

---

# 至 strongest 迷子

月下部 桜馬

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

至る最強迷子

### 【Nコード】

N4120W

### 【作者名】

月下部 桜馬

### 【あらすじ】

『願う事は平和な日々と家に帰る』異世界トリップで最強魔力を手にした安佐水 日和が望み通りの日々を送っていたのに一枚の手配書によってその世界は激変。魔力なんていらねえ！なんてそれでご飯食べてるので言えないですが、最強はいりません！その一言を貫く為に最強故の苦勞を全部背負い込んでしまっけど、日々努力で乗り越えてみせます

## 1話 私、迷子になりました

お父さん、お母さん。

恥ずかしながら貴方達の娘、日和ひよりは22歳にしてどうやら…

『迷子』になったようです

\*\*\*

今日も今日とて日は昇る。

目が覚めて見慣れた天井は今ではシミの数もわかる。前は起きてから一つずつ数えて変化がないか凝視したりしてた。

だって、ほんとはこの天井は私の部屋じゃない。

目が覚めても自分のベッドだといいなあって思わなくなったのはいつ頃からだっけ？

まさか自分が異世界トリップなどという『物語の世界』を体験するなんて考えもせず、しかもどうしてこの世界に来てしまったのかという疑問は3年経っても未だにわからない

普通は「勇者様!どうか魔王を倒してください!」などというイベントフラグが立つものじゃないんでしょうか?まあ…それはそれ

で迷惑な話だけど。イベントが無かったら無いで帰り方もわからなければどうしていいのかもわからず、あたしはこの世界で単なる迷子扱いだったりする。

「ひよ！朝！」

扉の向こうから聞こえる声にいつも安心感を与えてもらいながら、私はいつもの身支度を始めた。白シャツと黒ズボンの動きやすい服装に白の前掛けを腰に巻いて、肩より少し長めの茶色い髪をくるくるっと巻き上げてアップにする。

「よしっ！」

と腰を叩けばどこから見てもあたしは職人。

「あゝもうこの世界に来て3年経ったんだっけ？皆元気かなあ？」

洋服を着替えながら、郷愁を感じたのは昨夜、久しぶりに家族の夢をみたからかもしれない。

3年前と全く変わらない両親。

そりゃ3年前から一度も会ってないから変わってなくて当然なんだけど、せめて皺を増やすとか、白髪にしてみるとか、あたしを心配した陰を少しぐらい出そうよ……。

いつものように能天気ニコニコ笑う両親にこっちの方が心配に

なつたわっ！

「夢だけどねえ…」

まあ…迷子の報告なんていう全くもって恥ずかしい限りな再会だ  
ったけど…

「ひよっ！！朝っ！！！！」

あたしの一人妄想に痺れを切らしたのが、扉の外の人間は思いつ  
きり玄関を蹴っ飛ばして開けてきた。そこに立ってたのは超絶綺麗  
な美少女で、どう見ても扉を蹴破るなんて芸当をしそうにない。

4

「ミレー又…今月玄関壊したの何回目？」

「…2、3回？」

「15回。半月毎日玄関壊されて直してる身になって下さい」

うるうる瞳であたしを懐柔しにかかっているようだけど、まだま  
だお子ちゃま。

悪い事をしたら、ちゃんとしなくちゃいけない事があるでしょう？  
あたしが流すつもりがない事を悟ったのか、ミレー又はかるうじ  
て聞き取れる大きさで「…ごめんなさい」と口にした

「はい。謝罪受け入れました。で？こんな朝早くにどうしたの？」

時計を見ればまだ朝の7時。いつもミレーヌが店にやってくるのは10時近くになってからで何かがあった事は一目瞭然。するとミレーヌがフリルのついた前掛けのポケットから4つに折られた紙を取り出して差し出してきた

「？」

「これ！昨日宿に泊まった人が持ってたの！！」

ここテリサン村は小さな村だけど隣国への旅行者がよく立ち寄って宿泊していく、中継地点のような村だった。なので宿を經營するミレーヌの家には旅行者の出入りがよくあった。

そんな彼女から受け取った紙は乱雑に折りたたまれていて、その状態から見えた内容は手配書のようなだった。

「この付近に強盗団でも逃げてきたの？」

とミレーヌをからかいながらその紙を開け、あたしは目を見開いた。言葉を無くした自分にミレーヌが甲高い声で話しかけてくるが一向に耳に入ってこず、ただただその手配書を呆然と見つめていた

「な…なんで？」

「この絵の人！ひよだよね！？ひよってば王族の人だったの！？」

そう。ミレーヌから渡された手配書にはでかでかとあたしそつくりの似顔絵が描かれていて、懸賞金の金額もとんでもない数字だったけど、その手配書を発行した相手を見て、あたしは更に衝撃を受けてしまった。

そこにはこの世界で一番の大国ガルフエルド帝国皇帝直々の印が  
押されていた

## 2話 トリップは刺激的!?

手配書に心当たりがあるかと聞かれれば…無いと言いたいくらいありますと答えるしかなく、でも私にとって出来れば抹消したい過去なんです。

手配書を見ながらあたしの記憶は嫌でも無理にこの世界に飛ばされた日に遡る。

「刺激のある生活してみたいよ?」

通勤途中で一緒になった同僚にそんな事を軽く言ったかもしれない…でも、断じてあたしは異世界トリップなどを望んでいたわけではなく…ってトリップした先でも刺激的な生活どころか全然モブ的な日常生活ってどういう事!? まあ…その件は置いて…

でもトリップした場所が場所なだけに、初っ端は実は刺激的な事があったんだけど。

いや…でもマジであんな刺激望んでませんでしたからっつ…!!

そう、あれは3年と少し前の話。



それは極々、普通の日だった。  
しいて言えば、通勤ラッシュの電車で入口付近を取れてラッキー  
！ぐらいな日だった

M P プレーヤーで好きなアーティストの曲を聴きながら、いつも  
と同じ時間に地下鉄に乗って、会社の最寄の駅で降りたら改札で同  
じ営業部の同僚、箱崎はこき 那智なちと一緒にになって、戯言をほざく彼女と  
会社に向かった。

「日和はほんつとに現実主義者だよな？」

「…そうかな？」

「性格だつて男かつて言うぐらい淡泊だし…容姿は可愛いお子ち  
やまなのに中身それってどうなのよ！」

二十歳過ぎた女に可愛いお子ちやまは決して褒め言葉ではない…

「まあ…ね」

確かに男兄弟に囲まれて生活してきたんで自分の性格が男寄りな  
のは自覚してる。学生時代も女子のノリにはついていけなかったし、  
友達も男の方が気兼ねなく付き合えたからそっちのが多かった気が  
する。

お子ちやま容姿なのは、身長が低くて出るところが出てないからだ  
ろうけど、これで髪でも短けりゃどっからみても中坊だろうと自分  
でも思う。凹凸の無いあたしの唯一の女子らしさが腰まである直毛  
黒髪で、家族から絶対に切るなと断言されている。容姿全ては社会  
人になっても全く変化無かった。

「日和って刺激ある生活とか求めないわけ？」

何事にもストレートな物言いをする彼女は大学時代からの付き合いで珍しく女子の中で気があった貴重な存在だった。

「失礼な、あたしだって刺激ある生活してみたいよ」

「え〜日和に刺激的な生活なんて似合わないっ！ビバ日常！」

「……………どつちやねん」

なんて軽く突っ込みを入れながら、社員証をゲートに翳したときにそれは起こった。

「っ!？」

急に光で視界が遮られて目を瞑った。暫くして目をゆっくり開けたら、暗い世界で今ゲートにかざしていた社員証を右手に、思い切りビジネスバッグとスーツという違和感で天蓋付きのベッドの隅に正座してた。

「んう…ああんっ！」

「……………はい？」

ベッド脇にある仄かな灯りで慣れてきた視界の先に広がってたのは美景…もとい美形の男女が全裸で絡み合ってる姿で…

いや…いくら見た目お子ちゃまでも大人ですからわかりますよ？

目の前の人達が×××《ピー》の最中だって事ぐらい…

とにかく何で私がベッドに居るのか訳がわからないけど、この人達の邪魔にならないようにここから去らないといけない事はわかる。

こんな場に遭遇されて相手が気不味くない訳がないし、こっちだつてどう対応していいかわからない…

…ここはこっそりベッドを降り…る事は出来ないらしい

「…貴様は誰だ？」

そこには裸で絡み合ってた筈の美形男が映画でしか見たこと無いような物をあたしに突きつけていた。それは包丁なんて可愛いものじゃなくて、刀…でもない西洋剣のような感じの物だった。

「え〜っと…」

…これって本物？なんて悠長に構えている自分もいれば、この危機を乗り越えるための言葉を捜す自分もいたり、あたしはどうしていいかわからないという状況を初めて味わっていた。

これが、所謂パニック状態ってやつ！？とテンションが上がる自分がいるのも訳がわからない

「もう一度聞く、貴様は誰だ？」

あゝ美形女子が引きまくってるよ…。ま…そりゃ引きますよね。

とにかくこの剣を下げてもらうのが先決で…

「あ、怪しい者じゃないです。安佐水 日和と言います」

「…アサミ…ズ、ヒ…ヨリ？それは名か？」

「あ…はい。あのこれ…」

しまったあゝゝゝ！いつもの営業の癖で名刺とか差し出しちゃってるし！！

こんな怪しい人に身分明かしてどうすんのさっ！！しかも名刺取り出そうとしたら剣が動いたしいゝ

「…何だこれは？」

「名刺です」

「…メイシ？何だこの文字は？」

「…私の身分証明みたいな物です。文字は日本語なんで…」

確かに西洋風な方々に日本語の名刺が通じるわけもなく、っていうか相手裸で名刺交換ってありなんですか？交換してないけど…

「陛下っ！！早くその者を殺して下さいませっ！！そのような怪しい容姿の者！陛下を狙う刺客に決まっておりますっ！！！」

「…はいいい？」

陛下を狙う刺客？…つまり暗殺者って事？あたしが！？

陛下って…この人そんなに偉い人なの！？って、何であたしこんなとこにいるの！？

しかも殺すって何？これって銃刀法違反でしょ！？

「ち…ちがつー！！」

「余の寢所に許可無く立ち入っただけで極刑に値する」

どンドン迫ってくる剣先にあたしは後退するしかなくて…ベッドからずり落ちるようにして後退してたらいつの間にか背中に壁があたって、あたしの頭上にはベッド横の灯りより明るい灯りがあって『陛下』と呼ばれた男の容姿があたしの視界に飛び込んできた

彼は銀髪に青い瞳で暗闇の中でも美形だとは思ってたけど、こんなに人外な美形だとは思ってもみなくてあたしははっと息を呑んだ。ただそれは相手も同じだったみたいであたしの姿を見た瞬間、男の剣が下げられた。

「そな…たは…」

「誰かつ！！近衛え！！！！近衛え！！！！」

美形男が続けた言葉はベッドにいた美形女によって遮られ、あたしには聞き取れなかった。そしてその美形女の声に部屋の扉が開き、中世のようなマントを纏った兵士が駆け込んできた。

「陛下つ！！ここは我々がつ！！！！どうかお下がりください！！！！」

あたしの周りにはあつという間に近衛と呼ばれた男達に囲まれ、美形男の周りにも男達がいて何か言い争っているようだが、あたしはそれどころじゃなかった。

「貴様つ！！覚悟しろつ！！！！」

近衛の一人が剣を振り上げたのを見て、…殺される。と思った瞬間、また先程の光があたしを包んだ。美形男が「殺すなあ！！！」と叫んでいるのが遠く聞こえたが、その時にはもうあたしの視界は別

の景色を映していた。

その別の景色こそ、このテリサン村で、この村の人達と話す事によつてあたしはようやく異世界トリップをしてしまったんだと気付いた。でも、そんな怪しいあたしでも村の人達は襲つたりしなかつたし、それどころかあたしを迷子だと思つて献身的に受け入れてくれた。

それから3年平和にこの村で暮らしながら、何とか日本に帰る方法を探している。

あたしはもう一度手配書を見て大きくため息をついた。

あたしがこの世界で知つてる貴族っぽい人なんてあの美形カップルぐらいだし…逆に言うとなたしを知つてるのも彼らだけなので、つまりはあの美形男かその家族がガルフェルド帝国皇帝なわけで…

「ねえミレーヌ…。もしも…もしもよ?」

「ひよ、どうしたの?」

「皇帝陛下の寢所に潜入とかしちやったら、指名手配になるかしら?」

「……………そんな馬鹿な人いないんじゃない?」

…つまりは、なるって事だよね。

ああ、やっぱり一度謝りに行かなくちゃいけないのかな…

### 3話 平和に暮らしたいんです

いつものようにミレーヌと一緒に彼女の家に朝食を食べに行く。と言っても向かいなのでそんなたいした事じゃないんだけど

「ミレーヌ。さっきの手配書の事ってメルフォスさんとかライザさんに言った？」

ちなみにメルフォスさんはミレーヌの父親でライザさんが母親。宿は母親のライザさんが経営してメルフォスさんはこの村の守護兵として働いてらっしゃる。守護兵つてのが日本で言う警察みたいな物で、あたしが3年前、この村の外れに突如現れた時、一番にメルフォスさんに連絡がいき保護されたのがこの一家との付き合いの始まりだったりする。

あたしにとって命の恩人と言っても過言ではない人達なのだ

「言ってないよ。お客さんが今朝早く出立の時にテーブルに忘れていった紙を開けてみたらひよが載ってて、慌てて飛び出してきたから」

「そっか。誓って罪人じゃないから、この件ちょっとだけ内緒にしといてくれない？」

ミレーヌが言うように忘れ物程度で偶然この村に辿りついた手配書なら都市部に行かない限りは捕まる事は無いと思うし、その間に謝る方法考えて手配書を取り下げて貰えばいい。ただ出来る限り平和に過ごしたいからお尋ね者なんて騒動になりそうな事は極力避けたいと願う

「罪人？ひよ何言ってるの？」

「え？」

「ひよが罪人なわけないじゃん！」

「え…だって、手配書って…」

少なくとも日本で手配書って言ったら、前科何犯の指名手配犯と  
かを連想しちゃうんですけど…違うの？

「この手配書は人探しの手配書。罪人の手配書は紙自体が赤いし、  
金額表示も手配書は謝礼金。罪人は懸賞金。ひよのは謝礼金でしょ  
？つまりひよの手配書は人探しの手配書なの！…しかも皇帝陛下直  
々の手配書なんてあたし見た事ないよ？」

ミレー又の説明に「罪人かもしれない」って不安が無くなった。  
とにかく罪人扱いじゃなくてよかった…でも説明を聞いても、やや  
こしい事には変わりなさそうじゃない？

あの件を罪に問わないんだったら何で手配書とかするかなあ。  
やっぱ罪にはならなくても何で突然あの場にいたのかとかの説明を  
求められるのかなあ。そんなの自分でもわかんないんだから説明の  
しようがないですけど…

「…手配される身に覚えはないんで、やっぱり内緒でお願い」

「うん。もしかしたら他人の空似かもしれないしね！よく考えた  
ら皇族が3年もこの村にいるなんてありえないしっ！！」

ミレー又が単純な子で良かった！そして身に覚えはめっちゃめっちゃ  
あるけど、嘘ついてゴメン！ってあたしは心の中で手を合わせて謝  
った

「さっ…ご飯食べて開店しようっ！！」



「うんっ！今日も横で見てていい？」

これもこの世界でのいつもの日常。ミレーヌがあたしを起こしに来てくれて二人で朝食を食べてそのままミレーヌはあたしの店を手伝ってくれる。何故かあたしの作業を見ているのが好きらしく、基本は宿のお手伝いなんだけど、日本でいうチエックアウトと食事の時間帯以外は暇なのであたしの店に入り浸ってる。

キラキラした瞳で作業を見られると照れるけど、嫌な気分じゃない。

「いつも許可なんていらぬのに。それどころかこちらこそいつも手伝ってくれてありがとう」

そうあたしが言葉を返すと真っ赤になったミレーヌが「そんな」と照れている。んゝ美少女のそんな姿を見ると、お姉さんはそのケはないけどときめいてしまうよ？

「今日のご飯何かな？」

「今日はグライのスープと母さんのグリユスリーフよ」

「よしっ！！」

グライとは日本の鶏肉みたいなもので、グリユスリーフはシフォンケーキみたいな感じの物だ。どっちもこの世界にきて初めて食べた物で今ではあたしの一番の好物になってる。ライザさんもそれをわかってくれるのか2週間に一度はこの献立を出してくれて、ほんとにこの家族はいい人達だ…とあたしの涙腺は潤んでしまうのだ

#### 4話 素晴らしき『文明の利器』

隣国へ向かう次の中継地点は結構遠いので、この村に泊まる旅人の朝はとんでもなく早い。だから村人の活動時間には出立してる事が多く、今日もミレー又の宿の食堂は既に閑散としてどこでも座りたい放題だった。そんな中でもあたしとミレー又が座るのは入り口の付近の窓の席といつも決まっている。そこなら目の前の自分の作業場が見え、誰かが訪ねて来ればすぐわかる。大体一人目の客が来るまでこの食堂でお茶するのが日課になっていた。

店をやる気があるのか？と聞かれれば「ある！」と答えるけど、この世界というか村の特色が基本の〜んびりなので、そんな村人相手の店で一人で頑張ってる経営しても意味が無かったりする。勤勉日本人のあたしにとってはの〜んびりぐらいで丁度いいのだ。

目の前には空になった食器達。もちろんライザさんの食事は全て美味しく完食させて頂きました。元の世界では味わった事のない美味しさに、初めてこの料理に出会った時は思わず「お母さんごめんなさい」と謝ってしまったのはつい勢いである

「ご馳走様でした！とても美味しかったです！！やっぱ、ライザさんの食事の中でもグリユスリーフは格別だ〜！！」

元の世界のくせはやっぱ3年程度では抜けなくて、両手を合わせての食事の挨拶もそのうちの一つ。ライザさんも初めは不思議そうにその仕草を見てたけど、今ではそれをするにつこり笑ってくれる。やっぱ何でも礼儀は重要だよな！料理を作ってくれたら作ってくれた人に感謝！原材料を作ってくれた人にも感謝！これ常識！

しかし、これを味わう事が出来たのならこの世界に來た意味もあったかもしれないと思わせてしまうこの料理とそれを作ったライザさんが恐ろしい。

「はははっ！いつも美味しそうに完食してくれるから、ひよには作りがいがあるよ！うちの亭主も娘もあたしが食事を作って当たり前だと思ってるからねえ！」

料理はとても繊細な味付けなのだがライザさん自身はとても豪快なおかみさんで、例えるなら肝っ玉母さん！が一番しっくりくる気がする。あたしのこの世界でのお母さん…まだ了解は取ってないけど、心の中ではいつも「ありがとう、母さん！」って感謝してる

ミレー又は可憐な容姿は父親似で、いつも玄關を破壊する中身は母親似なんだと思う。

いや…決してライザさんが不細工だとは言っていないよ？ただメルフォスさんの美しさが男の人！？っていうだけで。あれで自分の身の丈の倍ある槍を簡単に使っちゃうんだから…この世界って不思議。

「そういえばひよ、ちよっと調理器具の調子が悪いんだよ。見てくれないか？」

「あ、はい。どれですか？」

そう言うとライザさんは調理場に戻って行ったと思ったら、その調理場から声が聞こえてきた

「ひよ~~~~~！ちよっとこっちに来ておくれ~~~~~！」

あゝ持って来れないサイズの物って事はオープンとかおっきい物

だな…。作業場で道具取ってこないと修理出来ないとは思っけど…  
とりあえず見てみるか

「今、行きまゝす」

そう、この世界でのあたしの職業は道具屋さんだったりする。家庭で使うような小さな調理器具から、それこそ業務用の大きな土方アイテムまでお客様の要望によつて様々な道具を作り出しちゃってるのだ。

調理場に入ると、そこはライザさんの世界でこんな村の宿とは思えないほどたくさん調理器具が雑然と、でもある一定の法則できちんと配置されていた

そんな中困った顔でライザさんが立ってるのはやっぱり予想通りオーブンの前で、扉を開けたまま両手を挙げてお手上げポーズをしている

「オーブンですか？」

「そうなんだよ。最近こいつがご機嫌斜めでねえ…今日もグリユスリーフを2回ほど焦がしてくれちゃったんだよ」

「ええ！！グリユスリーフを！？」

それは大事件すぎるっ！！

「焼けないわけじゃないから、ひよの手が空いた時にで」

「すぐ直します」

グリユスリーフが食べれなくなるなんて考えられない！

とにかく原因を調べないと対応の仕方がわからないのでオーブンを空いた扉から覗いてみたら、以外とすぐに理由がわかった。

「あゝこれ、暴発しちゃってますね」

電気が無いこの世界では別の力が存在している。

それが民の生活を支えていて、その力は『魔法』と呼ばれている

なんとあたしはその『魔法』が使えちゃったり、つまり魔力があるらしく…らしくっていうのは魔力自体はあんまり自分で実感出来る物じゃなくて、魔法が使えるから魔力あるんだなあ程度にしかよくわかってない。

ただビバ日本人！で、手先の器用さと魔法を使うのは一緒の感覚らしく、なんだかパズルを組み立てていく様な感覚で魔法が使えてしまう

で、このオープンに使われてる魔法って言うのが魔石と言われる電池みたいなやつで、魔法を編んだ石を動力に動いている。詳しく原因を調べるためにオープンから魔石を取り外す。魔石に触れた瞬間に魔石に編みこまれた魔法図が頭の中に流れ込んでくる。

「これ、あたしが作った魔石じゃないですね？」

「そうなんだよ。ひよが作ってくれた方のオープンは調子ばつちりなんだけどね。これは少し古いやつなんだよ…」

その場でも直せそうだったが、過去にもっと小さな簡単な魔石を道具も使わずにその場で直したら、周りを驚愕させてしまったのでそれ以来作業は作業場だけでと決めている

「これなら魔石の再設計だけで何とかなると思いますから、道具

必要なんで…この魔石一度作業場に持ってつてもいいですか？」

そうあたしが言うと「急がないから頼むよ」とにっこり笑って言われ、その場で直せるのに直さない自分の良心の呵責が疼いた。母さんごめんよ。

「じゃ、一度帰ってまた来ますね」

今度はこんなちやちな魔石じゃなくてもっとばっちりな高性能な魔石作るから！

あたしは魔石を握ると調理場を後にして、まだ食堂で朝食を食べたミレー又簡単に事情を説明して「すぐ戻るから」といって自分の作業場に向かったのだった

5話 愛読書は「はじめてのまほうのつかいかた」です

どうしよう…多分、いや絶対ピンチです。

いや、魔王は全然楽勝だったんだけどね。だってあたしの愛読書『はじめてのまほうのつかいかた。ちいさなこへ』で立派な物が作れましたから！

え？そんなちやちい本でいいのかって？

ごほんっ！何事も基本なのですよ？変に上級編の本なんて読むとその著者のくせが生まくりで碌な事ないんですからっ！！決して読めないからって負け惜しみ言ってるわけじゃないですからっ！！

…ええ。どうせ、幼児レベルしか読み書き出来ませんよ。  
何か問題ですか！！？

生活出来ればいいんですっ！！

大人なのに…と自暴自棄で泣いた過去は見なかった事にして下さい。だいたいこの世界の文字の数が多すぎるでしょ？

何なんですか？子供と大人で使用する文字が違ってます？  
しかも貴族と平民でまた使用文字が違ってます？  
それ以外にも事細かに文字が分けられてて意味がわからない！！

文字とは本来、人に伝達する為のものだろうがあっ！！！！  
せめてひらがな・カタカナ・漢字レベルで抑えとけよっ！！

という、あたしの過去3年のジレンマ…もとい、誰にぶつければ  
いいかわからない怒りはいいとして…

そっつ！ピンチなんです！！

あれは作業場に戻ってすぐの事。

魔石の修正はすぐ終わりそうだったんで、あまり早く戻るのも宜  
しくないと思つて、たまたまさっきの手配書に手を伸ばしたのがま  
ずかった。

手配書に触れた途端、さっきは感じなかった違和感を感じて思わ  
ず凝視しちゃったんです。よく見ればあたしの似顔絵部分に変な魔  
法が織り込まれちゃってるのを発見してしまっただんですよね。

普通気になりますよね？

自分の顔に何の細工がされちゃってるの？とか

…もし、これで似顔絵が年をとったら凄いつ！！とかつて思っ  
ちやっただんですよね



……ええ安直でした。今猛烈に反省してます。

何故ならその不思議な魔法に触れた途端に手配書が鳥となって羽ばたいていつてしまいましたから。

…あの魔法は何だったんでしょかね？

十中八九『追跡魔法』だと言う自分の脳ミソに蓋をして、現実逃避に愛読書を読みました。あ、これも元の世界のくせの一つなんですよ！現実逃避に本に逃げるっていうの！まあ、読める本は幼児レベルしかないですけど…ふふっ

でもおかげで立派な魔石の修正が出来ました！

残る問題はやっぱりさっきの手配書で…

「まずい…まず過ぎる…」

これなら下手したら罪人の方が罪がはっきりしてる分気持ち的には楽かもしれないと思う。何だかよくわからない追跡ほど気持ち悪い物はない。公開ストーリーカーに追いかけてられる気分だ。

「…逃げる」

何処に…。

この世界でこの村と皇帝の寝室しか知らないあたしに何処に行けと？

次に行く村なり街がいい所だという保障は無いのだから…

「ああ〜！〜！〜！どうしてあたしが追い込まれなきゃ駄目なのさっ！？」

悪い事なんてしてないのに…。

あ、寝室に無断侵入はしましたけどね…

「駄目だっ！！こんなモヤモヤ気持ち悪くて仕方ないっ！！すぱっと謝ってこよう！！」

よしっ！！

ウダウダ相手の出方を待つより、こっちから謝る方法を考える方が建設的な気がするし、そうしようっ！！

「謝罪するにしても、手紙はいつ届くかわからないし…まず貴族文字なんて書けないし…直接行くにしても、こっから城まで確か徒歩だと半年かかるとか言われたよね？転移魔法…？」

しかしこの転移魔法には自分の記憶の場所にしか行けないという問題がある。

何度も言うようにあたしは皇帝の寝室しか知らない。次にまた夜伽乱入などになったら今度こそその場で殺されてしまうと思うんですけど…

「ん？夜伽？…夜？そっかつ！！！」

夜伽は夜なんだから昼に転送魔法使えばいいんじゃないっ！！

ああ…こんな事もすぐに思い浮かばないなんて…かなりこの村のく〜んびり空気に感化されてしまってる。いや…別に悪い事ではないけど、こんな形なりでも元の世界ではやり手の営業だったからちよつとシヨックだっただけですよ。

この村に来て一番勉強して練習した魔法だから、転移魔法は得意中の得意！

だって元の世界に帰れそうが一番の魔法が転移魔法だったから…何度も自分の家をイメージして魔法を発動したけど、その度によくわからない大きなぼよ〜んとした壁に跳ね返されてしまう。世界間を越えるには転移魔法の他にも何か魔法が必要みたいであたしは普通に生活する反面、その研究に没頭してる。

なのでまあ城に防壁が張られてても何とかなるでしょう！

「そうと決まれば…すぐにでも行動しないと、あの追跡魔法が相手に届く前に」

鳥の形の追跡魔法って事は伝達レベルは低いはず、その分大量に施せそうだけど…自分の手配書がたくさんあるのを想像して背筋が寒くなった。

「うゝトリハダっ!!!」

あゝ早く処理してしまいたい。そしてこの不気味な感じから解放されたいっ!!!

「よしっ！思ったら即決行しよう!」

あたしはそう決めると、簡単な事情を説明しに修復した魔石を持ってミレーヌの宿に向かったのだった。

## 6話 光の道。転送ドライブへゴー！

オーブンの修理は魔石をオーブンに戻すだけだったのですぐに終わった。さて、これからの事をミレーヌにどうやって説明しようか？いきなり皇帝の寢室に乗り込みますとか言ったらどう思われるかわからないし…3年の間に遠出とかした事ないからちよつと隣町までとかも無理。

「あの〜ミレーヌ、今日一日店番お願いしていいかな？」

「ひよどっか行くの？」

「あゝの、ちよつと魔石の原材料を採取しに…」

はは…魔石の原料なんて普段は村からちよつと行った川の石コロでしてゐるくせに…

この世界、魔法を溜められる石なんてゴロゴロしてるからその辺のでもいいんだけど、川の石は水の流れて角が取れて綺麗になるから気に入ってあたしは愛用してるのだ。

「？いつもの川？」

「ん〜もうちよつと遠くまで行ってみようかなって思って、ついでにそこから家まで戻って転送魔法の練習もしたいし…」

「了解！店番しとく」

ミレーヌの笑顔に自分の腹黒さが浄化して昇天させられそうになる。あつ…今のお姉さんにその笑顔は毒です…はい。

「じゃあ、…よろしくね」

「うん。行ってらっしゃいー」

帰ったら何かミレーヌの好きな物を作ってプレゼントしよう。  
あたしは宿の外で笑顔のミレーヌに見送られながら、そう心に決めたのだった

\*\*\*

歩いて10分ぐらいでいつも魔石を採取している川の辺りまで来る。

一応自分の魔法に人を巻き込まないように周りに人が居ないか確かめる。転送空間は目を開けられないぐらいの光の世界なのでポケットからサングラスを出して装着するのを忘れない。一番初めに何も装着せずに転送魔法を使った時にはあまりの光に目をやられて、しばらく頭痛が引かなかった。もちろん普通のサングラスでは無理なので、特殊な魔法フィルターをつけた物を自前で作ってみた。なので蝶番部分には魔石が組み込まれてる。

「人の気配なし！オツケー。…んじゃあ、行きますか？」

目を瞑って意識を体の中心に集める。身体的设计図を認識して、それに皇帝の寝室への転送魔法を合成していく。自分の体が沈み込んでいく感覚に転送空間に入った事を認識した。目を開けるとそこは全て光の世界でサングラスが無ければ、やはり目を瞑らなければ耐えられない世界だった。一筋の道が自分の立つ場所から伸びており、自分で歩かなくても意識するだけでその道に沿って立った場所自体が猛スピードで動く。

「初めはこれに振り落とされるかと思って気が気じゃなかったん

だよねえ……」

としみじみ呟いてみるが、もちろん周りには誰も居ない。今ではどんなにスピードを出しても大丈夫だとわかっているので出来る限り最速で場を動かす。

そうしてしばらくそのまましていると、前方に大きな壁が見えてきた。

「おゝビンゴ。魔法障壁見つけ」

壁の手前で場を止めると、とりあえずその壁を見渡してみる。その壁は道を分断するように建っていて左右を見てもどこまでもその壁が続いていた。

「さて……と」

あたしは右手をその壁にくっつけ、再び目を閉じた。すると、頭の中で壁が魔法の網に変わる。こうなればもうこっちのもんで、網の綻びを探す。どんなに優れた魔法使いが作った物でも完璧な物などなく、必ず小さな綻びは存在する。小さな綻びさえ見つければ後はそこから服の解れを解くように穴を開ければいいだけの事なんだけど、ただこれが意外と気を使う作業だったりする。

ここで重要なのが、服と同じく無理に解くと後で修繕が大変になってしまうので、修繕する人が簡単に済むようにきちんと一人分だけ解いて、他を傷つける事はしない。

うん。やっぱり、国の中枢部分だけあって魔法が緻密だしめんどくさいわ……。出来れば帰りは障壁の外から転送魔法を使いたい。

こんな一日に二回も作業したら肩がガキゴキになってしまふ。

「あ、わかり易く目印つけとこうか…」

修繕する人の為にあたしは自分が通れる穴だけを開けると、そこに全く関係の無い物理魔法をかけておく。簡単に言つと待針を刺したみたいなもの。

「よしっ！じゃあ乗り込みますかっ！！」

場を再び動かすとすぐに道が途絶えた場所についた。そしてそこに立つと自分の体が再び沈み込み始め、無事目的の場所に着いた事にちよつと安心した。

どうか余計な人が居ませんように…

出来れば謝罪文を残すだけで帰れますように…

この世界の神様お願いします！

沈むのが収まり、目を開けるとそこには見覚えのある景色が広がっていたが、前回見た光景が広がっていなくて安心する。やはり昼なので人の気配もない。そこまでは予想通りだったが…

「………何でまた転送先がベッドの上なのよ」



自分が座ってしまっただけであらう皺を戻しながら、何故か自分の道徳観に文句を言いたくなった。

## 7話 拜啓、皇帝陛下様

はりきって転送してきたはいいが…そこで気付いた自分の愚かさ。

「何であたし家で謝罪の手紙を書いてこなかったのよ…」

昼間の寢室に人が居ない事なんてわかりきっていたし、むしろそれを望んでいたんだから直接謝罪出来るわけがないじゃないっ！！

ああ…あたしの馬鹿…。

「でも…凹んではかりはいられないし」

とにかく謝罪文を残すためにあたしは筆記具らしきものを探してみるけど…見れば見るほど部屋の豪華さが眩しいっていうか…

天蓋つきのベッドって何さ？

これってお姫様の特権じゃないの？

男でもアリなのか？

それにしても無駄にデカイベッドだな…

などの下らない疑問で時間を使ってしまう。

しかも探し物は見つからない。まあ…偉い人が寢室に筆記具置く

必要性もないか…。作業とかは専用の部屋があるだろうし…その時あたしの視線は部屋の出入り口であるう扉に釘付けになった。

「…隣の部屋にあるかな？」

…あゝ更に罪を積み重ねそうな気がするけど、ここまで来て何もせずに帰るとかありえないしさ。扉に耳を付けて隣の部屋の様子を伺うも、人の気配はなさそうだし…

……よしっ女は度胸！やってみよう！！

\*\*\*

うう扉に手をかけるだけで、心臓がバクバク言ってるんですけど。結構スパイ映画とかスリルのある映画が好きだったからよくこういうシチュエーション見てドキドキしてたけど、こんな冷や汗ダラダラな事、出来れば実地経験したくなかったというのが本音。

ガチャ…って扉の開く音でつかくない??

何で人ってこっそりする時首を竦めちゃうんだらうね？

ああ…さっきから下らない思考ばかり巡ってる。これはかなりテンパってるな…。

隣の部屋に人が居てたら即アウトだけど、一応小さく声も掛けてみる

『お邪魔しま〜す』

とにかく扉を開けた瞬間に、自分でも驚く凄いスピードで左右上下人の確認をする。寝室で確認した通り、隣の部屋にも人の気配は無かった。

凄い！この緊張感…初めて取引先に行った経験なんてこれに比べたら全然余裕だわ…

安堵感に支配されながら部屋を確認すると、寝室の豪華さとは打って変わって豪華絢爛っていうよりは家具の輝きから高級品に違いなさそうだけど、シンプルな感じだった。机と応接セット？とでっかい本棚には分厚い本がたくさん並んでた。

ええ…もちろん貴族文字でしょうから…背表紙すら読めませんけどね。

「そんなお家探検してる場合じゃなくて…何か書くもの、書くものって」

机にはさすがにあるだろうと思って一番に探してみる。机の上に羽ペンと墨壺を見つけた時には、何故か手をぎゅっと握って「ゲツトおー！」と小さく叫ぶのを止められなかった

「え〜書くものは見つかったけど…、紙が無い」

机の上にはたくさん書類らしき紙はあったが、読めないけどさ

すがにこれに書くのはまずい事ぐらいはあたしにもわかる。こついでう時に確実にいらぬ紙をゲットする為にはあそこが一番。  
あたしは徐に机の下に潜ると目当ての物を見つけた

「ゴミはさすがにいらぬよね…って空っぽだし！！！！」

ゴミ箱を逆さにしてむなしい行為を試みる。

うう…さすが城。ゴミを放置なんて事しないのか…

さてどうしよう…もう転送してきて結構時間経ってるし…そろそろ障壁に穴開けたの見つかりそうな気がする。

…こんな事なら見つけやすくなってるんじゃないかった。

「…ん？」

たまたま見た書類の山に挟まった物に、何か見覚えが見える。山を崩さないようにゆっくりとそれを引き抜くと

「……これ」

自分の手配書だった。

「…こ、これなら必要ないよね？」

あたしはすぐに机の羽ペンを掴むと墨をたっぶりつけた。紙にペンを置いた途端に墨が黒く滲む。何度使ってもこの羽ペンというのは慣れないし、ボールペンが恋しいなあ…と思う。今度自分で作ってみよう！と頭の作成リストに記載する事を忘れない。

え〜つとそれでは、文面は…と

『はいけい こうていへいかさま

わたしはせんじつ、しんしつにとつぜんあらわれたものです。

あときはほんとうにすみませんでした

ずっとはんせいしています。

ですからおねがいですので、てはいしよをとりさげてください

よろしくおねがいます

安佐水 日和  
『

名前だけ日本語の漢字で書いたのは、前に来た時にあの人にあたしの名刺を渡したからで、この文字はこの世界であたししか書けないし、立派なあたしの証明になるでしょう！

…まあ、その他はお子ちゃま文字しかかけないんで、片言文章しかかけないけどさ…

とにかくこれで任務完了！

このまま机の上に置いといたら見てくれるでしょう。さて、せっかく遠い所まで来たのだから城下町見物でもして帰るかな。

肩凝るし、面倒だし障壁を通らずに城下町に行く方法無いかなあ？  
ミレー又にも都会のおみやげもいいかもしれない。

手紙を書き終えた事であたしは完全に油断していた。

バァーンツ！！！！

あたしが来た寝室とは違うもう一つの扉が吹き飛ばされる勢いで開かれる。

何故手紙を書き上げたら障壁も関係無くさっさとこの場を後にしなかったのか、これほど自分自身の怠惰を後悔したことはない。

「あさみずひよりっ！！！！」

飛び込んできたのは3年前と同じ麗しい姿の美形男、多分皇帝陛下に違いなかった

## 8話 サバの名前は『あさみずひよ、り』

ああ…今すぐ自分自身を抹消したい

あその後、飛び込んできた皇帝かどうかは未だ不明な人に、よくわからない紙を背中に張られて強制的に応接セットのソファに座らせられた。

張った本人はあたしがさっきまで立ってた机で何か調べてる。

指名手配まで受けてる超怪しい人物が、突然自分の部屋の机漁ってたらしりゃ当然の対応です。

いや…まあ…当然の対応なんですけどね。

…一応弁明しなけりゃあたしの首が危ないんで

「…机のペンとちよつと手配書の裏を借りただけですよ」

はは、軽く無視ですか…これはどんだけ無罪を訴えても有罪確定。

…この背中の紙に「この人お馬鹿です」とか書かれてたらやだなあ…。

と思つたら皇帝が手にしたのはあたしが書いた手配書の裏のお手紙。

「…これは？ん？コウテイヘイカサマ…私への手紙か…」



その後の文章も音読しやがった皇帝様。

超お子ちゃま書きな内容の手紙を目の前で音読されるって何の羞恥プレイですか？これが罰ですか？ええ今の音読で結構心ぼつきり折れましたよ。

ソファといえども膝を抱えていじけてしまっ。

「あさみずひより」

うるさい…こっちは凹んでるんだ。

「おい、あさみずひより！」

フルネームの連呼って何だか教師に叱られてる気分になって、さらに凹む。しかも普通の日本語の発音じゃないから、ただ一定の音で名前呼ばれるのって気持ち悪い。

返事しない事にイラついたのか皇帝が違う手段に打って出てきた

「あさみずひよ、りー！」

「変なところで名前切らないでよっ！ー！！」

何だその名前！

百歩譲って「あさみずひよ」は苗字としてまだ許そう。…大分妥協してだけどね。

だけど「り」は受け入れられない。

名前が「り」「り」って何だよ！「り」「り」って！ー！！

ありえないでしょうが！普通！ー！！

「あたしは『あさみず』、『ひより』!..」

「あさみず…ひより」

「そうっ! わかった!？」

「わかった…あさみず、ひより」

思わず怒りにソファを立ち上がって皇帝に詰め寄ってしまった。

…ま、まずい、こんな事出来る立場じゃなかった。

今までの怒りは何処へ行ったのやら、まるで無かった事のように急速に冷めて、後に残るのはキレた気まずさだけで。

とりあえず顔に自分でもわかる引きつった笑みを貼り付けながら元の位置まで戻る。ソファに座って皇帝から無理やり視線をはずして、ひたすら「ははは」と笑い続ける。

あゝ次視線合ったら、もしかしたら今日死ぬかもしれないなあ…

そんな不吉な予感が頭を過ぎるのを無理やり抑え込む。

とにかく謝罪しなければ…

そう思って頭を下げたときに皇帝からまた声をかけられた。

「あさみず、ひより」

名前を呼ばれて身体がびくつと反応する。

「すみませんっ!! 悪気は無かったんです! ただ名前は親に貰った大切な物なのでそれを間違えられてちよつと我慢が出来なかっただけで…」

「…君の年齢は？」

あたしの謝罪と相手の声が被ってよく聞こえなかったけど…

「え……………年齢？」

全然想像してなかった質問に、あたしの頭の処理速度が追いつかない。

…どうして今、年齢聞くの？

「そう、君の年齢だ。この文面からしてまだ幼いようだが…」

あ…そっか。

この人あたしの実年齢なんて知らないんだから、幼児文字を書けばそれがあたしの年齢基準になるんだ。

もちろん25歳なんて実年齢は絶対言いませんよ？ビバ童顔日本人！

…とはいえ、この文字を使う年齢って何歳ぐらいなんだ？

ミレーヌと一緒に文字の勉強してるんだから、ミレーヌの年近くに合わせとけば間違いはないんだよね？

…ミレーヌっていくつだっけ？

あたしの頭はフル回転で記憶を辿る。きつとこの返事があたしの生命の助かるボーダーラインだと何となく察した。

ただ慌てた頭は上手く回転してくれなくて「ミレー又は魚介が食べれない」とか「ミレー又は首に黒子がある」とか下らない情報だけを提供してくる。そんな中でぱっと思いついたケーキの映像に思わずあたしの下げてた頭が上がる

「12本!!」

「……じゅっ!？」

そうだ、先月のミレー又の誕生日会のケーキの本数を思い出した!ああ…サンキュ…あたしの頭、お疲れ!じゃあ…それから計算してあたしの外見で通用するような年齢を考えてと想っていたら、机の方から皇帝のか細い声が聞こえてきた

「12…とはな。もう少し上だと思っただが…」

…はい?

「15歳差か…」

…あれれ?

「12歳か…」

ぎゃ~~~~っ!!違っよ!!!

それ、ミレー又の歳だから!!ケーキの話ですから!!  
いくらあたしでも12歳は口に出来ません!!  
さすがに13歳サバ読むのとか犯罪じゃないでしょ!

ってあたし見た目そんな若さ通じるんですか!?

今12歳って、3年前は9歳ですよ?

少なくとも見た目は髪以外、全然変わってないのだからありえないでしょ!!

気付けよ皇帝っ!!!

とにかく混乱に陥ってるあたしは口をパクパクさせるだけで、言葉が出てこない

皇帝も口元に手をあて何か考えているようだった。

「ところで、あの時どうして私の寝室にいたんだ?」

それ今聞く!?

普通最初に聞かないですか!?

そして、皇帝の口から再び年齢の話は出せず…あたしの12歳は決定事項になったようで…

12歳って、中一じゃないですか…去年までランドセルの年齢じゃないですか…

しかし、下手に自分から年齢を上に出した事によって罪を問われても嫌だし…まあ、今しか関わらないから…なんて納得できるわけもなく。

いや~~~~っ!!!

あたしから言えないんだから、皇帝…この不思議に突っ込んでよっ!!!

もちろん心の叫びは誰にも届かなく、訂正もなく、とにかくあた

しは口と喉がカラカラでこの後「何か飲みたいです」と皇帝にお願  
いしたのだった。

## 9話 ウソも方便

暖かいお茶がテーブルの上で湯気を立ててる。だけどそれはあたしのじゃなくて皇帝の分。あたしの前に置かれているのはグラスに入った果実ジュース…。ええ…12歳の扱いだから当然だとは思ってますけどね…。

さつきから目の前の皇帝は黙ったままでお茶に手をつける訳でもないし、ただじっとこつちを見つめるって何ワザ？

…逃げないように見張ってるの？

それならもうちょっと扱い方を変えて頂きたいと望むというか…空になったグラスにすぐジュースを注いでくれたり、お茶菓子を薦めてくれたり、丁寧なお客様扱いをされるとお互いの思考のチグハグさに空気が気ますぎる。

注がれると飲まなくちゃいけない気がして頑張っただけで、何杯もジュースを飲み続けるのもお腹の限界があるし…すでにもう胃がタプタプ状態なので、もうそろそろさつきの話の続きをしたいんだけど、皇帝に対してこつちから話し出すって礼儀作法的にはどうなのよって感じだし…

ただ…あたしの全てが限界です。

「あ…」

とりあえず、視線を合わせる勇氣はないので手に持ったグラスを見ながら皇帝に話しかけてみる。

「…喉は潤ったか？」

思いがけず優しい声に視線を皇帝に向けてしまって、すぐ後悔した。だってそこには信じられないぐらいに眩しい神々スマイルが存在していたからで

ぎゃくっ！！眩しい！眩しすぎる！！

めったにいない美形男に微笑まされると、顔がムズムズして溶けそうで…これはもう凡人には毒でしかないわ。偉い人に平民が気軽に会えない理由ってこういう事もあるんじゃないかな？って思う。

メルフォスさんも半端ない美しさだけど…この人にはそれプラス神々しさがあるというか…権力者の威圧感というか…とにかく全然落ち着かない。

「……………」

「？どうした？」

いや…話そうとした事が貴方の笑顔でぶっとびました…何て口には出来ません。

…というか、無理だわ。美形とは遠く離れたところから見ても楽しんでしょう！があたしの持論なので、美形の目に自分が映っているなんて状況が耐えられない。

「うう…」

「喉が潤ったなら、自分の分かる範囲で答えられる事を答えてほしいのだが…」



この拷問のような状況から早く開放して欲しいので、目線を合わせずにあたしはコクコクと頷いた。

「そうだな…まずさっきも聞いたが、3年前…私の寝室に突如現れたのは？」

待っていました！その質問！！

出来れば年齢なんかよりもまずそれを聞いて頂きたかった！

「あの…あたしの国はニホンという地図にも載らないとても小さな島国だったんですけど…、そこが魔法でも防ぐ事の出来ない天災に襲われまして、その時に大きな転送魔法を発動したんですけど…それが暴走したらしくて…気がついたらここに居ました」

ニホンが存在しているのはホントで、地図にも載らない小さな国というのはウソ。

国が天災に襲われたのはウソだけど、あたし自身が魔法で防ぐ事の出来ない天災に襲われたのはホント。

大きな転送魔法が発動したのはホントで、それが暴走したのはウソ。

半分のウソと半分のホント。そして異世界の存在は微塵も感じさせない。

すらすらとこんな話が出来たのは、実は3年前のあの日。テリサン村で最初に出会ったメルフォス夫婦と話した時に自分が異世界トリップをしたと分かり、その時にメルフォス夫婦に自分に起こった全てを話し、そして異世界の話は隠しておいたほうがいいと判断した上で、この自分の身の上話を作り上げたのだ。つまりあたしが異世界人だと知っているのはメルフォス夫婦だけで、ミレーヌもこの事は知らない。

身の上を全部ウソにすると、どこで檻ケツ褌が出るかわからないので、現実と隠す事実の辻褄が合うように作った今の話。皇帝の寝室に初めに転送した事は夫婦にも言っていないが、この世界でこの身の上話が通用する事はメルフォス夫婦のお墨付きなので多分この美形男にも通じるだろう…と思う。

「…ニホン。確かに聞いた事の無い国だな」

「…はい」

そりゃ異世界ですから…とは言えない。

「天災に遭ったと言ったが…その他の国の者や、両親はどうした？」

「両親や皆とは…その転送された時点で離されちゃって…今どこでどづしてるのかも…わかりません」

両親の話をされるとほんとに元の世界での両親を思い出して思わず目に涙が浮かぶのを止められなかった。

「……すまない」

いやいや…あたしが異世界に飛ばされたのは皇帝のせいではない

し、謝られても困るんですけどね。とにかく多少は脚色してるけどあの日の事情は説明したし、

あとは…

「3年前のあの日はそんな状態で、気付いたら知らない寝室だったので慌ててしまって…ほんとにすみませんでした。許して頂けますか？」

言葉と一緒に頭を下げたあたしに皇帝がさっきまでと同じ優しい声で答えてくれる。

「別に「あさみず、ひより」は罪を犯したわけじゃないのだから許すも何もない。手配書もそんなつもりで配ったのではないさ」

よしっ！口頭でも謝った！！

で、これだけは忘れちゃいけない件がある

「あのお…その手配書の件なんですけど…」

「ああ、もう「あさみず、ひより」が見つかったのだから取り下げ」

ふう…これで手配書も無くなって、堂々とテリサン村に帰れる。

それじゃ…と言おうとして皇帝の発言に顎が落ちた。

「謝礼金は「あさみず、ひより」に払おう」

「……はい？」

謝礼金って…あの手配書の莫大なお金の事！？

あたしの頭に手配書に並んだ莫大な数字が羅列される。

…あれってあたしがこの3年で稼いだ金額より多いですけど。

「そ、そんなのいりません!」

「あさみず、ひより」が自ら名乗り出てくれたのだから「あさみず、ひより」に支払うのが当然だろう」

そんな宝くじみたいなお金、身の丈にあったお金じゃなけりや身につかないし…逆に不幸を呼びそうで怖いわ。

「いりませんっ!!!」

出来ればこの皇帝と関わるのも今回で終わりにしたいし、お金なんて貰っちゃったら縁が出来そうなのも嫌だ。

でも…それよりもさつきからずう〜と気になってるんですけど

……

「あの…」

「…何だ?」

「あの…名前『あさみず』か『ひより』かどっちかで呼んでいただけませんか?」

そう、さつきからこの人はずっとあたしの事を『あさみず、ひより』とフルネームで呼び続けていて、それがすごく居心地が悪いのだ。

「しかし…『あさみず、ひより』が名前なのだろう?」

「…貴方はお名前なんと言われるんですか?」

相手はあたしが名前を知らない事に驚いてたようだけど知らないんだから仕方ない。皇帝かどうかも名乗ってくれないし……え……皇帝だよね？

「私は皇帝、リユージニアス・クロムレス・レイ・ジェイライト・ローダスタ・ガルフェルドだ」

はい、リユージニアスまでしか覚えられませんでした。

紙に書いてもらっても読めないだろうし……皇帝なので皇帝って呼べばいいだろうけど……

「私にとって『あさみず、ひより』っていうのは陛下のその長〜いお名前を全部呼ばれているのと一緒になんです」

「…そうだったのか。私はてつきり『あさみず、ひより』は変わった愛称だと……」

どんな愛称なんだよ…と突っ込みたかったけど、相手の立場がよりはつきりわかったのでやめとく

「…どちらで呼ぶのが普通なのだ？」

「あ〜……」

友達とかだったら迷わず「ひより」って呼んでもらうけど…、皇帝は友達じゃないし…男の人だし、何となく上司っぽいんで…

「『あさみず』が普通だと思います」

「そうか…ならば『あさみず』と呼ぼう」

「ありがとうございます。陛下……」

あたしがそう言つと…皇帝は機嫌よく先程の話題に話を戻した。

「…どうしても『あさみず』は謝礼金を受け取らないのか？」  
「受け取りません」

そこは譲れない。

皇帝は何か納得がいかないみたいで眉間に皺を寄せて何か考えてる様子だったけど、その顔が一瞬でにっこり笑顔に変わった。

…嫌な予感がする

「…それならば『あさみず』を我が国で保護しよう」

…………はい？

…何だかとんでもない方向に話が向かってない？

## 10話 多重人格ですか？

皇帝の言った言葉に固まったのも一瞬ですぐにフル回転で頭が働き出す。

…保護って何？

あの…生活保護とかそういう感じの物ですか？

それなら生活はやっていけてるし血税の恵みはいりませんけど…

ただ…何だかあたしの考えと皇帝の考えが違う様な気がする。  
聞くのは怖いけど聞かないと話が終わらないので…頑張る。

「あの…保護って…」

「『あさみず』が両親が見つかるまで、この城に住むといい」

…え？

…城に住む？

「転移魔法が使えるという事は魔力もあるようだから、帝国魔術学院に通うといい。も

ちろん後見人には私になろう」

…後見…人？…学校？

「それでは…すぐに部屋を用意」  
「ストオオオオッブ!!!!!!!!!!」

危ない！危なすぎる！！

皇帝の言ってる事を聞き取るだけで精一杯で思いつきり流されていきそうになった。

「い、いりませんっ！！保護いりませんっ！！」

「『あさみず』を一人で生活などさせられない。私の近くにいればいい」

…あたしの今までの生活を丸無視ってどういう事！？

しかもあたしには毒でしかない満面の笑みで「私の近くにいればいい」とか言うなあ！！！！

「ひ、一人じゃないから大丈夫ですっ！！」

ひいっ！！！！い、息苦しい…。

何か突然部屋の空気が減ったあ！！

「…一人じゃ…ない？だが、両親は別れたままだと…言わなかったか？」

こ、こ、コワイイイ！！！！

な、何で急にこの人怒っちゃってんの！？

あたし変な事言った覚えはないんですけど！！

「…もう一度聞こう。…今は一人だな？」



何で断定？と思ったけど、恐怖で思わずコクコクと頷いてしまう。  
…だって怖いんだもんっ！！

「ならば…一人じゃないというのはどういう事だ？」

「こ、皇帝の寢室からとある村に飛びまして、そ、そこで大変お世話になった人がおりますっ！！」

「…男か？」

何でそんなに地を這うような声出すんですか…。

び、美形が凄むと凡人の3割増しだって知ってます！？

「夫婦でえすっ！！！！」

「声出せえええ！」みたいな感じで『で』が思わず声裏っちゃったじゃないか…。

…これ何の訓練ですか？

「夫婦？」

ああ…ちよっと空気が戻ってきた

…何だったの今のやりとりは…死ぬかと思っただわ。

「夫婦というのは？…拾われたのか？養子にでもなったのか？」

こ、この人さっきから質問多くないですか？

せめてちよっとあたしにも息継ぎの時間を下さいっ！！！！

って、まあ〜超メンドクサイ…ほっといて下さいって逃げるのは無しですか？

ちっ、しまった。手配書で所在地ばれてるじゃん…。

でも、何でたまたま寝室に転送してきた子供…にこんなに手をかけようとするの？まあ…ほんとには子供じゃないけど…。

初めての寝室で見た事が無かったら完全に「…え？この人口リコン？」って疑惑が浮かぶ行為だよ？

まあ…そうじゃないにしても、迷子の子供を保護するってどれだけ子供好きなの！ってちょっと心配になってくるわ…。

自分で言うのもなんだけど、一つの国ともなればあたしみたいなストリートチルドレンがたくさんいるわけでしょ？それを全部保護してたら国潰れるよ？

そんな事を考えてたら皇帝が全然的外れな事を言った

「転送魔法で何処かにいこうとしても無駄だぞ。きっちり全て話してもらうからな」

「え？…どうして」

魔法の事なんて頭の中からスパッと消えてたけど、皇帝に言われて思い出した。それにしても無駄ってどういう事？

この部屋特殊結界でも張ってんの？そんな感じしないけど…

「『あさみず』の背中には魔法封じの術がかかっている。私より魔

力が優れていない限り、無効には出来ない」

あの最初に貼られた紙！！

でも…よかった。お馬鹿とか書かれてなくて…

んでもさ…こんな事言うのもなんだけど…、多分、多分だよ？

あたし今でも普通に魔法使えそうですけど…

10話 多重人格ですか?? (後書き)

閑話集を別で投稿しました

<http://ncode.syosetu.com/n6497w/>

10話に1話ずつぐらい書けたらと思います

## 11話 髪は女の命です

多分魔法が使えるっていうのは、それなりの確証があつて…まずあたしの頭。

これ実は魔法がかけてあつたりする。あたしの髪は本来は黒髪のど直毛なのに今は茶色のフワフワ髪。ライザさんにこの世界では黒髪が珍しいという事を聞いてとにかく目立ちたくなかったあたしはまず髪を変えた。

ざっくり言うと髪の構造と同じ3層魔法構造で今の髪型は出来上がってる。

『メデュラ』と言われるたんぱく質と脂質の塊でこれが髪の張りを司るものなんだけど、まずそれを細くする事によって直毛がふんわり毛髪に変わるのですよ！

その次に『コルテックス』と呼ばれる硬ケラチンというアミノ酸の塊があつて、この中のメラニン色素をいじる事で好きな髪色に早変わり！

『キューティクル』これ重要！細胞の板！これがしっかりしてないと天使の輪は出来ませんからね！強化！強化！

髪の成分さえ知ってりゃ魔法で簡単に操作出来ちゃったんだよね。

この魔法が組み込まれた魔石をピアスにしているのであたしの髪はサラフワ髪になっているのだ。

傷めずに髪を弄れるなんて、素晴らしい。

ひそかに昔からこの髪型に憧れていた事は内緒だ。

さすがに長さはどうにもならないので思い切って切った。いいよね、軽い髪！

切るなつて強制する奴がいなけりゃ元の世界でも肩下のこれぐらの長さがベストだと思う。腰下の黒髪なんて重さ半端ないっすよ。

…髪 of 構造なんてどこで知ったのかつて？ビバ理系！

ふふ…無駄に顕微鏡と格闘してなかつたですからね。

いや…元の世界では全然無駄でしたけどね…何せ営業職ですから。

まあ…ぐだぐだ説明したけど、そんなあたしのピアスは電池タイプじゃなくて魔方陣だけが組み込まれた物でずっとあたしの魔力を使つて発動してるから、本来なら背中 of 紙を貼られた時点で黒髪に戻らないと変なんだけど…指先で掴んだ髪は今までと一緒の茶髪…

…？

…あたし、皇帝より魔力あるつて事ですか？

いや…まさかそんな…ね。

きつとこの魔方陣が間違ってるか、皇帝の魔力が…そんなないだけですよね？

いや…失礼な事を考えてる自覚はあるんですけどね？

そうじゃないとすると…え〜無理。

考えるの止めよう！

そして今魔法を使うのは止めよう！

「あ！ほんとだ！！魔法使えないやつ！！ははっ！！」

ちよつと時間が空いたけど、とりあえず答えてみる。

怪訝な顔で皇帝がこっちを見てるけど気にしない。

「いや〜こんな魔法もあるんですね〜。びっくりです。凄いなあ  
〜まだまだ勉強不足ですね。あたし…」

…これは本音。まだまだあたしの知らない魔法がたくさんある。

…でも、希望が持てた。

あたしの知らない魔法があるって事は、それだけあたしが元の世界に帰れる可能性が広がったって事を意味する。

「これは少し上級魔法だからな…」

皇帝の言った言葉にそりゃあたしには無理だわ…と納得する。  
あたしの愛読書「はじめてのまほうのつかいかた」だし…ね。後  
は独学で全部やってきたから想像出来ない事は形に出来ない。

「上級魔法…」

それを使うのに必要なのは知識。それを得る為に必要なのは文字力。

……分かってるけど、道のりは長いなあ。

「……だろう。違うか？」

突然聞こえてきた声に体がびくっとなる。

…しまった。ここは皇帝の部屋であたしは闖入者だった。

あたしが自分の世界に浸ってる間に皇帝は何か喋り続けてたらしい。

どうしよう…聞いてなかったんですけど。

「え…っ」と

「どうだ？」

どうだと言われましても…何の事やらさっぱりで…

さっきみたいに「城に住め」とかだったら安易に肯定の返事も出さないし…

「そ、その件につきましては…後ほど…しっかり考慮させて頂いて…」



日本人秘儀！グレーゾーン！！

「考慮も何も無いだろう…。親に会いたくないのか？」

ええ？何の話だったんですか！？

全く持って話のつながりが見えないんですけど！？

「いや…親には会いたいですけど………」

「両親を捜すのに魔法ほど効果的な物はないだろう。あさみず…君のご両親の情報は君自身しか持ちえない。それならば調査の為に君自身もつとその技術を磨くしかない」

「はい…それはごもつともです」

いや、それは重々わかってるんですけどね。

いかんせん道のりが長いんですよ…

「ならばやはりあさみずは帝国魔術学院に通うべきだ」

「陛下…そろそろお時間が…」

「うわぁっ！！！！」

突然、扉付近から掛けられた声に飛び上がった。

ええええ！！！！

いつから居たんですか？！貴方！？

そしてどちら様ですか！？

## 12話 猫の威嚇は怖いんだぞ！

あたしのナゾはナゾのまま、皇帝と突然男は会話を続けてる。  
二人の会話を要約すると『ガース国の使者との謁見中にあたしが現れて、皇帝はその人をほっぽり出してここに駆け込んできた』らしい、皇帝陛下の返事が「放っておけ」なんかの切り捨てる言葉が出てきてないところを見ても重要な案件だったのではと推測出来る。

……… って駄目じゃんっ！！！！！！

重要度は関係なくても社会人としてそういうのはよくないと思うよっ！！！！

しかもそのガース国ってテリサン村の隣の国じゃん！揉めたらどうすんのさ！！！！

一番最初に被害受けるのテリサン村の人じゃないかっ！！！！

「あ…あの…」

とりあえず声を掛けてみるけど、男二人は全く気付いてくれず、それどころかどんどん話がずれていって「戻ると言った・戻るなんて言っていない」の会話をヒートアップさせていってるようで…

あたしは側にあつた適当な紙を丸めると肺いっぱい息を吸った

「そこまでええええ！！！！！！」

二人目掛けて自分の出せる最大の声を出すと、呆氣にとられこちらを向く二人の顔はなかなか見物であった。

「そんな「言った・言わない」の水掛け論してもしょうがないでしょうが！皇帝！！」

「な、なんだ」

「貴方、一國を統べる王様でしょう！こんな私事に左右されてる場合じゃないでしょうが！！キチンと自分の責任を果たしなさい！責任をつ！！！」

あたしの突然の言葉に皇帝は「うっ」とブロンズ像のように固まっってしまった。突然男も片眉を上げて「おや？」という顔でこつちを見てるがそれにもちよつとムカついた

「あんたも側近なら頭使え！！下らない私事に皇帝を煩わせるんじゃないわよ！！」

「あ…ああ」

今度は皇帝がこちらを見て「くくっ」と笑っている。それを見てあたしは皇帝に対して眼差しをきつくした。

「さつさと皇帝は元の場所へ行きなさいっ！！」

「いや…しかし…」

「シャー……ッ！！！！！！！！」

あたしが猫のように威嚇すると、皇帝は慌ててソファから立ち上がって扉へと向かう。だけど扉の前で立ち止まるとふっところちらを振り返った

「すぐ戻る。私が戻るまでここに居るように…」  
「そんな事よりさっさと行きなさいっ！！」

あたしが嘔み付くように言っても皇帝はその場から動こうとはしなかった。ただ俯いて聞こうとしなければ聞こえない小さな声で

「…頼むから…居てくれ」

と言った。そう言った皇帝の顔は俯いてて見えなかったけど、ぎゅつと拳が握られてるのだけが見えた。そんな皇帝を見てあたしの怒りも急速にしぼんでいく。

え〜っと…なんだか犬を捨ててる気になるのはあたしだけですかね…

…散々「う〜」とか「あ〜」とか誤魔化してみたけど…結局口から出た言葉は「……居るようにします」だった。

それを聞いて皇帝はぱつと顔を上げると、にこりとあの神々しい笑みを浮かべた。

いや、だからその笑顔はあたしには毒なんだって…  
自分の中にある罪悪感がどつと押し寄せてくる

いや…だつてあたし…居るようにしますって言っただけだし、あたし的には「（皇帝が帰る時間頃に）居るようにします」ってわけです。ずつとここに居るとは言っていないから一度家には帰ってもいい

よね？

いつ戻るかわかんない人をこんな上品な場所で待つって…あたしにとつては罰ゲーム以外のなんでもないもん。それにそろそろお昼でしょ？ミレーも心配だし、お腹も空いてきたから、ライザさんの昼食食べに一旦家に帰りたいかつたりするじゃない…。皇帝が戻りそうな時間にまた来ればいいだけで…ね？

「行ってくる」

「…い、行ってらっしゃい」

にこやかな皇帝が扉を出て行くとあたしは一つでつかいため息を吐いた

「…っ、疲れた」

最後のやりとりだけで疲労困憊になった。

「くっくっく」

「うわあ〜！！」

あたしの横から聞こえてきた含み笑いにまた叫び声を上げてしま  
う。

と、突然男っ！？あんたも出て行ったんじゃないの!？

どうしてか突然男はまだあたしと同じ部屋にいて、しかもあたしの隣で口元を手で覆って笑っている。

「ああ…すみません。あんな陛下を初めて見たものですから…」

いや…別に笑ってる理由なんて聞いてないし…

「…こ、皇帝と一緒にいられないんですか？」

「ええ、外には別の側近が控えておりますから」

「……………」

あたし的には一緒に出て行って貰った方が嬉しいんですけど…あ、もしかして

「見張りですか？」

「見張り？」

「ええ…あたしがこの部屋で悪さしないように…」

そりゃ闖入者だから信頼ないのは当たり前だけどさ…なら待ってけなんて言うなよ！って言いたくなる。

「ああ…違いますよ。そんな疑いはかけてません。幼児文字しか読めない貴方にこの部屋で何か出来るとは思いませんから」

一言多いなこの突然男は…またそれが的を得てるから更にムカつく

「じゃあ何で…」

「貴方に興味があったというか…いや、違うな。皇帝が興味を持った貴方に興味があるんですよ」

…やっぱり一言多い。

別に興味がある事に代わりないんだから違わないでしょうがっ！  
！「皇帝が興味を持った」部分はあっても無くてもよくないですか

!?

それにしても、突然男：貴方は誰なんでしょうか？

……いい加減名乗って貰えませんか？

### 13話 オアシスは毒沼だった

あたしの怪訝そうな目には全く動じず、突然男は優雅にソファに座った。

落ち着いて見ると、突然男…貴方って……

何て普通の顔してるの〜っ！

最近、メルフォスさんとかミレーヌとか皇帝とかその相手の美形女性とか…基本この世界の人間は顔が整っている…その他大勢キャラの中で生活してきたあたしは若干、美に食傷気味。

そんな中のオアシス見つけた〜!!!

名前も分からないけど突然男！  
素晴らしいっ！！貴方の普通顔！！

「あさみず、…座ったらどうですか？ずっと陛下が戻られるまで立ち続けるのはしんどいでしょう？」

「え…何であたしの名前？」

「……最初からずっと扉付近にいましたから」

ええ！？

全く気付きませんでしたけど…何その存在感のなさ！？

…あれですか？この世界は美形度合いで存在感が決まるんですか？



「き、気付きました…」

「まあ…よくある事です」

…そう言った突然男の姿に影を見たのはあただけでしょうか？  
ただすぐにその影も取り去って、こちらを向いてにっこり微笑ま  
れた。

いい。いいよ！その笑顔！

神々しさなんていらぬよ！素朴な普通の笑顔、素晴らしいっ！！

「お茶のお代わりを頼みましょうか」

突然男の笑顔に見惚れてると、彼がテーブルの上の茶器を片付け  
始めた。

ただそれを聞いた瞬間あたしのお腹がタプタプを必死に訴えてきて

「いついえっ！！もう飲み物は結構です！」

ソファにだけ座らせてもらったが、お腹をポンポンと叩いてアピ  
ールを忘れない

「ああ…そう言えば、レヒアのジュースを7杯も飲んでいらっし  
やいましたね…」

…残念だ。

顔はオアシスなのに…やっぱり一言多い…この人。

「…ところで、皇帝の側近って事はわかりましたけど、貴方はど  
なたなんですか？」

「失礼しました。私はガルフエルド帝国宰相シュバイリヒト・グ

ランロード・レイ・レングランドと言います」

「シュ…?」

「シュバイリヒト・グランロード・レイ・レングランド」

さっきの皇帝と言い、この人と言い…名前が長い!!!

…もう皇帝の名前思い出せないし…リユ……なんだっけ?

ちょっと思い出そうと努力はしてみたけど…無理っぽいんで諦める。

ああ…他の事考えたら、宰相の名前忘れた…

昔から人の名前覚えるのは苦手なんだよね…正直、皇帝と宰相の名前は一生覚えられる気がしない。

え〜っと……シュ〜グラ〜……レンがついてたよっかな?

あっ!……シュグラ〜!

……何か違う。

もう宰相でいい。

でも宰相って…確か、国の偉い人じゃなかったっけ？

「え〜っと…宰相さん。あの…あたしどうなるんでしょうか…」

「どうなると言うか…あさみずがどうしたいかによるんじゃないでしょうか？」

「あたし!？」

「ええ。君が帝国魔術学院に通うならばその手続きを取りますし、そんでなければ今後の事を多少話し合う必要がありますね」

あゝあの保護とかってやつですね…。

「あの…あたし結構自立してやっていけてるんで、保護とかいら  
ないです」

「そうですか。ですが決定事項として諦めて下さい」

「はい?」

今、何と仰いました？

諦める…意味がわからないんですけど…

「陛下が貴方をこの国で保護すると口にした以上、それに我らは従うだけです。この国で陛下の勅命に逆らう事は出来ません。逆らう者達は下手すれば反逆者です」

は、は、反逆者!？

おいおい、自分の無実を証明しにきて、ほんとの犯罪者になるとかってどうなの!？

…それに何か宰相の言い方が気になる。『者達』って複数形ですよね？

「え〜っと…それってあたしが皇帝を無視してこのまま帰れば、住んでる所にも迷惑がかかるって事ですか？」

「説明前にご理解頂けて何よりです」

…褒められても全然嬉しくないんですけど。

「…つまりあたしにどうしろって言うんですか？」

「陛下の御心のままに…」

…何だそれ。

あたしは皇帝のおもちゃじゃないっての！！！

そう思いながらあたしはさっきの皇帝との会話を頭の中でリロードする。

彼はあたしを保護するのは考え直してくれそうだった…でも帝国魔術学院には行けて何度も言われた

「……………つまり、あたしは帝国魔術学院に通う事になるんですね」  
「…やはり貴方は頭の回転が速い。陛下とのやり取りといい、とても12歳とは思えません。ニホンという国にちよっと興味が出てきましたよ」

「ニホンは関係ないし…あたしじゅっ」

「…じゅっ？」

やばい…もう少しで「12歳じゃないし」って言うっちゃうところだった

「じゅっ…何ですか？」

「え〜っと…十分苦勞してきてますから」「」

若干、苦しい言い回しだとは思ったけど、宰相は「…そうでしたね」って納得したみたいだった

「では、魔術学院の説明をしましょう」

「……ヨロシクオネガイシマス」

ああ…宰相がまたにっこり笑顔を浮かべている。

オアシスはどうやら毒沼だったらしい。

私、安佐水 日和は22歳にて迷子になり、25歳にて学生に戻る事になりそうです

14話 「前門の虎、後門の狼」隠れていたのは雌ライオンでした

一通り宰相から魔術学院の説明を聞いた感想は、はっきり言って

「…めんどさいこの上無く、超敵しいですね」

学院自体は朝の9時から午後6時までらしい…いやいや、12歳をどれだけ拘束するの？無茶でしょ？このカリキュラム…まあ…休憩は2時間あるらしいけど…

この学院だけでも、かなりゲンナリなのにさらに輪をかけて全寮制の寮がハンパ無い。

何？朝5時起床って…5時に起きて何すんの？

…門限6時半って何ですか？学院6時までなんでしょ？

しかも寮で自主学習時間って何？…習い事？んなもんいらねえ

！！！！！

それを淡々と語る宰相も人じゃない…この似非オアシスめ~~~~

~~~~！！！！

「…いい、行きたくない…なんちゃって」

何で社会人で悠々自適な生活からこんな窮屈な世界に逆戻りせにやならんのだ！！

基本怠惰人間なので、断固として反対…

「ならば城に住みますか？城ででしたら礼儀作法・貴族常識・ダンスなど社交界に出られる程度の嗜みは必需となりますのでみっちり教育させて頂きますが…」

「前門の虎、後門の狼」を身を持って体験…全然嬉しくないんですけど…。

嬉しくないけど、どうせ食われるなら身になる物のがいい。

「ま…魔術学院でお願いします」

「では、すぐに手続きをしましょう」

「ちょ、ちょっと待ってください。あたしにも今までの生活があるので、それをきちんと整理したいんですけど…お世話になった人達に挨拶もしたいですし…」

とにかく地獄への道は出来る限り先延ばししたい。

ああ…出来ればドロンしたい。

テリサン村でゆっくりのんびりしたい~~~~~!!!

「…それもそうですね」

宰相は手を口元に持って行って少し考えてるような感じだった。頑張れっ!!あたしっ!!もう一押しだっ!!!

「では城から連絡を向かわせましょう」

おおい!

それじゃあたし帰れないじゃないですかっ!?

どうやって宰相を説得しようかとあたしが考えてる間にバーンとまた扉が開かれ、そこにはさっき出て行ったと思った皇帝が立っていた

「あさみず！」

「あ…皇帝」

…どうやら宰相と話してる間に大分時間が経ってたらしい

目の前の宰相は皇帝の姿を確認するとすぐにソファから立ち上がり、横に避けて頭を下げた。あたしも座ったままだったけど釣られて頭を下げる

「お帰りなさい」

無意識にあたしから出た言葉に皇帝がこれでもかというぐらい笑みを深くする。

いや…単なる癖なんですけど？

「今戻った。話は進んだか？」

「はい。魔術学院に通って頂く了承を得ました」

「そうか。よかった」

…いや、了承って…ほぼ脅迫でしたよね？拒否権…何ですか？それ？

口まで出かけた言葉は宰相の笑顔を見て瞬時に飲み込んだ  
彼を敵にまわすのは得策じゃないですね



「…アリガトウゴザイマス。ガンバツテベンキョウシマス」

…心が籠ってないのは許してください。

「？」

「…あさみずは魔術学院の厳しさを聞いて少し不安になったようです」

「そうか…だが、私がいる。私が守るから何かあったら言いなさい」

皇帝が手を広げてくれているけど…

え〜〜と、これは…あたしどういう反応すればいいんですかね…

対応に困って焦っていると宰相と目が合った。

…はい？

どうみても首を皇帝の方向にぐいぐいと振っている。

え？何ですか？それ…

……………あたしに皇帝の胸に飛び込めと？

それあたしの…死亡フラグですか？

飛び込んだ瞬間に不敬罪とかでメツタ切りに合っんじゃないでしょうか。

どきどきしながら宰相を見るとだんだん眉間の皺が深くなっているのが見える。そのまま視線をギギギと動かし皇帝を見ると、希望に満ちた目でこちらを見ている。

「え〜〜〜〜と…」

ぎゃ〜！！前後の虎と狼が一緒になって襲ってきてます！！

あたしが冷たい汗をたらたら流しながら究極の選択を迫られている中、また扉の方が騒がしくなっただと思っただら扉がさっきの皇帝に負けない音で開かれた。

た……助かった！

とりあえずこの状況から救いだしてくれるなら何でもウエルカム！出来れば急用とかで皇帝、もちろん宰相込みで引き取って欲しい

「エリルトーラ様！お待ち下さいっ！！」

「陛下っ！！！！」

駆け込んできたのは女性だった。

それを見た宰相は大きく舌打ちをし、皇帝は今までの笑顔はどこにいった？って感じで無表情で絶対零度な怒りを醸し出している。

そんな雰囲気を全く察していないのか、飛び込んできたエリル…

？さんはまっすぐにあたしに向かってくる。

あれ…この人どっかで見た事あるんだよね？

思い出せないけど、向かってくる彼女の表情を見て思った

虎と狼を押し退けて雌ライオンがやってきた…

## 15話 嫉妬の対象

あゝ…エリル?さん。

せつかくの綺麗な顔が雌ライオンから般若と化してますよ。

怖い…夢に見そうです。

猛然と迫ってくるエリル?さんを見て、このままじゃ確実にフルボツコな目に合いそうな予感がしたので、とりあえず慌てて人身御供を立ててその影に隠れてみた。

「どきなさいっ!!!宰相!!!」

「…あさみず…色んな意味で仕返しですか?」

エリルさんの前に押し出された宰相が口を引くつかせながら振り向いてくる。

はて…あたし的にはナイスチョイスだと思っただけけど…

「え?だって彼女は嫉妬の権化でしょ?火に油注ぐような事してどうするんですか!」

どう見てもエリルさんの瞳は嫉妬の目に燃えていらっしやるので、皇帝と宰相で比べるとまさか嫉妬の対象が宰相であるわけが無く…皇帝の後ろなんか隠れて引火されたら困るでしょう

「…別のところで引火どころか大爆発を起こしてますよ」

蒼い顔の宰相が見つめる先を辿って、彼の影に隠れたまま後ろを振り向いてみる…。

ひいひいっ！！悪魔がいた…悪魔が！！

すぐに顔を元の位置に戻し、宰相に話しかけたが余りの恐怖に思わず小さな声になってしまう

「な、何で皇帝あんな怒ってるの!？」

「わかってないんですか!？」

驚愕な色を浮かべた大きな目で宰相があたしを見つめてくる。

いや、エリルさんの嫉妬は分かるですよ？

皇帝との寝所に突然現れたらしい手配書の女がまた皇帝に接触してるなんて聞いたら、そりゃ飛んで来ると思います。それは皇帝への思いがあつてこそですよ。素晴らしい！！

なので穩便に受け流すべくあたしは宰相の影に隠れたんですけど…

何ですか？後ろの伏兵は…：全然身に覚えはないんですけど!!!

「あ…」

つまりあれですか？この皇帝の怒りは「何隠れてるんだ？俺の好きな女に心配をかけたのだから素直に殴られる!」ってやつですか？

えー…出来れば痛いのは御免被りたいんですけど、男兄弟の中で育ったんで、女性に殴られるぐらいなら…我慢出来る範囲です。

まあ、アポとらずにこの部屋を直接訪れたのは事実ですから…：…  
一回は我慢ですかね

あたしは覚悟を決めると宰相の影からゆっくりと前に出て、直立した

「…いい覚悟ですわね」

振り上げられる手を見たけど…そ、そんな振り上げますか？って  
いづぐらい振り上げられてたので相当の痛みを覚悟した。

思いつきり痛いのは一瞬！！耐えるあたし！！！！

ぎゅっと目をつぶって衝撃に備えた。

…けど、いつまで経っても予想した痛みが来ない。

…あれ？

恐々と薄目を開けて状況を確認してみると、あたしの前には大きな  
背中。それはさっきまで隠れてた宰相の背中とは違い…

「…皇帝？」

しかも皇帝の後ろから前の状況を確認して啞然とした。

「離しなさいっ！！宰相！！私を誰だと思っているのですか！！」  
「エリルトーラ伯爵令嬢ですかね…」

え？何でエリルさんが拘束されてるんですかね…しかも宰相に拘束されてるし、皇帝は皇帝で悪魔から魔王へと表情を進化してらっしゃいます…！

え〜っと…何がどうなってるのでしょ…

あたしは現状を把握するべく周りの会話に集中した

「側室一の位の私を公爵位呼ばわりするとは…宰相、身分をわきまえなさい…！」

「すでに解散させた後宮での位など何の役にも立ちませんよ。私は…筆頭侯爵。貴方が太刀打ち出来る相手でないのはわかっているはずです。『エリルトーラ伯爵令嬢』」

相手が逆上する中で静かに宰相が『エリルトーラ伯爵令嬢』と繰り返した時の声色に思わずトリハダが立つ。エリルさんもそれが分かったのか、話をする相手を変えてきた

「陛下っ…！！私を手を掛けたこの者をどうか罰して下さいませっ…！」

宰相に拘束されながらも、必死になってエリルさんは皇帝に訴えかけてくる。

その時「陛下っ！」と叫ぶ声に自分の記憶の中の彼女が誰だったかを知った。

「あの時…皇帝と寢室に一緒にいた女性…」

あの時はベッドの灯りだけでは、暗くてしっかりと顔はわからない

かったが、『陛下っ！！早くその者を殺して下さいませっ！！』という記憶の中にある彼女の声と今の『陛下っ！』の音がリンクした。ただ、あたしの呟きは誰にも聞こえてなかったようで、会話はあたしを無視して進んでいる。慌てて思考を会話に戻し、キャッチボールを見ているように会話の先に目を追わせた。そしてその先にあった皇帝の凍えるような冷たい視線に思わず彼から一步距離をとってしまふ。

「何故だ？…解散を言い渡して3年も経っているのにいつまでも後宮に居座るそなた達の為に何故私が動かねばならないのだ？」

「へ…陛下！？」

「解散命令に従わぬそなた達が後宮で豪華な生活をおくるを放置していたのは、一重に今までを労つての事。素直に親元へ戻れば、我が側室であつた事実により再び良縁に結ばれたであろう…それを…まさかあさみずを襲つとは…」

「……あさみず」

あたしはエリルさんに人を殺さんばかりの視線を向けられた。

そんな憎憎しい視線は生まれて一度も受けた事がなかった。



16話 腹が減っては戦…の前に死にそうです

いや…あのね。

これはどうみてもとぼっちりでしょう？

「あさみず！…！お前のせいだっ…！！！」

「ええ！？」

いやいやエリルさん。

皇帝の言ってる事をよおしく考えて欲しい。全部自分達のせいじゃないですか？

しかも怒りをぶつける相手間違ってますか？…怒りなら最初に理不尽な命令をした皇帝にぶつけて頂きたいんですけど…

そして果てしなくあたしにとって皇帝云々はどうでもいいです

…それよりお腹が空きました。

限界越えています。

死にそうです。

これはもう早く解決して食事にありつかないとヤバい領域です。

一番てつとり早く解決出来る方法な気がしたんで、とりあえず無言であたしの目の前の背中を押ししてみる。

「…？…あさみずどうした？」

「…とりあえず一発ぐらい叩かれるのがよろしいかと」

「…え！？」

「だって、側室ってようは奥さんの事でしょう？相手が納得して

ないのに権力使って一方的に離縁って…それはヒドいと思います。  
そんな男は最低です」

目を見開いて驚くエリルさん。あたしの発言に固まったままの皇帝と宰相だったが。いち早く立ち直ったのは呆れた溜息をついた宰相だった。

「…あさみず。皇帝が側室を持った理由はただ単に子を残す義務の遂行です。皇帝がその義務行為をきちんと果たしていた以上、10年という月日がありながら子を成せなかった彼女達は側室の仕事を果たさなかったのですよ。それに対して何らかの決定を下すのは当たり前的事。その例外対象なのは正妃だけです」

宰相の言葉にエリルさんがぎゅっと唇を噛む。

…何てややこしい貴族世界。  
そして、どうでもいい世界。

宰相の話聞いて、彼女達がそれを理解した上での婚姻だという事はわかったけれど、ならその後の命令に従わなかったのも罪とわかった上での事らしく…

「法で正妃だけは皇帝自ら愛した者を選べます。我が国では子を産んだからといって正妃になれるわけではありません。もちろん継承者の位も産まれた順ではなく正妃・側室一位・二位と続きます。正妃がずっと空位の時もあります」

…別に聞いてないし、聞きたくないし、聞けば聞く程、面倒くさ

さが増すし。

…というか、別にそんな『リアル大奥』豆知識を知りたいわけじゃないんです。

あたしはとにかく自分のお腹の為に解決して欲しいだけなんです  
！！

あたしは無関係だと誰か証明して下さい！！  
すぐ村に帰るのが無理なら、せめて食事を下さい！！

「…あさみず。私は義務だとしても、彼女達を不当に扱った事など無い。家柄によって地位の高さはあったが皆平等に扱っていた」

…いや、それも聞いてませんから。

あたし全然そんな事気にしてませんから！！あたしが今気になるのは自分の空腹だけですから！！

何、この難局…さっきの皇帝の腕の中に飛び込むかどうかの方が  
何倍も簡単だった

フル回転でお腹の為に脳みそを働かせこの事態を打開しようとするけど、上手くいかず。深く考えれば考える程、お昼抜きのまま現状にいたる事など空腹な事しか思い出せない

…駄目だ限界だ。

『くう』

思ったのと同時にあたしのお腹が盛大に鳴った。

だって仕方ないじゃないですか！！

ここに来るまでに転送魔法でかなりのエネルギーを消費してたんですよ？宰相と二人の時にすでにお腹が限界だったのに、帰れる策を微塵も感じさせない脳みそにお腹が反乱を起こしても仕様がなと思うんです！！

…お茶菓子ありましたよね？

あたしの視線はもうテーブルの上にある上品そうなお菓子にロックオンされていて、それ以外の事なんてどうでもよくなっていた。

…視線で殺す？上等です！！

このままだとそれより先に空腹で死にますからっ！！

人間、極限まで追いつめられるとどんな事もへっちゃららしく…一度たがが外れたあたしはとにかく栄養の補給を求め、ソファにどかっとなり目の前の茶菓子にカブリついた

あたしの突然の行動は残りの3人の空気を一変させたらしく。

「……………あさみず」

宰相に話しかけられ、あたしはもしかやもしかや口を動かしながら三

人を見る。

…何ですか？その3人とも哀れむ様な見守る様な瞳は…

「……食事を運ばせよう」

「私が伝えてきますわ…」

「ならば…その後、私が宮まで送りましょう」

皇帝・エリスさん・宰相の今までの秀囲気は！？という突然の行動にあたしは口を動かしながら頭に疑問符をつけたけど、とにかく食事がありつけそうなのでひたすら目の前の茶菓子宰相の分まで完食したのだった。

## 17話 昼ドラ渦巻く城事情

宰相とエリルさんが一緒に出ていってから数分で部屋の扉がノックされた。皇帝の返事とともに扉が開けられ、部屋に運び込まれる大量の食事にあたしは圧倒されてしまう

「はやっ!!」

「…そうか？」

いや皇帝…わかってないようですけど料理つてもっと手間のかかるものなんですよ？

並べられる食事の中に普通に手の込んだ煮込み物とかありますし…多分魔法で時短調理した物なんですかね？出来れば後で厨房を覗かせて頂けるとライザさんにいいお土産が出来そうな気がします

まあ…それよりも今はこの空腹をどうにかしないと頭も働いてくれないですけどね。

「…食べてもいいですか？」

まだ並べられてる途中だけど、いい香りが立ち込めていて我慢の限界です

いつの間にか向かいに座る皇帝に視線を向けると…こり微笑んでくれる

「どうぞ。…そんなにお腹を空かせていたとは…すまなかった」

「いえ…では、いただきます！」

いつもの習慣で手を合わせて挨拶すると、あたしはとりあえずた

くさん並べられたフォークやナイフから一番使いやすそうなフォークを選んで目の前の肉にぶっ刺した。

これでもかというぐらい大口で一気に頬張ると口中に香ばしい味が広がり、そのまま溶けて無くなった。

…有り得ない。感動…これは…

「激ウマ~~~~~!!!!!!」

…ほんとにこの世界の料理はおいしい。

元の世界でも食べる事が好きだったあたしは、料理の点で言えばやはりこの世界はパラダイスだと改めて実感した。

元の世界と同じような食材でも何倍も味が濃厚な気がする。

あたしはとにかくお腹が空いていたので、どんどんお皿を空にしていった

その度に「最高!」や「宝石箱きた〜!」などの言葉を発していると、皇帝が向かいのソファで肩を揺らして笑いだした。

「にやんでふか…(何ですか)」

…口の中に食べ物が入った状態だったから変な言葉になってしまったのは許して欲しい

「いや…すまない。そんなに美味しそうに食事をする人を久々に見たのでな…」

ええ!?

こんなに美味しい食事を食べて、仏頂面とかがありえないし!!!

まあ…ここに並べられた物でもライザさんのグリユスリーフに敵うものは無いけどね

「それは失礼ですね」

「…失礼？」

「食事を楽しめない環境なんて材料を作った人にも料理を作った人にも失礼です」

こんな美味しい料理を感謝出来ない環境なんて…とんでもない!

「そうか…昔はいつも食事は毒が仕込まれているかと…緊張の日々だったからな」

「ぶっつっ!!!」

思わず口の中の物が噴射されてしまった。

「ど、ど、ど!毒!?!」

「昔の話だ。今は料理も全てチェックを入れてるから大丈夫だ」

いや…そういう事じゃなくて…

…食べ物に毒が含まれてるってどんな映画の世界ですか?

「…も、もしかして…皇帝はある程度毒の耐性をつけてたりするんですか」

「そうだな。即死するような強い毒に関してはある程度の耐性は身につけている」



ひいひい！

恐ろしい！都会ってどうか城！愛憎劇から泥沼政治まで恐ろし過ぎるー！！

…あたしは田舎ののんびりした空気の方がいいです…はい。

「普段は魔法である程度は防御している。だがもし相手の魔力の方が強かった場合に備えての措置だ」

…あたしは何もしてませんから。

皇帝より魔力が強いかもしれないなんて…脳の海溝に捨てましたから…

えー

…食欲が激減しました。

まあ…ほとんどお皿はキレイな状態だったんで、別名満腹ともいいますが…

少なくともこのお腹、3人前は食べた感じですよ。

「…じ、ごちそう様でした」

手を合わせて挨拶すると不思議そうな顔で皇帝がこちらを見てい

た。

「さきほど手を合わせていたな？…それは何だ？」

あくこつちの世界では食事の挨拶無いんだった…。  
ずっとメルフォス家で過ごしてたからすっかり忘れてた。

「ニホンでの習慣だったんです」

「祈りか何かか？」

「いえ…祈りというよりは材料と料理を作ってくれた人への感謝の気持ちです」

「ほう…。それはいい習慣だな」

あたしもそう思います。

何事にも感謝の気持ちを忘れなければ、争いなんて起こらないと思っんですけどね…

ま、そんな事はいいとして…

「あのお〜」

「どうした？」

食い逃げの様で凄く嫌なんですけどね…

「ところで、あたし…いつ帰れるんでしょうか？」

「……帰る？」

「はい。魔術学校に行くにしても一度村に戻りたいんですけど…」

「……村はどこだ」

「テリサン村です」

「っ!？」

…え？

…どうしてそんなに驚かれてるんでしょうか？

「…テリサン…村？」

えっと…あたし何か地雷踏みましたか？

踏んだ地雷がわからないんで対処の仕様が無いんですけど…

何だろう？

またまたピンチな様です

## 18話 田舎だと思っていたら、やっぱり田舎だった

えっと…テリサン村はそんな変な村じゃないんですけど…？

そんなドン引きされるような村じゃないですよ？いい人達ですよ

！！

あたしがどうフォローを入れればいいか考えていると皇帝が言葉を續けてきた

「帝都からテリサン村まで…魔法以外の一番早い移動手段を使っても3ヶ月はかかる」

「あ…そっちですか…」

あはは〜距離の事だったなんて全然勘違いしてました

「…転移魔法も…距離からして莫大な魔石を必要とするからそうやすやすと行える物じゃない」

…あれ？

転移魔法って距離 $\parallel$ 使用魔力なんですか？

しかもテリサン村が以外と遠い事実にびっくりした。

…だから3年も帝都で手配書だされても村まで届かなかったんだ、なるほど納得。

村にある地図とか超アバウトだったもんなあ…。

あの地図では帝都とテリサン村の間2cmぐらいしか無かったけど…結構近所なんだって勝手に思って来ちゃったあたしはどうすればいいの？

…あの地図の縮図は信用性0っていう事がよくわかった。

…それより前にあの地図って正しいのか？

まあ…その疑問は置いて…

今はこの場を乗り切る事に全力を注がなくては…だって皇帝が返事を求めてじつと見つめてくる…これはかなりキツイ

「あはは」

「あさみずは…どうやってここまで辿り着いたんだ？まさかジュールに乗ってきたわけじゃないだろう？」

ジュールは知ってますよ？

この世界で一番早い乗り物で、見た目馬車なのに馬無し。動力は魔石らしく、よくガース国へ向かう旅人が乗ってる。

スピード的には車ぐらい出せるみただけで魔石の消費が凄まじいので、だいたい自転車ぐらいのスピードで走ってるのがほとんどらしい。

あれで3ヶ月っていうと…この世界の時間軸は元の世界とあまり変わらないので…単純計算で…

90日×(一日の走行時間10時間×自転車時速15km)＝村までの距離13・500km

東京からマイアミまで行けちゃうよ…

改めてデジタル化すると…そんなに遠いのか…テリサン村…その距離

を2cmつて…

もちろんあたしは帝都で地図を買って、あの地図は即座に廃棄する事を頭にメモした

しかし…どうしようか？

そんな距離を「普通に来ちゃいました…」とかありえないよね？

仕方ないけど…

「帝都近くまではこちらに用事のある方に転送魔法を便乗させて頂きまして…これってガース国からの中継地点の利点ですね。まあ…そこからのこの部屋へは自分の転送魔法を使いましたけど…」

嘘がどんどん増えていく度につこり微笑む顔筋が痛い…。

平凡に生きていく為とは言え、いつかお婆ちゃんに聞いた「嘘つく子は舌抜かれるばってんね」という言葉が頭を過り、思わず口をぎゅっと閉じた

「そういえば魔障壁は…城へはどうやって転送したんだ？」

…つち。

何かどんどん最初に心配したヤバい点についてくるなあ。

「え〜つと…穴が開いてまして」

「穴!？」

「目印つけておきましたから後で直された方がいいですよ?」

え〜…開けた犯人あたしですけど。一応すみませんと心の中で謝

つておく。

皇帝が慌てて外に控えていた衛兵を呼んだから、至急直させるのだと推測。

その際に衛兵から耳打ちで何か言われていたが、こっちまで聞かえなかった

ここでこの会話をしてしまったからには城の中からは転送魔法を使う事が出来なくなったので、とにかく一刻も早くこの城を出る事に専念しなくては

…早くおみやげも買いたいし。

「あの…そろそろ遅くなって村の人も心配してると思うのでたし帰ります」

「私にとつては最悪だが…あさみずにとつては朗報だ」

「朗報？」

皇帝が苦虫を噛み潰した顔でこちらを見ている。

朗報とは何ぞや？と視線で訴えかけてもなかなか話さそうとしない

「…ほんとにこのまま城に残る気はないか？」

「ありません」

ええ、即答です。

…魔術学院の事とか、とりあえず一旦帰って村で冷静に考えます

皇帝は一度大きく溜息をついた

「ガース国の使者が2時間後にテリサン村近くまで転送魔法で飛

ぶらしい…それへの便乗が可能そうだが…どうする？」

…2時間後。

ぎりぎり夕食に間に合いそうな時間…って今御飯食べたところだけ  
ど。

ライザさんの夕食は別腹なんで！！

「お願いします！！」

疲れてるし、自分自身で魔法使わずに済むならラッキー！！！！

「ならば…約束して欲しい事がある」

…さつき見た捨て犬のような陛下にまたなった。

切に願う。

美形のこんな姿を邪険に出来る魔法があるなら今すぐ教えて欲し

い



## 19話 色んな意味で逃げれません

え〜つとこの沈黙は返事を求められているんでしょうが、先に内容を聞くわけには…

ちらりと皇帝を見てみるけど…やっぱりじっと捨て犬の目で見つめられてるだけで

やばい…やばすぎる。

このままじゃ普通にわけもわからず何でも頷いてしまいそうな気がする

…これ暗示魔法か何かですか？

あたし動物に弱いんです…というかメロメロで…

ええそりゃもう！！元の世界の実家には猫が6匹、犬が3匹います。

全部拾ってきた子達で…あの子達どうしてるでしょうかね？…まあ全員あたしより何故か弟に嫉妬の炎も燃やしてしまうぐらい懐いてましたから心配ないんですけどね。

がたんっ！！！！

あたしが目を逸らして意識が外れたのを気づいたのか目の前の皇

帝が突然立ち上がった

「うおっ!!」

「?」

いや…人間、突然の出来事だと癖が出るんですよ。

男兄弟の中で育ったあたしに「きゃっ!!」とか女っぽい事を求めても無駄です

「背中の封じの紙を取ってあげよう」

「え?あ…」

…あ、すっかり忘れてました。

そつえばあたしそんな物貼られてましたね

「…苦しかっただろう。魔力保持者は微力ながら魔力を常に使用しているから、それを無理に止められ体内に留められると、身体自体が何倍も重くなる」

「ど、道理で身体が何か重だるいなあ…って思ってたんですよ」

全く元気です。

むしろ食事美味しかったんでいつもよりがんがいけそつです!

立ち上がった皇帝があたしの後ろにまわると背中に貼られていた紙が剥がされた

「……………」

身体軽くなるかなあって…………ちよつと期待したのに。

やっぱり何の変哲もない…けど、とりあえず肩を回す動作をしておく。

「気分は悪くないか？」

「あ…はい」

後ろの皇帝へと振り向いた瞬間、耳に感じた違和感。

あっ！

「これが…私からの願いだ」

とつさに耳に手をやると、そこにはいつも感じる金属の感触が無かった。

耳を確認した後、ゆっくりとした動作でそのままその手を頭へと移動させる

…もうひとつ自分に感じた違和感。

視線だけを移動した手元に向け、その手に握られた黒髪を見た  
あたしの心臓が早鐘を打つ。

げげっ！もしかしてあたしが皇帝より魔法使えそうなのばれまし

た!?

「…髪の色が変わってただろう? 魔力を封じても変わらないなら何かの媒体を使ってるに違いないと思ってね。身に着けている装飾品はこれだけのようだったからな…」

そう言っ て手にしたあたしのピアスを眺めている

「黒髪の方が君には似合う」

「……………」

よ、よ、よかったあああ!!

どうやらピアスが魔力込みの魔石だと思われたみたいで、あたしが常に魔力を使っ てた事はばれてないみたい…。

息も詰めてたみたいで、ふう〜と大きく吐きだした。

ただ… ばれなかったのは良かったけど困った事もある

取られたピアス… あれ、チタンなんだよね。

あたし基本的に金属アレルギーだからシルバーとか18金とかあれ以外の金属ピアスつけるとただだれて酷い状況になっ ちゃうんで、

よく知らないこの世界の鉱石を身に着ける勇氣は無い。だけど身に着けてないとピアス穴塞がっちゃうし。

「返してもらえますか」

無駄な気はするけど一応手を皇帝に差し出してみる

…どうして手を握る？

「約束として預かっておくよ。君が城に戻ってくれば返そう」

「……………」

「その代わりにこれを…」

言葉とともに握られた手首に虹色の細いリングのようなものが現れた。

「……………」

「これ何ですか？」

「魔力を結晶化したものだ。これを身に着けていると自然に体内から流れ出る魔力を集める事が出来る。テリサン村からの転送魔法もこれで行えるだろう」

そんな便利な物があるんですね…

「この髪色だと目立ってしょうがないんですけど…」

「その方が逃げる事が出来ないだろう？」

「……………に、逃げませんよ」

テリサン村が思いの他遠かったんで…そのままばっくれようなんて考えてませんよ…。

うう…皇帝の笑顔が怖い。

「では、ガース国の使者に引き合わせよう」

握ったままの手を軽くひっぱられ立ち上がるとそのまま腰に手をあてられた

…こ、これは…！いわゆるエスコートってやつですか！？

思わずびくって身体がなった事は許してほしい。

だってあたしは根っからの平民ですから！

皇帝自らエスコートなんて名誉な事なんでしょうけどね…あたしにとつてこの状況、羞恥プレイ以外の何でもないんです…！！

散々城の中をこの状況で歩いて人々の好奇心な視線に晒され、拳句の果てには勝手にガース国の使者が控える部屋に乗り込んで…

「あさみずは私にとって大事な人だ。丁重に頼むぞ」

んぎゃー！！！！

今からこの人達と行動するのに、これほどの妨害は無いでしょう

！？

使者の人達の恐縮が…萎縮が…入り乱れてる  
ただ一様に皆さん、厄介な頼まれ事を引き受けてしまったって顔  
に書いてますよ。

…色んな意味で痛い、痛すぎる。

…どうみても、この部屋の中でご機嫌だったのは皇帝だけだった

19話 色々な意味で逃げられません(後書き)

毎日たくさんの方に読んで頂けてほんとに嬉しいです

明日のお昼は閑話2話目を更新します



20話 『美形男が口にする言葉10選』は望郷の念を呼ぶ

今の感想は…針のムシロです。

2時間この状態とありえませんが…

一挙一動を監視されてるといっつか…  
ちよっと手を上げただけで誰かが話しかけてきます

しかも

「どうかされましたか？」

「何かご不興でも？」

いや…別にただ伸びただけで…

「「申し訳ありません」「

「……………」

目の前で頭を下げる使者の方々。

…あたしは魔王か何かですか？

皇帝は人に呼ばれて「ちよっと待ってて」と言い残し部屋を出て  
行き、それからずっとこんな感じ。

…非常に居た堪れません。

それでも涙が出るくらい説明したんですよ  
あたしはあくまで平民だと…力説に力説を重ねた結果。

…なぜか魔王と化していました。

力説が仇となつてさつき以上に萎縮されたらしい。

仲良くしようにも今日初めて会った人、しかも異世界の他国人なんていくら営業人間といえど越えるにはハードルが高すぎて…しかもとどめにあの皇帝の一言ですから

それならば邪魔にならないように黙って隅の方に座っておこうと思つて移動したら、ずっとこっちの様子を伺われて、しかもあたしが喋らなければ…みんな喋らないし…重い！重すぎます！！！！

とにかく何とかこの空気を打開しようとして側に居た人に話しかけてみる

「後…どのくらいで発たれるんですか？」

「申し訳ありません！！ゲートの使用許可が下りるまで待機状態です…」

…全力で謝られました。

「……………」

「……………」

ガス国の人と見詰め合う事5分。  
逸らされる事の無い相手の視線はだんだん潤み始めてる

…いや、泣きたいのこっちだし。

もう無理だと思って立ち上がったら、同時に扉が開いてそこに皇帝が立っていた

「あさみず、待たせたね」

「皇帝!!」

うん、今腕を広げてくれたら気持ちよく飛び込む。

実際は皇帝は腕を広げなかったので側に駆け寄るだけだったけど…

駆け寄るあたしを見て皇帝が破顔した。

その笑顔…毒だけど背筋にぞぞって何かが走ったけど、今は素直に嬉しい!

だからあたしも笑顔を返す

「使者殿、ゲートの準備が出来たのでご案内しよう」

良かった!!皆さん!!

苦行の時間は終わりを迎えました!!!!

と振り向いたあたしが見たものはガース国の使者達が驚愕で固ま  
ってる姿だった

「…おや？」

そんなガース国の人にあたしの注意が向いている隙に、また皇帝  
の手が腰にあてられる

「うわっ！！！」

…しまった油断した。

「さ、あさみず。こちらだ」

この部屋に来た時と同様にさりげなくエスコートの形をとられて  
しまったあたしは、今更逃げるわけにもいかず素直に従った

…気にしない。気にしない

あたしは子供。子供なのっ！！

これはお兄ちゃんに手を取られてるのと一緒なのよ！

………

………何て思えるかぁ！！！！！！

何このさりげなさっ!!

歌舞伎町のホストでもこんなにスマートに女性を扱えないんじゃない？

…行った事ないから比べようはないけど、この女性! って感じの扱いがムズムズする

「…皇帝。あのこんな風で無くてもきちんとしていきますから

…」

「女性をエスコートするのは男性の義務だ」

…出たあ!

美形男が口にする言葉10選に選ばれそうな台詞!…!

しかも皇帝、恐ろしい事にこの台詞が似合いすぎてる。

ムリムリムリムリ!!!

あたしのキャパをとくに越えています

普段のあたしならこんな台詞聞こうものなら、その台詞を吐いた相手とはとりあえず5Mほど距離をとるか、見下した笑いを送ってやるのに…

この城に来てからの自分は明らかにいつもの自分じゃない…

冷静? それって何? な状況なんて今まで陥った事無かったけど、

こう立て続けにキャパが決壊されると元の自分に戻れる自信ありません。

…とにかく一刻も早く村という名の避難所に戻って自分を取り戻さなければ。

城に来る時は精神を完全武装して望まないと勝てない事がわかっただけでもよし！

何に対しての完全武装？と聞かれても困ります

だって全て未知との遭遇状態ですから。

これが世に言うカルチャーショックってやつですかね？

この世界に来て3年。

初めて異世界に来た事に押しつぶされそうです。

極度のホームシック。

今、凄く元の世界に帰りたいです。

## 21話 死にかけてわかる事がある

目が覚めて見慣れた天井は今ではシミの数もわかるいつもの天井。

「……………おお、生きてた」

神様…この世界に神様がいるかどうかは知らないけど、誓いますもう、二度と楽しようなんて考えません。

帰ってきたあたしの状態を一言で説明すると、酷い船酔い状態。  
クラブのファンキーソングばかりで胃が踊り、脳が殴られた様にグ  
ラグラ揺れてる感じ

…他人の転送魔法がこんな永遠ジェットコースターだと思わなかつた。

どおりでガス国の使者達が魔法を行う前に魔術師に眠らされていたはずだよ…と納得した。

あたしも眠りの魔法をかけてもらった

ただし皇帝自らにかけてもらったので…やっぱりあの人の魔法は効かなかった

なら自分で眠ろうと思ったのだけど、皇帝が魔法詠唱の最後に小さく付け加えるように言った爆弾発言で一気に目が冴えてしまった。

『…あさみずは嘘付きだな』

何が!?

年齢? 出自? 魔力?

どの事なのお〜!!!!!!

自業自得だけど嘘をつきすぎてどれの事を言ってるのかさっぱりわからず…あたしは恐々としたまま転送魔法に乗せられ…: サンダラスをかける間もなく、光のジェットコースターを経験した

着いた場所はテリサン村のほんとにすぐ側、歩いて戻る距離だったのが幸いで、こんな状態のあたしでも自分を保ってガース国の方達ときちんとお別れました。あたしという気苦労の種が居なくなっただけとしたのか皆さん笑顔で去っていかれましたし、こちらの別れの際の多少の蒼い顔は許して下さい。

その姿を見送って自宅まで辿りついたのはよかったですかね、すぐグロッキーでトイレに駆け込みましたよ…ふふ…

ミレー又にも事情を説明出来る状態じゃなかったんで、彼女は「きやーっ!」という叫び声を上げながら慌ててライザさん呼びに行きたみたいで…というのも



そこからの記憶は無いです

で、今朝出たはずのベッドに寝かされています。

「夢……んな訳ないか……」

まだ少し残る船酔いと、頭に乗せた自分の左手首に光る虹色の腕輪を見て、深いため息をつく。

「…今、何時？」

部屋が暗いし、夜だという事はわかるけど…

「…気がついたかい？20時を少し過ぎたところだよ」

暗闇から突然聞こえてきた声に一瞬驚いたけど、それは聞き慣れた声で、そちらを見るとその声の主の部分だけがほのかな明りに包まれている。そこには青髪的美男子が立っていた。

「…メルフォスさん」

「ミレーヌとライザもさっきまで居たんだが、宿の食事の時間になったのでね…」

ライザさんの宿は7時から9時までが食堂での夕食の時間なので忙しくなる

「あゝご迷惑をおかけして…」

「ストップ。それ以上は言わないでいい。ひよりはこの世界では僕らの家族だろう?」

…涙が出てきた。

自分でもわからない内にすごくテンパっていたのだと思う。

手配書を見てから今日一日、訳のわからない混乱状態に陥って、まるでトリップした日のようで、考えないようにしていた異世界という現実を突きつけられて、あたしの中の何かが限界だった。

顔に乗せた手で目を覆いながら、嗚咽を必死に止めようと思うけどなかなか止まってくれない。

25にもなつた女がみつともない…

何とか泣くのをやめて冷静に今日の事を話そうとして、上手くないかない自分に余計に泣けてくる

「…じつごめんなさい」

そんなあたしにメルフォスさんはベッドの側に立って上掛けの上からポンポンと優しく叩いてくれる。

しばらくその優しいリズムに身を任せると段々落ち着いてきて、  
嗚咽も無くなる

もう大丈夫ですという意味も込めて起き上がると、優しい笑みを  
向けてくれるメルフォスさんがいた

「落ち着いた？」

「……はい」

「何があつたか話せる？」

「はい」

こくと頷くとメルフォスさんは「じゃあライザ呼んでくるよ」  
と言って一度出て行った。

床に足を下ろしてみたら立てそうだったので、とりあえず部屋の  
明りをつけてお茶の用意をはじめた。

どうやって今日の事を話そうか考えていると、メルフォスさんが  
すぐにライザさんを連れて戻ってきて、あたしがお茶を煎れようと  
しているのを見て代わってくれる。

ライザさんを見ると目が真っ赤で……すごく心配をかけてしまっ  
たのがわかる

謝ろうとした瞬間彼女に抱きすくめ……抱き殺されかけた

「ら、ライザ……さん」

「ひよりのいいい……」

……号泣されてしまった

しかしマジでこのままでは死ぬ……

「ライザ…ひよりが死にそうだ」

メルフォスさんの苦笑が混じった声が、ライザさんの腕の力を弱めてくれた

「ああ…ごめんよ。ひより…ひよりいいい」

ライザさん、さっきの状態でも見なかったお花畑が見えたよ。

身体を離されても手を握って目の前で泣き続けるライザさんを見ていたら、今度はこっちから抱きついてしまった。

止まった涙もまた溢れ出して二人一緒に泣いた

21話 死にかけてわかる事がある（後書き）

ストックが無くなった途端に体調を壊しました…ぐふ

## 22話 黒い謎解き

ほんとの子供のように心配してくれる二人にもう嘘はつきたくな  
かった。

だから手配書を前にしてメルフォスさんとライザさんに今日起こ  
った事も含めて、あたし自身の事を全部話した。

どついう経緯で手配書になったというところでは、実は最初にこ  
の世界に飛んできたのは皇帝の寝室だった事も話さなければならな  
かったのだけど…

…これはさすがに黙ってた事を怒られた

皇帝の魔封じが効かないと言った時にはメルフォスさんが驚愕し、  
12歳に間違われた話の時には、ライザさんがお茶を噴いた。

…わかってます。

実年齢を言った後ではその反応になりますよね…

そんな話もしつつ、自分が疑問に思っけていても聞けなかった事を  
二人に質問する

「この国も含め、他国の皇帝も親を失った子を片っ端から保護す  
るんですか？」

と尋ねたら、そんな国は無いと二人ともに全力で否定された。  
昔はこの世界にも国家間の戦争や魔族との闘争があったらしく、  
孤児はガルフェルド国を含むどの国にも居て、それを保護する団体  
の話などは聞いた事があっても皇帝自ら後見人や保護などの話は聞  
いた事が無いと言われた。

つまりはやっぱりあたしの一件は特殊な訳で…

全部話し終わって訪れたのは沈黙。

「……………」  
「……………」

メルフォスさんは何か考え込んでいる感じだし、ライザさんは黙  
ってメルフォスさんを見ている。  
あたしからこの沈黙を破る勇気は無く、やっぱり話し出したのは  
メルフォスさんだった

「ところで日和はこれからどうしたいんだい？」

「はつきり言ってお会い方も最悪だったし…どうして皇帝にこん  
なに関心を持たれたのか全くわからないんで…このまま帝都に行く  
のは怖い感じがします」

「ああ。それについてはちょっと心当たりがあるんだけどね…」  
「ええ!？」

どうしてメルフォスさんに心当たりがあるの!？

あたしの説明で変なところがあつたとか!?

ストーリーカーされるような変な行動した覚えないんだけど…

もしかしてあたしにこの世界で誤解されるような態度があつたとか!?

「…な、なにかあたしに…悪いた、態度が…あつたでしょうか」

「まあ…いきなり皇帝の寝室に乗り込んで殺されなかつたのは奇跡だよ…」

「あんたっ!!!」

ライザさんがメルフォスさんを怒ってくれるけど…あたし的には

や、やっぱりそこですか!?!?って感じで…

皇帝は別に構わないって言ってましたけど、やっぱり罪人決定ですか!?!?

「日和もライザも最後まで話を聞きなさい。日和は殺される筈だったのに殺されてないだろ?」

ひたすら落ち込むあたしにメルフォスさんが言葉を続ける

「陛下にも日和を殺せない理由があつたんじゃないか…と僕は考えてる」

「な、な、な、何ですか?理由って…も、もしかしてあたし何か変ですか!?異世界人を斬つたら呪われるとかですか!?!」

あたしは自分の身体を色々調べるように手を忙しく動かす。

そんなあたしを見てメルフォスさんは苦笑を浮かべる



「違う。日和じゃなくて…ガルフェルド皇帝は黒呪を受けている…と聞いた事がある」

「ごく…じゅ？」

「そう。黒の呪い」

あたしじゃなくて…皇帝が呪われてるんですか？

まあ、普通に毒で殺されるような生活してそうでしたから、皇帝が呪われてると聞いてもあんまり不思議には思わないですけど…ただ…

「でもそれが…あたしに何の関係があるんでしょうか？」

「詳しい事はわからないんだけどね。それに日和が関係してるんじゃないかな？と僕は思うんだよ」

…そうしてメルフォスさんが指差したのは自分の目と髪。

この世界では珍しい黒目と黒髪。

「最初に日和と会った時には夜だったし実際は瞳の色の判別が出来なかった。光に当たると日和の瞳は茶色に変化するよね？その日の夜に部屋で日和の瞳が黒いを見て実は驚いたんだ。日和には黒髪は非常に珍しいという話はしただろ？黒い瞳は…珍しいどころか僕は見た事が無かったんだよ」

「…え？」

…3年この世界で生活してたけど初耳だった。

確かにあたしの瞳は日の光にあたると茶色に見える。けどそれは日本人的には珍しくも何とも無かったから別に何の疑問も持ってなかった。

「この村で生活する程度なら、気にする事はないと思って説明しなかったんだ。まさか僕らより先に皇帝と会ってるなんて思ってもみなかった」

うう…黙っていた事が今になって重大事件になってしまった。

でも、故意というより1ヶ月も経つとそんな事、忘れてしまっていたというのが実際なんですけど…

「瞳の色というのはね、その人の力や魔力の特性を強く表す場所なんだ。黄色であれば光の力が強い、赤色であれば火、その二つの力を宿す人はオレンジ色の瞳になる。そしてその加護を受けて生活している」

「…そうなんですか」

遙か昔に見た美術のカラー見本を頭に思い浮かべるけど…いまいちピンとこない

「白が全ての色に染まるのに対して、黒色は全ての色を飲み込む色。その力がどんな物なのか…はつきり言ってるわからない」

「………わ、悪い力なんでしょうか？」

どうしても黒というイメージを悪く思ってしまうのは日本人だからだろう。

「わからない。誰も知らない未知なる力だと思う。そして皇帝の呪いの内容もわからないけど黒呪と呼ばれるぐらいだから、日和に固執する理由は…きっと黒の加護が関係してると思う。まあ、これはあくまで僕の想像だけだね」

「黒の…加護」

…平凡な日々がどんどん遠くなってる気がするのあたしだけですか？

## 22話 黒い謎解き(後書き)

すみません。少し更新が遅れました  
早くストックの日に戻れるよう頑張ります

## 23話 意外と凶太い精神力でした

二人と話をしている間に結構な時間が過ぎていてあたしの体調の事もあって、後は明日にしようと言って二人は帰っていった。

お気遣いは嬉しいんですけどね、こんな状態で寝れる凶太い神経してないんです…

ベッドに入って目を閉じてみても、あたしの頭の中は今日体験した事と今聞いた情報が錯綜してて、全く持って混乱状態のまま眠りなんて訪れてくれない。

だからと言って考えて何か解決があるわけもなく…

「…どうしろっていの？」

黒の呪いとか言われても、全然ピンとこないし。こんなあたしが皇帝を助けて上げるなんておこがましいでしょ？

それにそんな事を期待されているのだったら帝都に行くのとか断固拒否したくなる。

黒の加護…っていうのも、どうみても暗黒なイメージしかないし、

そんな物受けた日には魔王になるしかないんじゃないですか!?

魔王決定ですか!?!って不安にもなる

…あたしは元の世界に帰れないのなら、せめて平凡に暮らしたいだけなんだけど

何て無限ループな悩み

「…こつやつて悩んでる…この状況が果てしなく面倒くさい」

…でもいくら行きたくないと言っても、もう一度城に戻って皇帝に会わなければいけないのが現実。

「…なら今ジタバタ考えても仕方ない。寝よう」

口に出してみると意外と実行できるみたいで、あたしは身体の疲れもあつてそれから5分もしないうちに眠りに落ちたのだった

\*\*\*

目覚めるとすでに周りは明るくなっていて、すっきりした自分に思わず「自分が思うよりずっと神経が図太かったね」と突っ込むのを忘れない

今何時だろう?と、とりあえずベッドから起き上がって服装が昨日のままなのを苦笑する。昨日帰る時にライザさんに今日はゆっく

り休むように言われていたし、起きたら宿へ顔を出す約束だったから、身支度を整える時間はまだある

「お風呂入りたくないな…」

服には付いてなくても、何だか嘔吐のにおいが微かに残っている気がする。

お風呂に入ったら少なくとも身体的にはすっきりするだろうし…

あたしは部屋の奥に設置した浴室に入ると、そこで魔法を唱えた。この世界の魔法はどちらかというと精神的な物が多く、化学では説明出来ないような物も多いけど、あたしの魔法は基本元の世界の化学を基本にしている物が多い。

そんなやりかたは「はじめてのまほうのつかいかた」には載っていないかったし、思いつきり外法な気がするけど、使える物は使わないと損な気がするし、あたしには理論を説明出来るこのやり方が合ってる気がした。

例えばお湯にしても、この世界では川の水と火の魔石を使ってお湯を作る。

基本面倒くさがりなあたしはある程度の大気を手の中に集め、大気中に漂う水蒸気に圧力をかけて気体から液体へ変化させ、乾燥大気の酸素で小さな爆発を起こし熱を発生させお湯を作る。圧力バランスを沸点40度で設定する事によって沸騰すると流れ出るようにした

外から見ると前にかざした手の間からお湯が吹き出ている形で、元の世界ではありえない事だと思う…多分この世界でもおかしいか

もしれない。

…楽チン便利です。

…え？昨日神様に誓った事？

ちゃんと自分で行ってるので昨日の誓いには当てはまらない事にしておきます…

ある程度お湯が溜まった状態になったら、着ていた物を脱ぎ捨てゆっくりお湯につかる

「いい気持ち〜」

思わず鼻歌が出たけど、いかんせん壁が薄いのでちっちゃく歌う

この世界にはなかったのでポンプで浴槽のお湯を汲み上げるシャワーも作ってしまった。これはライザさんやミレーヌにも好評で感謝された。

なかなか快適なバスライフはあたしのこの世界に来てからの数少ない自慢だったりする

身体をすつきりさせて浴室から出たところで聞きなれた騒音が部屋に響き渡った

ばあ〜んっ！！！！

今月16回目の玄関の破壊。



そして飛び込んできたミレーヌを抱きとめる。

「ひよおおおお!!!!!!」

キチンと服を着ていてよかったと心の底から思ったのだった

23話 意外と凶太い精神力でした(後書き)

今日まではストック無しだったので…更新遅れてしまいました。

明日からはまた12時更新に戻ります

## 24話 『ママ』ハードルを飛び越える

ライザさん宿にたどり着いたはいいけれど、あたしは今非常に困っていた

メルフォスさんとライザさんも固まっっていて、その視線の先にあるのはあたしじゃなく…あたしの腰にへばりついてるもので…

「あの…こんにちは…」

ずるずると引きずるように店に入ったら、固まっていた二人がはつとなった

「何やってるんだいミレーヌ!! 離れなっ!!」

「やだっ!!」

「……………」

どうやら昨日のあたしの姿はかなりミレーヌに衝撃を与えてしまったらしく、先ほど浴室から出た瞬間にミレーヌに腰アタックをされ、そこから一切離れなくなってしまった

…こんなに怯えさせるなんて、あたしとんだけ酷い面してたんだ?

メルフォスさんも苦笑を浮かべながらミレーヌに手を差し出すが娘にきつと睨まれ、差し出した手をゆっくり下ろした。

「…み、ミレーヌ、ひよりが困っているよ?」

「…うっ。だってパパとママは昨日ひよりが起きてから話したじゃないっ!! あたしだけお留守番だった!!」

あゝ…そういえば昨夜はどこまでミレーヌに聞かせられる内容かわからなかったからメルフォスさんとライザさんと三人だけで話したからね…

思えば帰ってきて一番最初に顔見たのミレーヌだし、けたたましい叫び声を上げてた様な覚えがあるから。

…ミレーヌもかなり心配してくれてたんだよね…ちょっと反省。

あたしは張り付いたミレーヌの手をそつと腰から剥がしぎゅつと握りながら、前に立たせて辛うじて高い身長を少しだけ屈めて、ミレーヌの目をまっすぐ見て謝った

「ミレーヌ、心配かけてごめんね。もう大丈夫だから」

「うう……だって…ひより…すぐ近くに行くっていったのに、全然帰ってこないし…帰ってきたらあんなんで……死んじゃうかと思っただもん…」

「うん…ごめん。ごめんなさい」

このミレーヌの姿を見て不謹慎だと思うけど、親家族以外からこんなに愛されてて凄く嬉しい。そう思うと自然と顔も緩んでしまう

「……何で笑ってるの？」

「ん？ミレーヌがこんなに心配してくれて嬉しいなあって……ほんとの家族みたいだなあって思って」

「ひよりっ！！ほんとの家族『みたい』だなんて…まだそんな事言ってるのかい！？あんだ達は真正銘あたしの娘だっ！！」

ライザさんに怒りながら言われたけど、くすぐったくってやっぱり笑みしか出なかった

「ありがとう…ライザさん」

「ママとお呼びっ!」

「はいっ!」

あまりのライザさんの勢いに思わず直立姿勢になった…敬礼をしなかつたのを褒めて欲しい。

…ただママってライザさん、肝っ玉母さん風なんでどう考えても…おか…ま、まあそれは置いて、色んな物を差し引いても、あたし自身その言い方慣れてないんで、非常に抵抗があるんですけど…

「…マ」

ライザさんがじっとこっちを見てる

「ま…お母さん」

「すみません。」

「このライン限界です。」

「25歳の今から『ママ』呼びは色々キツイです。」

ライザさんは片眉を上げたものの納得顔だったから…ひとまずクリアという事で…

…横のメルフォスさんが期待を込めてこちらを見ているのは気のせいですよね？

「え〜つと…」

色々思案の結果、スルーで！

メルフォスさん、ごめんなさい。

「お父さん」のハードルは「ママ」より高そうです。

元の世界でも、このお年頃って父親に対してって色々あるんですよ…

がつくり頂垂れる美形…しかし美形は何しても絵になる。

横で「ひよがお姉さんになった!!!」と喜んでるミレーヌと会わせると「喜びと悲しみ」ってタイトルで絵が描けそうだし、確実に売れるね。

…そんな輪の中に自分が居れる幸せ。

いつかは元の世界に帰りたいたからと思っけていても…やっぱり一人は寂しかった。

だからふとした事で一人ぼっちだと感じるこの世界で、メルフォスさん一家はあたしが勝手に心の底から安心出来る唯一の場所だと思っけてた。

こっちが勝手に伸ばしていた手を…しっかり掴んでくれる嬉しさは言葉に出来ない

でも、今から自分が言おうとしている言葉が…せつかく手に入れたものを手放す事になるんじゃないかって怖い。

「…ひよ？どうしたの？」

急に深刻そうな顔で黙り込んだあたしにミレーヌが声をかけてくる

「あたし…」

「さあミレーヌ！これから少し忙しくなるぞっ！」

あたしの声をかき消すようにメルフォスさんがミレーヌに笑いかける

「え？どうして？」

「ひよは来年から魔術学院に通う事になったんだ。だから皆で帝都に引越すぞ！」

「…そんなんっ！あたし一人で」

あたしの為だけに今までの物を捨てて帝都に行かせるなんて…

「馬鹿をお言いでないよっ！！帝都なんてこっから遠い物騒な所に可愛い娘を一人で行かせられるわけないだろうが！」

「だって…ここから3ヶ月もかかる遠い所なのに…全寮制だって聞いたし、あたしだったら転移魔法で一気に帰って来れるから…」

「いいんだよひより。もうそろそろ戻ろうかってライザとも話してたところだからね」

…戻る？

「ああ、ひよりには言っただけ、あたしも旦那も元は帝都出身の人間なんだ。…ちよっと事情があっただけね。ミレーヌが産まれてからこっちに引越してきたんだよ」

…事情？

「帝都に家もあるんだけど、今まで面倒で戻らなかったただけだからね」

「…家の状態を確かめに行かなくちゃいけないねえ」

…帝都に家？

「…あたしもひよと一緒に魔術学院行ける？」

「…え！？」

じつと考え込んでいたミレーヌが口にした言葉にあたしはぎよつとする

いやいや！！ミレーヌ！あんなところ行くもんじゃないよ…

「そうだな…ひよりも通う事だし、ミレーヌにも魔力あるし…受  
験してみるか？」

「うんっ！！」

え〜〜〜〜！！！！！！

あたしの脳みそは急展開についていけず、その間にメルフォス一家のお引越話はどんどん進行していった



24話 『ママ』ハードルを飛び越えろ（後書き）

一日のユニークが9000を越えました

自分の話をたくさんの人が見て下さっているのが信じられないです

ほんとにありがとうございます

## 25話 平民12歳と貴族12歳の間は『スッピン25歳』でした

簡単に引越しが決まってしまう、宿は最後のお客さんが旅立たれてから臨時休業になった。もう再開する気もないようなんだけど、この宿を村の他の人に譲るみたいで、その人がすぐに営業出来るように配慮して『臨時』をつけたらしい。

ライザさん：もといライザ母さんとミレー又は近所の挨拶周りの事を相談していて、あたしはメルフォスさんと雑談をしている状況で…

…あの城での深刻さは何だったんだろうって感じ。

そんなメルフォスさんとの雑談の中で話題と言えぱり城での事になる

「あの…あたしが12歳とかやっぱり無理があると思うんですけど…」

「あくそうでもないよ。城とか魔術学院って貴族のお嬢ちゃんが多いから。みんな10歳ぐらいで社交界デビューしてる子達がほとんどだし、作法・マナーは完璧で化粧とかもバッチリだからね。一般の12歳だと考えると逆に驚くと思うよ」

そういえばあたし…この世界に来た時はさすがに出勤モードだったから多少のメイクはしてたけど、次の日からは見事なまでのスッピンでした。

12歳の子供でも化粧をバッチリこなす世界…つまり、スッピンなあたしは12歳で十分通用するって事ですか？

…いや、あたしもメイクが面倒くさいとか…そんな事は無いですよ？

ただ社会的常識とかが無い世界だと、別にスツピンでいても何ら不便でもなかったんで…そもそも皮膚が弱いし、この三年ファンデーションと無縁の生活でお手入れだけをしてたら何だかお肌のハリも少し戻った気がします。

「…そんな状況の中にあたしが入ったら逆に凄く浮いちゃうんじゃないんですかね？」

「ミレーもいるから」

…ミレー又はスツピンでも、絵のような美しさだから多分化粧と関係ない気がします

「それに少数だけど受験組の子は平民の子が多いから、その子達はきつとひよに近い感じだと思っよ？」

…でもきつとその子達よりは確実におばさんですよ？

どちらにしてもえらく不思議な存在になる事は間違いなく…

「これで実年齢バレたら魔術学院通わなくていいとかにならないですかね？」

「きつと即、城入りだと思っけど」

…ですすよね…。

つまりどんなに浮いていようと12歳を貫かなくてはならない訳で…

精神的にキツイ…

「ただ城でも信用出来る人には全てとは言わないけど、本当の事を話した方がいいかもしれないね」

「…信用出来る人？」

「例えば宰相のシユビとか…、筆頭医術長のシーとかね？」

…宰相ってそんな名前だったっけ？

後、筆頭医術長の人は会ってないからよくわからないけど……

…今、会話の内容よりもすつごく疑問が浮かんできたんですけど…

「あの…メルフォスさんって、何でそんなに城の事とか詳しいんですか？」

だって黒呪なんて話は宰相からも全くされなかったし、という事は宰相自身が知らないか外部に洩らせない内容な可能性が高いのにこの人は知っていたし…

「あれ？言わなかったっけ？僕、元々城で働いてたんだよ」

…聞いてないです！！

こんな側に手配書を何とかしてくれそうな人がいたなんて！！！  
こんな事なら素直にメルフォスさんに手配書を渡した方がややこしい状況にならずに済んだんじゃない…

あたしはちよっとした事実茫然としながらも…済んでしまった

事は仕方ないと諦める

こういう切り替えは昔から早かったのだ。

「…ちなみに、どんなお仕事をされてたんですか？」

「そんな大した事してないよ」

苦笑の表情を浮かべて言うメルフォスさんの横からライザ母さんの呆れた声が重なる

「筆頭団長だったくせに、よく言うよ…」

…団長？

『フリー！フリー！』とか……………なわけないですよね？

「き、騎士だったんですか？」

「あゝ昔の話だから」

「格好良かったんだよ。白の鎧が似合う団長なんて後にも先にもこの人だけだからね」

はい…そこには激しく同意します

「皇帝の黒の鎧と、団長の白の鎧が対になってね。ほんと絵みたいな光景だったよ。…まあ、それを辞めさせたのはあたしなんだけどね」

少し暗くなったライザ母さんを凄い勢いでメルフォスさんが抱きしめる

「…ライザ。そんな事まだ気にしてるの？」

「……………」

え…抱き合う二人を見て、両親のラブシーンに立ち会った気ま  
ずさを今感じてます。

このままラブラブ一直線な二人を前にどうしようか迷っていると、  
その状態はあたしだけじゃないみたいで、呆れた目で二人を見るミ  
レーヌと目が合った

お互い同時に視線で店の外を指した時には思わず二人ともぷつと  
吹き出してしまったが、ラブラブの二人はそれに気付く事もなく、  
あたし達は静かに店の外に出たのだった

笑いながら外に出ると、身体を伸ばしながらミレーヌがあたしに  
話しかけてくる

「あゝ！！やっぱひよがお姉ちゃんて嬉しい！」

「？」

「だって両親がああ状態でもあたしの状況わかってくれる人居な  
かったんだもん。今まではあたしを忘れてる両親にちょっとムカつ  
いたけど、ひよが居てくれて今日初めて純粹に両親の仲が良くてよ  
かった！って思える」

お互いしか見えてない両親に対して…確かに一人である状況はち  
よっと辛いかもね。

あたしの元の世界の両親もあんな風に仲が良かったけど、兄弟が  
居たから別になんともなかったんだって今ちよつと思つた

「役に立って良かったよ」

「……………ほんとにひよがお姉ちゃんて嬉しい」

あたしの目下の悩みは……この子に実は同じ年で学院に通う事を  
どうやって説明すればいいのかという事に切り替わったのだった

25話 平民12歳と貴族12歳の間は『スッピン25歳』でした（後書き）

またまた出てきた12歳疑惑ですが。

この世界の12歳の外見年齢が上だと思って頂ければと思っています

最近ちよくちよくメッセージを頂けて嬉しいです

ダイレクトに感想を頂けるといいうの何か別の感動ですね

ほんとうにありがとうございます



## 26話 基本を学び？に胸高鳴る

結構な時間が過ぎてラブラブな二人が落ち着いた後、向かいの家で過ごしていたあたし達を迎えに来て…落ち着いてさらにハートを飛ばし続けていた二人にあたし達は呆れを通り越して尊敬の眼差しを送り、どうにか帝都の家を見に行く事になりました。

…どうにかって何が？

「なんとと言っても10年も空けていた家だったから風通しはもちらんの事、住める状態なのかもわからないからね」

「そうだねえ〜帝都で店も開きたいし、店舗の下見もしたいね」

「君の料理なら帝都の看板店になる事間違いないよ」

「やだよ…あんだ…」

…どうしてくれよう、このメロドラマ。

家族新入生のあたしにこれの打破は難しいですが…

「……いちゃつくなら自分の家帰れ」

予想外なところから打破が入りました。

ひゅ〜って吹雪く絶対零度なミレーヌの一言。

か、関係ないあたしまで凍りつきそうです

「…い、ごめん。ミレーヌ」

「み、ミレーヌ…あんだって怒ると怖すぎるんだよっ…!!」

ラブラブムードも何処へやら、二人もミレーヌの絶対零度な怒りに凍えてる

「…ならいちゃつくのは自分のテリトリーだけにしなよ」

「…はい」

「あ、あ、あ、あの…おおお、お取り込み中申し訳ないんですけど、へ、部屋が…」

どもっているのは決してこの雰囲気でなっているわけじゃなく…

普通に寒いんです！！！！がち唇が震えています！！

部屋が凍ってきてるんです……南極状態です。

そんな中に薄着一枚でいるってもう自殺な意気じゃないですか？

しかも何であたしだけが震えてて、当の本人達はケロっとしてるんですか！？

「「「……あ」「」」

視線が一気にあたしに集中する。

「やだっ！！…どうしよう！！…」

ミレーヌはパニック状態になったのか部屋の凍化が一気に進んでいく。

…やっぱりこれ、ミレーヌの魔力だったのか。

ミレーヌの瞳は青いけど、白がかなり混じった淡い色。つまり氷属性で…

美女に氷って…雪女じゃん…。

しかし、このままじゃやばいなあ。

…頭の中で「眠るなー！」って定番の台詞が聞こえてくるし、寒くて思考力がどんどん奪われてくし…ううー

「ミレーヌは落ち着きなさい！ひよりは自分の周りに壁を張るんだ」

「…かかか？」

メルフォスさんに言われるけど、そんな魔法使った事ないし要領がわからない

寒さで言葉がまともに出てこなくなってきたので、手を顔の前で横に振って出来ない事を伝えるとライザ母さんがあたしを抱きこんでくれる

すると今までの寒さが嘘みたいにな、普通の状態に戻った

「…ら、ら、ら、ライザ母さんって、魔法使えたんですか？」

「まさかつ！あたしじゃないよっ」

…ということは何？

ライザ母さんの後ろを見るとメルフォスさんがライザ母さんに触れていて全部まとめて壁というものをかけているらしい

…身体が暖かくなると思考力も戻ってきた。

ずっとライザ母さんに抱えられ、このままというわけにもいかないので…

寒さを緩和させるには…確か空気の流れを止めるだけで熱伝導率が下がって断熱効果があったはず…

「えつと…こうすれば」

自分の身体から5cm離れた部分の空気を固定するように魔法を発動させる。

…上手くいったかな？

恐々とライザ母さんの身体から離れてみても、凍えるような寒さを感じる事は無かった

「おお！成功した」

「ひよー！！ごめんね」

あたしが耐寒魔法を考えている間にメルフォスさんに説得されたのかミレー又は落ち着いたようで申し訳なさそうに部屋の隅でちっちゃくなっている。それと同時に部屋の氷も無くなって元の状態に戻った。

「びつくりした。魔力つて魔法形態にしなくても発動するんだ…」

ミレー又がさっきの時点で魔法を発動した形跡は無いし、怒りの感情が抜けるとすぐに凍化が解除された事も驚きだった

そんなあたしの疑問に答えてくれたのはやっぱりメルフォスさん

「魔力ってというのは属性エネルギーの塊だからね。感情に左右される部分も大きいよ。ミレー又は魔力が人並み以上だけでもまだ扱い方が稚拙で感情に左右されやすい」

メルフォスさんから言われてさらにしゅんとなってしまうミレー又

つまりは説明を聞くと魔力は石油状態のようでもそれだけで十分なエネルギー資源にもなりうるって事で、魔法は石油を精製してガソリンや石油製品にしているような物でより純粋なエネルギーを得る事が出来る…らしい。

そんな説明は「はじめてのままほうのつかいかた」には載ってなかったし…

…という事はあたしが最初にこの世界に来た時に発動した転送魔法は実は魔法じゃなくて属性魔力のせいだったりする？

だって、この世界に来てすぐなんて魔力が自分にあるなんて事も知らなかったわけだし……だけど殺されそうになって感情爆発は確かにあった。

…でも属性力が転移って…あたしどんな属性なのさ？

黒の加護の謎がますます深まっていく。

その辺りにあの『ぶよよん壁』をすり抜けるヒントがあるのかも  
しれない

何て考え事をしていたら、解除し忘れてたあたしの耐寒魔法をメルフォスさんが調べていたみたいで…

「……ひよりは魔力が凄くてもその扱い方が独特すぎる。基礎を知っておく事も大事だと思うから、やっぱり二人とも魔術学院に行く事は必須のようだね」

魔法基礎はもちろん大事だし、文字の習得もありがたい。

もし、黒の属性がこの世界に存在しない属性だとしても、その事自体を研究しやすいのも魔術学院だろうと思う

魔術学院！興味がわいてきた！！！

「……研究。ふふ…研究」

社会人になって久しく感じていなかった高揚感があたしを包む

ふふ…これでもあたし大学で研究者としては優秀だったんだよね  
く楽しみい〜！！

日夜、顕微鏡に向かっていた日々を思い出しながら思わず口元がにんまりとする

「ミレーヌ！頑張ろうね！！」

「う、うん」

…自分が学院で12歳扱いという事はすっぱり頭から抜けさつていた。

## 27話 不幸の手紙が届きました

メルフォスさんが家の様子を見る為に帝都に旅立って早1ヶ月。最初はあたしの転送魔法で送っていいこうと思っただけ、あたしの転送魔法の行き先が城内だけだと知ると、露骨に嫌そうに断られましたよ。

…一体メルフォスさんとお城ってどういう関係なのか…まあ同じ立場だったらあたしでもきつと嫌な顔すると思っけど…

なので地道？よりは早い転送魔法を連続して使用する方法で帝都へ向かわれた。魔力の予備があつた方がいらしく、10個ほどあたしの魔石も持っていかれました

で、あたしの生活はあの日が嘘の様に特には変わってなかった。毎日ライザ母さんの御飯も美味しい。

臨時休業中のライザ母さんの宿はすぐに引き継いでくれる人が見つかつて、今は料理なんかの引き継ぎをしてる。あたしの道具屋も閉店したけど、ミレー又と一緒に作業場と化してるのは変わらない。

だけど、今までと一つだけ違う事がある

「ねえミレー又、精霊石の作り方って精霊取っ捕まえて何魔法だっけ？」

「え？…ちよつと待って…精霊取っ捕まえたら怒って作ってくれないって…」

「…え？じゃあ…取っ捕まえるのは？」

「それは使役魔法」

作業場の真ん中にどーんとでつかい机を置いて、その上は難しい本が積み上げられ、色々な言語の辞書が開かれたまま置かれ、紙が散乱し、溢れてる。…もちろんそんな中にある「はじめてのまほうのつかいかた」はかなり浮いている

もちろんそんな紙媒体に埋もれた状態のあたし達がしているのは『受験勉強』である

「ねえ、ひよ。製鉄って何だっけ？」

「鉄鉱石から不純物取り除く事」

あたしの頭はすでに臨海状態となっていて、記憶容量の空きなどすでに無い。元の知識で応用出来る事もあれば、全く一から覚えなくてはいけない事も山のようにある

「…駄目だ。あたし限界だ」

…使ってなかった脳みそは硬化がかなり進んでるらしい。

そんな限界状態のあたしが突っ伏した机に突然、魔力の渦が現れた

「…げ、何コレ？」

「あ…魔法便」

「まほうびん？…お湯が出るの？危くない？」

「ち・が・う。魔法で送る手紙の事！さっき覚えたじゃん！！」

…駄目だ。もう1分前の事も記憶にございません

でも『まほうびん』と口で言われると『魔法瓶』変換なのはしよ  
うがないと思うんだよ



「魔法の手紙ねえ…」

そのやり取りをしている間に渦が小さくなったかと思うと、渦の真ん中から細長い筒が飛び出てきた。

「うおっ！」

「…誰からだろ？パパかな？」

ミレー又もかなり受験勉強で疲れているのか、あたしが驚いているのは完璧スルーで出てきた筒を調べている

「あれ…ひよにだ…。リユージニアス…誰これ…」

「……………」

…………リユージニアス…どっかで聞いた事あるような？

とりあえずミレー又から受け取った筒を開けてみると巻物状態の紙が出てきた

「よかった…読める」

書かれている文字が見慣れた文字だったのでちょっと安心した。

「え…つと…何々」

あさみずへ

あさみずが帝都を後にして、早1ヶ月が経とうとしている。

今日、手配書の伝達鳥が戻り君の現在地がようやく特定出来た。

一向に戻る気配のない君に、私はすぐにでも迎えを送りたい

転送魔力が足りないのであれば、すぐに言ってくれ。それなりの者を送ろう

ガルフェルド皇帝

リユージニアス・クロムレス・レイ・ジェイライト・ローダスタ・ガルフェルド」

ちなみにあたしの語学力は上記を全てひらがなに変換したような文章だと思って頂きたい。

っていつかあの伝達鳥って今着いたの？どんだけの性能なのさ。すっかり忘れてましたよ…あの時の追跡魔法の存在なんて…

すっかり忘れていたと言えば…そういえば皇帝ってそんな名前だったっけ？

「皇帝からだったよ」

「『ごごご』、『ごうてい』!?!』『ごうてい』ってあの皇帝!?!」

ミレーヌは思いつきり動揺してるのか、今にも椅子から落ちそうな勢いだ

「ミレーヌ危ないって…」

「何で皇帝がひよ迎えに来るの!?!」

あ……ミレーヌに事情を話すのもすっかり忘れてましたよ

「あ〜」

「…あの日に何かあったのね」

ミレーヌの言ってる『あの日』とはもちろんあたしが『帝都に行

った日』の事を指してるに違いなく…あの時の気分の悪さの理由は  
転移魔法だと説明はしたんだけど、その他の事は何だか流れで、説  
明しなくても引っ越し喜んでるし…とか思っちゃったんだよね…  
これはちよっぴり帝都に行ってきた皇帝と仲良くなっちゃった！  
とかで誤摩化せる事なのか…

「あはっ」

「……あたしが知らない事あるんだね」

「あはは……はあ」

どこから説明したものか…

あたしは『黒呪』や『異世界の存在』というものを省いて出来る  
限りの事は話した。

「というわけで、皇帝とも知り合ったわけで…」

ミレーヌの目が爛々と輝いてるのに気付いたのは全部話し終わっ  
た後だった

「凄いつーラブね！ひよ、皇帝陛下に愛されてるのね！！」

……え？

「ひよはすごく愛されてるのね。たかが1ヶ月も離れていたらな  
いぐらいなんて、ひよにずっと側に居て欲しいのね。だから城に住  
めだなんて…物語みたいっ！！」

「いや…ち、違う」

…何だか違う盛り上がり方してませんか？お嬢さん！！

あ、あたしの話し方が間違った！？

「…何が違うの？この文面から見ても陛下はひよに会いたくて仕方ないんじゃない！」

ああ…黒呪の事を話せないのがもどかしい。

「いや…だからね」

「ああ！早速返事書かないとね！！ひよ魔法便の送り方わからないでしょう？あたしが代わりに送ってあげる！速便にしよう！すぐに迎えに来て下さい！！でいいよね？」

「やつ…ちよつ！！！」

「大丈夫！あたし魔法便は得意だからっ！！任せて！！！」

違う~~~~~！！！！という訂正は一切聞いてもらえず、速便で「迎えに来て」と皇帝に返信されてしまった

やばい……迎えがやってくる

27話 不幸の手紙が届きました(後書き)

100万PVを越えました。

お気に入り登録ももうすぐ3000件に達しそうです

心より感謝いたします。

## 28話 速便は速かった

なんとか魔法の渦に筒が飲み込まれるのを阻止するべく差し出した手は見事に宙を舞った、あたしはそのままミレーヌを振り返りにっこり微笑む。

もちろんその笑顔とはミスマッチの、どでかい怒りマークが額には浮かんでいる

「あれ…ひよ」

「みれええぬうううう」

笑顔とは真逆の地を這うような声を出した

「え？…あれ？もしかして…不味かった？」

ミレーヌは剣呑な空気を読んで椅子から立ち上がり、笑って誤摩化しながら扉へとちよつとずつ下がっていく

「えへ…えへへっ」

「もしかしてじゃなあああいつ…!!…!!」

…逃がすかつ…!!…!!

「しゃあ…っ…!!…!!いつも人の話はちゃんと聞けと言っているでしようがっ…!!」

「きゃーん…!!…!!」

…12歳の少女にマジ切れするのもどうかと思うが、あれによって自分の生活の危機を迎える事になると思えば、やはりここは怒っ

てしかるべきところだと判断する

フルフル震える子猫のようなミレーヌ。

「だって…だって…!!」

「だってじゃないっ!! 玄関の事と言い、学習能力が低過ぎるっ!!」

そう、こういうミレーヌのところにも多大な迷惑を被ったのは一度や二度では無い。例えば旅人の青年と笑いながら話しただけで『恋なのね!』と言って無理矢理デート紛いの物をさせられたり…

最終的にその青年はミレーヌに一目惚れしていた事が判明したが、彼はミレーヌにこっぴどく振られ、それどころか「ひよは遊びだったのね」などと言う彼にとっては意味不明な濡れ衣を着させられ、傷心のまま、また旅立っていった。

…つまりミレーヌの頭の中は常に乙女モードの花満開なのである。しかも他人限定で…

「言う事があるでしょうが!!!!」

「ご、ご、ごめんなさあーいーいー」

まあ…頭の中が満開なだけで本人に悪意がないからいつもこれで許していたのだけれど…今回はいかんせんまずい。

…伝達鳥が着いてからの手紙までのスパンが短過ぎる事を考えると、あちらさん返信の手紙が着いてからすぐに行動を起こしかねない…しかも速便だし。

あたしどれだけ迎えを要望してんのさ…

ああ…早1ヶ月って、まだ1ヶ月の間違いでしょうが!!

あたし色々片付ける事があるってあの時ちゃんと言ったよね？

もう少ししたらメルフォスさんが帰ってきて、そこから引越するらしいから、それまで待ってて貰えるようにもう一度間違えませんでしたあって手紙を送り直そう。

「そうだった!!そうしようっ!!よし、ミレー又もう一度速便よろし…」

ピンポーン!

…元の世界から聞き慣れたあたしの作品『ドアベル1号』が作業場に鳴り響く

「……………」

ピンポーン!ピンポーン!!

「……………」



ピンポン！ピンポン！ピンポン！

連続押し…まさかね…そんなまさかね…

「ひ、ひよ…お客さん？」

「しいー！！！」

話しかけるミレーヌの口を思わず手で塞ぐ。

いやいや、一緒に『閉店』の看板出したじゃん…ライザ母さんだつたらドアベルなんてならさずに入ってくるしさ…村人さん達もあつたし達が受験勉強してるって知ってるから訪ねてなんて来ないしさ…後考えられる人なんて…ふふ…

あたしの勘違いで…このまま居留守で帰ってくれと非常に助かります

ドンドンドン…！

はい…玄関叩きでしたよ。

「あさみず…！居ないのか！？」

………はい？

「…出かけてるのか？………だがあの手紙は確かにこの座標から送

られてきたしな」

すみません。独り言が丸聞こえなんですけど…しかもこの声…心当たりがありすぎるんですけど…。しかも独り言はミレー！又にも聞こえたのか、あたしが塞いだ手の下で青くなって、必死に玄関を指差している

……ですよねえ。きつとあたしの想像通りだよねえ。

— 先ず裏口から逃げる！それしかない！！

…て、あたしのお馬鹿！

お風呂の増築で裏口潰しちゃってるじゃん！

「…何だ？この玄関開くぞ…」

「しまっ！！」

しまった…今朝ミレー！又が玄関たたき壊したの、鍵直してなかった…

「失礼する…あさみず！！居たのか！！……何をやっている」  
「……………」

口を塞がれた美少女を連れて端っこに逃げるあたしは、絵づらのようにどう見ても立てこもり犯でしかなく、駆け込んだ貴方はまさしく王子様。もちろん助けられる姫はミレー！又で犯人あたし…

……み、ミレー又連れて行ってくれないかな？

とりあえずミレー又を前へさしだしてみる。

「……ひ、姫を帰します」  
「ひっひよ!？」

「ごめん。これで速便の件やらにするから大人しく連れて行って貰って下さい」

「あさみず…何を言っている」  
「ですよねえ〜」

ええ…わかっていますよ。  
わかっているんですけどね

その前にあたしはとおおっても聞きたい

…皇帝…何であなたがここにいるんですか？

28話 速便は速かった(後書き)

…何だか脳内のあらすじがどんどん膨れていって、えらく長い話になりそうな気がするの……どうしたものでしょうか。

## 29話 口は災いの元？

本人はそうでも無いらしいが、あたしは皇帝がこの家に居る事にかかなりの違和感を感じながらとりあえずお茶を入れる。ミレー又は「お、お母さん呼んでくる！」って出て行ったまま帰ってこないしね…

「……………」

「……………」

空気が重い。

さつきから皇帝の顔筋は動くのを拒否してるのか、無表情のまんまだし…

ただ、あたしから何か話しかける気は毛頭無かったので、とりあえず皇帝と自分の前にお茶を置いた後、湯飲みのお茶を啜る。

…もちろんあたしの試作品32号『日本茶』ですが？

皇帝は目の前に置かれた湯飲みを少し不思議そうに、見様見真似でお茶を啜っている

「…苦いな」

「苦味が美味しいんです」

「そうか…」

…はい、会話終了。

あたしをすぐ帝都へ連れて行くのかと思いきや、皇帝が来た目的

がよくわかりません。

「…ここがあさみずの家なのか？」

「借家ですけど」

「そうか…」

…だから何なの？

一気に目的を伝えてくれれば、それに対応も出来るんですけど…

「ここにある物は全てあさみずが作ったのか？」

「……………」

「そうか…」

「返事してないしっ！！！」

あ…しまった。

思いっきり突っ込んでしまった…あたしが顔を引きつらせるのを

見て、それまで無表情だった皇帝の顔がゆっくりと微笑みを浮かべた

「…やっところつちを向いた」

「え？」

「さつきからずっと俯いていたんだろう？」

そういえば皇帝が乗り込んできて全然彼と目を合わせて居なかったことを、指摘されて始めて気付いた

…だから、微笑まないで…

貴方の顔はあたしにとって毒なんですってば

「顔を見たかった。あさみずが実在している事を確かめたかった

んだ」

「……………」

「あの日、再び私の元に訪れてくれた事を…」

…すみません。砂吐いていいですか？

そんな甘すぎる台詞は日本人には辛すぎます。

出身文化は気持ちを上手に隠す文化なんです！

…まあ、黒呪の事を知った後なんで多少ましですけどね

「げ…現実ですよ」

あたしは出来れば夢の方が良かったです。

この世界に来た事自体夢だったらもつと良かったですけどね…

皇帝は何を思ったのか手を伸ばしてきた。

「んぎゃっ！！」

皇帝の手はあたしの手を包み込んで、それを自分の額に当てた

「…こ、皇帝」

「…本物だ。この1ヶ月あの日が夢だったらという恐怖に襲われていた」

「……………」

ど、どんだけ黒呪って恐ろしい呪いなんでしょうが…

皇帝の話の聞けば聞くほどあたしにどうこう出来る代物じゃない気がします

ただ…皇帝の手が小刻みに震えてて、悪気があったわけじゃないですが、この1ヶ月皇帝へ連絡をしなかった罪悪感に切り刻まれてる自分がいたり…

「あのお…すみませんでした」

「…？」

「連絡…しなくて…ちょっと引越しやら受験勉強やらで…パニックってました」

う、嘘じゃない。

受験勉強も引越しもこれから本腰だけど……嘘ではない。と思う

「構わない。魔法使へ返事をくれただけで十分だ」

…魔法使はあたしが出したんじゃないです。

事故に近いものがあつたんですけど

…真実より嘘の方が重要な事ってありますよね？

「はは…」

「もう帝都に向かえるのか？それにしては…」

皇帝が部屋の中を見回すのを見て、彼の思考に同意する

「はい。まだ片付けが終わってないんです」

「…？」

「て、手紙を間違えてしまって。ほんとはもう少し待っていて下



さいと書いた物を送るはずだったんですが…ほ、保護者に向けて送る筈だった物を送ってしまいました」

あたしナイスフォロー!!

「…保護者？」

「はい。メルフォスさんという一家にあたしご厄介になってまして…」

「メルフォス!？」

皇帝が勢い良く立ち上がった拍子に机の湯飲みが倒れた

「ああ!！」

お茶がかかった本人の皇帝はそんな事が気にならないほど、何か別の事に気を取られている。あたしはとりあえず台布巾でこぼれたお茶を拭き、皇帝には乾いたタオルを渡した

差し出されたタオルに皇帝ははっと自分を取り戻したらしく

「……ありがとう」

「いえ……どうかされたんですか？」

「メルフォスというのは、青髪の槍使いか？」

確かにメルフォスさんは青髪の美男子で、槍を使っているけど…

「だと思えますけど…」

「こんなところに居たのか?!！」

…あれ？

皇帝にメルフォスさんの事言っちゃいけないかったですかね…？

メルフォスさん、皇帝のこの様子からして穏便に帝都から旅立つた訳じゃ無さそうですね…道理で転移魔法の時にあんなに露骨に嫌がったはずだ…

「メルフォスは今どこに？」

「あのお…」

「教えてくれ！！」

「……………」

これ以上墓穴を掘れないので、黙っていると皇帝はあたしのタオルを持ったまま表へ飛び出していった。

「ええ！？」

追いかけて表へ出た時には魔力の歪だけがそこに存在して…

「……………あの人、あたし迎えに来たんじゃなかったの？」

メルフォスさんを捕獲しに皇帝が戻った事に間違いなく…

「しくじったあゝ」

頭を抱えてその場にしゃがむが、そんな事をしてる場合じゃなく…急いで向かいのライザ母さんの宿に駆け込むと、ミレーヌとお茶をしているライザ母さんに向って「少し帝都に行ってください」と言い残して、すぐに転移魔法を発動させたのだった。

29話 口は災いの元？（後書き）

ひよ墓穴です。

### 30話 イベントはトラブルがいっぱい

転送サングラスを装着し、あたしはどこぞの族？って感じで転送ロードをかつ飛ばした。帝都であたしは皇帝の手配書のせいである有名になっちゃったので、もしも何かあった時の為にとりあえず髪の色を変える魔法式をサングラスの魔石に追加する。

「つたく…また転移魔法で帝都に行くはめになるなんて…」

一度通った道は加速度も倍で、前回より早く魔障壁まで辿りついた。

「…あれ何で？」

魔障壁があるにはあるけど、前回開けた穴も目印もそのままの状態で…

「…？あんなに慌てて補修するように言ってたのにまだ直してないの？」

ま…あたし的にはわざわざ面倒な魔障壁を処理しなくてラッキーだけ

あたしはそのまま前回と同じようにゲートと化した場所を通過する。通過する際に認証システムの履歴を見ると、何だかすさまじい人数が通過してるのを確認して顔が引きつってしまった…

…ここが悪用されてるとかないよね？

そして通過が完了した瞬間、強制的に転送ロードから引きずり出される感覚に思わず身を硬くする。

「なっ!？」

手が先に地上についてくれ、危うく無様に顔から落ちかけたのを助けてくれた。

…あ、あぶな。

バクバクする心臓を押さえながら、とりあえず辺りの様子を伺う。どうやら排出された所は何だか庭のようなところらしく…落下場所にはたくさんの人が居てその瞳が一気にあたしに注がれる。

「…え？」

パンパカパン!!!

突然鳴り響くファンファールに身体がびくつと反応する。そしてその驚きが収まらないうちに次々と鳴らされるクラッカーにあたしは紙の雨をもろに受ける

「なっ…何？」

「おめでとうございます!! 貴方がファンシーゲートを通過された100万人目のお客様です!!」

…何ですと？

ふぁ、ファンシーゲート？

「記念品の贈呈。そして簡単な式をご用意していますのでこちらにどうぞー!」

「いや…」

全然理解出来てないし、そもそもファンシーゲートって何!?

そのまま自分の落ちてきたところを見ると、そこにあっただのはでっかいクマのぬいぐるみで…

「…確かにファンシー」

じゃなくて…もしかしてあたしがつけた目印の形がこうなったの!?

どうせすぐに撤去されるから適当にアップリケをつけちゃえ!って感じの魔法式だったのに…どうしてだかクマ飛び出しちゃってますよ?

どうみても周りにいるのは城に勤める人というより観光客風な人達ばかりで…

「……か、観光スポット?」

「はいっ!今帝都で噂のスポット、ファンシーゲートです!このまま城内の見学コースが一般的となっております」

さっきからあたしに話しかけてくれるのは、赤髪のとてもしっかりなお姉さんで…

ああ…適当に作った魔法式がありえない数の人の目に晒されている。

…さっきこのお姉さん100万人とか言わなかった?

自分の魔法がいつのまにか観光スポットになっているなんて、これほど気まずい物は無い。

こんな事になるならもつとちゃんとした魔法式組むんだっただけ…

もちろん後悔先に立たずで、今更どうしようも無いのはわかっている。

ただやっぱり式をちょっと修正されてるらしく、あたしがされたような強制排出なんて式はなかった筈なので…

「…お客様。魔法に酔われましたか？」

「あっ…」

ずっと黙ったままでいると心配してか、赤髪のお姉さんがしゃがんであたしの顔を覗き込んでくる。

サングラスのおかげで瞳の色を見られる事はないけど、あまりに近くに顔があつたので飛び離れた。

「だっ大丈夫です！あ…あの、記念とか結構なんで…」

…自分が作った物に対してキリバンを踏んでしまうのは…そんなつもりはなくても詐欺っぽくて嫌だ。

あたしは近くにいた老夫婦の手を取ると、赤髪のお姉さんの前に突き出す

「こちらのご夫婦に移譲します」

「…おっお嬢さん!？」

「よければここの記念に受け取って下さい」

「よろしいんですか？」

赤髪のお姉さんの問いかけにっこり微笑むとあたしはようやく立ち上がり、しきりにお礼をしてくれる老夫婦に見送られながらその場を後にした。

「……さて、どうしよう？」

ここは観光客も出入り出来るような区域らしいので、もちろん簡単に皇帝に会いに行くなんて出来ないだろう。

かといってこんなに人の多い場所で転移魔法を使うと人を巻き込む可能性も出てくる

「てつきり、また皇帝の寝室に出ると思ってた。考えが甘すぎるなあたし……」

とりあえず人の流れに沿って進む。

情報収集が大事なので周りの人の話に耳を傾けると、いつも庭園などは一般開放されているが、どうやら今日は1年に2度ある城内の開放日のようで、場所はかなり限定されているが一般人が城内に入れる日らしい。

「どつりでこの人数……」

まるで元の世界での有名な遊園地並みの混雑で、さっきから少しずつしか列が進まないし、警備員のような人が「きちんと列で並んで下さい」と声を何かで拡張して叫び続けている

そんな時、城内に音声が響き渡る



『迷子のご案内です。ゲエタ地区よりお越しのザイファス様。お子様をこちらでお預かりしています。1階正面玄関受付までお越しください』

…迷子アナウンス。

一瞬自分の名前をアナウンスしてもらう事を考える。宰相あたりが来てくれると嬉しいんだけど…迷子は恥ずかしすぎる。

思考が葛藤している中、また音声が響き渡る

『迷子のご案内です。テリサン村からお越しのアサミスヒヨリ様、お連れ様が医療部にてお待ちです。至急お近くの警備員にご連絡ください』

…はい。あたし城でも迷子らしいです

30話 インベントはトラブルがいっぱい(後書き)

土日はどうしても更新が遅れてしまいすみません。

閑話は明日かあさつての昏に更新します

### 31話 ときどき、イベントでの出会い

城内音声では簡単に警備員と言われましたが、さっきから声は確認出来るんですけど…姿が一向に見えないし、というか私今気づいたんですけど、この世界の平均身長よりかなりミニマムらしく、人混みに入ってしまうと周りを人の壁に覆われてしまって埋没。

「これはテリサン村では体験出来ない事だわ…」

…あえて好んで体験したいとも思わないんだけどね。人混み苦手だし…

「さ…酸素が薄い」

満員電車などでも身長が低いとどうしても澱んだ空気しか吸えなくて、あたしにとって出入り扉付近を死守するのは生死をかけた戦いだったりする。この状況はまさしく満員電車状態で…

ヤバイなあ…酸欠になりそう。

とにかく人混みから離れようと動こうとするけど、自分の位置がきっちり固定されて前に進む以外全く動く事も出来ず。

「あの〜!!横に行きたいんですけど!!」

と叫んでみるものの、この人混みでそれぞれの人が会話しているとあたしの声は聞こえないらしい…

魔法でぶっ飛ばしたい…なあって物騒な事が頭を過ぎるけど実行

はしませんよ？無差別殺人者なんかになりたくないですし…

「…困った」

困ったけれどどうする事も出来なさそうなので、人混みが途絶えるところまで我慢するしかないか…と思っただらまた城内音声の流れる

『再度迷子のご案内です。テリサン村よりお越しのアサミズヒヨリ様。お連れ様が大変心配しております。大至急お近くの警備員までご連絡ください』

思わず怒りマークが顔に浮かぶ。

誰が音声を依頼したのかわからないけど、無事着いたらとりあえず一発殴る。

出来るもんならさっさとやってるっつうのっ！！！

ちよつとずつしか進まない列にイライラもMAXになり、叫びだしそうになる寸前

「君、アサミズヒヨリっていつの？」

と隣にいる緑の髪を持った青年に話しかけられた。

「え？」

突然見ず知らずの相手に名前を言い当てられる事ほど怖い事はない。しかもその青年の容姿が長く黒い外套を羽織り、前髪で目がほとんど隠れている状態なので警戒心が倍増される。そんな相手は当然眉間に皺を寄せ見るしかなく、そんなあたしを見てその青年は苦

笑しながら

「城内音声が流れた途端に動きがそわそわし始めたから、そうかな？って思ったただけなんだけど…」

と言った。

なるほど…確かにそう言われればそうだけど…

だからと言って単純に警戒心を解くほど世間知らずじゃない。黙って見つめていると青年は「まいったな…」と頭を掻いた。

「…あたしがアサミズヒヨリだったら何なんでしょう？」

「ん〜お連れさんがかなり心配してるみたいだから、警備員を呼んであげるかな」

よし、良い人決定

「すみませんでした。お願いします、困ってたんです」

「よかった。じゃあ…」

青年はそう言つと「警備員さんお願いします」とぼそつと呟いた

「…い、今の何？」

「ん？警備員さん呼んだんだけど…それでよかったんだよね？」

「いやいや、ありえないくらい呟きだったんですけど…」

そんな声で伝わるんだつたらとつくの昔にあたしがやってるつ

うの…

「ああそういう事、警備員の位置は見たからそこに魔法で音声を飛ばしたんだよ」

「魔法！？…という事はあなた魔法使い？」

「フロシエイド・ダイス・ビュートリア。魔術学院の研究者だ」

魔術学院って今度からあたし達が通う予定のところだよ…間違いない。

つまり怪しい黒の外套は魔法衣らしい。

「…そんな人が何で城見学なんか？」

「ああ…俺、地方出身だからさ。魔術部には所属できないんで、就職活動を兼ねて城の部署見学」

…部署見学なら何もこんな日を選ばなくてもいいんじゃないでしょうか？と思わなくも無い…

けれど就活と言われると、自分の就職超氷河期時代の過去を思い出して寒くなるのでそれを現在経験している人にそんな突っ込みは出来ない。

面接100社とか…あれは精神的にも体力的にもしんどかった。

それにしても、魔術部って地方からの人間が入れないんだ…。

特権階級の集団ってわけですか…やだやだ、そういうの。

そう思うと目の前のこの青年を心から応援したくなる。

「それは…大変ですね」

「ん〜。まあ別に観光も兼ねてだから…あ、警備員来た」

彼がそう言うのと遠くの方からあたしを呼ぶ声が聞こえてくる。

それに合わせて人の混雑がモーゼの十戒のように開かれていつて  
るらしく、警備員の頭があたしからでも見えた

「アサミズヒヨリ様〜!!何処ですか〜!!」

「警備員さん!ここで〜す!!」

緑の青年が大きく手を振ってくれて、それをすぐ見つけてくれた  
らしい警備員が「今そちらへ行きます!!」と返事をくれた。

「…色々ありがとうございました」

「いえいえ。それじゃね。アサミズちゃん」

そう言つて緑の青年は先に進んでいった。

あたしは一礼してそれを見送り、こちらに向つてくる警備員さん  
を待つ。

…帝都であたしの名前を呼ぶ皇帝・宰相・エリルさん。そして4  
人目の人。

何だかちよつと不思議な雰囲気を持った人だったけど、いい人だ  
った。

受験に合格して、もし次に会う事があればお礼をしなければ…と  
思う。

受験勉強で容量が少なくなった記憶の端に留めたところに警備員  
さんが到着した

31話 ときどき、イベントでの出会い（後書き）

今日で連載を初めて一ヶ月です

たくさんの方に読んで頂けて嬉しく感じています

本当にありがとうございます



### 32話 ついてないのは皇帝のせいだ(前書き)

文章評価・ストーリー評価が10000ptを越えました  
ほんとにありがとうございます

### 32話 ついてないのは皇帝のせいだ

人混みから出ると空気が美味しかった。

例え警備員さんに両腕を抱えられ人混みから出る姿が現行犯逮捕のようでも、それを見た人がひそひそ話していたとしても、この空気を吸えただけで良しとする。

まあ…サングラスも悪役に一役買ってると思うけどね…

あたしはようやく色んな意味で自由になった身体を解す為に、思いつきり腕を伸ばして伸びた。

「うーん!!」

「アサミズ様、どうぞこちらへ」

「あい！ご、ゴホン。す…すみません」

思いつきり伸びているところに話しかけなくてもいいではないか…と思う。思わず変な声が出たのを咳で誤摩化したけどあまり効果は優れない…

警備員さんに前後を挟まれ取りあえず進むけれど、途中の今でさえ自分で元の場所に戻れと言われても絶対に出来ない自信がある。

こ、この城どんだけ広いの？

皇帝の部屋からガーヌ国の使者の人がいた部屋までかなり遠かった様に感じたのに、今歩いてる距離はそれとは比べ物にならない。

『関係者以外立入禁止』を何度潜れば目的地に着くのか解らず、そんなに医術部とは遠いものなんだろうか？とだんだん人の数が減

つていくのを見て、どうしても頭にも不安が過る。

「あのぉ〜後どれぐらいかかるんでしょうか？」

「申し訳ありません。もうすぐ医療部ですので……」

「はい……」

この会話が約10分前。

いくらこの世界を3年しか知らなくても、周りに人が全く居なくなったら危険だって事ぐらいわかりますよ？ええ、見事に居ませんよ？私たち以外。

「……貴方達ほんとに警備員ですか？」

「……………」

…無視ですか。

怪しさ満開じゃないですか…

「…あのお、トイレ……」

言った瞬間に後ろの警備員から首に何かを突きつけられた感触は、トリップした日に味わったものと同じ感じで…ゆっくり突きつけられたそれに目をやる

「………やっぱり刃物」

「アサミズヒヨリさん。私たちと一緒に来て貰いましょうか？」

少しハスキーボイスなその声は、こんな時で無ければカッコいい  
と思える声で

「……惜しい。惜し過ぎる」

「アサミズヒヨリさん？」

「あゝもしかしてもしかしなくても…これって誘拐ですか？」

前の警備員が帽子と上着を脱ぎ捨てる。浅ましい笑みを浮かべてこちらを振り返る男はどうみても犯罪者だ。それに比べて後を振り返るといい声男も帽子と上着を同じ様に脱ぎ捨ててはいるけれど、全く印象が違う

うん…君は犯罪者っていうより、怪盗とかの方が似合いそうだ。

しかしこれって予知ですかね？対象があたしじゃないけど…マジで現行犯逮捕じゃん。

「…なあゝんであたしなんですかねえ」

「顔絵とはちょっと違うようだけど、君に手配書で結構な金額ついているの知ってるよね？手配書は取り下げられたけど、君自身の価値は下がってないだろう？あの場内音声を聞けば大切にされてるのがわかるよ」

んゝ、やっぱり聞けば聞く程いい声だわ。

しかし…色んな意味で皇帝、殺！

あたしが皇帝に呪音を送っている間に、いい声男が話を続ける

「それにしても、今日はそれでも犯罪発生率が高い日なのに大切にしている割には一般人の中に警備も付けないで居るなんていい度胸してるよね？まあ居るだけなら、黒い眼鏡と髪の違いで手配書の女だとは気付かないけど…」

…場内放送であたしの名前ばんばん言っちゃったもんねゝ。し

かもこつちから助けて下さいと言っちゃってるしね…もしかして…

「あの緑の髪の人もグル？」

「ゲへへ、違う違う。奴はほんとにたまたま側に居た警備員に声を掛けただけだろうよ。それが警備員に化けてた俺たちだったのがお前の運のツキだったな。ゲへへ」

…前の奴には喋って欲しくないわ。

別にあたし正義感とか強くないのに犯罪者しすぎてて今すぐ捕縛したくなる。

よし、呼び方『犯罪者』に決定！

『いい声男』と『犯罪者』…なんて凸凹コンビなんだ…犯罪者が哀れで泣けてくる。

しかし、それはそれ。これはこれ！

「あのさ、誘拐って弱い者を連れ去るから成り立つって知ってる？強い者を連れ去る時にはね、ちゃんとそれを動けなくする人質というものが必要なんだよ？」

「何言ってるやがる…」

「だからこの状況だったらね。あたし自由に動けちゃうわけですよ。それはもう自由に！貴方達は少なくとも今すぐあたしを殺せないでしょう？」

「このクソ餓鬼が…」

犯罪者に睨まれるけど、魔法を使えるからか初めて皇帝に剣を向けられた時と違って今はあんまり恐怖を感じない。

「てめえ…自分の立場がわかってねえようだな。他にも金になるネタはたくさんあんだよ！！今すぐてめえを殺したところで俺達は痛くも痒くもねえんだよ！！！！」

犯罪者は単純だ。

あたしに逆上していらぬ事をベラベラ喋ってくれる。

つまりあたし以外にも誘拐された子が居るって事で……果てしなく面倒な事に巻込まれた気がするけど、だからって関わっちゃったからには、ここで無視したら絶対後味悪くなるし……

「そうですね……なら」

しかしほんとに皇帝絡みになるとことんついてない。

あたしはそう思いながら前後の二人組の横、1m部分に固定した直径60cmの空気の塊を時速50kmでぶつけてやった。二人とも殺さない様に吹っ飛んだところを柔軟性をもたせた水の塊で受け止める。

原チャリに引かれたぐらいじゃ打ち所が悪くない限り死なないでしょう？

…腕の骨折ぐらいはいつちゃってるかもしれないけど…ね。

32話 ついてないのは皇帝のせいだ（後書き）

閑話をUPしています。

突然寒くなりましたね。皆さんお体は大丈夫ですか？  
私は案の定、発熱しております（笑）

皆様お気をつけ下さい。

### 33話 名付けセンスは無いかもしれませんが

見事に悪者二人は「げはっ！」「やぐっ！」「という台詞とともに吹っ飛んであかしから離れてくれた。

『ワルピー』と名づけたこの魔法は、実は村に居た時に習得した物。

テリサン村「辺鄙な村」自然に溢れた場所だったので、村を出て少し歩くと森やらがたくさんあった。普段の注文ぐらいなら必要魔石は川で十分事足りるのだけど、稀に特別な物を依頼されると良質な魔石がある事が多く、その入手手段として森などに行かなくては行けなかった。森は良質な魔石がある反面、危険度も上がり魔獣なんかもたくさん居るので自然と身を守る術を学んでいったのだった。

最初のうちは出会っては逃げるを繰り返していたけど…これがかなりキツイ。1時間以上逃げた事もあって、ずっとその間隠れては走るの繰り返し…あたしアスリートじゃないし20歳越えた女に走り続ける事を求めるなんて何の拷問？ってその時に思った。

それを経験してから真剣に攻撃の仕方考えた。

殺してしまえば単純なのかもしれない。だけど村を襲われたならまだしも、相手のテリトリーに入り込んでるのは自分なのだから無意味な殺生するのは嫌だった。

だから魔法を使って殺さなくてすむように、だけどそれなりに強力で、あたしがやったようにはわからなければなおよろし！でうま



れた魔法が『ワルピー』だった。

基本は昔、兄達が持ってたエアガンがふつと頭に浮かんで、それを参考に魔法式を組んでみたんだけど…魔法式に座標を組み込んだのが良かった。きつちり目標物に対して左右どちらか1mのところ  
に球を固定する事が出来て、実践でも思いの外上手く使え、魔獣は相手の見えない攻撃に怯えて逃げていった

「いやあ…まさか城でも役に立つなんてね。思わなかったわ」

それぞれ互い違いの方向に吹っ飛んだ二人は水に受け止められ、水は衝撃を緩和しつつはじけ飛びそこから中が水浸しになった。受け止めるものが水だったせいで二人も全身びしょ濡れになっている。犯罪者は倒れたまま起き上がる様子は無かったけど胸の部分が上下に動いているから命に別状は無く気を失ってるだけに見えた

「……………つてえ」

いい声男はどうやら気を失ってはなないけど、膝をついた状態で空  
気砲を受けた部分を手で押さえているからこちらに攻撃は出来なさ  
そうだと。

「あ、ちよつと待っててね。気を失った方を先に診るから」

「……………」

あたしはいい声男にそう言うと、犯罪者の方に近寄って首で彼の脈を取り、正常な事を確かめた。上着をめくって空気が当たった場所を確認したが、赤くなっているだけで骨折などは起こって無さ

そうだった。

「速度指定を原チャリで考えたのがまずかったかな…」

魔獣を気絶させた事はなかったものでちよつと心配だけど、すぐに治療すれば大丈夫だろうと思う。人に見つかるまでに動かれてもやっかないので、両手両足を自分のベルトで結んでしまう。

捕縛の魔法とか覚えてたらいいんだけど、それは「はじめてのまほうのつかいかた」には載ってなかった…

「さて…これでよし！」

で、意識のある人の方ですけど…

視線を向けるといい声男はまだ苦しそうで無理矢理笑みを浮かべているものの、瞳はこつちを睨みつけている

先に『か弱い女の子』に刃物向けたのそっちでしょうが！

ちよ、ちよつと…か弱くなかっただけですけど？

あたしは犯罪者の側から立ち上がっていい声男の方に向かう。いい声男はさすがに警戒してるらしく、片足ついた状況でもじりじり下がってくが、さっきと変わらず少し笑みを浮かべた表情でこつちを見る。

そして下がりながらもあたしに話しかける

「……今の衝撃、君の魔法？」

「……でしたら何です？」

「……何？今の衝撃。鉄ではねられたみたいなんだけど…」

「………」

そんな大げさな、鉄だつたら死んでる…多分。  
…まあ速度上げたら空気砲でも内臓破裂とかで十分殺傷能力あり  
そうですね…

「俺とキツシュほんとに同時に吹っ飛んだよね？遠隔魔法を二人  
同時であんなに正確って…君よほどの使い手？魔術学院にそんな子  
いたっけ？少なくとも俺は聞いた事ないな」

…あの犯罪者の名前は『キツシュ』らしい

「へえ〜。あの男キツシュって言うんだ。フルネームは？」

「キリアード・メルドリアって俺は聞いている」

なるほど、仲間のお名前をすぐに教えて下さるのなら…

「貴方お名前は？」

「……………」

じいーつと同じ笑みでこっちを見つめてくるけど、答える気は無  
いらしい。

あたしは相手にもわかるぐらいに大きく溜息をつく、指で拳銃  
のポーズをとる。

そして指先にさつきと同じ『ワルピー』を今度は直径3cmで作  
り、肩がぶつかる程度の速度で「バンッ！」という掛け声と一緒に  
いい声男の眉間に飛ばす

「っ！？」

突然眉間に衝撃を受けたいい声男は後に跳ねて尻餅をついた。そ  
の顔には驚愕が浮かんでいて、ようやく笑顔の仮面が剥がれ落ちま

したよ

「貴方のお名前は？」

「……ジヨゼ」

「ジヨゼねえ。何でフルネームで教えて頂けないのかしら？」

「……」

怪しさMAXなんですけどね……

警備員の時の身のこなし方もこの人の方がキツシュより全然キレイだったし……魔術学院の内情知ってるのも、もしかして……

「……貴族の坊ちゃんが誘拐犯の真似は頂けないわね」

「……っ」

さあ……って洗いざらい白状してもらいましょうか……！

### 34話 絶対絶命、これって走馬灯？

異変を感じ取ったのはまず身体だった。突然全身がぞわっと総毛立つ様な感覚、その正体を確認しようとした途端に突風に襲われる。

「なっ…！」

「ごめんね、アサミズちゃん」

突如空中に現れたのはさっきの緑の髪の男、確か名前はフロなんなら…だった。

彼はジヨゼの横に降り立ち、彼を冷たい視線で一瞥すると、こっちに視線をやりながら、口で何かを詠唱し始めた。

一度、ニタリと笑みを浮かべ、あたしへ向かって手を掲げてくる。

…やばいつ！！攻撃される

あたしは咄嗟にとれる防御魔法なんてたかが知れていて、その瞬間に出たのは先日ミレーヌが暴走した時に発動させた空気を固定する魔法だった。

炎があたしを包む様にして襲ってくる。だが固定された空気は遮断の役割を果たしてくれたらしく多少の暑さは感じるものの炎が直接襲ってくる事は無かった

炎の壁からちらちらと見えるフロなんとかは腕を組みながら左手を口元に持っていった状態で親指の爪を噛んでいる。顔は笑みを浮かべて人を試すような感じ。

…いい人撤回。あいつ…気持ち悪い。

しばらくその状態で耐えると、炎の攻撃が止まった  
フロなんとかは同じ状態で笑ってる。

「へえ〜やっぱり君…本物のアサミズヒヨリだったんだ」  
「チ・ガ・イ・マ・ス」

こんな気持ち悪いやつに本名乗るほど頭悪くない。  
ただ相手も簡単に騙されるような奴じゃないのは確かで、それを  
聞いて笑みを深くした

それにしても…

「…あんた…やっぱこいつらの仲間だったのね」  
「…僕がこいつらと？」

そう言うとフロなんとかはジヨゼが手で庇っている場所を蹴りつ  
けた。「ぐうっ！」といううめき声をあげてジヨゼが吹っ飛ばされ、  
壁に叩き付けられる。

「な…なにをするのっ!!」  
「どうして怒るのさ？君を襲ったやつらだよ？」  
「……………」

フロなんとかは『人』を攻撃するのに何の躊躇も無い。それどこ  
るか笑みを浮かべてその行為を楽しんでる。

… 快楽殺人者。

浮かんだ考えに…尋常じゃない汗が身体から吹き出してるのわかる。

さっきの炎の攻撃はかなりの炎の量だったのに、フロなんとかは平然と繰り返し出していた。つまり彼はかなり魔力を持った上級の魔法使いだと言う事がわかる。

…こんなやつにあたしのにわか魔法が通じると思えないんだけど。

考える…あたし。

どうすればこの状況を打開出来る？

視線を倒れている悪者二人に向ける

悪者助けるっていうのもなあ…でも助けないと他の子の行方わからないし。

…でも悪者って、目の前で笑ってるやつのがよっぽどやばいじゃん。あいつに比べたらキッシュもジョゼもおこちゃまな悪さだわよ…とにかく何か思いつくまで時間を稼ぐしかない。

「…ど、どうしてこの場所がわかったの？」

「ふふ…ヒミツね」

あの時確かに彼は人混みをそのまま進んであたしから離れていった。変な追跡魔法をかけられた感覚も無かったし、かなり移動したこの場所を特定するなんて、広範囲の搜索魔法みたいなものを使ったとしか考えられないけど…でもその中でもあたし達だけを特定出来る程の魔法なんて…

相手の力が測れないってこんなに恐怖なんだ…

「あの手配書の絵って白黒なのがネックだよね。はっきり特徴がわからないじゃん」

「……何の話よ」

突然話題を変えられて思わず聞き返してしまった。

「『アサミズヒヨリ』を皇帝があんなにやつきになって捜すからさ…てつきりそうだと思ったのに」

確かに筆のような物で書かれたあたしの似顔絵は白黒だった。あたしは自分の髪が黒髪だからそれに対して違和感を持ってなかったけど、この世界の人なら黒髪に違和感を感じるんだし、白黒の絵からあたしの髪の色を別に連想してもおかしくはない

しかも今のあたしは茶髪だし…

「『黒の加護』っていうぐらいだから髪が黒いのかと思ったけど、君、薄い茶色の髪してるしや〜」

『黒の加護』

…また出てきた。

どつやらこの世界であたしが過ごすには切っても切り離せないワードらしいけど…全然わかんないし。

「…そんな加護知らないし」



「そつだよねえ。君が『黒の加護』を受けた者なのか…わからないよねえ。瞳を見たいけど…その色眼鏡が邪魔しちゃってくれてるし」

さんきゅーサングラス！！心底あたしは自分の発明に感謝した。

「…殺しちゃえば確認できるかなあ？」

「…殺す！？」

フロなんとかはまだ笑っていたけど、さつきと違い目は剣呑な光りを宿してる。

あたしに近づくとフロなんとかの足音が響き渡る。

え〜と…黒の加護って殺しちゃっていいんですか？

つまりこの世界にいるとあたし命狙われちゃうって事ですか？

…あたし絶対絶命な気がするんですけど。

笑いながらフロなんとかがあたしに向かって手を掲げる。

「さつきみたいに試すんじゃないくて、一瞬で殺してあげるから」

そういうとフロなんとかの周りに風が巻き起こる。どうみてもさつきの炎より強力そうそれは彼の属性が風な事を物語っていて…

…こんな時って逆に冷静になるのかもね。

渦巻いた風が切り裂く刃となってあたしに降りかかる

やけにゆっくりとその現象を見たあたしが考えたのは

もしやこれって走馬灯？やばいじゃん…あたし死ぬの？

って事だった。

### 35話 期待を裏切らない存在

風の刃があたしを傷つける為に向ってくる。

それが眼前まで迫った時、相当な痛みを覚悟した

『魔式、3型発動「制圧領域 オールセーフティ」』

頭の中で勝手に鳴り響く声がする。

…そして自分の顔を通り抜けたのは心地良い風だった。

「…え？」

驚いてるのはフロなんとかも同じみたいで、その場の時が止まったみたいだった

「…アサミズちゃん。何したの？俺結構本気で君殺す気だったんだけど…やっぱ『黒の加護者』って君の事なのかな？」

そんなの聞かれてもあたしが一番わからないし、逆にこっちが聞きたいわっ！！

「アサミズちゃん。殺すの止めたげるから…俺と一緒に来る？」

「…謹んでお断りします」

あたしを捕獲しようと、段々近寄ってくるフロなんとかに『ワルピー』ぶつけて見るけど、そもそもこの魔法は奇襲攻撃だから効き目が絶大なだけで、特に風属性の人にはいとも簡単に弾き飛ばされてしまう

「くくっ君って面白いね。是非ともその頭、研究したい」

…それって結局殺される気が多々とするんですけど。

「大丈夫。痛くないから」

…信用なりません。

「さつき助けてあげたじゃん」

ええ…そしてその後、殺されかけましたからね。

「さつきの事は忘れてよ」

「忘れられるかつ…!!」

何て会話をしてる間にすぐ側までフロなんか来てて、あたしの頭の上で何か詠唱し始める。逃げようと思ってもさつきの攻撃で腰が抜けたらしく…いや殺されそうになったら普通抜けるでしょ？

とにかく動けない。

「ごめんね。暴れられると困るから、ちょっと縛らせてね」

「にやあ〜っ…!!」

縛りとかこいつが言うത്卑猥な言葉に変換されるんですけど…!!  
しかも何かにぎゅっと縛られてる感じがするのは捕縛魔法ですか  
!?

あゝ連れてかれるの決定だな。

メルフォスさん…捜してくれるかな…。

ってあたしを城内音声で呼び出したのって結局誰だったんだろ？

あたしの身体が宙に浮いたと思ったたら派手な音を立てて落ちた  
ええもちろんお尻を強打しましたよ？

「つついいた！！！」

「……ぐっ」

フロなんとかに文句を言ってやろうと顔を向けて更にびっくり。  
一瞬でフロなんとかが傷だらけになっている。

「…あれ？」

「…よくもアサミズに刃を向けたな」

自分の背後から聞こえてきた声は、地を這う様な声であたしに向  
けられたものじゃなくても全身に鳥肌が立った。

怖々と後を振り向くとそこに立っていたのは皇帝と……赤毛を爆  
発させたお姉さんで

皇帝の手はフロなんとかに向けられ、そこから水の刃が飛んでい  
く。横の赤毛のお姉さんはあたしに近づいてきて「大丈夫？」と声  
をかけてくれ、身体の束縛を解いてくれた。

腰が抜けたのも直ったみたいで、動ける感じがする

急展開すぎて頭がついていきません

え〜っと…あたしさっきまで死にかけて、連れてかれようとして

たよね？

で、宙に浮いて落ちたら皇帝がいた

なんて考えてたらフロなんとかの叫び声に思考をぶったきられた。

「ぐはうっ！！」

…おお〜い。と、吐血してますけど

し、死んじやいませんか？このままじゃ…

しかも攻撃の手を緩めそうにない皇帝の手に、あたしは思わず飛び込んでしまった

「ススス、スト〜〜〜ッブ！！し、死んじやうからっ！！！」

「…止めるな。アサミズ」

「止めるでしようっ！！普通！！！」

目の前で殺人とかありえないし！

…いやあたしも殺されかかったんだけどさ…まあそれは死ななかつたからいいじゃないって感じで…

でも目の前で他人が殺されるのとかマジ勘弁してっ！！

あたしは平和な国の日本人なんですっ！！

「止めなくても大丈夫よ」

いやいやお姉さんっ！！

貴方は何故ここにいるんですか？

この人のストッパーじゃないんですか！？

「違うわよ。貴方が怪我を負ってるかもしれないから付いてきたの」

何故か心の声を読まれて返事される。

「怪我してるのあたしじゃなくてあたし以外の人なんですけど」

あたしは無傷。本人一番びっくりしてるけど無傷！

ちよつと今の落下でお尻が痛いだけだし…

「あなたじゃないならきちんと医療部の順番守らせるわよ」

ええ〜〜〜！？

壁に激突して頭から血を流してる人と、意識不明者と、吐血者ですけど！？

結構みんな重傷者だと思っんですけど！？

「…それにうちの治療はいらなさそうよ？」

赤毛のお姉さん微笑を浮かべてますけど…美人さんなのに頭の爆発でかなり損してるよね。いや、そんな事は今はどうでもよくて…

お姉さんの視線を辿るとさっきまで笑みを浮かべていたフロなんとかが苦しそうに、口の血を拭ってる。

「へえ〜もう表、制圧してきたんだ…。無駄に能力値高すぎ」

フロなんとかが皇帝に話しかけるけど、皇帝はそれに答える事なく、あたしを手にぶら下げたまま鋭い視線をフロなんとかに向け続

ける

「何故、アサミズを狙う」

「そんなの、貴方が一番よくわかってるでしょう？」

「…知らんな」

あたしの事を話題にされてるけど、さっぱり意味不明ですけどね  
しかも「知らんな」までの一拍の間って知ってるっていつてるよ  
うなもんじゃないですか？でも二人ともそんなやり取りはどうでも  
よさそうで…

わけもわからず気になってるのはあたしだけかっ！！！！

「さすがに一人で皇帝と筆頭医相手って…ちょっとしんどい」

フロなんとかはそう言うと宙へ自分の身体を浮かべ、最後にニタ  
リと笑う

「迎えに来るから、また会おうね。アサミズちゃん」

何て悪役真つ青な捨て台詞を残して来た時と同じ様に風に乗って  
消えた。皇帝も赤毛のお姉さんも深追いするつもりは無いのかその  
まま見送った

「アサミズ…大丈夫か？」

手にぶら下がったままのあたしに皇帝が心配そうな眼差しを向け  
てくれる。



「いや…ほんとにあたしは平気なんだけど…っつて、ああ〜」  
「っあの二人!!!」

あたしは皇帝の手から降りて、慌てて自分を連れてきた悪者二人を確認する。

案の定ジヨゼはフロなんとかが連れて行ったみたいで、壁に血だけを残して消えていた。

…キツシュは気を失ったままその場にいた。

「…あいつに聞いても何も出てこなさそうよね」  
「……………」

赤毛のお姉さんに激しく同意してしまう

キツシュ…貴方ってほんとに期待を裏切らない見事な捨て駒ぶりだわ。

### 35話 期待を裏切らない存在（後書き）

更新遅れましたが、ちょっとだけ長くなっています  
次回には色んな理由が書けるといいなと思っています

### 36話 メルフォス家の事情

皇帝から紹介された赤髪爆発の美人筆頭医は『シフォンレイ・クラスグリム』と名乗ってにつこりこちらに微笑んでくる。

「『シ』って呼ばれてるから」  
「あ…はい」

…につこり笑顔は200点満点の美人さんなのに…もったいない。

「痛いところない？」などの優しい台詞を言いながら、怪我が無いかあたしの体を念入りに調べてくれるシーさんだったけど…

…でもねどうしてもあたしの目に赤髪が飛び込んでくるのよ。  
そうしたらやっぱり気になる物は気になるし

…どうやったらこんなに髪が爆発するの？これはもしかしてわざとなの？

鳥でも飼っていきそうな赤髪はどうやっても櫛なんて通らない。これは断言出来る！アフロみたいなお洒落な感じは一切ないので、やっぱり鳥の巣でしかない…

…き、気になって仕方ない。

「……………」

ただ：天パなどで実は触れてはならない部分だったりしたらそれはやっぱり…聞くにきけず、あたしは手をワキワキと動かすしかなかった。

「何？どうしたの？手に怪我でもあるの？」

「いやっ…これは…怪我とかじゃないんで…」

大慌てであたしが否定すると、シーさんはもう一度微笑んでくれた。そして皇帝に向かって「大丈夫」と合図をしている

「皇帝との話が終わったら、絶対医療部に寄ってね」

あたしの耳元でそう囁くとシーさんはキツシュの方へ向った。あたしと皇帝はシーさんがキツシュを診察しているのをただじつと見ている。

「こっちも意識ないけど、大したことないわよ」

そう言つと彼女はやって来た警備兵に気を失ったキツシュを運ばせる手配をして、皇帝には「帰るわ」という言葉と、あたしにはウインクを一つ残し颯爽と去っていった

そして警備兵がキツシュを連れて行った後、残されたのは皇帝とあたしなわけで…

「……………」

「……………」

この間は何なんでしょう…質問とか今していいんですかね？

…立ち話で聞いていいのかしら？

「あのお〜」

黒呪の事とかメルフォスさんとのつながりとか、聞きたい事はいっぱいあるんで時間は有効に使いたんだけど…ただ質問ありすぎて何から聞けばいいのかわからないってのが正直な話で。

「……………あつ」

そこで今一番重大な事を忘れてた事に気付いた

「ああ〜!!!!!!誘拐っ!!!」

すっかり命の危険に遭って頭のすみっこに追いやってました！

ご、ごめんっ誘拐された子供達っ!!!

あたしは皇帝に慌てて事情を説明すれば、呆れるような皇帝の視線に晒されて…

…あたし間違った説明しましたっけ？

「…落ち着け。すでに犯人は捕縛されて、子供は保護されてる」

「へ？」

「メルフォスが近衛を指揮して、全て解決済みだ」

「め、メルフォスさん？」

そういえば…メルフォスさん。昔、騎士だったって言ってた。家を見に来たついでに…騎士に再就職したって事？

え〜… 1人でテンパって空回りをしたのすんごい恥ずかしいんですけど…

「ブジニカイケツシテヨカッタデス」

ちゃんと心はこもってる!…はず

なら、別にそちらの心配はしなくて言い訳で…やっぱりこの時間、あたしの質疑応答タイムでいいんですかね？

「さっきは…アサミズを置いて戻ってしまっただけですまなかった」

「……………」

と思っただらびっくり皇帝が話しかけてきた。

……………そう言えばそんな事もあったな。

その後起こった事の印象がきつ過ぎて、そんな話すっかり影が薄くなってるさ。

「メルフォスさんに用事だったんですか？」

「メルフォスは、ずっと城で捜していた人間だった。12年前に騎士団長を一枚の紙で突然辞め、それ以来行方不明だった」

「行方不明!？」

普通にテリサン村で『メルフォス』で生活してましたけど…あそこ、隣国との中継地点だった筈なのに、どれだけテリサン村って隠れ家なのよ？

…しかも皇帝の探し人が全員テリサン村に居たって…………ウケる。

それにしても、突然紙切れ一枚置いて責任のある立場を辞めてしまふ人と、あたしの知ってる責任感の強いメルフォスさんがどうも一致しない

「よつぼどの事があつたんですかねえ……」

例えばライザ母さんに『別れるっ！』って啖呵切られたりとか……いや「あたしのせいで辞めた」みたいな事を言つてたし……。

そんな事言われたら絶対メルフォスさん、すぐ仕事やめると思うわ……ライザ母さんが関わると責任感とか無いに等しいね、あの人。

半分冗談はさておき、この話の時には二人とも深刻そうな顔してたし……何か事件があつた事はわかるけど、直接聞いて二人の傷を決る事はしたくないし、保護者の就職先が決まつて解決つて事で……まあ……いつか。

と勝手に自己完結してたら皇帝が話し出した。

「メルフォスが騎士団長を辞める一月前、帝都での暴動と国境付近の町が襲撃される事件が同時に起こつた……私は暴動の鎮圧を指揮し、メルフォスには国境付近の警備の強化に遠征へ出た。しかし中々思うように警備体制が整わず、子を身ごもっていた奥方の産み月になつても帝都へ戻る事が出来なかつたんだ。悪い事は重なつて……奥方が切迫流産で母子共に命を失いかけた。かなり辺境地に居たメルフォスがその事を知つたのは帝都に戻つてからで、彼はその時、奥方の側に居てやれなかつた自分を責めた」

ライザ母さんの「ほんと絵みたいな光景だったよ」と嬉しそうに語る顔と「辞めさせたのはあたしなんだけどね」と言った時の翳った顔の意味がわかった。

…ライザ母さんの誇りと罪悪感。

騎士団長であったメルフォスさんはライザ母さんにとって誇りだった。そして夫からその場所を奪ってしまった罪悪感。出産のトラブルなど自分でどうする事が出来なかつたとしても、ライザ母さんの性格なら自分自身を責め続けただろう。

ただ想像だけで中身は、そんな事があつたライザ母さんから離れるのをメルフォスさんが極端に嫌がり「仕事続ける」とライザ母さんが制止するのも聞かず我俣を押し通して、騎士団に連れ戻されないうちにライザ母さんが全快するまでに全部隠して田舎に引っ越したつてのが妥当だと思うけど…ライザ母さんの事、狂愛だし…あの人。

…で、今度はメルフォスさんの罪悪感で戻る事になった

だつてきつとテリサン村に居る限り、ライザ母さんは性格上「あたしが辞めさせてしまった」って表には出さないけど陰で自分を責め続ける筈だし、妻のそんな様子に気付かないメルフォスさんじゃないし…

あたしとミレーヌの事がいい切欠になつたんだろう。

何てまたまた自分の考えに没頭してたら、皇帝の話は続いてて



「…最近、急激に帝都の治安が悪化しつつある。メルフォスが騎士団長に戻るだけで犯罪者へかなりの抑止力となるのは明確で、国としてはメルフォスが見つかったのなら元の立場に早急に戻ってもらう必要があった」

居るだけで抑止力って…どんだけメルフォスさんって最終兵器なんでしょうか。

「はは…そんなにすごい人なんです…ね」

あの美人の微笑みが最終兵器だとは…家族の前でどんだけ猫被ってたんだよ…

「確か『微笑みの槍使い』とか呼ばれていたな…」

得てして戦闘名に柔らかな助詞がつく人間は碌なもんじゃない。思わず笑顔が引きつってしまふ。

「私の槍の師でもあるが。今回は見つけた方がいいが、騎士団長へ戻る事は散々渋られた。下流騎士として働くなどほざいていてな。帝都に来る家族の安全を考えると言えば一発でやる気になったが…」

…ああ、それはとてもメルフォスさんが言いそうです  
家族ラブですから…っていうかライザ母さんラブ？

「まあ…押し付けであれ何であれ、早々に職が見つかってようございまして」

そつ言つと皇帝が笑った。

何故笑われる…だって無職でライザ母さんの収入に頼って『ヒモ状態』とかありえませんか…日本人『働かざるもの食うべからず』ですから

ま、これで帝都に慌てて来たメルフォスさんの件は解決したので、帝都に来てから発生した問題について解決しましょうか…

「あの…ところで皇帝…黒の加護って何で…」

何ですか？と続けようとしたところを皇帝に手で口を塞がれた

「ふー！ふー！」

「静かに。黒については人に聞かれない。私の部屋へ場所を移そう」

いや、そんな理由は初めて知ったので！

人に聞かれないって言いますが、さっきのフロなんかは『黒の加護』って何度も連発してましたんで今更な気がしますけど？

あたしの怒りなんて何処吹く風のように、突然皇帝はあたしを横抱きに抱え上げるとすたすと歩きだした。

「あの…」

…あたし歩けますから。

そう言おうとしたら

「何も喋らないように」

横抱きだったのでお互いの鼻があたる位置で皇帝からそう言われてしまう。すっかり自分が12歳扱いだという事を忘れていたので…キスされるかと思ってしまうたじゃないか

「ぐううう…」

顔が赤くなってしまってるのが自分でもわかる。

だって、ほんとにすぐ目の前に美形男がいてキスされるかも！とか錯覚したらそりゃ赤くもなるでしょう！？

人の視線から逃げたいのと、赤い顔を隠したいのであたしは皇帝の胸に素直に隠れた

ええもちろん口も貝のようにぴったりと閉じましたよ！

### 36話 メルフォス家の事情（後書き）

すみません36話かなり修正しました。

そしたら2話分ぐらいになってしまいました…ほんとに申し訳ないです

### 37話 疑問、質問、回答、解放？

現在もうお馴染みとなった皇帝の私室には魔法壁が張られ、会話や空間自体が切り離された存在となっている。前には居た宰相の姿もない。

もちろんその魔障壁を張ったのは皇帝で、あたしを前回座ったソファに下ろすと、すぐにこれらの作業を行った。

そして作業が完成するとゆっくりとした動作であたしの前のソファに座った

「さて…これで他人に話しを聞かれる心配は無い」

…あたしと貴方も他人だと思っただけ、なんて突っ込みは飲み込む

「その色眼鏡も外して大丈夫だ」

「あ…はい」

特に外すつもりも無かったのだけど、突っ込まれてしまうとかけておく理由もないので外すしかない。

サングラスを外すと、髪の色も元の黒髪に戻る。

「色眼鏡に魔法式を組み込んでいたのか？」

「ええ。ここに魔石をはめ込んでるんで」

あたしはそう返事をしながら、サングラスの魔石を指差す

「なるほど耳飾の魔法式も自分で組んだ物だったのだな」  
「…ええ」

皇帝はあたしからサングラスを受け取ると、興味深げに色々触っている。

ただあたし的にはそんな小道具の事はどうでもいいんで、早く自分のモヤモヤを何とかしたいんですけど…

…しばらくは待ってみた…が、話が始まる気配すらない。  
さて、どうする？

どうするも何も。始まらないなら、こちらから始めるしかないでしょう。

「…そんなに黒の加護ってやばい物なんですか？」

「いや…『黒の加護』自体は魔法を扱う人間にはそれなりに知られている物だ。城の書庫にも関連書物がたくさんあるぐらいにな。

…だが、それを受ける人物が実在する事は絶対に知られてはいけない筈だった」

「え…それってもしかしてもしかなくても、あたしの事なんですかね」

皇帝に勘違いであって欲しいと期待の眼差しを向けるが、生暖かい目で返された。

しかし、帝都で手配書とか絶対に知られてはいけないなんて言うてる割にはやってる事が無茶苦茶なんですけど…

あたしの若干引いた様子に皇帝が苦笑する

「…言いたい事はわかる。だが、アサミズの身柄を確保し保護する事が最優先だった」

「…さつきみたいに身の危険があるからって事ですか？」

確かに実際、さつき殺されかけたんだし保護対象なのはわかる。

で、次の疑問が浮かぶ。

「なら、何であの時、事情話してくれなかったんですか？それにして素直にあたしをテリサン村に帰してくれたんですか？…あたしの変装解きましたよね？…これっておかしくないですか？」

どんどん溢れてくる疑問をそのまま皇帝にぶつける。

だってどう考えても皇帝の行動はあたしにとってはおかしい事ばかりだ

「事情をあの時話さなかったのは、君を混乱させない為だ。それでもなくても手配書の件で犯罪者や何だと混乱していたら。あの時に君は命の危険に晒されているなど正直に話して、不安を持たせたくなかった。テリサン村へ帰したのは君に冷静になってもらう為だ。すぐに迎えに行くつもりだったんだが、さつきも話した通り、ここ最近急激に帝都の治安が悪化して動く事が出来なかったんだ」

「……………」  
「後は…変装か…。アサミズは魔法使いは全て瞳の色で属性が決まる、という事は知っているか？」

あゝはいはい。メルフォスさんから聞いたやつね。

あたしは肯定の意味で、何度か頷いた

「ならば今のアサミズの瞳が黒の加護を表す物だという事はわかるな」

これまた頷いて了解する

「その瞳を誤魔化すのに黒髪は最良だ」

…なぜに黒髪で目の黒さが誤魔化せるの？

頭に疑問符をたくさん浮かべると皇帝が続きを説明してくれる

「黒髪はこの国ではかなり珍しいが。居ないわけじゃない。存在するが希少な物は人の視線が集まりやすい。それに比べて黒い瞳の人間は少なくともこの国には存在しない。人の意識で存在しない物は別の何かに摩り替えられる事が多い。黒髪と比べるとアサミズの瞳は日の光に当たると茶色に見える、ならば人は地の属性だと思いきむだろう。それが茶色の髪になると瞳の黒は強調される」

つまり、木を隠すには森の中って事ですか…

「テリサン村では普通にそれで生活してても…怪しまれませんでしたけど？」

「テリサン村はこの国の中でも辺境地だ。魔法を使える物も少ないければ、知識がある者も少なかっただろう？」

「でも…ガース国の旅人とか…」

「…運がよかったとしか言いようが無いな。まあ…何か問題があったとしても、メルフォスが解決していた筈だ」

…つまりは危険はいつでもすぐ側にあったわけですか。

平々凡々と暮らしていたと思ってた生活が、実は危険と隣り合わ



せだったなんて…

何てはた迷惑な力を持ってあたしはこの世界にきてしまったのだ  
らう

「…黒の加護って一体、何なんですか？」

「それについては、まず私の体に触れて欲しい」

そう言つと、皇帝が上着をどンドン脱いでいく。

…え？

何で自分を解放しちゃってんの!?

全く意味がわかんないんですけどおっ!?

37話 疑問、質問、回答、解放？（後書き）

36話かなり訂正をいれました。

話の筋は変わってませんが、内容は2倍の長さになっています。

ちよつとずつ黒の加護の事を解き明かします

今回はヒヨリの疑問、解決編でした。

38話 今の特集『皇帝のセミヌード』はいけるっしょ！

突然脱ぎだした皇帝に対し、どこをどう突っ込んだらいいのかも解らず、途方に暮れているあたし。けどどしっかりと「見た目細いのに、意外に筋肉ついてるな…」なあんて観察してしまうあたり…気付かなかつたけど日本で流行の腐女子要素も持ってたんですね…あたし。

「…細マツチヨか」

「？細…何だ？」

「いえ…こちらの話なんで…」

「……………」

しかし、美形男は何も着なくてもかっちょええのあゝ。

テリサン村では見た事なかったけど、女性雑誌とかこの国には無いのかな？

皇帝のセミヌード特集とか絶対売れると思うんだけど…

あゝ…その前に購入者全員不敬罪で捕まるか…

なんて事を考えていたら…ガン見しすぎました。

えゝ皇帝の顔が何気に赤いのは気のせいですかね？

…不埒な女ですみません

「…で、突然何で脱ぐんですか？」

「…私の身体には黒の紋章がある」  
「黒の…紋章？」

確かメルフォスさんの話では皇帝は『黒呪』をその身体に宿して  
るって言ってたけど…黒の紋章というのが、それなんですかね？

「…ごこだ…」

そう言って皇帝は自分の胸に手をあて、胸の上で拳を握りしめ目  
を閉じた。

そして目を開けるとあたしに向かって手を差し出してくる

…嫌な予感。

大抵こういう時の予感は当るよね。

「触れてくれ」

「……………」

ん〜。これは究極のセクハラなんですかね？

「……………それは…ちょっと」

ごめん被りたい。

あたしは別に皇帝の『黒呪』も説明されればいいだけで…別に実  
証とかいららないんで

しかも呪いに触れるって自分も呪われそうでやだし…もしあた  
しに解除の力があつたとしても現時点では無いわけだし、触れる意  
味ないじゃん。

「…アサミズが触れてくれれば紋章の力が解放される」

「…の、呪いが解けるって事ですか？」

「呪い？……何の事だ」

「え…だって、紋章って『黒呪』なんでしょう？」

「バカなっ！！紋章が呪いだなどと…」

「え？」

…違うんですか？

…なら、黒の紋章って何なんですかね？

っていうか、この行動、後でも良くないですか？

「せ、説明を先にして貰えませんか？」

「いいから、触れ！」

そう言つと皇帝は半ば強引にあたしの手を掴んで、自分の胸に押しあてた

「いやぁ…だ…？」

手を取られた瞬間にあたしの叫びが響き渡つたけど、触れた皇帝の胸から信じられないぐらいの魔法の力が溢れ出してきて、あたしの中にどんどん吸収されていく

「な…何なの！？」

「……ぐっ」

『契約』『共有』『魔式解放』や聞き取れない数多くの言葉があ

たしの頭に響く。まるで頭をかき回された状態で、思わず立っていられなくなつてその場に膝をついた。

ようやくその状態から解放され、慌てて皇帝を見ると彼も同じ状況だったのか倒れてはいないもののこめかみを抑え苦痛に満ちた表情をしている

「…こ、皇帝？」

「大丈夫だ」

そして皇帝の胸を見て驚いた。そこにはまるで紋章のような、魔法式のような、摩訶不思議な模様が広がっている。

そんな物はさつきまで無かった。ガン見したのだから断言出来る。

「そ…それ…何？」

皇帝は愛おしそうに胸にあるそれに触れた。

「黒の紋章…やつと戻つた」

「やつと…戻つた？」

…この図はどうみても『皇帝再び呪われる』でしょう？  
呪われてるのが嬉しいなんて…どんなマゾ男なんですか？

若干引いた視線を皇帝に向けていると、それに気付いたのか皇帝があたしに向かつて膝をついた、そしてあたしの前で………頭を下げた

「アサミズ、礼を言う」

「……いえ、役に立ってよかったです」

「…アサミズが黒の加護を受ける者だと証明された。これより黒に関して全ての記憶を渡そう」

皇帝はそう言うと、あたしの額に手を翳す。

そして『魔式 型発動』視覚領域 記憶解放』』と聞き覚えのあるフレーズの魔式を唱える

「黒とは白以外と決して混じる事なく、全ての力をその身に取り込む事が出来る。そしてその力で、この世を支えている黒の支柱。黒の加護とはその支柱の力を扱える者の事を指す。そして黒の紋章は加護を受ける者の守人だ。さあ…支柱の記憶を辿ってくるんだ」

皇帝がそう言うのがどこか遠くの方で聞こえた。

### 39話 記憶のカケラ

優しく頬を撫でる風に目を開けると大きな樹の前に立っていて、足下は少し泥濘み膝までの草が生い茂っている。それは見渡す限り続いて…さっきまで城の皇帝の部屋にいた筈のあたしは溜息をついた

…またわけのわからないまま変なところにいるんですけど？

皇帝が黒の加護の説明を何か言っていた気がするけど…後半良く覚えてない。

「どこなんですかね〜ここは？」

何だろう？

こういう事も2度目となると意外と耐性がつくらしい。

皇帝が言っていた魔式が関係してるのかも知れないけど、確かめようにも本人居ないし…

ここの人に確かめようにも周りに人っ子一人居ないし…

あたしは目を閉じてもう一度溜息をつく。身体を反転させ背中を目の前の大樹に凭れかけさせ、皇帝が言っていた魔式を何となく口ずさむ

「魔式 型発動『視覚領域 記憶解放』」

『…アサミズヒヨリ。黒と白の加護を纏いし者』

「はっはいいい？」



突然聞こえた声に、あたしは大樹から身を起こし辺りを確認するけれど、目視出来る範囲に人影は見当たらない。

すると背中の大樹から大きな魔力が近づき、あたしの身体をすり抜けた。すり抜けた大きな魔力は光り輝くと一度小さく集約され、再び大きくなった時にはあたしがよく知る形になっていた

「な、夏生<sup>なつお</sup>？」

その姿はどうみてもあたしが愛していた『夏生<sup>なつお</sup>』だった。

「どうして？ だって、な…夏生はあたしが就職する前に…死んじやったのに…」

だけどどう見てもそれは夏生の姿をしていて、あたしをまっすぐ見つめてくる。

あたしは自分の見ているものが信じられず、消えてしまうのが怖くて手も伸ばせない

『…アサミズヒヨリ？』

更に驚愕な事が起こった。

「な…夏生が喋ったっ!？」

『…これは喋らないの？』

「だ、だって…」

…だって犬だし。

夏だったから、夏生と名付けたあたしが一番最初に拾った犬。

その犬が喋ってる姿は18年一緒にいて、もちろん一度も見た事

がなかった。

『これは夏生って言うんだ？君の中で一番心を許せるものの姿を形どっただけだ…』

ええ…そりゃ夏生相手には色々人には言えないような事も言いましたよ？

言いましたけど…一番心を許せるものが犬って…どうなんでしょうね？

しかもすでに当犬は他界して、更にあたしは別世界に居るのに未だ現役で心を許せるトップってどう言う事なんでしょう…

『遠い目をしてるとこ悪いけど、君がここに居られる時間には制限があるから戻ってきて』

「制限？」

『そう、ここに居られるのは黒の紋章を持つ者、つまり君をここへ飛ばした皇帝の魔力が保つ間だけ、つまりそんなに長くないから簡潔にちやちやっとしてしまおうね』

…何だかノリが異様に軽く感じるのはあたしだけ？

しかも…見た目犬がそう言ってるのだから…どうなのよ？

とりあえずあたしは「はい…」と返事するしかなかった

『ではまずこの世界の仕組みから…君が居た世界をAとして今君が居る世界をBとする』

「ちよつと待ったあー！」

すんごいさり気なくあたしが居た世界とか言いましたけど…それ

つてももちろん日本の事ですよね？

「あ…あの、貴方誰なんですか？」

確実に夏生ではないですよね？

『…そこから？』

若干嫌な顔しましたよね？犬の顔なんでわからないと思ったら大間違いですよ？

あたしと夏生の付き合いですから嫌な顔ぐらいすぐわかります！

『僕は黒の支柱って呼ばれている。名前は夏生でいいよ』

黒の支柱…そういえばそんな事を遠くの方で皇帝が言っていましたね。

夏生でいいって…適当だな…おい。

『話を戻すよ。AとBの世界を君は別の異世界だと考えてるようだけど…実際はちよつと違う。君たちが地球と呼んでいるAの中にアナストリアも在るし、君が今居るBのアナストリアという中に地球も在る』

…いや、意味がよくわかんないんですけど？

しかも…犬が難しい言葉喋ってるから余計に意味わかんなくなる。

現実には私の世界にはガルフェルドなんて国は無かったし…無かったはず？

『並行世界って言えば納得する？Aは白の支柱が支えてる世界。』

Bは僕、黒の支柱が支えてる世界。Aは世界を白の加護で形成しているし、Bは黒の加護で形成している」

「ま…魔法なんて元の世界ではありませんでしたけど？」

「簡単に説明すると、君の世界は『縦×横×高さ』の3次元が基礎になつてる。僕の世界は『物質×生命×力』が3源力が基礎になつてるんだ」

「物質だつて3次元の理に入ってますよ。何なんですかその基礎は…」

「だから…同じ物質でも、その3次元の法則にあてはめる事自体が白の加護なんだよ…」

……自分の考えの根底が覆されて、オーバーヒートです

はい、敢えてさつきはスルーしましたけど…

何かね、黒の他にも増えてるんですよ…自分のオプションが…

白の加護って…何？

### 39話 記憶のカケラ（後書き）

今回はかなり説明モードです

後2回ぐらいはこんな感じっぽいです

ただヒヨリの謎は解けると思います

## 40話 使えないハイスペック

犬の夏生からの説明を受け、あたしの元の世界と今居る世界が同時に存在していて、つまり本の中とか、まるつきりファンタジーなぶつとんだ世界に来た事で無い事はわかったけど…

『それにしてもさあ、本来ならこの二つの世界を行き来する事は不可能な筈なんだよね。どうして君はこっちに来ちゃったのかな？』

「…はい？」

…それをあたしに聞きますか？

『黒と白の加護を手にした超ハイスペックな人間なんてどの世界探しても君しかいないし』

犬に前脚で指されながらウィンクされても意味不明だし…しかもあたし珍獣決定？

『君自身で壁を越えたとしか思えないんだよね』

誰がわざと異世界に行きたいなんて願うかつ！！

あたしはちよつと怒り口調で返事した。

「じゃあ…あたしのそのハイスペックな能力使って元の世界に戻れますかね？」

『あ、それは現状、無理な感じ』

はい即答。

だったらそんなハイスペックいらね〜!!!

『だから君がどうやってこの世界に来たか聞いてるんだよ。君が世界渡った原因が解らない事には解決も出来ない。つまり黒の支柱の僕だけの域を越えてる』

「……使えない」

『うわっ！さっき助けてあげたのに！』

「…?」

夏生が怒りながらさっきあたしがフロなんとかに風魔法で殺されかけた所を助けた説明をしてくれる。その説明を自棄半分で聞きながら、夏生の尻尾を見て

犬が怒る時って尻尾がぴんって立つんだよね〜見た目を借りてるだけでもそれは一緒なのか…

なんて関係の無い事を考えてしまう事自体すでに自棄半分どころか完全なる現実逃避…

「でも黒の支柱の世界でどうして黒の加護を使える人間がいないんですか？」

『あのね…大きい力というのは受入れるのにそれなりの器が必要なの。僕と同じかそれ以上のね』

「…居ないんですか？そういう人」

『居たら黒の加護を持つ人間がもつといるんじゃない？』

…つまり居ないって事ね

『ちなみに白の加護と同時に黒の加護も、とかって僕も無理だか

ら』

「……………」

…その先は考えたくない、考えないぞぉ〜!!

『とにかく君って前例も0だし、全てにおいて未知数なわけ』

どんだけ規格外なのさ…

『で、こつからは僕の推測で、君はこちらの世界の魔力も半端ないほど持つてるけど、今はこの世界の魔法や黒の加護をきちんと使えてない。だからもしかして黒の加護をきちんと扱える様になったら、白の加護と連動させて向こうの世界に帰れるかもしれない』

「つまり『魔式、3型発動「制圧領域 オールセーフテイ」』を扱えるようになって事？」

『…黒の加護がそれだけしか無いみたいない方止めてくれる？』

魔式を単調なリズムで言うのと夏生が片方の口角だけ上げて返事する。そんな引きつりながら返事するのを見て、ほんとの夏生には無かった人間のような感情表現が面白い。

おっと大事な先生になる人を怒らせるのは得策では無いし…

あたしはへへっと笑って誤摩化す

『後は君がこの世界に来た原因を解明する事かな』

…それが解つたら苦労しないし。何か結局この夏生の話聞いてもあたしがこの世界に居る理由とかわかんないし、珍獣扱いだし…



『とにかく黒の紋章の元で、魔法の基礎を習っておいで。後の話はそれからだ』

「ええ〜!!!何かぱっと教えてくれる魔法とかないの!?!」

『あのね…この世界の人間は皆、生まれついた加護を持っていてもそれを扱える様にきちんと勉強と訓練を重ねる。君も才能があってもちゃんと手順を踏むしかない』

やっぱり…魔術学院に通わなきゃならないんですね…

がつくり落ち込んでいる所にさらに夏生が爆弾を投下する

『ところでさ、ありえないぐらい随分サバを読んだり嘘ついたみたいだけど…』

「うっ……」

何故そんな痛いところをつくのだろうこの犬は。

…今更絡まった誤解をどうやってほぐせと言うんだ

『別に魔術学院に年齢制限ないんだし、色々早めに訂正しておいた方がいいと思うよ?』

「…そうなの?」

『黒の加護を持つ者は利用価値が高いし、さっきみたいに命狙われたりするかもしれないからね』

「だ、大丈夫。そこんこは、ばれないように隠すから」

カラコン入れて、髪の色変えればなんとかなるでしょう!

カラコン作らないと駄目だけど…それは白の加護でなんとかかなりそうな気がするし…

『まあ…それならいいけどさ。さて…そろそろ黒の紋章使いの魔

力が切れる。それじゃあ、勉強頑張つて！」

「…よくわかんなかったけど…またね夏生」

そついつと目の前の視界がぐらりと揺れて、無数の光に襲われ目を閉じる。

そして起きたら皇帝が目の前にいた。

## 41話 カミングアウトは寝室で

覗き込んでる皇帝の後ろに見えるのは天蓋、そして背中の中から  
い感触。

やばいわ…このベッド。

寝心地サイコーだわ…出来ればもう一度今度は意識飛ばすとかじ  
やなくて、ちゃんとした眠りに入ってその心地を堪能したい。

上掛の下に潜り込もうとするあたしを皇帝の手が阻止する。

必死に上掛を死守するあたしとそれを剥ぎ取るうとする皇帝。

…言葉だけだとエロさ満天だけど、実際には朝の母親と子供以外  
の何でもない図

「こ、らっ！起きろ！！」

「いゝやゝだあゝ」

あたしは決めたっ！何が何でも、もう一度寝る！

ここ最近受験勉強で睡眠時間減らしてたし、今睡眠を貪らなくて  
いつ貪る！！

皇帝の質問とか後で結構。

…黒の支柱、つまり夏生と話して結局わかった事って、元の世界  
に戻るには自分が頑張らって事で、それより変に自分がハイスペッ  
クな珍獣だってわかって軽いショックを受けただけだった気がする

「あたしは傷心中です、デリケートなんです。そっとしておいて

下さい」

皇帝の手が突然止まった……もちろんお互い全力で引き合ってた力を突然一方だけが抜いた場合に起こる事はもう一方の力だけが残る事で…

あたしは見事にベッド上部に頭を強打した。

「つぐう!？」

「す、すまないっ!！」

いや…もうそんな言葉に反応出来る痛みじゃないです。目から星どころか大きな火花が打ち上がってまた何処かに行きかけましたから、とりあえず後頭部を抑えてのたうち回るのは許して下さい

「のおおおお〜っ!！」

「す、すまなかった…ア、アサミズ大丈夫か? そうだっ! シーだ! 医者を呼ぼう!！」

オロオロする皇帝に構ってられない痛みだったんですけど…医者という言葉に思わずベッドから離れようとする皇帝の腕を思いつきり掴んだ。そしてドスの聞いた声を発しながら皇帝を睨みつけた

「げっ!」でず

朝の親子の図から頭部強打とか恥ずかしすぎる……しかもここ、よくよく考えたら皇帝のベッドだし…

頭の花火ついでに先日ここに乗り込んで来たエリルさんの鬼の形相も襲って来た。皇帝のベッドに寝てる姿とか見られたら確実に殺

られる気がする。それでなくても命の危険があるのにこれ以上命の危険を増やしてどうするのか

グッバイ最高ベッド。最高の寝心地をありがとう。

「お、お”きま”ずがら”…」

頭を抑えて起き上がろうとするあたしを今度は皇帝が抑えつける

「悪かった…寝ている。このままでも話はある」

いやいや…眠れない快適（皇帝の）ベッドに固定とか一番最悪なパターンなんですけどっ！！それなら断然、隣の部屋のソファが希望なんでっ！！

「いいです！！起きますっ！！」

「しかし…」

「起きたいんですっ！！起きるの希望です！」

とりあえず片手を上げてもうアピールしてみる。

「…大丈夫なのか？」

痛む後頭部より、事件が起きる方が断然厄介なのであたしはにっこり皇帝に笑いかける

「寝ぼけてたみたいですから！頭打って目が覚めました」

「そうか…」

そう言って皇帝が確認の為にあたしの後頭部を触る。

「っんにゃ~~~~~!!!!!!」

見事に100連発ぐらいのスターマインが打ち上がりました

\*\*\*

さつき紹介され別れた筈のシーさんがベッドの上で三角座りしたあたしの後頭部に柔らかい綿のようなもので薬を塗ってくれる。あの叫びの後、あたしは悶絶して皇帝が慌ててシーさんを呼び出し、そして今に至ります。

「…すみません。お手数おかけしまして」

「いえいえ……ぷふっ」

どうみても皇帝の寝室でベッドの上で後頭部をトントンされる図は笑いを誘う。

「……シー、笑うな」

皇帝に言われて必死で堪えるシーさんの手元が小刻みに震えてる。

「駄目っ！もう限界っ！！あはっはっはっはっ！！！！」

盛大に笑い出したシーさんに、あたしは他人事だったらあたしも笑うのに…と引きつった笑顔を返すしか無く…

「あははっ！！ごめっアサミズちゃん！でも皇帝の寝室で後頭部打撲ってありえないし！！あははっ！！しかも結構強打！」

「はは…」

はい、色気なんてあったもんじゃないです。

「シー…いい加減にしろ」

「はいはい。あく楽しかった。単なる打撲で頭の中に損傷は無さそうだけど、今日と明日に吐き気なんか感じたらすぐにあたしのところに来てね」

「…了解です」

この人達の見解は12歳とは言え、本来25歳の大人が寝室で打撲ってどうよ？泣きたくなってくるわっ！！

「シー、手当てが済んだら出てけ」

「ったく、こんな幼子になにしたのよ？皇帝様は？」

「なっ！？ち、違う！！断じて違うっ！！」

…幼子？それってあたしの事？

「まさかリユージユがそんなロリ好きだったなんて…ショックだわ…」

目の前の二人はまだロリだの子供だの言い争ってるんだけど…もしかしてこれってサバを訂正する絶好のチャンス？

そのまま突っ走る気でいたけど…黒の支柱にも訂正した方がって言われたし、メルフォスさん達にも信頼出来る人には言った方がいいって言われたしなあ…

それに皇帝の黒の紋章って黒の加護者を守る人だって言ってたし、バレても怒られないよね？最悪怒られても今ならハイスペック持ちだし、白黒の加護者だし…罰せられたとしてもなんとかなると思うし……言っちゃうか。

「だから！！違うと言ってるだろうっ！！こんなお子ちゃまにそんな事するか！！お前の頭の中の方がおかしいだろうがっ！！」

皇帝の台詞にあたしの片眉がくいつと上がる

こんなお子ちゃま…？

あゝ何かその台詞、気持ちいい程古傷を抉るんですけど。

昔言われた事あるんだよねえ〜元カレに

『お前見た目そこそ可愛いけどさ、一緒に歩いてるとお子ちゃま連れてるみたいなんだわ。悪いこんなつもりじゃなかったんだけど別れて』

…ええ、一方的に告ってきた相手と付合ったら、こっちがさんざんな振られ方して傷つきましたよ。どうせあたしは見た目お子ちゃまですからね。

でも中身は立派な大人なんで、しっかり仕返ししてやりましたけど？何か？

「あゝ」

あたしの声なんて聞こえてないのか二人の争いはヒートアップし



ていく。

どっかで見た光景だっと思ってたらこれって宰相と皇帝でもやってなかった？

ここの上層部はこういう人を無視して言い争うのが好きなのか？

あたしはあの時と同じ様に大きく息を吸い込むと二人の声をかき消すぐらいに大声で叫んだ

「お子ちゃま談義に花を咲かせてるとこすみませんけどっ！！あたしほんとは25歳なんで、その話題関係ないんですけどっ！！」

…ああ…叫んだら頭に響く。

ぴたつと止まった二人がぎぎぎつと音が出そうな感じでこっちを振り向く。先に立ちなおったのは皇帝みたいで

「こ…じゅう…じゅ？」

「はい、見た目こんなですけど成人してるんで」

「だが…あの時は、12歳だと…」

「そう言ったのは皇帝であたしじゃないです。あの場で訂正出来なかったあたしも悪いんですけど…まあ今訂正出来て良かったです」

…それにしても二人ともすごい驚きようなんですけど。

12歳って言った時よりも確実に驚かれてるよね。

そっんなにあたし25歳に見えないですかね？

ああ、何か今日は色々ハートブレイクだわ…

## 42話 黒の凸凹

年齢のカミングアウトという暴挙に出たあたしに待っていたのは、罪に問われるなどでは無く、どうやったらかこんな体型を保てるの？と医学的に疑問を持った医師の身体測定という名の超セクハラ、「生命の神秘だわ…」と聞こえた呟きには思わず右手が出そうになっただけ、キラキラした瞳でこちら見つめる姿に心が萎えた。

「残念っ！！タイムリミットだわ」

心底残念そうに言った医師に対し、あたしはガッツポーズを捧げよう。

あたし頑張ったよ！よく耐えた！よくやった自分！！

「まだまだ色々知りたいけど！でも…嫌われたくないし我慢するわっ！」

ぐえ…これ以上つて何する気？精神的疲労が半端ないんですけど…嫌われたくないというか…もうすでにあたしの中で要注意人物決定ですけどね。

「それじゃリ्यूージュ。あたしこれから手術だから、これ以上アサミズちゃんに傷つくだらないですよ！ほんつとに怒るからね！！」

「するかっ！！！！」

「アサミズちゃん！！」またね！！！！」

医師は皇帝の言葉を受けながらも微笑んで、あたしに手を振って去っていった。『またね』部分の強調は無かった事にして貰いたい…心からそう願います。



あ、あたし殺されかけまくってんじゃない……これ信用とか以前の  
問題じゃね？

あたしが回想でこれは無理でしょ！とか思っていると、皇帝がぼそ  
ぼそ喋り出す

「…黒の紋章使いは、全身全霊をかけて黒の加護者を守る使命を  
持っている。私は君を守りたいんだ」

「…待つて下さい。一国の王様が一人を守るとか駄目でしょ。ザ  
ッ博愛精神ですよ？別に精神的にはメルフォスさん一家に守られて  
ますし、実力行使的にもこちらの魔法覚えたらなんとかなりそうで  
すし、守ってもらわ…」

途端に捨てられた仔犬の目をする皇帝に、続く言葉が詰まってし  
まう

皇帝はあたしと目が合うとその目を伏せ、紋章がある部分の服を  
ぎゅっと掴んだ。

「私は…生まれた時からこの紋章と共にあった。それは皇帝にな  
る前からずっとだ…ずっと今までに現れた事の無い黒の加護者を夢  
に見て来て…やっと目の前に現れてくれたのに皇帝だから…」

…いや、それ完璧呪いだし、『黒呪』ってあながち嘘じゃないわ。

『黒の紋章使いだから黒の加護者を守らなくちゃいけない』

これって小さい子供に『使命』という刷り込み教育するようなも  
んでしょう？例えば黒の紋章使いである事によって何らかのオプショ  
ンを手に入れていたとしても…この考えは受入れられない。

使命とか運命とか：自分自身以外の手で左右される人生なんてあっていい筈がないっ！

そう！いい筈がない！あたしだって勝手にこの世界に飛ばされていい筈がないっ！！

…こほん。話がずれたけど、つまりこの皇帝はその刷り込み教育によって黒の加護者が出現すると自動的にその保護者にならざるをえない立場にいるってわけよね？

「アサミズ」

「…でもそれってあたしじゃなくてもいいんですよね？」

「アサミズ？」

だって黒の加護者であれば誰でもいいのであって、あたしである必要は無い。

「……そんな呪い…あたしが解いてあげます」

そんなものに捕われてたら、この人の一生勝手にあたしに捧げられてしまうし、そんなのごめん被りたい。自分だけでも精一杯なのに人の一生背負わされるなんて無理に決まってる。

「呪いなんかじゃないと言ってるだろう」

「……」

いえ、正しくそれは呪いです『黒呪』です。しかも双方にとってのね。

紋章の件は黒の支柱に言えば何とかかなるような気がする、でも黒の支柱に会うにはあたしがこの世界の魔法を覚えるという課題をク

リアしなくちゃいけない。

「よしっ！とりあえず目先の目標見つかった。あたし頑張っ  
て魔法覚えます」

「…ならば私はアサミズの信頼を得られるように努力しよう」

「…そして思惑の違う、黒の凸凹コンビ？は出来上がった

## 42話 黒の凸凹（後書き）

たくさんの方に読んで頂いて嬉しいです。

t w i t t e r のなるう読んだの感想も拝見しています。

心から感謝を込めて

ありがとうございます。

活動報告を使い出しました

とりあえず私のイメージ画を載せていく予定です。

自分の中のイメージが壊れる！という方は無視して下さい

というわけで今回は閑話ではなくイメージ画で…



43話 天性のスターに凡人の気持ちは届かない(前書き)

評価ポイントが10,000ptを越えました

読者の皆様がいて下さったの作品だと思っています  
ありがとうございます

### 43話 天性のスターに凡人の気持ちは届かない

全身全霊であたしを保護したい皇帝と、それを断固拒否するあたし。もちろん話し合いは平行線に決まってる…

「後見人にはメルフォス一家がなってくれるって言うてるからそれでいいでしょうがっ!!」

え？敬語はどこいったんだって？

そんなものはこの台詞を10回ぐらい言っただとこで消えて無くなりましたよ。

「だから何故だ？メルフォスの立場は今すでに帝国騎士団長だぞ。それならば皇帝の私と立場はそう違わない。ならば私でもいいではないかっ!!」

皇帝の言い分に思わず頭を抱えなくなる。さっきからこの会話を繰り返してるけど、一向に相手が折れない。

あのさ…この国の一番偉い人と2番か3番じゃ全然違うし、皇帝の後見なんていう、どこぞの葵の印籠みたいな物を持って魔術学院入学してみなさいよ…どうなるかなんて一目瞭然すぎるでしょ？

心の底から平凡に暮らしたいあたしにとって、それは拷問に近い状況を生み出すって事を何故この人は理解してくれないんだろ…あ、あれか？産まれた時から人の視線のど真ん中に居た人にはこの話は理解し難い事なんだろうか？厄介だ…厄介すぎる。

あたし的にメルフォスさんの後見であれば、多少のやつかみは受けるかもしれないけど全然まっして感じたと思う。それにミレーヌも一緒に入学予定だし、実子と後見だったらどうみても注目される

のは実子であって、上手くやれば後見なんておまけみたいな扱いかされない筈。

…全然ミレーヌを人身御供にしようなんて考えてないですよ？ただ彼女よりはちよつと長い年生きてるっただけです。何かあつたら義姉としてちゃんと守りますし…もちろん影からですけどね…というわけで

「私の都合もメルフォスさんの後見の方がいいんです」

「だが…アサミズは手配書で私の探し人だと少なくとも帝都ではかなり知られている。先ほどのように、いつどんな危険が舞い込むかわからない。私の後見であれば少なくとも多少は牽制になる筈だ」

誰のせいじゃ〜っ！〜っ！！と叫びたいのを飲み込んで、につこり微笑んであたしの対策を説明する。

「もちろん面が割れてるのは百も承知してるんで、それなりの対策は考えてます。っていうか髪と瞳と化粧すれば、大抵の人には気付かれないでしょうし」

これでも『25歳』ある程度化粧での化け方だっけ覚えてるし、髪ももつと念入りにカラコンだっけ製作しちゃって変装モード完璧にするしさ。そんなあたしの変装を見破る人なんて皆無だと思っわけよ

あ…眼鏡っ子とかもいけるか？三つ編みお下げで黒の法衣なんてきた日にゃ…どこぞのコスプレ大会。

自分の考えが暴走していると、皇帝がむくれた感じの声で思考を遮断してくれた

「私は髪の違いでも気付いたぞ……」

「そんなのは黒の加護者ぞっこんラブなだけです」

はい、ずばつと切り捨てます。だって刷り込み教育は危険ですからねっ！

ずう〜んと落ち込む皇帝の傷なんて舐めてやりませんから、これも黒の加護者ぞっこんラブからの脱却、第一歩です。

……ってぞっこんラブっていつの言葉だよ。完全なる死語を生き返らせてしまった……。

「それにあたしの完璧な変装を見破るような輩は皇帝の後見なんて痛くも痒くも無い人達でしょうから、皇帝の後見におまけでついてくる余計な輩の方が断然迷惑です」

「……………」

追い討ちをかけた第二步目はかなり効いてるようで、潤んだ目が今にも泣きそうな感じ。イケメンは何でも絵になりますね〜って傍から見てる分にはいいんですけど、当事者のあたしにとってはいい大人がそんな事をして……としか感じず、せめて捨て犬程度の目で勘弁して下さいと切に願います。あたしの「いい大人が……」視線を感じ取ったのか、少し皇帝は顔を引き締めるとあたしに問いかけてくる

「……ならば、アサミズは私に何をして欲しい？」

「『国の為』にも関わらないで頂けるのが一番かと……」

残酷な事を言ってるのかもしれないけど、あたしの側にいるこの人は刷り込み教育が発揮されてしまうのだから、離れているのがこの国の為。

…それがあたしの為だなんて、そんなおこがましい事微塵も感じませんよ！

「…無理だ。それならば…アサミズを城に閉じ込めてしまっ  
「はい？」

…なぜいきなり監禁発言？

しかもどうして危ない発言をした人が顔を背けて苦しそうな顔をするのさ…

「国の為と言うならば…アサミズを城に閉じ込め、私の目に届くところに置いておかなくては完全には国政に集中出来ない」

待て待て待て〜！！！！怖いっ！！その発言盲目過ぎて怖い！！

あたしが無言で皇帝の危険発言にどう対処していいのか頭がフル回転している間も皇帝は言葉を続ける

「…そんな事は出来ない事もわかってる。だが、これでもかなり譲歩してるんだ…。全く関わるななど…言わないでくれ」

ですよね〜我慢はよくない！

ストレスは溜め込むと大爆発起こしますからねっ！この場合どうみても大爆発の被害はあたしだけにくるようですし、そんな大爆発対応出来る自信ないですからっ！！

「じゃ、じゃあ…こうしましょっ…！！」

とりあえず何も思いついてないけど…思いついたフリをした。

…いや、だって皇帝の顔見ると今にも大爆発起こしそうなんですもん。

43話 天性のスターに凡人の気持ちは届かない（後書き）

どんどん皇帝がヘタレになっていくのを止められません。

…ヘタレなのは日和の前だけなのですが、日和視点だとこつなつてしまつのでしょつね…

#### 44話 駆け引きに爆弾は重要です

さて…今とても困った状況にいます。期待を込めた目で見つめてくる皇帝の視線に焼き殺されそうです。その場しのぎの言葉って駄目ですね…」「ごうじましよう」「の』『ご』の字も思い浮かびません…」

「ああのお…」

どうする？どうやってこの難局を乗り越える？

…とにかく接点はひたすら少なく、それでもこの黒の加護者ぞっこんラブを納得させる方法は…」

「あっ！」

そうだった！あれにしようっ！！

ただ下手に話すと全く受け入れて貰えない危険性があるし…：あたしは思いついた事をどうやって皇帝に伝えるか言葉をゆっくり選ぶ

「あの…皇帝」

「何だ？私に何をして欲しい？」

どうやって相手を納得させるかはここからすでに戦いは始まっている。

頑張れあたしの営業魂っ！！

「出会いが会いだったので、今のままでは…いくら皇帝が側にいてもあたしが信頼出来るようになるとは思えないんです」

「……それで？」

「私の故郷には毎月手紙を書く事を条件に学校へ行く事を支援し



て頂くというシステムがあるんです。だからそれにちなんで私毎月皇帝にお手紙書きますので、ひっそりこっそり陰から支援して頂くというのはいかがなものかと…これならば私も故郷であった事なので受け入れやすいですし…貴方の事もわかるのではないのでしょうか？」

…ええ、これはもちろんあの有名な童話ですよ。勝手にシステム化したのはご愛嬌です。これならば皇帝との接点は最低限、支援というのもこちらに不足がなければ受け取らなくて済む話

「…陰から？」

「はいっ！陰からでお願いします！皇帝が表立って身内でもない一個人に肩入れするのはやはり色んな方面から見てもどうかと思いますので…」

沈黙の時間…皇帝は顎に手をあてて何かを考えてる。あたしは心の中で両手を組んで祈りを捧げた…無宗教だけど、この世界に神様がいるのならあたしの願いを聞き入れて！！

「そのシステムは…アサミズに会うことは出来ないのか？」

「え？…あの…その…」

一切会えないとか返事したら、全部却下されそうだし…ここは秘儀『営業駆け引き』

「一切会えないわけでは無いです。ただ本来支援されてる人は支援者の顔は知らないシステムですから、他の人にはばれてはいけないシステムなので、会う機会があっても見知らぬ人のように接すると思います」

「見知らぬ人…」

ああ…やばい…皇帝の気持ちか否定に向ってるのが手に取るようにわかる。

「で、でも！あたしと皇帝は見知らぬ人じゃないですし、秘密裏に会うのなんかどうでしょう！ほらっ！紋章使いと加護者の二人だけの秘密とかいいじゃないですかっ！」

「紋章使いと加護者の秘密…」

よかった…かなり肯定に気持ちに戻ってきたぞ…最後のもう一押し！

だけどその前に確認しなくちゃいけない事がある

「ところで全然別の話なんですけど、魔術学校って入学資格ってんな感じなんですか」

「魔術学校のか？…確か貴族は魔力を持つものであれば簡単な実技テストだけで優先的に入学出来る。そして枠は少ないが平民からも筆記試験と実技で入学することが出来る筈だ」

「年齢制限は？」

「特には設けていない。魔力は血の系統によるものが多いから必然的に貴族に集中している。故に平民で魔力の才能を持つものが希少だ。貴族は10歳前後で入学するのが普通だが、平民枠は子供から大人まで幅広い」

よしよし。あたしの期待通り。

夏生から年齢制限が無いって聞いて、それなら実力社会なんじゃないのか？ってちょっと思ったのよね…

「平民が試験を受ける時って後見っているんですか？」

「いや、さつきも言ったとおり平民の中で魔力を持つてる事が稀

だからな、平民クラスは実力世界だ」

「平民クラス？」

「ああ。貴族と平民では魔術学院の中でもクラスが分かれる」

なるほど…なるほど。

「あのおくもしメルフォスさんの後見で入学するとなると、貴族扱いなんですかね？」

「もちろんだ。メルフォスはグライバル侯爵家の者だからな」

…おお！ある程度予想はしてたけどメルフォスさんはやっぱり貴族様だったんだ。しかも確か侯爵って上位の家柄じゃなかったっけ？という事はミレー又とは貴族クラスか…うん。これはメルフォスさんの後见人程度でも注目される事になっちゃいそうだ。ミレー又と別れるのは寂しいけど仕方ない

え？何でかって？そりゃもちろん

「あたしメルフォスさんの後見もお断りして、平民で一般受験しますから」

ま、その為に試験勉強して来たんだし…ミレー又の試験勉強は全く無意味だったけど…

「メルフォスさんが貴族だって事を知らなかったので身元引受人をお願いしましたけど、皇帝の後見もお断りした以上、彼の後見も受けないってという方が平等ですよな」

「ちよっ、ちよっと待て！アサミズ！！」

「あたし頑張りますから、これであたしの話受け入れて貰えますよね？」

とにかくあたしは平穩な日々を過ごしたい。それはテリサン村でも魔術学院でも一緒。

で…最後に爆弾を投下します

「受け入れてもらえないと、あたし学校には行かないで修行の旅に出ますから。お手紙どころか居場所さえご連絡出来ないかもしれないかもしれません」

「っ!?!」

にっこり笑って皇帝を見ると、彼の背後に白旗が見えました。

とりあえず一勝。『脱・黒の加護者ぞっこんラブ』も三歩ぐらい進んだ気がします

45話 『今更』な事は危険分子を含んできます(前書き)

逆ユーザーお気に入りが入りが100件になりました。

アクセス数も200万PVと40万ユニークとなりました

心から感謝いたします

45話 『今更』な事は危険分子を含んできます

してやったりでにこやかに笑うあたしと引きつった顔の皇帝。何か喋ろうとしては言葉を飲み込んでる姿は哀れかもしれない。

でもあたしも引き下がるつもりも無い。何と言っても未来がかかってますからっ！！

「…わかった。そのシステムを受入れよう」

よしっ！！あたしは心の中でガッツポーズを決めた。

これが営業先なら営業成績上がるのになあ…なんてちょっと郷愁にかられて、どんな郷愁だよっ！！って自分で突っ込んでしまう悲しさ…。

「ありがとうございます！」

自分が喜ぶ事をされたらきちんと相手にその気持ちを伝える！これ重要！

言葉にしないと伝わらない事って多いし、どんなに身近な人でも大事だとあたしは思ってる！お礼と一緒にしたのは綺麗なお辞儀。まあこれは営業の必須アイテム。会釈15度、敬礼30度、最敬礼は45度！こういう時自分にはしっかりと社会人が身に付けてるって思ふのよね。

今はお礼だから敬礼30度！

言葉と一緒に下げた頭の向こうではっと思を呑む音が聞こえた

「皇帝？」

何だろう？疑問に思っ て皇帝を見ると少し驚いた顔

「こつこつ姿を見ると…やはりアサミズは成人してるのだなと感じさせられる」

ん？褒めてるようで何気に失礼？

思わず口元を引きつらせながら返事してしまう

「こんなの貴族社会だったら、礼儀で当たり前なんじゃないんですか？」

「ああ…女性は少し形は違うがな。だが礼儀で習った事とは言い、子供では形ばかりのものがほとんどだ。作法の仕草に気持ちを載せる事が出来るのはやはりある程度の年齢を重ねていなければ出来ないものさ」

「…皇帝も大変ですね」

…なるほどね。皇帝ともなればそれだけたくさんの人に傳かれるだろうし、礼儀一つで相手を判断する事もあるんだろうね。

うん。初めて目の前の人が皇帝なんだって感じた。

「アサミズの礼は…とても暖かいな」

…礼に暖かいとかあるんですか？言ってる意味がわからないんですけど…

あたしの怪訝な様子を見て皇帝が苦笑する。

「…上辺だけの感謝など…冷たいものだ」  
「あ…なるほど」

確かにさっきのありがとうには、ちゃんと感謝をぎゅっぎゅっに詰め込めましたから！それにしても、あたし『皇帝』自体を呼び名みたいに使ってますけど…皇帝ってこの国で一番偉い人なんだよねえ……ってしみじみ思っちゃったけどさ

「はは…」

やな事に気付いてしまった。

あたし…そもそもの礼儀がなっちゃいないんですけど…？

「…アサミズ？」

よくよく考えたら『皇帝』って呼び捨てるの果てしなく失礼じゃない？

普通『陛下』だったり、『皇帝陛下』だったり…名前は…何だっけ？まあ…『様』だったり…やばい…汗出て来た

『皇帝陛下』と呼ぶべきか…『陛下』と呼ぶべきか…

「アサミズ…様子が変だぞ」

「…」

「皇帝…」と言いかけた口を慌てて両手で塞ぐ。

のお〜〜〜！！返事も出来ないっ！！

「アサミズ…どうした？」



あたしは口を抑えながら首を小刻みに左右に振る。いや…だって何て呼んでいいかわかんないんです。パニックです！取りあえずバクバクする心臓を抑えて、呼吸を整える  
落ち着けあたし…。何でこうなった？

思い出せあたし…最初はちゃんと呼んでた………多分…。  
そうだっ！ちゃんと『陛下』って呼んでたよ！あたしっ！

「へ、陛下…」

「………」

そう呼んだ途端に皇帝の眉が吊り上がった…。

ええっ！？どうして怒るの？

…ど、どもったのが悪かった？

「陛下………」

いやあ〜！！冷気が漂ってます！ミレー又と同じ現象なんですけどっ…！！

慌てて対処の魔法を発動させたけど、それも気に入らないのかど  
んどん部屋が氷ついてく…

え〜この防護魔法どれくらいまで保つんですかね？

いくら空気を固定して熱を遮断してるとは言え、限界があるのは  
確実で…早くこの状況を打破しなくてはならないのだけど、全くも  
って皇帝が怒る理由がわからない。

…つまりそう言う場合は…

「どうして怒ってるんですかぁ！！！」

と本人に聞くのが一番です。

「何故怒ってるか…と聞くのか？」

地を這うような声で返事されても、死を目前に控えた人間には効きませんよ…多分

おう吹雪まで出てきましたよっ！！すごいなっおいつ！イリユー  
ジョンじゃん！！

「だってわかんないですからっ！！！」

確実にこのままだと普通に死にますから…必死です  
部屋で遭難しそうですっ！！

「……………どうして……………」

「……………はいい？」

今や雪が暴雪と化したせいで、上手く皇帝の言葉が聞き取れない。

「皇帝っ！！！！死ぬからっ！！！！死んじゃうからっ！！！！」

必死に叫んだ言葉が皇帝に届いたのか、それまでの景色が嘘のよ

うに元の状態に戻った。最初はあまりの変化にあたしはただ茫然と  
してしまっただけ……だんだん浮かんできたのは怒りで……

あたしは拳を握ると皇帝の頭に思いっきり落とした

「つくー!!」

「バカかつ!!!殺す気かつ!!!守護者が守る人殺してどうすん  
のよっ!!!」

……あたし今思いつきり殴ったんですけど、何でこの人笑ってる  
んですかね？

DMですか？この人……

「……良かった」

ふわりと微笑む姿は美形だけに美しく……頭に置いた手が邪魔だけ  
ど、それには文句は言えない。それにしてもやっぱり発言も変なん  
ですけど……頭叩いておかしくなりました？

「……良かったって何がよ？」

「すまない。今まで……気軽に皇帝と呼ばれていたのに……突然……  
陛下」だなんて……壁を作られて……暴走した」

……はい？

つまり……あたしがただ『陛下』と呼んだから暴走した……と？

「ど……どっただけ危険分子なんですか……。他にも起爆スイッチあつ

たら前もって教えといて下さいよ」「

「…普段はこんな事はない。アサミズだけだ…」

「…はい?」

「アサミズに関してだけは…理性が保てない」

あたし自身が起爆スイッチかよっ!!

きつと…これも全て『黒呪』のせいに違いなく。

あたしは心の中で『絶対呪いを解く!』と念のように唱える

それにしても…さっきは勢いでまた『皇帝』と言ってしまったけど、そのまま呼び続けるのは礼儀に反すると自覚してしまった以上出来そうにない。

でも…変に『陛下』とかで呼ぶと、どんな起爆スイッチが潜んでるかわからないし…

……

「あの…皇帝と呼ぶのは失礼です…」

やばい…ちよつとでも敬語を使おうもんなら…起爆だ…。

「もつと親しく呼びたいな!…な、な、何て呼べばいい?」

おお…ほんとに嬉しそうだよ。仔犬みたい…ちよつと可愛い…。

絆されるなっ！待てあたしっ！！

この可愛さの両隣は起爆スイッチだからっ！危ないからっ！！

「出来るなら名前で呼んでほしい」

「名前？」

「ああ」

……名前。

ええ…名前お伺いしましたよね？お伺いした事は覚えてます…。  
やたら長い名前だったなあ…って記憶の底にありましたよ…。

「なまえ…」

ああ…期待を込めた仔犬の視線

必死に記憶を遡るあたしの頭に要注意人物の医者が出て来た

『じゃあね、リユージユ』

彼女が言った言葉が蘇る。

「リユー…ジユ？」

その言葉をあたしが言った途端、皇帝リユージユの顔が今までの  
笑顔など比べ物にならないぐらいの満開の花が咲いた。

この顔だけできつと何人も人が跪くに違いない。

び…美形って凄い。

「アサミズに…名前を呼ばれるのはこうも嬉しいものなのだな…」

きた〜っ!!!

お医者様！要注意人物だけありがとう！！

今日の教訓、『今更』な事はきちんと相手に確認しましょう。

45話 『今更』な事は危険分子を含んでます（後書き）

少し長いです。

ようやく日和に皇帝を名前で呼ばせる事に成功しました

活動報告でラフ画その2『皇帝』を載せました

## 46話 怪しい入学願書

皇帝、もといリユージュと無事和解？をして、メルフォスさんの無事も確認して帝都から村に戻って1週間後その通知は自宅に魔法便で届いた。

「あ…来た」

魔力の渦からでかい箱が出てくる。

やたらめつたら豪華な箱に入ったそれは、待ちわびていないよう  
で待ちわびたもの「帝国魔術学院 入学願書」と箱の上部に記載さ  
れている。必死にメルフォスさん一家も説得して、平民として願書を  
出す事に納得してもらってようやく手に入れたもの。実はミレーヌ  
にはまだ内緒だったりするけれど…

「…にしてもでかいな」

願書って…紙なんじゃないの？何でこんなでかいの？なんて考え  
たけど…このままにしてもしょうがないし、とりあえず開けてみ  
る事にした。ゆっくり開いた箱の中身を見て思わず一度閉じてしま  
った。

「……………」

あたしの目がおかしいの？だけどどう見ても箱の中に入ったの  
は…確認する為にもう一度箱を開いてみる。やっぱり箱の殆どを占  
めているのは真っ白な卵。きちんとスタンド見たいな物に支えられて  
るから転倒はしなさそうだけど…何故、願書に卵？



「え〜…つと?」

卵の横に申し訳なさそうに封筒が挟まれていて、多分この卵の説  
明もそれに書いてありそうなんだけど、取ろうとしたらどうやって  
も卵に手があたってしまふ。

「とりあえず…卵を避難させちゃおうか…」

資料の確認はその後でもいいわけで、卵も試験に関わる物なんだ  
ろうし…傷つければそれだけで試験に落ちてしまふ可能性もあるの  
だから。あたしは慎重に手を卵に伸ばしてそつとそれに触れた。卵  
に見えたその感触は想像していた物と全然違って、まるで柔らか  
いゴムのような感触だった。そして触れた途端、その部分から魔力  
が掃除機のように大量に吸収されていく

「うひゃあつ!!!」

慌てて手を離そうとしたけど全く離れず、まるで触れた部分が吸  
盤のようになってる。無理をすれば簡単に壊れそうなそれに為す術  
もなくただ魔力が流れ込んでいくのを見守るしかなかった…

「…ん〜どうする?」

このまま魔力吸い取られて死んじゃう?…なんて考えたりもした  
んだけど、悲しいかなあたしの魔力は無尽蔵にあるらしく…身体は  
全然平気。中腰という無力な体勢のまま、卵の方から離れてくれる  
のを待つしか無い。

そのまま5分経過。

「……どうしろっての？コレ…さすがに腰が辛い」

白い卵が何だかグレーに色付いてきたのは気のせい？

説明を記載されてるであろう願書を取ろうにも両手が吸着された状態ではそれも叶わず

ただ時間だけが10分・30分・1時間と過ぎていく。腰が悲鳴を上げ始めた頃、卵にはつきりとした変化が始め、ほのかな色合いだったグレーはいつの間にか銀の卵と化してる。

…魔力を使って鉱物を作る卵？

卵が鈍く光って硬度が増してきてる気がするし、これが実技試験と言われるとなるほどと思う。思っけどさ！せめて触れないように卵を覆うとかして送ろうよっ！と相手はいないけど文句を言いたくなる。

「…誰かあゝせめて椅子を下さ〜い」

あたしのわずかな願いは空を舞い、腰が限界を越え一步も動けない状況になった段階でようやく卵が手から離れた。時間にして3時間半。今や輝かしく硬い銀の卵となった物体が目の前に鎮座している。とりあえず箱から出して机に置いてみたけど意外と重さもあつた。

「……………」

もしかして実技試験で目の前で錬成しなきゃならない物だったら、あたしすでに失格？

「と、とにかく説明書…」

あたしは箱に残った封筒を開けると、とりあえず流し見で卵の説  
明が書かれた物を探した。

「「同封の魔魂について」…これかな？」

『魔魂』って、また物騒な名前だし…と心の中でビビりつつ、説  
明書を開く。そして書かれた内容に目が点になった。

『魔魂の取り扱い方』

魔魂は魔力を持った者の魔を吸い取りそれを聖獣化するものであ  
る。学院での授業に聖獣を役とする授業があります。聖獣化するに  
は膨大な魔力を必要とする為、魔魂への魔力の注入作業は日々行っ  
て下さい。柔らかい表皮が魔力によって硬化していく様子をレポー  
トにて提出。課題とします。一日の魔力注入量は魔魂自体が注入者  
の体調によって調整しますので魔力を吸いつくされる事はありません

注意）万が一にも聖獣化する事は無いと思われませんが、硬度が金  
属程度になると孵化が始まります。

主な聖獣化例 主に鳥型、猫型、鼠型が多い。魔力によって大型  
が生まれる場合もあるが、めったにない特異例である

「硬度が…金属？」

あたしは恐る恐る目の前にある卵を側にあつた金属棒で軽く叩い  
てみる。響く音は正しく『カーンカーン』という高い金属音。

「…まさかね？だって万が一にも無いって書いてあるし…」

…ただこういう時、頭に過るのは自分の『無駄』なハイスペック。

目の前の金属が揺れ始めたのは…誰も居ないけれど誰かが机を揺らしたのだと思いたい

## 46話 怪しい入学願書（後書き）

この話から第二章の扱いになります。

第二章は魔術学院編です

よろしくお願いします

#### 47話 　　こんなに出ましたけど…

揺れ動く物体を手で触れるわけにもいかず…とりあえず手近にあった願書が送られてきた箱を逆さにして被せてみた。…別に臭い物には蓋をしるではないけれど、一旦視界からアウトさせて落ち着きたい。

「さて…どうしよう」

カタカタなる目の前の箱はちょっとでも振動を与えると割れ始めそうな気配で…っていうかむしろそれを望んでそうな感じがする。

「割って！割って！」…みたいな？

…このまま試験に持っていくか？とも考えたけど、そんな事をすれば折角手に入れた平凡な日々が粉々に砕け散りそうだし…まあそれよりもこれを帝都まで割らずに持って運ぶ自信も無い。

「…お願いします。出来る限り小さいモノが産まれてくれますように」

『パンパン』と特に神様に祈るわけでもないのに柏手を打ってしまふのは…やはり日本人の性っぽいなどと考えつつ、運ぶにしてもデカイ生物を運ぶのは色んな意味で困るからとか、大型が生まれる可能性とかいらぬいんどか、生まれてしまふのは止めようがなさげですから出来る限りコンパクトに生まれて頂けたら、何て自分勝手な事はしっかりお願いする。…でも出来ればもう少し生まれるのを待って頂けたら尚嬉しいです。

しかし…八方塞がりとは強制的に解決される物で…

ドガアアアアン！！！！

吹き飛ぶ玄関扉、それは机に見事にヒットしてくれた。待つてましたとばかりに弾け飛ぶ空箱、そこから赤く煌めく煙のような霧が舞い広がり、その向こうに憤怒の形相なミレー又が立っている姿はまるで美しい地獄の絵図で…美人がキレると怖さ倍増だつてこの時まで知らなかった。

「あれ…」

何気にあたし色々な意味でピンチかも知れない。

「ひいいいよおおおりいいいいい」

ミレー又はドスン…ドスン…と聞こえて来そうなぐらいにゆつくりと歩み、地を這う声を出しながらあたしを睨みつけてくる。

「どおいうこおとおかあせえつつめえしいてえくうれえなあいいい？」

「ひいいい」

スピードが上がリ駆け寄つて来たミレー又にあたしは思わず防御の姿勢をとつてしまふ…つまりあれです。片足上げて猿のように手をコの字にするあれです。

でも何時までたつても想像した衝撃はやってこなくて…ちらつと薄目を開けてミレーヌに視線をやると、そこには今までの憤怒が嘘のように消え去ったミレーヌがハラハラと涙を流して立っていた。

「み、ミレーヌ？」

「っひつく…っひつく…どう…して？どうして…ヒヨリと一緒に…受験出来ないの」

もちろんこの瞬間に、大人の自分が罪悪感にメツタ打ちにされましたよ？でも同時にきゅんとなったのも事実です。ああ…どうしてくれようこの義妹可愛過ぎる…

…自分でいっばいっばいで義妹の事を蔑ろにしてごめんよ。メルフォスさんとは帝国でライザ母さんとは戻って来てからいっばい話し合いましたよ。ちゃんと君の事も含めてね。

「あのね、ミレーヌ…」

それからあたしはメルフォスさんとライザ母さんと相談した事をミレーヌに伝えた。

テリサン村には子供がいない。子供を持つ者はどうしても帝都よりの街に引越し、いつのまにかこの村は大人だけの村となった。そんな中で育ったミレーヌには友達がいなかった。3年前にあたしが来て一番喜んだのはミレーヌ。友達が出来たとはしゃいでたのを覚えてる。

…だけどあたしは中身は大人。どうやっても12歳にはなれないのだ。だからミレーヌには同じ年頃の友達を作るべきだと思った。一緒に平民クラスに入るの簡単だけど…平民クラスは年齢制限のない無法地帯。それでは今までの村の扱いと同じになってしまう可



能性が高かった。それに比べて貴族クラスは10歳から12歳の子供の集団。ミレーヌにとって初めての社会生活をおくるのにベストな環境だと思った。同世代の子達とこ社会生活から学ぶ事は意外と多いし、将来の糧になる。侯爵の血筋なら敬遠される事はあっても…ミレーヌの実力だったら直接いじめられる事も無いはず。

「親から離れて生活が始まるのは皆一緒。頑張ってみる気ない？」

貴族クラスに私がいるとミレーヌはあたしから離れない…それでは意味が無いのだ。厳しい事かもしれないけど…きつとミレーヌの心の強さがあれば先に楽しみが待ってるはず。…もし無理なら平民クラスに転入させてしまえばいいとか簡単にメルフォスさんが言ってたのもあって、あたし達はこの選択をしたのだと…

「…だけどね、ミレーヌの気持ちが一番大事だから。今からでも充分に間に合うよ？どうする？あたしと一緒に平民クラス受ける？」

「…うん。あたし…頑張ってみる。貴族のお嬢様になんか負けない…それにヒヨリに会いたい時にはいつでも会えるんでしよう？」

「そりゃ同じ学院だもん！大丈夫でしょ？」

「ヒヨリっ！！義姉さんっ！！大好きっ！！！」

ミレーヌがあたしに飛びついてくるのをしっかりと受け止める。

メルフォスさんとライザ母さん、そしてあたしの気持ちをしっかりと受け止めてくれた彼女は素直で強いと思う

「お互い頑張ろう。で、嫌な事があつたら今までみたいに愚痴を言い合おうね」

「うんっ！！！」

キラキラ輝くミレーヌの笑顔を見てあたしも釣られて笑顔になっ

たけど、次の瞬間にピシッと固まった。

「主…話は終わりましたか？」

ミレーヌの背後にふよふよと浮かぶ冷蔵庫サイズの濃い紅色の犬？っていうより狼？……しかもどう見ても両目の他に額にも目がありますよね？背中にでっかい翼まで生えてますけど…

「……あ、聖獣」

すっかり忘れてましたけど、そういえば…卵どうなった？って目の前にこれが生まれてるって事は…

「…我は魔魂より生まれし、主に使えし者。主、私に名を授けて下さる」

…やっぱり。ミレーヌが「何？」と振り向こうとするけど…とりあえず胸に抑え込む。だってこれを見たらさすがに普通に卒倒するでしょ。あたしだって食われるんじゃないかって内心ビビりまくってるし…

「あのさ…名前の前に…もう少し、サイズ小ぢゃくならない？」  
「…これでも充分小さいです…主が私生まれる時に願った事で身体を変化させる力が備わりました。この50倍ぐらいがわたしの魔力でいうと標準サイズです」

「…」

取りあえず絶句。

50倍って…村壊滅するし…聖獣っていうよりモンスターでしょ…それ…

「主…ヒドい…」

「あ？」

どでかい尻尾が後脚の間に収納されるのを見て、犬属性だと確信する。というか何であたしが頭で考えた事に反応するの？

「主の心の声……外に漏れてます」

おっと動揺で、自分が喋ってる事にも気付かなかったよ…

「…この姿ではご満足頂けない様なので」

聖獣はそう言うと、自分の身体を回転させた。翼から出る風力で部屋の物がひっちゃかめっちゃかになったけど…まあ…いい。そして現れたのは人の頭ぐらいのサイズで同じ姿をしていたが、耳と尻尾と目（額以外）がやたらとでかくなっていて、その耳にはたくさん耳飾りがついていた…

「…これまた…デコラティブね…」

「魔力を散らさなくてはならなかったんで…でもコレが限界です…これ以上は魔力を圧縮する事が出来ません。この姿もずっと維持するのは正直ツライです」

…正直可愛い。紅い身体はビロードみたいに見えるし…触り心地良さそうだ。これならミレーも大丈夫だと思って暴れまくっていたミレー又を解放する。

「ぷはっ！！もう！！死ぬかと思ったっ！！」

そして振り返って固まる事5秒…

「何コレ！！可愛いつ！！！！」

「なっ…ちよっ…と、主！！！」

んゝ美少女と愛玩犬が戯れる図…素晴らしい、目の保養だ。これだけで聖獣グツジョブと違ってしまっあたしはやっぱり現金なやつらしい…

## 48話 安らぎ

その後も「可愛い〜！」の一言で、ひたすらミレー又は聖獣を弄びまくり、いささか腕の中の聖獣がぐったりし始めた。ミレー又はもともと素直なのとまだまだ子供なんでしょうね…さっきまで泣いてたのに今はもう満開の笑顔、気持ちの転換が早くて羨ましい限りです。大人になると…ねちっこくなるからなあ…あ、それはあたしだけか？

「…主、もう限界です」

腕の中の聖獣はそう言うと…ミレー又から飛び降り少し離れたところで、また身体を一回転させる。そして姿が現れた時と同じ冷蔵庫サイズになった…

「あ……………」

「……………」

やばい…。やっぱり元の姿は恐ろしいのかミレー又が聖獣を見て固まってる。

「………、聖獣………」

早くちっこい姿に戻って…と言いかけた時に横から正しく黄色い声援が飛んで来た

「かつこいい〜〜〜〜！……！変身も出来るのねっ！……！」

ミレー又は何の迷いも無しに冷蔵庫サイズの狼に飛びついている…。え〜っと…初めに小ちゃいサイズを見たのが良かったのか、それとも全然冷蔵庫のサイズでもおっけーだったのかよくわからないけど…ま、怯えてないから…いつか。

「モフモフ〜!!! すごく気持ちいいっ!!! ヒヨっ来て! 凄く気持ちいいよっ!!!」

ミレー又が聖獣の首元にスリスリと顔を近づけるのを見て…あたしも釣られてとりあえず後から抱きついてみた。すると紅い毛は想像通り高級ビロードのような感触で…こいつ狩人に狙われて皮剥がれちゃうんじゃないか!?! って心配してしまうほど気持ちよかった。

「あ、主!?!」

「お前…ほんと気持ちいいね…」

「でしよう!」

ミレー又を全面に、あたしを背後に抱っこした状態で聖獣は身動きが取れず固まっているが、尻尾は左右にパタパタと揺れていたのでご機嫌な感じではあると思う。大きさを元に戻した事が良かったのかさつきほどのぐったり感はあるみたい。あ…どうしよう…良からぬ事を考えてしまった…でも思いついたら…どうしても実践してみたくなるのは科学者の血で…

「ねえ…あと2倍ぐらいの大きさになれる?」

「もちろん出来ますが?」

「……………」

背後から期待を込めた目で聖獣を見つめると…聖獣は大きく息を吸い込み、あたしとミレー又に自分から離れるように言い、そして

そのまま大きく一回転しようとして飛び上がると轟音を立てて天井を突き破った。慌てて着地した時にはすでに身体は2倍のサイズになっており、着地先の机を粉碎した。咄嗟の判断でこの家全部とあたしとミレーヌを空気の膜で覆ったのは良い判断だったとあたしは自分を褒める。お陰で轟音は外部には漏れなかっただろうし、あたしとミレーヌも埃などを被らずに済んだ。

あたしの「あ…」とミレーヌの「きゃあ！」は同時に発せられて…

「…あの…主」

あたし達の声に恐縮した冷蔵庫サイズから2倍へと変化した紅い狼は、しっかりと尻尾が身体に収納されている。まあ…この惨状を理解しているからだと思うけど…でも実験っていつでも最初は失敗するものよね？あたしは天井が落ちて屋根と梁だけになった上部を見ながら苦笑する。そりゃこのサイズを普通の家の中で変身させちゃ駄目だわ

…怒らないのだった？だって変化してって言ったの自分だから。  
…天井は魔法で簡単に直せるし。しかもどうせ玄関はミレーヌに吹っ飛ばされてる状態で、聖獣が回転する度に起こる凄い風で家の中の物は既にめっちゃくちゃですし…開き直った感じで怒りなんてわいて来ない。

ただ埃っぽいのは嫌なので、窓を開けて中の空気を外の物と入れ替える。そしてようやく部屋の空気が綺麗になった状態で、あたしはワクワクしながらくるつと聖獣に振り返った。いよいよ想像してた物に出会える。

「あのさ…横になってくれる？」

「…？」

あたしが聖獣にそう言うと、聖獣は怒られると思ったのかちよつとびくつきながらも横に寝そべった。…これよ。これを求めていたのよっ！！

「ミレーヌ、おいで」

「え？ヒヨ？」

「一緒に寝よ！」

笑いながらそう言ってあたしは横に立っていたミレーヌの手を掴むと、聖獣のお腹に飛びついた。聖獣のお腹は柔らかい布団のようで、肌触りは高級ビロードなのだから文句無しに気持ちいい

「！？」

「やつぱり…想像した通り、コレ気持ちよすぎる…」

「ほんとだね……」

一瞬で眠りに落ちそうなあたし達を察したのか、聖獣は丸くなって包み込むような形を取ってくれた。…素晴らしい。素晴らしいよ、聖獣君。

微睡んだ状態で隣を見ると、泣き疲れた事もあったのかミレーヌはすっかり寝息を立てていた。でも…ほんとに気持ちいいな。人肌じゃないけど…有機物の温もりに包まれるというのはこんなに安心感を与えてくれるんだって初めて理解した気がする。

「主…後で名前つけて下さいね……」

そんな囁きを眠る前に聞いた気がしたけど、ごめんすっかり忘れてた…っと思しながら忘却の彼方、夢の世界へあたしは旅立った。



#### 48話 安らぎ（後書き）

10万文字を越えてPick Up!に載る事が出来ました。

読み専だった時にトップページに載る作品を見て『すごい』と思っていました

自分で書き始めてからは『いつか!』と目標でした

すべてはこの作品を読んで下さっている皆様のおかげだと思います

心より感謝申し上げます

ありがとうございます!!!

## 49話 小春日和

すっかり本気寝をしてしまった…気付いたら窓からの光がすっかり夕暮れ色になっていてびびった。横を見るとまだミレー又は夢の中らしく、すやすや寝息を立てている。

「ん〜！よく寝た！！」

そう言いながら身体を起こして伸ばすと、こちらをじっと見つめる聖獣と目があつた…

「あ………」

「お目覚めですか？主」

「…はい」

よく考えたらあたしら爆寝したからいいけれど…この聖獣ずっとこの体勢で支えてくれてたんだよね。

「ご、ごめんね。身体痛くない？」

「？」

「いや…あたしが寝てる間、ずっとこの姿勢だったんでしょ？」

「ああ…別に大丈夫ですよ？主が私の身体で安心出来るのは嬉しい事です」

…何ていい子なんだ。こっちを見つめる聖獣に向かってあたしは手招きをして呼び寄せる。最初はきよとんとした顔の聖獣だったけど、意味がわかったのか頭をあたしの側まで持って来た。…さすが頭だけでもデカイ。

「…主？」

あたしはその頭にぎゅっと抱きつくると頭頂部を力一杯撫でた。

「…ありがとうね」

「主…」

大きな尻尾がふわふわと揺れて心地のいい風が部屋に舞う。

「もうちょっとだけ頑張ってくれる？もうすぐ夕食の時間だし、ミレーヌも起きると思うから」

「はい」

その間はあたしもまだこの感触を楽しませて貰おうと、もう一度元の場所に横になる。

「あの…主、名前をそろそろ…」

ああ…また忘れてた。っていつか忘れてたかったというか…名付けセンス0のあたしにとって名付け程悩まされる事は無く…キラキラと希望に満ちた視線からすっとそらした視線は宙をさまよう。

「名前ねえ…」

頭の中に浮かんでくる動物の名前と言えば『ゴン』や『太郎』、『次郎』、『セバスチャン』、『ゴロー』…いかんせん紅い狼には似合わない。そんな悩めるあたしの頭にふつと言葉のフレーズが浮かぶ。

『小春日和』

たまたま浮かんだその言葉だったけど、何だか暖かい寢床は『穏やかで暖かい天候のこと』という意味がぴったりな気がするし、それに今はちょうど11月。あたしの聖獣だし…全てがぴったりあてはまる気がした

「コハルにしよっか…」

あたしはぼそつと呟いた後に聖獣に視線を戻す…そして固まった。え〜…つと、あたし何をとち狂ったんだろっかね？この紅い狼のどの辺が『コハル』なの？『切り裂きジャック』の方が似合いそうな風体に何故『コハル』？これはあたしのオバカっぷりが如実に現れすぎて痛い、痛すぎる。

「あの…ちよつと…やめ」

「コハル…嬉しいです。主」

やっと貰えた名前に感無量なのかニパツと開けた口に食されそうで怖いし、尻尾が尋常じゃなく揺れてるのを見てしまうと…今更、見た目エグイから訂正なんて出来ない。

「コハル…コハル…」

そう何度も言葉を繰り返す紅い狼は…見た目はまあ置いて、行動は可愛い。

「気に入って貰えて…よかった」

まあ…見た目もずっと一緒にいれば慣れるでしょ。小ちゃいバー

ジヨンのコハルは充分『コハル』で通用するし…喜んでるし…ま、  
いっか。

「主…名前を呼んで頂けますか？」

「…ん？ああ…コハル」

「……ありがとうございます。主」

コハルの尻尾風圧が強かったのか横で寝ていたミレーヌがむくつ  
と起きた。

「おはよう、ミレーヌ」

「…んう、ヒヨ…おはよう？今何時い？」

「もうちよつとしたら給仕の時間」

「ああ…そつか、獣ちゃんのお腹が気持ち良くて寝ちゃったんだ  
…」

意外と寝起きのいいミレーヌは「おはよつ獣ちゃん！」とあたし  
を乗り越えてコハルに挨拶をしている。獣ちゃん…そう言えば…ミ  
レーヌの名付けセンスはいかほどの物なんだろう？コハルへの若干  
の抵抗が残るあたしとしては最後にちよつとだけ足掻いてみたい…

「ねえ…ミレーヌ。ミレーヌだったらこの獣になんて名前付ける  
？」

「……？あたしが付けるとしたら？」

ミレーヌはコハルの顔に抱きつきながら、うぐんと唸っている。  
やっぱり…12歳には名付けは早過ぎましたか…

「そうだなあ…見た目カッコいいし、ヴァルフレイムとか…ネヴ  
イルグレス…ヴィヴィアラムとかでもいいかも…」

……カッコいいじゃん。しかも紅い狼にすっごく合ってるし……っ  
ていうか何気にミレー又名付けセンス神レベルじゃないですか。

ええ…お姉さんは自分の名付けレベルの不甲斐なさに…かなり凹  
みました。

一応じとつとコハルに視線を向けてみる。

「…コハル」

「はい主」

「えゝこの子『コハル』って言うの？」

てつきり似合わないと言う言葉が続くのかと思ったのに…

「いいなあ…言葉が…ヒヨと同じ香りがする」

ミレー又は自分で言った名前候補などすっかり忘れて「コハル、  
いい名前ね！羨ましいぞお！」とコハルの頭を撫でている。撫でら  
れたコハルも嬉しそうに尻尾を振っている。そんな二人を見てしま  
うと…名前の変更など言い出せるわけもなく…。

小春日和はコハルとヒヨリになり、紅い狼は正式に、聖獣『コハ  
ル』となりました

#### 49話 小春日和（後書き）

お気に入り登録が4000件を越えました

何気なく初めてしまった小説に、こんなにたくさんの方が読者となつて下さって私はとても幸せ者だと思います

読んで下さった方一人一人に、心より感謝申し上げます。  
これからもどうぞよろしく願います。

## 50話 お受験戦争、勃発

ミレー又は宿の給仕の為、あの後すぐに家に戻っていった。冷蔵庫サイズに戻ったコハルはベッドに腰掛けたあたしの足元で丸くなっている。そんなあたしの手元にあるのはコハルと一緒に送られてきた入学試験説明書。最初のページには帝国魔術学院学長の挨拶。そして2ページからは試験の日時や注意事項などの記載がしてあった。

「試験は…12月の2週目か…」

今は11月の2週目、試験まで後一ヶ月という事になる。合格者発表が次の週で魔法便での入学通知と魔術学院正門付近での発表があるらしい。貴族受験者は面接だけ。平民受験者は面接、筆記、実技の3試験があるらしい。やっぱり貴族様はすごい優遇だな…

貴族クラスは20名クラスを10クラス200名の合格者に対し、平民は40名クラスを2クラス、計80名。そんな結構過酷な平民受験とはいえど、受験者数は毎年増加傾向にあるらしく去年の合格倍率は30倍と書いてある。なので単純計算でも2400人ほどの受験者がいるらしい…どんな人気学校なの？って突っ込みたくなるけど『帝国』と名の付く学校なのだから、あたしの世界で言う国立なんだろうし、魔術の最高峰という事は、「東の大、西の大」って感じのようで…

はい…受かる気がしないです。

この学校入学だけで、平民的には超エリートですよ？

そしてやはり平民クラスは年齢制限がないらしく、魔力重視の実力世界のようだ。合格ラインが3試験の合計で500満点中450



点…しかも合格者多数の場合は抽選ありらしい。

「…お受験戦争じゃん」

あたしは3ページ目にして挫折しそうな心を奮い立たせて、次のページに移った。そしてそこに載っていたのは

「……何コレ？」

どうみても筆記の試験問題が記載されている。一瞬カンニング？もしかして皇帝が裏から手を回したのかって焦ったけど、どうやら違うらしい

「え〜つと、下記の試験問題を別紙答案に答え、入試日に提出？」

何ソレ？これを前もって記入して試験日に提出すればいいの？それって試験じゃなくてレポートじゃん…。あたしはそう思いながら問題をさらっと読んだ。

「あ〜そういう事が…」

問題を読んでから答案用紙に触れ、その紙に隠して記された魔法陣を読み取る。そこには答案用紙に名前を書いた者以外の解答を拒否する魔法と、特殊な魔法の仕掛けがいくつも施されていた。

つまりあたしが想像していた『単なる』筆記試験では無く、これもあくまで『魔法』の筆記試験だという事。例えば一問目の問題は「ここに火系魔法を記載しなさい」これだけならば単なる筆記試験だが、ここからの但し書きが要注意なのである。

『但し、記載の火系魔法を発動させる為の魔法陣も同様に記し、発動可能にする事』

そう、つまりここに記す魔法は自分の魔力レベルにあった物しか記せず、名前だけを知ってる高度魔法などは記しても点は貰えないという事。つまり調べて自分が発動出来る魔法を書きなさいって事。紙自体の隠し魔法陣によって、記された魔法陣が10分の1ぐらいの力で仮発動出来る仕掛けになっている。

そしてその記された魔法レベルによって点数が決まるらしい。

こんな感じの問題が各属性ごとに複数あり、ようはこの答案用紙を見ただけで解答者の属性がわかり、魔力の強さも調べる事が出来るようになってる

「…なるほど。これは考えられてるわ…」

とりあえず試験は明日以降にする事にして、説明書の続きを読む。次の記載は面接と実技試験についてだったけど、これは面接内で実技試験も行われるらしく、実技は自分の属性魔法の一番得意とする物を面接官に披露すればよいらしい。面接については、魔法を習う上での心構えから将来像についてまで面接官によって質疑応答は様々らしい。

「まあ、ここまでは何とかなるにしても…最後のこれをどうするかなのよね」

最後に魔魂のレポート提出について。これについてはレポートを作れるほどの観察内容なんて無かったし、そもそも魔魂に触った時点からの経過なんて少ししかない。

「すでに今はコハルになっちゃってるしね…」

そういえば…あたしが試験落ちたらコハルって返さなくちゃいけないのかな？足元で丸くなって幸せそうに眠るコハルを見ると…もし落ちた時には申し訳ないけど皇帝に頼んでコハルだけは手に入れられるようにしよう！と思ってしまっ。

「一ヶ月か…」

試験の段階ですでに問題が山積みだけど、この問題をクリアする事も自分が元の世界に戻る事が出来る第一歩だと思う。そう思えば頑張ろうって力も湧いてくる…はず。

「でも最悪、浪人してもライザ母さんの店で働きながらまた受験すればいいし…遠回りかもしれないけど勉強だって帝都に行けば独学で多少は出来るだろうしね」

国立に2浪ぐらいして入学。うん、この方があたしっぽい気がする

「それにしても魔魂がなあ…」

あたしは大きいため息を吐くと、コハルの頭を撫でてやった。

## 50話 お受験戦争、勃発（後書き）

今、章の分け方・各タイトルを悩んでいます

以前の風邪からこじらせた気管支炎が未だに直りません。  
夜中に身体が温まると咳が止まらないのは中々つらいです  
寒くなって参りましたので、皆様も風邪に気をつけて下さい

## 51話 プチ旅しましょう！

実は今、空を飛んでいます。夢の世界なんかじゃありませんよ。リアルですリアル！コハルの背中に乗って大空に舞い上がってます…昔アニメで空を自由に駆け巡るとか憧れた事もありましたけどね…実際は恐怖のみです。だって落ちたら確実にますから…すぐ横に雲らしき小さな水の集団があると上空2000Mぐらいですよ？スカイダイビングの高さを装備無し、丸裸状態で飛行とかってありえないですから…唯一の救いはコハルの背中に埋もれてるので寒さだけは緩和されてる事ぐらいですよ…

「…何でこうなった？」

コハルの毛に埋もれながら記憶を辿ると思い出すのは今朝の事。前日に仮修理した玄関をきちんと直して、コハルに破壊された天井部分も補修魔法を完了した後にお茶をしながら休憩してる時だった。それは何気なくあたしがコハルに聞いた言葉が事の発端だった。

\*\*\*

日本茶を啜りながら側にいるコハルに視線を向けると、身体を舐めて綺麗にする作業に没頭していた。それを見ながらこういう仕草は猫系だよな…なんて思う。見た目狼なのに…でも聖獣はあたしの魔力であって…純粋な獣ってわけじゃないだろうし…ってそこがよくわからないんだよね…。

「あのさ…魔魂ってそもそも何なの？」

「魔魂…ですか？」

コハルが毛繕いを止めてあたしに視線を向けてくる。

「うん…ただ気になって、人が作ったものなの？」

もし人が作ったものであればあたしの無駄なハイスペックで作りに出せるかもしれない。という事はもう一つ魔魂を作ってそれでレポートを書けばとりあえず悩みは解決しそうなだけ…というのは表向きの理由で、単に魔力を吸収して獣を産み出す卵はあたしの研究心をガンガンに揺さぶってくれたので研究したい！っていうのが本音だったりする。残念な事にコハルは気付いたらすでに力チコチの銀色の卵だったので、最初の状態すらまともに見れなかったのだ。そうなる疑問を解くためには魔魂自体のコハルに質問するのが一番だと思ったのだけ…

「いえ、魔魂は大地の力が溢れる場所に自然に生まれる魔力の結晶です。そのまま自然に放置された状態だと魔獣となり、人の魔力が加わると知識が同時に込められ聖獣となります」

「え…じゃあ…自然にゴロゴロしてるって事？」

「ゴロゴロはしてませんが…、例えば私は火山で生まれました」

「か…さん？」

火山と言われるとどうしても頭の中にどろどろんと岩が飛んでる噴火状態を想像してしまうのだけど…無理無理そんな場所にいけないわけない。

「…そんな危険な場所にある魔魂をどうやって捕獲するの？」

「別に噴火の有無は関係有りませんから。それよりも長年の過酷な環境によって炎の力が凝縮された場所に、魔魂は生まれます。水系ですと海の大渦地帯や、大滝壺。風系ならば風の止まぬ絶壁や竜

巻地帯。土系は強力な磁力地帯。氷系は氷山。簡単に言うとこんな感じでしょうか。魔魂専門のハンターがいます、それによって各場所の魔魂が捕獲されるといっわけです」

「…なるほど。つまりコハルは火系の聖獣なわけね」

まあ…体の色からしても水では無いと想像はしていたけれど。

「はい。そのはずなんですけど…ただ主からの魔力は複数の属性が流れ込んできましたので…完璧な火系というわけでは無く、水も変な感じでは使えそうです…」

「変な感じ？」

「はい…例えば…」

コハルはそう言うと大きく息を吸い込むと、口を閉じ二回ほど咀嚼の動作をする。そして再び開けた口から小さな丸い水の塊が飛び出し、壁に当たった。壁から湯気が立ち上ってる様子からして飛び出した物はお湯らしい。

「…お湯？」

「…よくわかりませんが、吸い込んだ息から水を作り出す事が出来る様です。ただどうしても吐き出す時には炎と一緒になので温度が上昇するようですが…」

自分でもなぜそんな事が出来るのかよくわかっていないのか、不思議そうにこちらを見つめるコハルにあたしは顔を引きつらせてしまふ。大気中の物質から水を作り出す。つまりコハルの口の中で、化学反応が起こってるわけで…ごめんねコハル。それは多分思いつきりあたしの元の世界、つまり白の加護の分野だと思っわ…。

「ま…いんじゃない？便利で…」

笑って誤摩化すけど…つまり、あたしから産み出された聖獣はやっぱりハイスペックな有り得ない状況になるという事がコハルで証明されたわけで…そんなレポート提出出来るわけもないし…だからといって魔魂を取りにいくとか無理だし…

「…魔魂のレポート、どうしようかな…」

課題提出が出来なければ確実に試験落ちるよね？…どうしよう。諦める？「自力で受かる！」とかあんなに皇帝に大見得切ったのに？…んと頭を抱えるあたしを不憫に思ったのかコハルがあたしの腕を鼻先でつついてきて言った

「主、実は少し離れていますが、行けない距離では無い所に魔力が溜まる気配があります。そこなら魔魂がある可能性があります…。私の翼ならそんなに時間もかからないと思いますし行きますか？」

「え？そんなの？」

「はい。どういった系統の魔魂かはわかりませんが…」

…ほんの少しの望みでもそれを手に出来る可能性があるなら懸けてみるしか無い。あたしはコハルの頭を撫でて「お願い」と言った。

\*\*\*

…そして現在に至る。

「コハルううう…まだまだ遠いのお？」

ビョウビョウと風の音が鳴る中で思いつきりコハルに向けて叫ぶ。



凄いスピードで雲を抜けるので開けた口の中に水分が入ってくる。

「いえ、もう見えてきました」

「え？ そうなの？」

下を見るのは怖いけど…ちらつと覗くとどうみてもそこには緑の絨毯が広がっていて単なる平原と思われ、どう見ても過酷な環境には見えなかった。

「…魔魂がありそうに見えないけど」

「主、前方です」

…前方？ コハルに言われて前方を見てあたしは固まった。どう見ても前方には雲しかない。ただその雲があたし達の位置よりさらに高く昇っているのを見て嫌な予感がした

「…あれ？」

「はい。あの前方の雲から魔力が滞る気配がします」

でしようね〜。

どうみてもあの雲『積乱雲』ですから…

## 52話 聖獣ランド開園？

コハルに示された雲は巨大であたし達より遙か高くそびえ立ち、稲光が消える事なく走っている。どう考えても雷属性の魔魂に違いなく…ヤバい感じがプンプンする。

「あのさ、まさかあの雲に突入とかしないよね」

「……………」

…返事がないんですけど、しかもさりげなく近寄っていつてない？稲光って近くで見てもとっても綺麗とか言ってる場合じゃないから！

「…死んじやうからさ…普通に雷ヒットって死んじやうから」

「大丈夫です。さすがに雲の中には入りません。出来る限り近づいてそこから魔力を照射し魔魂を引き寄せます」

…早く言つてよ。凄くビビったんですよ？

「魔魂で魔力に近寄ってくるの？」

「はい。魔力は魔魂にとっての極上のエサですから」

直接エサだと言われたわけじゃないけれど…複雑な気分なんですけど。

それにしても雲に近づくだけで放電なんかがありそうだし…防御しておくにこした事はない。確か空気って絶縁体になったはずだから、断熱壁魔法の応用で、水分とか不純物を除けば絶縁体になるはず。後は絶縁耐力がほしい1mmで3000ボルトだったから1

0cmぐらいの厚みにしておけば大丈夫だと思う。

あたしはコハルの背中で詠唱を始め、自分とコハルの周りに魔法を展開させる

「主？」

「一応、電気対策しといた」

「ありがとうございます。ではいきます」

そう言うとコハルはゆっくりとしたスピードで積乱雲に近づく。絶縁体は上手くいっているようで稲光は相変わらず見えるが、今のところこちらに向かって放電が起こる気配は無い。それにしても、ほんと雷って危険さえなけりゃ綺麗だよね。こんな間近で雷が見れる日が来るなんて思いもなかったわ。

積乱雲のかなり側まで近づいたところでコハルが止まった

「主、ここから魔力を放出して下さい」

…はい？魔力の放出ってあたしがやるの？

「ここならば内部の魔魂にも届くはずですよ」

だから…それを魔力だけの放出なんてやった事が無いあたしがやるの？

「え〜つと無理」

「主？何か気に障る事が？」

「気に障るとかじゃなくて、やった事ない」

「……」

止まる時間。稲光の音だけが空間を支配する

「ごめんね。出来の悪いまで」

「いえ…そこに考えが至らなかつた私が悪いです。主は普段でも微力ですが魔力が体から放出されているので……」

「…え？そうなの？」

あたし魔力垂れ流しなわけ？どんだけ魔力有り余ってるのさ…シ  
ユンとしてしまったコハルに対して少し可哀想だったので、ちよっ  
とふざけた口調で話しかける

「もしかして手をかざすだけで出来ちゃったりしてねー」

ただここまで来てそのまま帰るのももったいないので…なんて軽  
い気持ちであたしはモーゼの十戒のごとくコハルの背中に立ち上が  
り、「いつてらっしゃい！」と言う台詞とともに手を積乱雲に向け  
てかかしてみた。

「きゃあっ！…！」

「主っ！…！」

手をかざした瞬間、光が目の前で弾け積乱雲に向かって手から何  
かが放出される。それは雲を一瞬で突き抜けたようで一筋だけぼっ  
かり雲が無くなり向こう側が見えた。そして雲の中のその筋にコハ  
ルの魔魂と似た物が積乱雲の上部から降りてくる。

「え？」

「主…魔魂です」

「……」

魔魂は複数あり、筋を通ってこちらに向かってくる。卵なのに何だか幼い子が集団下校してる姿に見えるのが不思議…。

「…あ、あんなにたくさん聖獣いらないけど…」

全部孵化させたら聖獣ランドとかできそうじゃない？その前にあれ全部にあたしの魔力吸われるとか…無理でしょう…さすがに。

「大丈夫です。必要分だけ私の体内に取り込みます。後はこの場に残しておけば元の場所に戻ります」

「たたっ食べるの!？」

頭の中で共食いを想像してしまった。

「違います。魔魂同士であれば体内は保管場所となるんです」

「凄いね。コハル」

「主の方が凄いです」

…うん。それはもうこの世界に来てから色々な人にウンザリするほど聞かされてきたから、そんなうっとりした顔で見つめられても…。

「一個でいいよ…」

「しかし雷属性の魔魂は貴重ですので、ストックしておくことでハンターとして結構高値で売る事が出来ますが…」

…売るねえ。駄目だ、一度幼稚園児に見えたものを売るなんて出来ない。

「ううん、一個でいい。でもあたしが触ると聖獣化しちゃうからコハル保管でお願いします」

「わかりました。どれにしますか？」

列をなしてこちらに向かってくる魔魂を見て、何だか一つを選ぶのも可哀想な気がするけど…全部は養えないのだから、心を鬼にして…一つを選ぶ。そう思って探したら魔魂の列から少し遅れて動きがぎこちない一回り小さな魔魂があった。

…どうみてもあれ弱そうに見える。ここに放置すればいずれ魔獣になる筈で…弱そうなのは…淘汰されちゃう可能性が高い

「…コハル。あれ、あの一番後のちっこいの」

「あれですか？あれは…もしかして劣性魔魂かもしれませんよ」

「いいよ、馬鹿な子ほど可愛い」

「わかりました」

そういうとコハルはあたしが指した魔魂を引き寄せ、大きく開いた口で飲みこむ。コハルが傷つくから口にはしないけど…見た目どうみても共食いです。

無事にコハルの体に魔魂が落ち着いたのか、コハルは次に尻尾で大きな風を起こし残りの魔魂を積乱雲へと戻した。そして体を積乱雲から反転させると羽根を動かし始めた

「では、戻り……」

しかしコハルは途中で言葉を止め、素早く向き直った体をまた積乱雲に向けた。そして耳を色々な方角に動かし何かを確認している

「コハル？どうしたの？」

「どうやら……一部の魔魂の魔獣化が始まっていたようです」

「え？」

「すみません……主。来ますっ！！」

そのコハルの言葉と同時に落雷がこちらに向かってくる。絶縁体の壁によって直撃は免れたが衝撃はかなりのもので、コハルごと5mほど後方へ弾き飛ばされる。

そしてあたしでも聞こえる咆哮が空に響き渡った。

52話 聖獣ランド開園？（後書き）

活動報告にてラフ画、筆頭医シーを掲載しました



53話 初めての戦闘…そして(前書き)

後半、R15的残酷な文章があります。

ご注意ください

### 53話 初めての戦闘：そして

途切れる事のない大音量の咆哮は周辺の大気を震わせ、こちらには大きな音の波となって押し寄せた。あたしはとつさに断熱壁を絶縁膜の外側に築き、空気を固定する事によって音の波を受け止めたが、咆哮と同時に積乱雲から次々と襲ってくる雷撃に断熱壁が弾け飛ぶ。何度も断熱壁を繰り返し作り出して対応するが、内側の絶縁膜も少しずつだが確実に削られていく。そんな中、コハルが口の中に炎を溜める姿が視界に入って慌てた

「コハル、マテッ！！」

あたしの叫びにコハルの動きがぴたつと止まる。

「主？」

あたしは詠唱を続けながら、コハルに叫ぶ。

「炎は駄目！！とにかく羽根を広げずにあたしの足場を保つよう努力！！」

「わかりました」

属性攻撃を止められたコハルは、なるべくあたしが揺れないように空中停止に近い状態を保つように意識を集中する。積乱雲に対して部分的に炎の攻撃をすると周りの空気が暖められてしまい、その熱によって上昇気流が生まれればさらに急激に積乱雲を成長させてしまう可能性がある。だからといって積乱雲を全て消し去る様な炎の攻撃は周辺への影響が大きすぎてとても指示出来る事じゃない。

「…少なくとも炎と積乱雲って相性最悪だわ」

「主…」

…まだまだあたしの魔力は余裕そうだし壁を作り続ける事は出来そうだけど、このままじゃ同じ事の繰り返しだけで解決には至らない。逃げる事も考えたけど、この雷撃はあたし達を逃がすつもりなんてなさそうだし…という事は問題は積乱雲よりそれに隠れて攻撃してくる雷獣なわけで…

「ねえコハル。積乱雲の中の雷獣の位置ってわかる？」

「はつきりとした位置は難しいですが、咆哮が放たれてる先ならばおおよそ…」

「ならそこに思いつきり風ぶち込んで」

隠れてばっかいないで、いい加減姿を見せなつての。一瞬でも姿が見えれば捕まえる…そして引きずり出す。

「主…いきますー！」

言葉と同時にコハルの尻尾が大きく揺れ、そこから生まれた突風が積乱雲へと渦になって向かう。風が突き抜けた先に見えたのは頭に鋭い角がある白く輝く馬がこちらへ金の瞳を向けていた。

「ユ…ユニコーン」

あたしは伝説上の動物が目の前に現れた事に少なからず動揺した。積乱雲に守られたように立つ姿は神秘的で一瞬今が戦闘中である事を忘れさせられた。

「主っ！！雷獣のチャームに惑わされないで下さいっ！！」  
「チャー…あっ！！」

コハルの言葉にハツと自分を取り戻すとあたしは慌てて雷獣に対して空間固定の魔法をかける。これでユニコーンは動けなくなっただけ…、しかし予想に反してユニコーンは前脚でその魔法を叩き割った。

「いやあっ！！」

力技で無理に破られた魔法の衝撃は術者に返ってくるらしく、あたしの体が衝撃に悲鳴を上げる。

「主っ！！！！」

コハルがあたしに気を取られてる隙に、また積乱雲の中に隠れると思っただけならユニコーンは雲から飛び出しこちらに一目散に駆けってくる。かなり離れた位置にいたはずのユニコーンはあつという間に近距離まで近づくと先程と同じ様にあたしの魔法壁を叩き割ろうと前脚を高く掲げた。

「主！！しっかり掴まって下さいっ！！」

「コハル！魔法壁消すから、どこでもいいから避けてっ！！」

あたしは衝撃を受けない為に魔法壁を消しさり、ユニコーンの衝撃に備える。ユニコーンの前脚の攻撃はコハルが旋回する事によって避けられたが、その反動であたしはコハルの背中から落下してしまっただけ。

「いやあああ！！！！」

「主い！！」

コハルが助ける為にこちらへ向かってくるのが見えるが、それよりも早いスピードで雷獣があたしに向かってくる。

ドクンッ…

『魔式、2型発動「空間制圧 フリーフォール」』

前回と同じく頭の中に声が響き、その途端体が魔力に包まれ降下  
が止まる。しかし止まったが故にユニコーンが鋭い角をあたしに向  
け一直線に向かってくる。後から追いかける状態なので前方にあた  
しもいる為、コハルは炎などの攻撃を繰り出す事が出来ない。

串刺しになりそうな予感に今度はただ無意識に魔法式が自分の中  
に組み立てられる。周辺大気を自分の手に纏わせ湿度を凍らせ槍化  
させ、そしてそれをそのまま真っ直ぐ向かってくるユニコーンに向  
けた。当然勢いを付けてこちらに向かうユニコーンがそれに対応出  
来るわけがなく

手に伝わる肉を断つ感触。初めてのその感触は、想像を絶するぐ  
らいに生々しくあたしに衝撃を与える。

「あ………」

あたしのその言葉と一緒にユニコーンの断末魔が響き渡り、白く  
流れ出る体液が氷の槍を伝ってあたしの腕へと流れる。

「……いやあっ!!」

あたしはそれを氷の槍ごとユニコーンを自分から振り払った。ユニコーンの体はあたしの横を力を無くし落下していく。それを側に来たコハルが炎に包む光景を見ていた。

「主…大丈夫ですか？」

「コハル……」

優しくあたしを包み込んでくれるコハルの暖かさに張りつめた何かが切れ、コハルの背に降りた途端にあたしは意識を失った。

53話 初めての戦闘…そして（後書き）

私的にはエグイ表現方法だったのですが…大丈夫でしょうか？

## 54話 ドロドロしたモノ

目を覚ましてもまだコハルの背中の上で仰向けに寝ていた、どうやらあたしが普通に眠れるほどのサイズになっていているらしい。気を失っていたのは数分だったようで、空が高く見えるのはコハルが地上に近い位置で飛行してくれてるからだろう。幾分ぼんやりとした頭を動かして確認しても、見渡す限り続く晴天から積乱雲からはかなり離れた場所に今自分がいるのだとわかる

「主、起きられましたか？もし気分が悪ければ一度降りますが…」

あたしが動く気配を察したのかコハルが話しかけてくる。心配そうな声色を安心させるように寝返ってうつ伏せになるとその身体に顔をこすり付ける

「大丈夫。このまま家に戻ろう」

「わかりました。もうすぐ民家がありますので、サイズを少し小さくしても大丈夫ですか？」

「うん…。もう平気」

本来なら獣の香りがしそうなコハルの身体は、あたしの魔力から生まれただけあって自分の香りと変わらない。毛に包まれると自分の布団の中のような感覚になる。あたしはコハルに気付かれないようにそつと自分の右手に視線を向けた。あの時槍を伝って流れてきた白い液体はコハルが綺麗にしてくれたのか、今は手には何も付着していない。ただどあたしの目にはいつの間にか白い液体が血へと変化し、べっとり濡れてる気がした。



…初めて命を奪った。

別にこの世界では何でも無い事。この3年の間に森なんかで何度も魔獣に対してきた。魔獣に村を襲撃された時には警備であるメルフォスさん達が身体を血で汚して帰ってきたのだった。普通に見てきた。だけどそんな魔獣を森で遭遇した時には「殺すのは可哀相だから」と魔法を使って自分が逃げるか、相手を逃走させるようにばかり仕向けてきた。メルフォスさんに聞くと10年前までは国家間の戦争も日常だったという話も聞いた。そういう事が日常的に起こる世界だって頭では理解していた。

…でも、ほんとに頭の中だけだ。

どこか映画のワンシーンのように思っていた世界。『映画に出演している』自分自身もどこかそんな感覚でずっと生活してきたのかもしれない。どこかのアトラクションの中にもいるような感覚で魔法を使い、自分の能力が高い事も物語の主人公なのだから迷惑だけど当たり前のように受け止めてきた。城で襲われた時だって殺されると思ったたら助けられて…その時だって本音ではここで死ねばゲームのように元の世界に帰れるかも知れないと思ってた。

…だけどこれは現実。

あたしは食牛がいる事を理解していても、自分が食す肉はパック

だと思っっている平和ボケした日本人だった。ぎゅっと握った右手には肉を断つ感触が残っている気がする。料理なんかじゃない…命を奪う行為。

「主、体のサイズを変える為に一度地上に降ります」

「あ…うん」

コハルの言葉に思考が戻されたが、一度深みにはまった考えは留まる事を知らない。コハルの背から降りて地上に足を付けたらどつと疲れが襲って来てふらついた。

「主、大丈夫ですか？」

「う、うん。ごめん。ちょっと空にすぎたのかも…少し歩いてもいい？」

「はい。でしたら私はちびサイズに戻りましょう」

そういつてコハルは回転すると人の頭サイズになってあたしの横にふわふわ浮いている。もうすぐ民家だとコハルが言っていたけど、目視出来るところにそれらしい建物は無い。ただ広がる草原にどちらの方向へ向かえばいいのかわからず立ち止まってしまふ。

「コハル…どっちに向かえばいいのかな？」

「こちらです。先をいきますので…」

「ありがとう」

コハルが飛ぶというよりふよふよと漂うといった形の方で前方を進んでくれる。その後を着いて歩きながらやはり右手に視線を向けてしまふ。「仕方がなかった」と言い訳をする自分、大きな力を持っているくせに殺す事しか出来なかった自分。

「はあ……」

「主……」

あたしの溜息に振り返るコハルの目は不安そうに瞳を揺らしているが、そんな瞳にさせてしまってもフォロ―する言葉が見つからない。大丈夫だと声をかけてもそれが真実でない事はお互いにわかる。この世界に居る限りはいつかは乗り越えなくてはならない壁なのだと思う……だけど正直辛い。

「……凹むわ」

また大きく溜息を吐こうとしたあたしの目の前に最近見慣れた魔力の渦が突然現れた。

ただ魔法使とは思えない魔力の渦にコハルが冷蔵庫の大きさになって尻尾を立て警戒する。

「主……どうか私の後へ……」

魔力の渦から足が出たと思ったたらあつという間に人が立っていた。グルルと威嚇をするコハルの後に下がっていたあたしはその姿を見て茫然としてしまう

「……え？」

「……ん？ここは……アサミズの家ではないのか？」

「……主……知ってる方ですか？」

コハルは警戒を解かず威嚇だけを止め、あたしへと質問してくる。

「知ってるも何も……」

目の前に立つリユージュユを見て思った事が、ただの平原に立っ  
いても皇帝は皇帝の貫禄を持ってるって凄いな…なんてくだらない  
事だった

54話 ドロドロしたモノ(後書き)

260万PV&50万ユニークありがとうございます

心より感謝いたします

55話 … チキンハートですから

何でここにいるのか何でどうでも良かった…。

ただそこにいてくれるだけで…良かった

リユージユの姿を見たら目に涙が浮かんで、込み上げてくる嗚咽をひたすら我慢した。黒の守護者って事でがんじがらめってる頼っちゃいけない人なんだけど、今はあたしの力を知っててすぐ側にいてくれる存在が凄く有り難く嬉しかった

「…うっ…く」

立ち止まったまま下を向いて涙を我慢してるあたしをリユージユが何も言わずそっと胸に引き寄せてくれる。その途端、涙の決壊が壊れて溢れてきた。泣き声はいつか叫び声のようになってあたしはリユージユの背中にしがみついた。

そんなあたしにリユージユは「間に合わなくてすまないかった」と謝りながら背中をずっとさすっていてくれた。

ずっとそのまま泣き続け涙が収まってしゃっくりに変わる頃、どれぐらい泣いたのか…泣きついたリユージユの服の濡れ具合からもかなり泣いた事がわかる。

思いつきり泣くというのはカタルシス効果だっけ？頭がちよっとぼーっとするけど…でもすっきりした。

ただ落ち着いてくるとリユージユの背中をがっちり掴んでるあたしがどうみても抱きついてる現状に顔が蒼くなる

「ごめん。リユージユありがとう」

あたしから抱きついてる状況に…とりあえず目が見れない。感謝の言葉と一緒に背中に回していた手をリユージユの胸に押しあてそつと距離を取ろうとしたが、今度はあたしの背中に手を回していたリユージユが離してくれなかった。

……どうすれば？

ちよつとドキドキしてしまう自分が嫌だ。

いや…抱きついてたのはあたしなんですけどね…。現金な物ですきまでどん底で落ち込んでたくせに…切り替わりの早さに自分でも呆れる。

「…何があつたか話せるか？」

そんなあたしの混乱を知ってか知らずかリユージユが頭上からいい声で話しかけてくるし、このままで話せと…いや、普通ならドキドキのトキメキモードなんでしょうけど、この人黒の守護者だし…ね。ドキドキしてるあたしのチキンハートを弄ばないで欲しいっていつか…

「話すので…離してもらっていいですか？」

「…大丈夫なのか？」

「はい。…ちよつと動揺してただけですから」

ようやく緩んだりリユージユの腕から秒単位の素早さで飛び出ると、リユージユの顔の片眉が上がるのが見えた。はい…言いたい事はわかります。胸をお借りしといてその態度は無いと仰りたいんですよね？とても感謝してるんです！でもね…でも私…チキンハートなん

です。引きつったあたしの笑みを見てリユージユは言葉を紡ごうと開けた口を一度閉じ、ふうつと溜息を吐いた後、明らかにわかるように別の言葉をあたしに問いかけた。

「で、何があつた？」

「あ…の、初めて魔獣を…」

続きを口にするのはやっぱり抵抗があつて、あたしは大きく息を吸った

「殺…ました」

「襲われたのかっ!？」

リユージユの想像より大きな反応に思わず身体がびくつく。そしてリユージユが慌てた様にあたしの身体をべたべたと触つて来た…心配してるんだろうと我慢したけど…

…とりあえず手刀をリユージユの頭に落とした

「ぐ…うっ」

「…触りすぎ、セクハラです」

…放置してたらどこまで触ってるんでしょうね…まったく。

「…怪我は…無いんだな？」

「あつたらもっと悶えてると思います。あたし痛い我慢出来ない子なんで」

「そうか…なら良かった。でもなぜ魔獣に襲われるような事になつたんだ？」

「正確には襲われたわけじゃなく、巣穴を突いたのはあたしです。



魔魂が必要だったんで、近くにあるって聞いて取りにいったんです」  
襲われたのなら殺した罪悪感は少なかったのかもしれない…仕掛けたのもこっちなら最後に殺したのもこっちなのでより罪の意識が増長されてる。

「魔魂？なぜそんな物を？」

「入学試験に必要なだったんで…」

「それなら問題と一緒に送られたはずだが……あの紅い魔獣は何だ？」

いつの間にか少し離れた場所で大人しく座って待っていたコハルによろやくリユージユは気付いたらしく…

「あ、紹介します。…コハルおいで」

あたしが呼ぶと反応したコハルは尻尾を振ってこちらに歩いてくる。ちなみにサイズは冷蔵庫サイズなのでトコトコというよりのそのそという歩み音が近い。コハルはあたしの側まで来ると、先程までと同じようにお座りの形をとる

「コハル？」

名前を聞いて引きつった顔のリユージユを見て『ですよね』と同調するのはコハルを傷つけそうなので心の中だけにしておく。

「はい。試験の魔魂から生まれたあたしの聖獣らしいです」

あたしがそう言いながらコハルの頭を撫でると、コハルもあたしを心配してくれていたので嬉しそうに頭をあたしの身体にすりつけ

てくる。

「…確か試験書類の配布は昨日だったはずだが…」

「ええ。昨日届きました」

「……一日で生まれたのか？」

「正確には3時間半です」

愕然とするリユージユにやっぱり自分は規格外なんだなあと改めて思いながらも、コハルは可愛いので全く後悔はしてない。シヨツクから立ち直ったリユージユが納得したように頷く

「…それで魔魂が必要だったのか」

「そうなんです」

「だが、この辺に火山や火系の地帯は無かったはずだが…」

「え？送られる魔魂の属性って決まってるの？」

それは初耳。ランダムで色々な魔魂が送られてるのかと思った…

「火系の魔魂が一番入手がしやすいからな。一番最初に学院の生徒が手にする魔魂は全て火系と決まっている。ただ他の属性の間には火系魔魂は孵す事が出来ないから入学時点で各魔魂に交換される。火系魔魂に各属性の魔力を注ぐという事も資料としての価値があるからな…レポートとして提出させそれを資料として使っているようだ」

なるほどね…つまり一挙両得ってやつですか…

「…でもそれって…火属性の生徒の方が先に魔力を注入出来て得って事になるんじゃない」

「火系魔魂は他の属性の魔魂より孵化が遅いんだ…遅いはずな

んだ……」

出たよ。あたしのハイスペック……ちょっと落ち込んでるリユー  
ジユは見なかった事にしよう

「まあ……アサミズが特別なのは……わかっているからな……」

「すみません……ってちょっと待って……」

じゃあ……あたしが取って来た雷属性の魔魂って……無意味。

「アサミズっ!?!?」

シヨックで倒れそうになった。

「じゃあ……何の為にあたしはあの雷獣を殺しちゃったの……」

「ら、雷獣と戦ったのか!?!?」

また涙が出そうになるのを必死に我慢しながら、事の経緯をリユー  
ジユに話して聞かせた。話終わるとリユージユがあたしの頭を手  
で軽く撫でながら「頑張ったな」と言ってくれた

「ただ……厳密に言つとそれは殺したわけじゃない」

「……え?」

……殺したわけじゃない?

「コハル……だったか? 聖獣によってとどめをさされた魔獣は魔力  
となって分散するだけだ……また時間が立てば、魔魂の形となるだろ  
う」

「人にとどめをさされた場合が魔獣にとっての死であって、魔獣

からは魔力を宿した部位が手に入る」

つまり…コハルが助けてくれたって事？

「…コハル？」

「主はあの積乱雲を消し去る力をお持ちなのに、それをしないという事は穩便に事を済ませたいという事だと解釈しましたので…ただあの魔獣はやかいだだったので炎で焼きましたが…」

うん。そんな力が自分にある事なんて知らなかったし方法も全然わからないけどね…コハルはあたし以上にあたしの事わかってるんだってびっくりした。それにあたしの聖獣はあたしの意識下にある『殺したくない』って考えをきちんと汲み取ってくれてる。

ぎゅうとコハルの首に抱きつくとコハルが顔を一舐めしてくれた

「その事で悩んでらしたんですね。気付かなくて申し訳ありませんでした」

「ううん。ありがとう」

ん？何だか視線を感じたので見上げるとリュージユがこちらを見て固まっていた。

「リュージユ？」

「…コハルは…人語を操れるのか？」

……使えないハイスペックは、こんなところで大絶賛活躍中らしいです。

55話 … チキンハートですから（後書き）

少し長めです。

前半が暗く執筆が思う様に進まなかったのですが、後半は元のノリに戻って気付いたらいつもの倍ほどの長さになってました…（苦笑）

## 56話 夢見る聖獣

コハルが人語を操れる事は特殊な事だと知って、これはちょっとハイスペックに感謝した。だってやっぱ動物大好きとしましては彼等との意思疎通って憧れだったしね。それにしても泣いて喋ったら… 凄く喉乾いた。と言ってもここ平原の真ん中だし、自販機もコンビニも無い世界で気軽にお茶を買うのかも出来ないし…

「…ねえリユージユ、とりあえず家戻らない？」

「…ん？ああ…そういえばここはどこだ？」

…ここは知らなかったのかよってツツコミをいれるべきなのか、それともそんな事も知らずにどうやってここに来たのかを聞くべきなのか悩む所だったりする。

「アサミズ…こんな何も無い所で何か用事があったのか？」

「いや…用事があったのはあたしじゃなくて貴方ですよ？」

「……」

無いのかよっ！！駄目だ。このまま会話続けてたら永遠に家に辿り着かない気がする

「コハル帰ろう」

「了解です。主」

「……リユージユもコハルに乗ってく？」

あたしとコハルの会話を聞いていたリユージユが不可解な顔でこちらを見つめてる。…そんなにあたしのここでの用事が気になるんでしょうか？説明しようにも特に用事なんか無いから説明しようが

無いですけど…適当な事でも言おうかと考えてるとリュージユが話しかけて来た

「…家までなら何故わざわざ聖獣に乗っていくんだ？転移魔法使えば簡単だろう？」

「……………」

ええ…忘れてました、すっかり忘れてました。さっきまでは頭がぐちゃぐちゃだったんで…考える力も無かったんですけどね…今は普通に忘れてました。ただ素直にそれを認めるのは何だか癪なので…

「…わわ、わかってたわよ。ただ…ちょっと空中散歩したい気分なの…！」

「そうなのか…！」

嘘です、ほんとはもの凄く喉渴いてるんで早く帰れるなら早く帰りたいです。ああ…あたしの馬鹿。何こんなところで意地を張り合ってるんだか…これは弱い自分を見られた反動ってやつですかね…そんな腹の足しにもならないプライドは捨てるに限る。さっさと謝って転移魔法で帰る…

「コハルは火系の聖獣なので私とは相性が悪い。なので私も聖獣を呼ぼう」

「……………はい？」

「ルシエーリア…！」

「いや…あの…転移…」

リュージユが見上げた空を追って見上げるとそこに大きな魔力の渦が現れていた。渦の中から現れたのは…どう見ても影だけ見るとでかいワニ…コハルだけが凶悪なのかと思ってたけど…もしかし

て聖獣って全部こんなのばっかなの？聖獣って言葉に夢を見ちゃいけないかったの？しかもその見た目にルシエーリアはないでしょう…

「……………」

リユージユのワニこと、ルシエはどれだけ凶暴な見た目なんだろうって思ったけど側に来ると意外や意外…美しかった。ワニのような姿だけとあんなごつごつした皮膚じゃなくて、魚の鱗のような物が身体を覆い、透き通りそうな水色をして光り輝いてる。瞳も全体的には透明で宝石のキャッツアイのように縦に一筋だけ青いラインが入っていて、こちらをじっと見つめている。

「…綺麗」

「そうだろう。ルシエとは一番長い付き合いだ」

微笑みながらリユージユは優しく側にいるルシエの身体を撫で、ルシエもそれを気持ち良さそうに受け止めている。うう…聖獣呼ばれちゃったら、それで帰るしかないよね

「コハル…んじゃ、さっさと帰ろう」

「では背にお乗り下さい」

「ん…」

あたしは伏せたコハルの背中にうつぶせに乗ると、何気なくリユージユの方へ視線を向けた。いや…だって空飛ぶワニとかって…普通見てみたいでしょ？しかもリユージユの乗り方とか気になるじゃない。まさか綺麗なルシエの背に立ったりとかは無いでしょ？

「主…飛びます」

「いいよー」



リュージュ達より先にコハルが翼を羽ばたかせ飛び上がる。全然翼によって揺れる衝撃がないから翼をはためかせなくても飛べそうな気がするんだけど…まあ…見た目も重要だよね。

先に飛び立ってしまったので疑問が解決されてないんですけど…なので空中で安定した状態になってすぐ後を振り返ってしまった。

…ワニが飛んでいます。普通に水の中を泳ぐみたいに前脚がふにふにと動いてらっしゃいます…ふにふになのに凄いですピードだし…うん。聖獣には陸海空は関係ないのかもしれない。そしてそれに乗るリュージュは…

「……何故横乗り」

あれですよ、あれ！好きな男子の自転車の後に女子が乗るあれですよ！

いや…美形なんで風に髪をなびかせてすっごく絵にはなるんですけどね…なるんですけど、せめてさっきあたしを抱きしめてくれた人には少なくとも少年のように股がっついて欲しかったというか。

「ねえ…コハル。乙女心は複雑だね」

「主？」

「うん…複雑だ」

一人納得するあたしにコハルは首を傾げたけど、それ以上は深くつつこんでこなかった。あたしの状態が回復したからか高度を上げて飛んだので、さっきコハルが言っていた民家は見えなかったし、降りるまでとは全然違う速度だったのであつという間に村まで戻ってくる事が出来た。あたし達が村の外れに降りた後すぐにリュージュとルシエも降りてくる。

そして降り立ってすぐルシエは軽く浮くとリュージュの周りを一回りしてまた空中に戻り、魔力の渦を発生させその中へと潜ってしまった。

「…あれはどこに行ったの？」

ルシエの一連の行動を見つめながらあたしは側のコハルに聞いた。

「私たちは魔力の塊ですので、通常の空間でこの形態を取る事は自分と主の魔力を常に消費してしまいます。ですので普段はその力を使わずにすむ魔空間に身を寄せます」

「へえ…じゃあコハルも？」

「私は…魔力を持って余してるぐらいなので…それに主が常に補給して下さいますし…」

「……………」

ガソリンスタンド安佐水。ふふ…もう開き直ってきたよ

「ですが魔空間に入る事も出来ますから、何かあるようでしたら仰って下さい」

「まあ…その都度考えるよ。今は別に居ていいから」

「はい」

居ていいと言われた事が嬉しいのか尻尾がブンブンと揺れている。可愛い奴め…ぐりぐりしてやるうか…

「アサミズ…何やってるんだ？」

はっとして声をかけられた方を見るとリュージュが呆れた視線を向けていて。どうやら想像でコハルをぐりぐりとしていたら手がワ

キワキと動いていたらしく…そんな場面を見られ…固まってしまっ。

「…手の…運動？」

「…アサミズは時々おかしな行動をする」

いやいや…ワニに横乗りしてた人に言われたくないしっ！！

とりあえずリユージュの発言は無視してあたし達は家に向かった  
のだった

## 56話 夢見る聖獣（後書き）

なんだか入試だけで結構な長さになりそうなので、章のタイトルを  
魔術学院入試編へと変えました

## 57話 皇帝モード

玄関を開けると忘れていた悲惨な部屋の状態をが飛び込んできた。うん…そういえば昨日コハルが産まれた時に酷い状況になったんだっけ…玄関と天井は直したけど、破壊されたままの机とか散乱した本とか…そのまんま。で、今のあたしの状況はその部屋の真ん中に正座させられていたりする。目の前には椅子に座ってそこから中に散乱していたあたしの受験資料を手にとって目を通してるリユージユ。

「…これも古い。全然使えない」

リユージユは手に取っていた本を投げ捨てた。投げ捨てた先にはすでに山のように本が積み重なっており、それらはすべてここ一ヶ月あたしが受験勉強に参考書にしてきた本たちだった。もちろん「はじめてのまほうのつかいかた」もすでに山の一部となっていて、リユージユはため息を一つ吐くとあたしに視線を向けてきた。

「こんな資料で勉強していたのか？」

「はは…」

だつて村の本屋で買える本なんてたかがしれてて、これでも一番近い大きな街から取り寄せなんかをしてもらって精一杯のものを買ったのだけれど…

「アサミズ…帝国魔術学院は帝国の中でもトップクラスの学校だ。その学校に私やメルフォスの後盾なく平民受験で入学したいのだから？」

「……はい」

「…敢えて聞くが、入試の筆記試験の魔法陣はどんな物を用意するんだ？」

「もちろん『はじめてのまほうのつかいかた』から適当に魔法を写すつもりでしたけど…そんな事を言ったら殺されてしまいそうな気がするのよ空気読めるんでわかります。」

「まだ…考えてなかったかも…ほら！昨日試験内容知ったばかりだし！」

「……………」

リユージユが頭を抱えるのを見て「あ…あたし落ちたな」って確信しちゃったり…どうしよう？とりあえずライザ母さんが帝都で開く店をお手伝いしながらもう一度きちゃんと受験勉強するしかないか…ま、やって無駄な事なんてないのだし、この一ヶ月の勉強だったきつとどこかで役に立つだろう。」

「アサミズ…」

すっかり頭の中で再来年受験モードに切り替わっていたあたしに地を這うような声が届いた。声の方を見るとリユージユが笑顔だけでなく背後に黒いオドロオドロシイものを背負ってる。見るからに皇帝モードになったリユージユに嫌な予感がする…というか嫌な予感しかしない。この人にギャップ萌えとかありえないし、ひいって叫び声しか出ないわ！

「今から猛受験勉強だ」

「え？いや…あたし再来年入学でもいいし、っていつか受かるまで頑張るし」

「…絶対来年入学させてやる。すぐに私と一緒に帝都に來い。そ

それぞれのエキスパートな先生も見繕ってやる。…城でみつちり試験勉強だ。まさか平民受験したいって言ったくせに断るなんて事しないよな？」

さらに笑みを深めるリユージュはあたしが正座のまま壁際までズザザザって下がってしまっただけで恐ろしく。…怖すぎる…いつもの紋章使いのわんこリユージュは何処へ行っちゃったんですか!? 助けを求めようとコハルに目をやっても頑張ってといわんばかりに尻尾をフサフサと振っている…裏切りやがった…

「しつかり陰から見守って合格させてやる」

ダラダラと流れる汗はもちろん冷や汗で、そんなあたしを見てリユージュの背後の黒さがどんどん増していつてるのは…気のせいであって欲しい。そして黒いリユージュは尽くあたしの先手をつぶして行く

「ちなみにメルフォス家がどうのって言い訳は聞かないからな、メルフォス家も今週中には帝都へ引越した。2・3日アサミズが早いぐらいどうってことはない。それどころか帝都の城に『1人』で居るメルフォスは早めにアサミズが来れば喜ぶだろう」

…メルフォスさんの裏切り者おー!!…なんて本人にとって完璧な八つ当たりの全く意味の無い八つ当たりを心の中でしてみる。それにしても黒い!黒すぎる!!リユージュ!!

「…でも試験まで後一ヶ月しかないけど」

「俺を誰だと思っている、皇帝だぞ?この国で俺の思い通りにならない事はない」

いやいや…皇帝の力を一平民受験に例えるって間違ってますから。まあ…リユージュに適当に付き合って…でもそれをやって落ちちゃったらどうしようもないし。また再来年受験という事で…そんなあたしの考えを読み取ったのかリユージュは椅子の背に持たれ、組まれた足の膝部分で手を握った体勢だったものを、足を開き、膝に肘をついて組んだ手の上に顔を乗せた前屈みの状況で笑った。

「アサミズ：再来年など無いと思え。平民受験に失敗するようであれば私の力だろうが後見人だろうがどんな手を使ってでも入学させるからな」

ひいいい！！そんなまんま裏口入学、一番嫌です！！！！

「頑張ります！頑張りますから…勘弁して下さい」

「死ぬ気でやれ」

「了解でありますっ！！」

あたしがとつさにした敬礼姿勢に満足したのか、リユージュは椅子から立ち上がると玄関に向った。

「30分で大事な物と簡単な身の回りの用意しろ。後の荷物はメルフォス夫人によるしく伝えておく」

そんな捨て台詞を残しリユージュは出て行った。

うう…確実に一ヶ月地獄が待ってる。皇帝モードのリユージュ恐るべし。これ以上怒らせる事は避けたいので、この世界に着て来た服や、鞆。そして数枚の着替えと日用品などを慌てて荷造りした。



もちろんコハルの首元を腕でロックして頭に拳骨でグリグリする  
事も忘れない

## 58話 再び帝都へ

きちんと30分後に戻ってきたリュージュはあたしがきちんと荷物を用意しているのを見て満足そうに頷いた。話を聞くとライザ母さんへの挨拶とミレーヌと一緒に行きたがったのを止めるのに苦労したらしい。最終的にはライザ母さんを1人この村に置いておくわけにもいかないので…となったらしい。自分が戻ってすぐにメルフォスをこちらに戻すと言った事も説得の勝因だったらしいけど…

「ではアサミズ行くかうか」

リュージュがあたしの荷物を持ってこちらを向く。…だけどまだ疑問があるんで

「あと少し待ってもらえますか？」

につこり笑ってリュージュに言うと、あたしは側にいたコハルに目を向け話しかけた。

「転移魔法ってコハルも乗れるの？」

「主、私は一度魔空間に入って主の気配が落ち着いた時点で合流します。主の魔力があれば迷う事なくどこでも合流出来ますので安心して下さい」

なるほど。そういえばリュージュのルシェもどこからともなく現れた魔力の渦から出てきてたもんね。

「そっか。じゃあまた後でね」

「はい。主も快適な旅を…」

そういうとコハルは空中に浮かび口を大きく開け魔力の渦を発生させた。その中に飛び込む姿はいかにもファンタジーな感じでちょっと感動した。さて快適な旅が出来るかどうかは今からこの人を説得出来るかにかかっているんだけどね？あたしはコハルが魔力の渦に消えるのを見送った後にいつの間にか背後にいたリュージユに顔を向けた

「もう済んだな？なら行くぞ」

「あのお…その事なんですけどあたし…転移魔法かけます」

「何故だ？帝都へは私の方が慣れてる」

ガース国の人のので懲りたんで、絶対他人の転移魔法に乗るのはごめんなんです。ただそんな事を言ったらガース国の使者さんに酷い扱いをされた感じなので、どうにか穏便にあたしが転移魔法をかけたいんですけど…

「あたしの方が魔力あるから」

「っ！！」

…あ、落ち込んだ。だって…ねえ、ほんとの事だし。使える魔法は少なくとも使える物の技術は多分あたしの方が精度高いと思うし。落ち込んでる姿のリュージユを無視しつつ…だって仕方ない事のフオローとか面倒くさい…

「…そんな感じなんで。これかけて」

あたしはリュージユに用意していた転移用サングラスを渡す。

「これは？」

「まあ…かけてれば分かるから」

そう言いながらあたしは自分用のサングラスをかけると、髪に魔法がかかったのがわかる…：そういえばそんな追加魔法を組んでたんだ。…すっかり忘れていたけど…：目の色とか…：コンタクト作るのとかもすっかり忘れてたし…

「こんな時に何なんだけど…：城で魔法実験とかしてもいいの？」

「…？被害が出るような危険な実験であれば事前に申請がいるが、それ以外であれば大丈夫だ」

シリコンハイドロゲルを合成するのに…：爆発はしれないと思うけど…：。取り扱い間違えたら有毒ガス出る工程が確かあった筈…：ただこれは白の加護を使った合成だから、城の資料で他に対処出来そうな物があればそれでもいいかな、瞳の虹彩とか変化出来れば一番簡単で目に負担が無いし…：あたしが考え事している間にリユージユもサングラスをかけたのであたしはリユージユに向ってにこっと微笑むが、…：どうやらリユージユは目を瞑っているようで何のリアクシヨンも帰ってこなかった…

「…それじゃ行きますか」

と言ってから初めて問題が生じた。あたし他人を転移魔法に乗せた事無いんですけど…：よく考えたら自分の身体構造と転移魔法を合成させて転移してたから他人を乗せるなんて出来そうに無いんだけど…

「あの…リユージユ…」

あたしが話しかけるとリユージユが目を開けた。

「…どうした？」

あんだだけ大見得切っつとして…今更出来ないとか非常に言いにくいですが、正直に言わないとリユージユにあたしのやり方で無理やり転移魔法に乗せて身体バラバラとか洒落にならないので…

「あたしの転移魔法1人乗りかも…」

「は？」

「…というか人を乗せたことが無いから、やっぱりちょっと怖いわ」

…だからといってリユージユの転移魔法に乗るのも怖いので…

「というわけで…現地集合にしませんか？」

「…何が』というわけで』だ」

「うう…だって…」

リユージユを乗せれない、リユージユの魔法に乗りたくない…どちらも絶対譲れない。そんなあたしにリユージユは大きい溜息を吐く

「ならば…私がアサミズの追尾魔法をかける。それでいいか？」

「…追尾？」

「いわゆる便乗魔法だ」

リユージユの説明を簡単にすると、メインの魔法をかける人が居て、そのメインの魔法に便乗が出来るグループ魔法らしい…それなら自分が使えなくても上級魔法に便乗出来るらしい。便利な魔法があるもんだ

「じゃあ…それで…あたしは普通に魔法かければいいんだよね？」  
「ああ。すぐに行くから転送空間で停止しておいてくれ」  
「わかった」

そういうとあたしは自分の身体を認識して転送魔法を合成していく。いつものように自分の身体が沈みきったところで目を開ける。するとすぐにその空間に歪みが発生してそこからリユージユの身体が現れた

「へえ…転移空間に現れるのってこんな感じなんだ」

リユージユはあたしの横に着地すると、手を四方に動かし何かを確認している。盲目の人が行なう行動にリユージユが目を瞑っている事がわかる

「リユージユ…目開けても大丈夫だから」

「？だが…光が…」

「いいから開けてみてよ」

あたしがそう言うところを向いて目を開けようとしているらしいが、サングラスに遮られ開けているのかどうか確認は出来ない

「これは…」

驚いた口調を聞いてようやく目を開けたのだとわかる。辺りをきよるきよると見渡し、それからまたあたしへ顔の向きを戻す。

「これのお陰か？」

そういつてリユージユが自身のサングラスに触れる

「そ、この転移空間の光でも耐えられる魔法かけてるから」  
「驚いた。さすがだな……」

あたしは褒められた事に素直に照れてしまう。

「じゃ。スピード上げて行きまーす！」

そう言ってあたしが乗ってる道の加速を上げると、リユージュがよろめいた。慌てて彼の手を掴むと、安定した後もずっと城に着くまで離してくれなかった。

## 59話 悪魔が来たりて、地獄を言い渡す

帝都の城に着いて、次の日は休みを貰った。その間にメルフォスさんに会ったり、城の間取りを覚えたり…全部は覚えられなかったから自分の使用しそうな所だけ把握した。あたしに用意された部屋はリユージュの部屋以上に豪華絢爛な部屋で、客間らしいその部屋は落ち着かないので部屋替えを希望したが泣きながら懇願という却下をされ…仕方ないので部屋にあつた移動出来そうな家具で一部の空間を四畳半に区切った。用意された、というか元からあつたベッドがその中に入るわけがないので、調理場からいらぬ木箱を大量にもらつて囲われた空間に簡易ベッドと机を作った。

傍から見るとデカイ応接間の隅に突如バリケード部分が登場したみたいになっており、中に入ると…木箱による簡易机とベッド…戦後の香りがプンプンと漂うけど…うん、落ち着く。そんな感じで次の日は終わり、こんな感じで1ヶ月過ぎるのかと思いきや…

「…落ち着いたか？」

と夜にリユージュが持ってきた今後のスケジュールに村に逃げ帰りたくなつた。

「…何ですか？これ」

手の中にある1ヶ月の予定表を凝視してしまう。見間違いかと思つたそれは何度見てもやっぱり変わらぬ…

「月曜、言語。火曜、魔術（医術含）講義。水曜、魔術（医術）  
実技。木曜、政治経済。金曜、歴史・地理。土曜、剣術訓練。日曜、



礼儀作法。各1日休憩は10時間……え　つとどこから突っ込めばいいの……」

「……これでも最低限だ。期間が短いので全部上澄を浚うぐらいしか出来ないだろうが……しないよりマシだからな。ちなみに明日から朝から晩までみっちり各指導者の指示に従って貰うぞ」

「つかぬ事をお聞きしますが……休みは……」

「この1カ月は基本無いものと思え。ただ頑張り次第では2週目からは考えないでも無い」

……鬼が居ます。いや、鬼より恐ろしい皇帝がいます。

「……死にます。確実に死にます」

「大丈夫だ。調子が悪くなったらシーがいる。私が皇帝に就いた時にもシーが居たから政務で2ヶ月ほどほぼ不眠不休でも大丈夫だった。人間そんなに簡単には死なないさ」

いやいや……筆頭医確実に皇帝に何らかのジャンキー状態にしているよね？それ。あまりの恐怖にひいひいとワザとらしいほど怯えてみせるが、リ्यूージュは動じない。

「ちっ……」

軽い舌打ちをしたあたしを見て、リ्यूージュがスケジュールに何か書き込んでいる。それを再び渡されたあたしはソファに座っていたのをすぐ降りて土下座した。

「申し訳ありませんでしたあ！頑張りますから『休憩時間。時と場合による』は元に戻して下さい！」

半泣きのあたしを見て、リ्यूージュは無言で訂正に訂正を入れて

くれた。だってどうみても10時間って休憩時間＝1日分でしょう？食事とか睡眠とか全部含まれてるんですよ？それを時と場合によるって……リアルに恐ろしすぎるでしょう。

「…あ、8時間になってる」

「ペナルティーだ。1週間ごとに見直すから、頑張って休憩時間も伸ばせ」

そう言ってリュージュはソファを立つと、「今日はゆっくり休めの今日の部分を強調して部屋から出て行った。その後にあたしのおおおお」という嘆き声が城全体に響いたのは言うまでもない

59話 悪魔が来たりて、地獄を言い渡す（後書き）

300万PVの感謝を込めて、通常更新とは別に、短いですがカットしようと思っていたシーンを載せました。

ありがとうございました。

## 60話 月曜日、言語

12時間の勉強時間に24時間分ぐらいの勉強してみ？：普通に死ぬるよ？魂が放心された状態のあたしの前に立つのはこの国の宰相と呼ばれる男：あたしの中での命名は『リ्यूージュだけ（こ重要）ラブな腐れ鬼畜』いや：ラブと言っても元世界でもっぱら腐女子の方に人気のそれではなく：根っから心酔してますって感じ、あ、でも年上だから溺愛の間違いか：

彼のあたしの四畳半の部屋を見て第一声が「：アサミズのようにすね」だったから：それは身体の事を言ってるのか、性格のみみちさを言ってるのか、それとも根っからの平民根性を言ってるのか判断しかねたのでとりあえず笑うしかなかった。それにしても木箱で一人勉強する平民の図はいいとして、4畳半に男の人と二人で居るのって息苦しい：しかも貴族様だから威圧感半端ないし：これは一人で四畳半は落ち着くけどカテキョがいる時はちよつと：なんて手を動かしながら考えてたら

「アサミズ、ここの綴りが間違ってます。余計な事を考えずに集中しなさい」

と言つて宰相が持っていた指示棒であたしの手を軽く叩いた。：何度目かのその行為は軽いくせに地味に痛い。宰相が教えてくれるのは貴族・その他言語各種と政治経済で初日の3時間ぐらいは休憩挟みながらゆっくりと進行してくれてたのに、あたしが実は25歳だと知った途端、態度が180度変わって超スパルタ方式に変換されたのだ。やはり若い方がいいのね！！と1時間ぐらいごねて愚痴ってやったら

「あのですね…12歳と25歳で態度が違うなど当然でしょう。はつきり言いますが12歳が持つ知識量と25歳が持つべき知識量では天と地ほど差があります。持つべき知識を有していない、つまり今の貴方は12歳ではお利口ぐらいです。そんな貴方がそもそもより博識を必要とされる魔術学院の試験に合格しようとは…はんっ」

…最後の『はんっ』はご想像通り鼻で笑われましたよ。それから休み無しで貴族言語の文法やら書き取りやら…書き続けて10時間。腱鞘炎で人って死ぬる気がしてきた…。右手親指の付け根部分からとんでもない悲鳴が聞こえる…。元世界のどの受験でもあたしこんなに勉強した事ないです…そしてこういうところにハイスペックが欲しかったと切に願ひ続けて8時間ぐらいです。

「…それにしても何でこの国には成人貴族文字だけで3種類もあるんですかね？言語的には一種類なのに」

「簡単には貴族の中にも高位貴族・中位貴族・下位貴族があるからでしょうね」

「あゝ公侯伯子男ってやつですか？」

「おや、爵位はご存知ですか？一概にそれだけとは言えませんが…高位文字は公・侯、中位が伯・子、下位が男・騎を扱うと思っただけならば…」

改めて思うけど何故一つにしない…。あたしの不満が顔全面に出していたのか、宰相は苦笑すると別の解釈も述べてくれた

「高位文字は主に政治や調印等に使用され、中位文字は貴族同士の手紙のやり取りなど、下位文字は中位文字に平民文字が混ざった物です」

うん…意味はわかるけどさ、何にしても…25歳で一から習うのはキツイ〜」。

「いたっ！」

「アサミズ、集中力が切れてますよ。ここの文法が違います」

「…うい〜」

下位文字は平民文字に近かったので結構楽にクリア出来たし、中位も下位からの流れで何とかなった…。問題は高位文字で中位や他の文字とも全く異なった文字で形成されてるからかなり大変。元の世界に例えるなら英語とか中国語などの辛うじてわかる物を習ってる中、突然アラビア語がやって来ましたな感じ。

手を叩かれた出したのもほとんど高位文字になってからだし…元々勉強嫌いじゃないけど…まじでこれを4週間で覚えるのはキツイんですけど…

「…高位文字って試験までになんか覚えなきゃいけないんですか？」

「覚えていて損はないです。陛下に言語は全てマスターさせるよと言いついておられますので」

リユージユの馬鹿やろ〜！って心で叫びながら満面の笑みを浮かべて宰相を見る。こつ見えても営業で鍛えた笑顔を貼付ける技術は伊達じゃないです

「…少なくともアサミズは政治に向いてるようですね。どうですか？魔術学院受験を止めて城に勤める事を考えては？それならば言語と政治経済だけで覚える事は済みますよ？1ヶ月なんて括りもないですし」

いやいや…政治なんて全然関心ありませんから…。そんな物に關わると碌な事が無いって知ってるし！それでなくても厄介事を一杯背負い込んでるんで、これ以上はご免被ります。っていうか魔術習えなきゃ意味ないしっ！

「結構です。地味に頑張ります」

「………そうですか？ならばもう100回この単語集の書き取りをお願いします」

…かなりのページ数ありますが？視線だけで「全部ですか？」  
「全部です」の会話をした後あたしは思わず叫んでいた

「鬼いいいい！！！！！！」

まあ…そんな泣きそうな宰相のスパルタ教育のお陰で3週間目には25歳が知っているであろう全ての言語が理解出来るようになりました。

## 61話 アサミズヒヨリ改造計画

生まれてこの方、清しい朝をこんなに恐ろしく感じた事は無い。初日の言語授業で完璧に腱鞘炎になった手はズキズキするし、頭の中は昨日覚えた事が耳からどンドン流出していくのを防ぐのが精一杯。こんな状況でどうやって新たな知識を詰め込めというのか…そんな事を簡易ベッドの上でボーッと考えてる間に時は無常に過ぎていき、バリケードな家具の向こう側の扉がノックされ、扉が開かれると同時に声が聞こえてくる

「アサミズ様、お早うございます」

返事も聞かずに部屋に入ってこられたおば様…ナサエラさんは侍女長らしく、城に滞在している間、作法の事など何もわからないあたしの面倒を見てくれるらしい。バリケードの入り口からちらっと顔を覗かせこちらを確認してくる

「ラツシュ様がすでにいらっしやってますが？」

「…？ラツシュ様って誰です？」

「本日の魔術講義の先生でいらっしやいます」

あたし…今起きたばかりなんですけど。習慣になっている7時起床。つまり

「…まだ朝の7時ですよね？」

「はい。初めてお目にかかるので一緒に朝食を、といらして下さったようです」



いりません！そんな気遣いりませんっ！何が悲しくて今日一日ずっと顔を合わせる人間とさらに長い時間を過ごしたいと願う人間がいるんですか。プライベートと仕事をきちんとわけましようよ！！！と叫びたくても、こちらは教えを請う身。うう…最弱な立場です

「わかりました。すぐ用意します」

「入浴をお手伝いいたしましょうか？」

「いえっ！いいです！」

来てすぐに入浴をお手伝い頂くという羞恥プレイは経験しましたので、あれからお手伝いはご遠慮頂きたいと心の底から願う次第です。この世界のお貴族様は日常的にあれっほんとに凄いと思う…。まあ…リ्यूージュとかエリルさんみたいな見た目が『美』な人なら大丈夫なんでしょうけど…けっ！

…うん。昨日の疲れが残ってて自分でもやさぐれてると思う。

それに何より初心者なんで人を待たせてるのにゆっくり入浴とかありえないし…

あたしは壁にかけてあった服を取ると着替えた。もちろん白シャツに黒のハーフズボンというこの世界ではどこの坊ちゃん？みたいな格好だけど、動くのに楽だし…それでなくても苦行な一日をずっとスカートやワンピースとか有り得ないし…ナサエラさんが手にしてるドレスなんて問題外です。

「ナサエラさん」

「はい？」

…そんな期待を込めた目で見ても駄目です。

「…それはちょっと」

「……………」

ナサエラさんが哀愁を漂わせドレスをクローゼットにしまっ後姿に、若干胸を痛めるがここで妥協してしまうと後が怖い。何故ならクローゼットの横にある鏡台には昨日まで無かった見た事の無い箱が一杯積んである。ドレスを着て鏡台へ直行し色々弄ばれる自分を想像してしまつて、ぶるつと身体が震えた

部屋替えを泣き落として却下したのももちろんナサエラさん

「…恐るべし、ナサエラ」

誰かからの極秘使命を受け『アサミズヒヨリ改造計画』とやらを実行中の彼女は油断ならない。彼女に届かないような小声で呟きながらあたしはだいぶ伸びて来た髪をいつものようにシニヨンに結つた…腱鞘炎のせいで乱れた感じになったのは愛嬌というか…やつれです…多分。ちなみに色はリュージュからピアスを返してもらつたので目の黒色が目立たない様に深い青にして、ふわふわモードから直毛スタイルに戻した。魔術関連の授業が始まるまでに瞳の色をどうにかしなくてはと思つていたのに、昨日は疲れ果てて不覚にも寝てしまった…

「どうしようかな…」

あたしは片耳のピアスを外すとそれに組み込まれた魔法式を頭の中に展開した。これにどうにかして目の色を変える方法を組み込めたらいちいちコンタクトとか考えなくて済むんだけど…髪みたくに単純にメラニン色素を弄ればいいつてもんじゃないんだよね…下手したら紫外線の抵抗なくしちゃうし…虹彩部分と網膜色素上皮のメラニン色素をどうにかしないと…メラニン色素がある場所は把握

してるのだから…黒褐色の真性メラニン部分を同じ構成の別の色に転化すればいいのよね？

「怖いけど…試してみるしかないよね…」

あたしはピアスに新たに眼球部分だけの固定魔法式を追加する。

それには真性メラニンと呼ばれる光を吸収して黒くなる色素部分を、光を吸収して赤く変化するようにし、左のピアスには左目部分だけを指定した。

「…よし、つけてみる」

そういうとあたしはピアスを耳に戻した。そして目に走る魔力を感じ、違和感が無くなった状態で鏡台とは別のバリケード内の鏡を見てみた

「うわ……ウサギみたい…」

その瞳は瞳孔までも赤くなり、この世界にいる火属性の瞳と違和感が無い様に見えた。

「やるじゃん…あたし」

黒目と赤目のコントラストは不気味でしかなかったけど、取りあえず黒目と赤目交互に手で隠して色々な物を見ってみるが、いきなり真っ赤な世界だったらどうしようどびびったのも何のその、視力も色判別にも支障はないらしい。あたしはもう片方のピアスにも同じ魔法式を追加すると、ついでに髪の色も黒に戻して、その足で今度は窓に向かい外の景色を見てみた。

「うん…とくに今までと変わらない」

光を見て眩しさを過敏に感じる事もなければ、視界はクリアな状態。

「アサミズ様？突然どうなされたのですか？」

ナサエラさんにとってはあたしが突然窓にへばりついてる状況が不可解なのか、ちょっと不安げな声を背後からかけられた。声のした方向へ振り向いてナサエラさんの驚愕の顔が飛び込んでくる…しまった…

「…あ、アサミズ様あつ！！め、目を怪我されたのですか!？」

慌てふためいて駆け寄ってくるナサエラさんに、あたしは手と首を思いっきり横に振った

「お、落ち着いて！あたしの目はこの色が元々の色なの、今日から魔術訓練だから変に幻術魔法とか自分にかけてくよくないと思っ  
つて…」

「…え？」

あたしの目の前で止まったナサエラさんの手は一体何しようとしてたんでしょうか？眼球抉られそうな形をしてるんですけど…怪我を調べるにしてもそれはちょっと危険だと思います…とりあえずこ  
つちもかなりびびった。

「まあ…火属性の方でしたの？」

手を元の位置に戻しながらナサエラさんがあたしに話しかけてき

た。火属性にしたのはコハルが火属性なのでその方が都合がいいと思っただけだからなんだけど…

「う、うん。ごめんね。驚かせちゃって」

「いえ…でもほんとにびっくりしましたわ。瞳に幻術なんてかけるんですのね…」

「あたしの祖国で流行ってたの」

瞳の色は嘘ですが、カラコンが流行ってたのは嘘じゃないんで…  
ナサエラさんごめん。

こうして黒髪に赤目の女が誕生し、どこのアニメキャラ？にナサエラさんの思惑とは違った『アサミズヒヨリ改造計画』は完了した。

## 62話 エネルギーは満タンで

魔術講義のお兄さんは一言でいうと優しい兄風の人だった。片目を覆う前髪は長いが全体的には茶色の短髪、見えている瞳も茶色の瞳。顔立ちはいい方なのに…周りが美形すぎるのも可哀想だなあ…と本人には有り難くもない憐れみを送ってしまう。あたしが部屋に入るとすぐに気付いて、立ち上がり入口まで迎えに来てエスコートの形を取ってくれるけど…これって日本人にはもの凄く恥ずかしいです…はい。

「お初にお目にかかりますラツシュ・ティディアーノと申します。医療部で副長をしております」

あたしを椅子まで導いてくれた後、その前で軽く会釈をしながらラツシュと名乗った彼は顔を上げるとにっこりと微笑んでいる

「あの…安佐水 日和です」

「…アサミズヒヨリ様、では、よろしく願いますね」

「あの…アサミズで結構です…」

そう言うのとそれに対してもにっこり笑って「わかりました」と了承してくれる。そして彼も元の席に座るとタイミングを見計らった様にそれと同時に部屋の扉が開き、従者さんがワゴンに食事を入れて入ってきた。

「アサミズ様、今朝は早くから押し掛けてしまつてすみませんでした」

「え!？」

並べられる食事に夢中で相手を見ていなかったあたしは突然の相手からの謝罪にびっくりしてしまった。…だつてさ、受験勉強中つて楽しみ御飯ぐらいだったから、つい同席者がどうでも良くなったなんて…言えませんか。

「いえ…こちらこそ、お心遣いありがとうございます」

「??」

今度はラツシユさんが疑問符を頭に浮かべ、不思議そうに頭を傾けてらっしゃるんですけど…え？初顔合わせだから気を配ってくれたんじゃないの？あたしナサエラさんに確かそう聞きましたけど？お互いがお互いに疑問符を頭に浮かべた状態で戸惑っていると、その間に食事が並べ終わつたらしく「失礼しました」の従者さんの声でとりあえず食べましようかの流れになった。あたしの「頂きます」に興味津々そうなラツシユさんを視界の端に納めつつも説明よりもまずエネルギー補給なので左手に焼きたてパンをがつつり掴んで、右手はフォークでよくわからない肉料理にブツさしましたよ！

…うん、ラツシユさんドン引きですね。でもいいんです！今は女気より食い気ですから、食べなきゃ持たない受験戦争っ！！

がつつが目の前の食事を平らげていくあたしに、最初はドン引きだったラツシユさんの視線が途中からキラキラ光るようになったのは気のせいですかね？

「…目の前で食事が綺麗になくなっていくのはこんなに気持ちのいい事なんですね」

うっ！…なんか変なボタンを押してしまった…。

そこからはラツシユさん本人は食べる事など忘れてテーブルの上で手を組んで顎を寄せ、うつとりこっちを見てます。とても食べるに  
くいですけど……いや、食べますけどね？

大半の食事があたしの胃袋に綺麗に納められ、目の前に食後の飲み物が並んだ辺りでようやくラツシユさんが話しかけてきた

「ところで……お心遣いってどういうことでしょう？」

「お心遣い？……ああ！」

はい……一瞬忘れてました。どうもあたしは満腹まで食べると頭の回転速度が極端に落ちるみたいです。八分目にする予定だったのに、ラツシユさんが食べないもんだからつい全部食べちゃいましたよ……。

「この朝食、初顔合わせで気を遣うだろうからって事じゃなかったんですか？」

「……………」

違っのかよっ……！

ならあたしのゆったりまったりな朝の時間返せっ……返してくれっ……！

「いや……それも理由の一つだったんですが……」

絶対嘘だね。片方だけの目が泳ぎまくってますよ？旦那。

あたしの胡散臭げな視線に気付いたのかラツシユさんはコホンっ  
と一つ咳を吐くと、あたしに視線を合わせてきた

「ちよっと気になった事がありました、授業の前にお伺いしよう  
と思っただんです」



「…気になった事？」

…何だか嫌な予感がするんだけど、気のせいであって欲しい

「はい。城の魔障壁のゲート…私も拝見させて頂いたんですけど

…」

「ぶはっ！」

…瞬間的に目の前の大人な男があの特徴的なゲートを潜る姿を想像してしまって吹いた。……はい、すみません真面目な話なんです。びっくりした視線で殺されかけた。怖いよ…この人実は怖い人だよっ！！

「……まあいいます。それにしてもあれほど綻びの無い完璧な魔法式を扱える人に今更なぜ各属性魔法の講座が必要なんでしょう？しかも陛下から指示された内容が初級魔法からの指導で…理解し難い状況なのですが、説明して貰えますか？」

…あ。ヤバい…冷や汗タラタラです。さっきの食事全部リバーシそうです。っていうかリユージュちゃんもフォローしとけよおっ！！！！！！

「え〜っつとですね…あの…ですね…」

…この人に黒の加護の事とか言っていていいものなの？そしたら目を赤くしたの意味なくね？…まあ…それはいいとして…どうしよう？…どうしたらいい？

テンパってほんとに気持ちが悪くなりそうになりかけた時、予想外の所から救いの手が入った。

「アサミズは異国からの留学生だ。出身国は転移魔法とシールド魔法に特化した国だったのでな…我が城の魔障壁もあんな風に細工が出来たのであろう」

「リュ…陛下…!」

危ない…名前で呼ぶとこだった…。

「これは陛下…お早うございます」

そう言うつと目の前のラッシュさんはすぐに立ち上がって、椅子の横に跪き頭を下げた。その姿を見てあたしも慌てて椅子から立ち上がろうとしたのに、リュージュに手で止められた。で、何故かあたしの顔を見て愕然とするリュージュに首を傾げると、リュージュが口をパクパクとさせながら自分の目を指差している

「あ…」

そう言えば…リュージュに瞳の事なんて相談してなかったね？あたしはにこつと笑みを浮かべるとし字型にした指先をくるつと回転させてみせ「ちえくんじ」と口パクで伝える

リュージュは安心したように俯きながら大きく息を吐き、大きく息を吸い込んで正面に顔を戻した時には皇帝の顔に戻っていた。

ちなみにラッシュさんは俯いているのでこのやり取りは見えていない。

「アサミズと朝食を取りにきたのだが…もう済んだようだな」

「申し訳ありません…アサミズ様とは初顔合わせでしたので、授業前に少しでも意思疎通を測ろうと思ひまして…」

いやいや…それがつつり表向きだけだったじゃん。呆れて物が言

えないあたしにリユージユが人差し指を口にあてる。はいはい…これ以上つつこまれない為にもここは黙つとけて事ですね…

「そうか…アサミズは私の大事な客だ。くれぐれも頼むぞ」

「はっ！心を込めて指導させて頂きます」

…心なんて込めなくていいです。普通に教えて貰えばいいんで…そんなに張り切られるとこっちが困る。

「ラツシユ顔を上げよ。…朝食には乗り損ねたようだから、私は朝食を後で食べるので授業開始まで茶には付合ってくれるな？アサミズ」

…朝食朝食って…根に持ってるの？

ほら…ラツシユさんの顔がちよっと蒼くなってるし…

そうしてご機嫌なリユージユと蒼い顔したラツシユ、そして気まずいあたしとの短い朝のお茶が始まったのだった。

### 63話 オタクに世界は関係ない(前書き)

3ヶ月目に突入しました。

毎日更新も読んでくださる読者様がいてくださるので維持できます

心より感謝いたします

### 63話 オタクに世界は関係ない

蒼い顔のラツシユさんと違う意味で蒼くなつたあたしの気まずい状態で始まつた魔術講義。だつてもうさっきまでのリユージユのお茶会が…びっくりで…内容は思い出したくもないんで…簡単に要約すると…

『うちのアサミズは出来る子だから、落ちたらお前の教え方だからな』

なんて宣言をしてくれちゃつて…でもね、リユージユ。それはあたしに対しても

『落ちたらラツシユがどうなるかわかつてんだらうな？死ぬ気でやれよ』

とも解釈できるわけで…。お互いよくわからない崖っぷちに立たされた状態でどうやって和やかに授業を始められるんでしょうね。リユージユが出て行つた途端にお互いテーブルに突っ伏したのは言うまでもなく、リユージユが部屋を出て行つたのだから外に待機していた宰相の我慢が限界を越えただけで、無理やり拉致られなかつたら授業が始まるまでどころか昼ごろまであたし達は解放して貰えそうになかつた。

原因が居なくなつた事によつてちよつとだけ気分を浮上出来て、お茶を口にしようとするばすでに冷え切っているのがわかり飲むのが悩んでいると、向かいのラツシユさんもカップを手にして一緒に行動を取つていた。ちよつとやつれた感じでカップを回す姿に自分

を重ねてしまい

「あ……」

そんな状況にお互い視線を合わせると、どちらからとも無く吹き出した。ひとしきり笑うとどちらからとも無く言葉がでる

「お茶淹れなおしましょうか」

「そうですね」

すでに授業開始の時間になっていて侍女さんや侍従さんが部屋には近寄らない事はわかっていたので、お茶を入れるために席を立つ。同じタイミングで二人とも立ち上がるうとしたのを、あたしの方がポットが近かったので「あたしやりますから」と言って止めた

お茶が湯気を立ててカップに注がれる。立ち上る香りに心を休めるが、勉強をするタイミングではコーヒーが欲しいなあと思ってしまうのは元の世界の名残。内勤作業の時はいつも傍らにコーヒーだったし…コーヒージャーキーだったから…あたし。

「アサミズ様？」

「うわっちゃー!!」

そんなことを考えてるとぼおっとしてしまっていたのか、声をかけられたのにびっくりしてしまい、持っていたポットを落としそうになる。慌てて手に力を込めると昨日の腱鞘炎がズキンと痛み、ポットを手から落としてしまう。

ガシャンと大きな音を立てて落としたポットは割れ、中から溢れた薄く茶色の液体は綺麗な刺繍の施されたワゴンのクロスに見る見る広がり染めてしまった。

呆然となったあたしにすぐ横からラッシュユが話しかけてくる

「火傷されませんでしたか？」

「あ…はい、それは大丈夫です。でもどつしよつ…」

魔法を使えばすぐに直せそうな気がするが、ラッシュユが居てはそれも出来ない。

「あたし…ちょっと謝ってきます」

悪いことをしてしまった時にはすぐに謝罪！そうすれば相手の怒りも多少なり収まるし…でもこんな高そうな物を弁償とか…うう、手元にお金、いくら残ってたっけ？

あたしがとぼとぼと部屋の外に向おうとするのをラッシュユが二の腕部分を掴んで引き止めてきた

「アサミズ様。大丈夫ですよ」

そういつとラッシュユは手を碎けたポットに向ける。そして何か口で詠唱するとポットが元の形に戻った。

「おお！」

「私は地属性ですので、物の修理は得意なんです」

パチパチと拍手喝采を送るあたしにラッシュユはそう言うと、あたしの頭をポンポンと軽く叩いた。そしてそのまま今度は汚れたクロスに手をかざして、同じように詠唱する。するとクロスに染みたお茶がどんどん蒸発していく。

「お？」

今ラツシユさん地の属性って言ってたよね？目の前で使われているのはどうみても火の属性の魔法で…あれ？属性魔法以外を使用するには魔法陣が必要なんじゃなかったっけ？受験勉強の最中に何かの本で読んだ気がするんだけど…

クロスが元の白さを取り戻すとラツシユさんがこちらに向いた。混乱したあたしの様子から「ああ…」と何かを察したのか隠れた前髪を手で掻きあげた。

「あれ…オッドアイ…」

オッドアイ…遺伝子疾患の一種で虹彩異常を指す言葉、元の世界ならそうなんだろうけど…この世界では瞳の色は属性を指すものだから…前髪で隠れていた瞳はあたしの今の色と同じ、赤く染まっている。茶色と赤い瞳。

「オッドアイ？それはアサミズ様の国の言葉ですか？ご覧の通り私は二つの属性を身に宿しています。周りがうるさいので普段は便利な地属性という事にしてるんです。まあこの力のお陰であなたの指導者という立場を得ることが出来ました」

「…それっていい事なんですか？」

あたしの指導者なんて子守、もしくは良くて家庭教師だろうに医療部の副長なんて立場の人がそれを買ってでるなんて…何か裏があるようにしか思えない。さっきもあたしの事何か疑ってたし…あたしの怪しい者を見る目を見てラツシユさんが苦笑する

「先程は失礼な事を言つてすみませんでした。ですが本当に純粹にあのゲートを作った方にお会いしたかったです。あの魔法式は本当に素晴らしかった。余分な物が一切何も無く、式の配置・組み



方全てが美しかった…」

そう言っつてうっとり宙を見つめるラッシュさんの視線を辿って宙を見てみても、もちろんそこには何も無い。え〜と…ラッシュさんは魔法陣オタクか何かですか？

「はは…」

「ですのであのような美しい魔法陣を組まれる方が初心者だなんて信じられなかったんです」

心底申し訳なさそうな顔を向けられ、あたしは「気にしてません」と首と手を横に振った。うん…色んな意味で魔術講座にぴったりの人な事も充分わかりました

「あのような魔法陣を他にも築いて頂けるなら…しかもそれを一番先に拝見出来るなんて…心を込めて指導させて頂きますよ」

うん…おかしな人だ。まだうっとりとした顔つきのラッシュさんはさっきリ्यूージュに対して言っていたのと同じ言葉をあたしに向っつて言っつたが、微妙にその言葉に艶がついているのは…気付かなかつた事にしよう。

63話 オタクに世界は関係ない(後書き)

すみませんまだ授業までたどり着きません…(汗)

## 64話 火曜・魔術講義？（前書き）

ストーリー・文章評価が2000ptを越えました  
嬉しいです。ありがとうございます

64話 火曜・魔術講義？

お茶を入れ直した後の会話は先程とは全然違って和やかな物だった。一番ビックリしたのがラツシユさんが25歳だった事…だって落ち着きすぎてるっていうか…どうみてもあたしより年上でしょう？

「っていうかタメ！」

「…タメ？」

「うん！あたしも25歳！」

…激しく失礼だよ？その反応。顎が外れそうな勢いで開いてますから、今までの落ち着きは何処へ行った？。しかも何また蒼ざめてんのさ…

「あ、アサミズ様…」

「あゝ同い年なんだし、敬語止めようよ。名前もヒヨリでいいし」

同じ年齢の人なんてこの世界に来て一人も会わなかったから素直に嬉しいかも、年下でも年上でもない同じ年…これってかなり貴重だ。

「…ひ、ヒヨリ様」

「ヒヨリでいいってば！あたしもラツシユって呼んでいい？」

「あ…はい。い、痛い…」

意味もなくとりあえずラツシユの背中をばしばしと叩く。いやあ…何かテンションあがる！何だろこの高揚感。しいていうなら高校入学したばかりで「君何中？僕二中」「僕も二中！」「まじで

っ！」みたいに盛り上がりたい感じ。

「じゃあ授業始めちゃう？」

「はい……」

…うん、まあ…あたしとラッシュの間にはテンションの温度差がかなりあるみたいだけど…。ただ、やっぱり副長の地位は伊達じゃないってというか、偉い人だなあって授業が始まると実感した。

\*\*\*

講座授業といえど、それなりのスペースが必要だと言われたのであたしのバリケード部屋は論外だった。

「…とりあえず、学習部屋を作りましょうか」

そういうとラッシュはソファや動かしたい家具に魔法陣が描かれた紙をどんどん貼付け、一通り全部貼り終えたら一気に魔法を発動させた。すると魔法陣を貼られた家具が少し宙に浮いた状態になる

「これで家具の重さが軽くなりました。ちなみにこれは地属性魔法で、物体の重さを軽くします」

「へえ〜便利だね」

ラッシュが家具に貼った魔法陣を一つ見て解析してみると、どうやら物を空中に浮かすというよりは重力を調整している魔法らしい。こんな魔法もあるんだねえと軽くソファを押してみると宇宙空間のように押された方向にふわふわと移動する。

「コレ面白い」

そこらに浮かんでる家具を突いて遊ぶ。家具同士がぶつかってビリヤードみたいに弾けるのを見て笑ってたら「遊ぶな」とラッシュに叩かれた。うーん叩かれておいてなんだけど…まだまだ遠慮が見えるなあ…「すみません」って謝られたし、友達になる道は遠い。宰相なんてばしばしあたしを叩いてきたんだし、もっとカモン！いや…決してM属性じゃないんですけどね…。

取りあえずスペース確保の為に応接室のソファやらを片隅に撤去して24帖ぐらいの広い空間を作り、そこに大きな黒板のような物を持ち込むと簡単な教室みたいになる。…こういう空間をわざわざ作るとどうして昨日は宰相とバリケード部屋で勉強したんだろ？とか考えちゃうよね…。

「凄いなあ〜あつという間に出来ちゃった」

あたしがそう呟いたのと同時にラッシュが家具の魔法を解除したらしく、ドンっという音が部屋に響く。

「さて、予定よりはかなり遅れましたが始めましょうか。ヒヨリ様、執務机の方へどうぞ座って下さい」

色々な意味ですみません。そのやつれの賠償が一番の原因であるリュージユに後で請求して下さい。あたしが言われた通りに執務機の椅子に座ったのを見届けるとラッシュは持ってきた黒板に何かを書き出した

そこには『天』『火』『地』『水』という4文字を時計でいうと天を12時に火を3時、地を6時、水を9時という場所で描かれていた。そしてそれを書き終わるとラッシュはあたしの方向へ向き直る

「この世界は四つの魔属性で形成されています。対象位置にある

物は反属性となっており相性が悪いです。各属性に補佐属性として無数の属性が存在していると言われており、現実にも今でも新しい属性の発見などもあります。ただどんなに新たな属性が発見されても全て4大属性のいずれかに所属しています」

まあ…これぐらいは自分で勉強出来ましたよ。天なんて元の世界では無敵っばいののにこの世界では補佐属性に『雷』や『風』が付いてる事から推測して、どちらかという大気や空中を表すような感じらしい。逆にもの凄く天っばい『光』は火の補佐属性で他には『炎』などが『火』の補佐属性にはあるらしい。

「ヒヨリ様の瞳が赤いように、人の魔属性の判定は瞳で行います。私のような者も極稀にいますが、一人一属性が基本です。単一属性では出来る事が限られてしまうので、自分の属性の横に書かれた属性の力を借りて、新たな出来る事が生まれます。例えば地属性の私が『火』や『水』の属性力を借りると『錬成』が出来るようになります。『天』の属性力を『水』や『火』が借りると雨などの自然現象が起こります。ここまでは理解していただけましたか？」

この辺は別にどの本にも載ってた事だし、ばっちり理解していますよ。あたしがオツケーの形を指で取るのを見て、ラッシュは頷きました黒板に向かって何かを書き出した

「…召還術と召喚術？何が違うの？」

「術者が聖獣や精霊の力を魔力化して使うのが召還術。個体を魔力化する事なくそのまま使役する事を召喚術と言います。聖獣や精霊は魔力が増幅して出来た個体ですので、どちらにも対応出来ますが、召喚術はその他にも使役契約を結んだ者呼び出す事が出来ます。ただし使役契約を結べるのは魔力が一定以上有るものだけです。見た事ありませんけど…膨大な魔力を持った人や竜族、海人

などが可能と言われていました」

…膨大な魔力を持った人って…もしかしてあたしも含まれちゃう感じ？あたしって実は召喚されちゃう側の人間？

「あの…質問いいですか？」

「何ですか？」

「例えば…あたしが竜族を使役しようと思ったたらどうすればいいんですか？」

…もしかしたらあたしがこの世界に来たのって何者かが行った召喚魔法に引っかけた可能性が高くない？ならそこに元の世界に戻るヒントもあるかもしれない！

「初心者が出来るはずもないですが…そうですね。書物などでは竜族や海人は直接会いに行つて合意の上、使役契約を結ぶのが正しいやり方と載っています」

うん？…そんな契約、元の世界で結んだ覚えないけど…？という事は召喚術はやっぱり違うのかな？折角異世界トリップの謎にちょっと近づけたと思つたのに…残念。

だけど続くラッシュの言葉にあたしは釘付けになった。



## 64話 火曜・魔術講義？（後書き）

後半はラッシュによる魔法説明文がだらだら続いて済みません。  
重要な設定部分なので次回もこんな感じかもしれません。

65話 火曜・魔術講義？（前書き）

すみません。ちょっと他でトラブルがあって短いです

## 65話 火曜・魔術講義？

ラッシュによって囁くように呟かれたその言葉をあたしはずっと求めている。

「禁戒の法であれば…」

「禁戒？…それって…」

禁って言われるぐらいだし、異法って事よね…。異法って言われると想像してしまうのは自分の存在であって…それって…

「…黒の加護や白の加護の事を指すんじゃないの？」

「ヒヨリ様は黒白こくはくの加護をご存知なのですか？」

「え？」

しまった…あたしは魔法に無知な留学生だった

「そういうのが存在する事だけ…陛下に教えて頂きました」

嘘ではない…はず。だって黒の支柱に会わせてくれたのだったりユージュだし…。ちよつと無理やりではあるけど自分を納得させる「そうですか…。しかし禁戒の法も黒白の加護も学院入試には関係の無い事です。それでなくても覚えなくてはいけない事が山のようにあるので、今は目の前の勉強に集中して下さい」

ええ〜!!!せつかく情報が得れそうだったのに!!!あたし的には受験勉強よりその件のが重要なんですっ!?!何てあたしが思っ

ても、目の前のラツシュはこの話の続きをする気は毛頭なさそうで、次の魔力の説明を黒板に書き連ねてる。

あたしはモヤモヤした物を胸に抱えながらも、不確かな情報に無理をすると身の破滅だと思っ取りあえず勉強の為に用意されていた紙の端に『禁戒術』と走り書きする。もちろん手が空けば自分で調べる為のメモで、ラツシュに見られないようにする事と後からすぐわかるように端を折り曲げた。

「それでは、次は魔力の説明です。魔力に純度があるのはご存知ですか？純度が高ければ同じ魔法を発動しても全然威力が変わってきます。魔力の純度が高ければ高い程、魔法力は上がるというわけです」

「純度？」

…そのアルコール度数みたいなのは何なんでしょうね？…後から金なんかも純度あったなあなんて考えて、一番最初にアルコールってあたし女としてどうなの？ってちよつと凹んだ

「はい。魔力というのは生体エネルギーの突然変異ですが、その中でもやはり属性魔力をずっと高めた家系と一代限りの属性魔力でしたら属性の魔力純度が全然違います」

「血筋って事？」

「はい、血統です。国の上位貴族達は大体これに当てはまりますね」

血統って聞くと、つい純血種！と売り出されてる動物を想像してしまうけど…意外とミックスの方が遺伝子的には強かったりするのにと考えてしまう。

「ヒヨリ様の火属性の純度を調べてみますか？」

「え？そんなの出来るの？」

「ええ。本来はチェッカーではないですが」

と言つてラツシユが部屋の隅から持つてきたのは、小さなガラスの中で火が燃え続けている一見するとランプのような物だった

「これは？」

「これは火灯籠といひまして、世界の標準と呼ばれる属性魔術師が各属性の力をガラスに込めた物です。この力を基準として同じ魔法陣でどのくらいの魔法を出せるかで純度を測る事が出来ます」

うーん、どうやってその世界標準が決められたのか…なんて突っ込みたいところは山のようにあるけど、それよりもまた訪れたピンチに頭が痛くなる

だってあたしの魔力って人外だし、普通にやっってしまうと騒ぎになるのが目に見えてるよね？ラツシユが火灯籠の底から魔法紙を取り出すのに苦労している間に、あたしは火灯籠をガン見する。

…これ以上大きくしちゃいけない。これ以上のサイズはまずい

念のように自分自身に唱え続ける。まるで呪いのようだけど、今一瞬だけ呪われて力が減ればいいのに…と本気で悩んだ

65話 火曜・魔術講義？（後書き）

コハルはどうなった？という声がちらほらと聞こえてきましたが、  
もう少し出るのは後になりそうです。

## 66話 火曜・魔術講義？

ようやくラッシュユが差し出した紙に描かれた魔法陣はあたしの愛読書『はじめてのまほうのつかいかた』にも載っている様な簡単な魔法だった。うん、やばい。これぐらいの魔法なら属性関係なく全部詠唱どころか念だけで出来ちゃいます。

「あ…の、さすがにこれぐらいだったら…詠唱で出来るけど…」

「もちろん火属性魔法の初歩ですから、火属性の者であれば詠唱で出来て当然なんですけど…これはチェッカーですので公正さが重要なんです。なのでこの付属の魔法陣で発動して頂きます」

おいおい…まだ念とか詠唱だったら何とか誤魔化せたのに、魔法陣とかで固定されちゃったら魔力を誤魔化せそうにないんですけど…！！

「はは…」

とりあえず顔を引きつらせながら紙を受け取ってしまった。魔法陣の解析をしてみてもチェッカーらしく、余計な部分が無いきつちりと組み込まれている物で、属性魔法を惜しみなく使う魔法陣になっていてラッシュユの目を避けて細工なんて事出来そうにない。あたしが冷や汗を背中に流しているとラッシュユが部屋の中央に別の魔法陣を描く

「…何その魔法陣？チェッカーに関係あるの？」

「いえ、魔法使用は事前に申請したんですが、何かあったら困りますので一応部屋全体にシールドを張らせて頂きます」

いやいやこんな初級魔法でシールドとかありえないし。うん？…  
もしかして私の存在気付いちゃってます？

「さあ、いつでもどうぞ」

「……………」

うえー。やりたくないよあ…今更止めますとか無理なんだろうなあ…あたしは手の中の紙の端を弄りながらちらっとラツシュを見てみた。まっすぐにあたしを見つめて逃げる隙なんてありゃしない。

…こつなりや覚悟を決めましょう。どうか、ラツシュのシールドの範囲で収まりますように…あたしは一度大きく深呼吸をしてから紙を右手の手の平に載せた。すると魔法陣が発動し赤く光を放ちだす。手に熱が伝わるのを感じると『出来る限り最小で！』と何度も念じる。効くかどうかかわかないけどね…

「綺麗な色ですね…」

うつとり魔法陣の色に見とれてる場合じゃないから…もしかしたら部屋吹っ飛んじゃうかもしれないからっ！！魔法陣の真ん中に赤い光が集められるとそこに火が発生した。

ポッ

「……………え？」

「……………」

えっと…あたしの見間違い？どうみても小指サイズのちっちゃな炎が一瞬現れただけなんですけど…この魔法陣の紙、おかしいんじ



やないの？まあ、求めてる事まんまだったんだけどさ…現実になると何だか複雑。いくら何でもこんなちっちゃい炎にしなくてもいいんじゃない？ほら、ラッシュだって言葉失っちゃってるし…

「ヒヨリ様…」

「わかってます！今度は本気でもう一度やり直します！！」

別に手を抜いたつもりはなかったんだけど、ちっちゃくなれと願ったのは事実なんで…今度はさつきよりちよつと大きくなれって念じた。光の発生も手の熱もさつきと同じで…やっぱり現れたのは『ポツ』で何度やっても同じだった。息の上がるあたしにラッシュが頭を抱えてる

「ヒヨリ様…本当に魔術学院の試験受けられるんですね？」

「はい…」

言いたい事はわかります。あたしもそれでも受かる自信が無いのに更に崖下に急下降してますから。

…というか、あたしって人外とか言われてるけど、それって全くのデマだったって事？

「…あたし全然普通の人間なんですかね？」

「…この状態だと、魔法使いとしては普通以下です」

「なんだ…」

あたしは身体から一気に力が抜けるのを感じた。

「何だ…全然普通なのか」

悲しくなんて全然無い。だって会う人会う人に想像の範囲を超え

る人間とか言われて…自分が化け物みたいで実は軽く傷ついてた。あたしの求めるのは平凡！ビバ平和！願いが叶った！！

「いよつつつしやああああ！！！！」

不出来を前にして雄叫びを上げるあたしにラッシュは心底呆れた視線をくれる。でもいいもんね！今のあたしを傷つける物は無い！あたしの黒目はこの世界での純粋な黒の加護の黒目とはきつと別物なんだ。大した事ないじゃん、あたしの黒の加護！早くリユージユに知らせてあげないとね

こんな平凡人には魔術学院なんて受からなくて当然だし、元の世界に戻るのには働きながら研究しよう！いやー良かった良かった！頭の隅っこで「ほんとに普通なのか？」とテリサン村で作った性能の高い魔法道具や質のいいと言われた魔石の事を思い出すけど…無視です！無視！！

「あの…、一応授業続けましょうか？」

ラッシュがあたしとは真逆のがっかりした様子で話しかけてくる。うん、あたしが凄い魔法使いなの期待してたんだよね？ごめんね！裏切っちゃってっ！！授業自体が無意味にも思えたけど、さっきラッシュが言ってた禁戒の情報がどんなタイミングで得られるかわからないし、ラッシュとの繋がりやちゃんと確保しておいた方がいいと思う。

「宜しく願います」

受験勉強すつごく憂鬱だったけどいい事があってよかった！あー今晚からすつきり睡眠出来るわっ！！

ラッシュが続きの説明をしている間中あたしのニヤニヤ顔は止ま  
らなかつた

66話 火曜・魔術講義？（後書き）

はい…ひより有頂天です。

## 67話 火曜 魔術講義？

この世界の魔法の常識なんて知らなかったあたしにとってラッシュから教わる事は新鮮で楽しかった。魔法の発動の仕方もあたしの独学とは全然違う物でそれによってあたしがどれだけ元の世界の力、つまり白の加護という物を使用していたのかもよくわかった。

簡単にいうとあたしが魔法を使う場合は魔法自体を化学式に置き換えて使用していたのだけど、この世界の人は体内にある属性の力を感じてそれを体外に発する際に魔法式をゲートに見立て、それを通過させる事によってあらゆる魔法となるらしい

「身体の中に存在する火属性魔力をこれで感じて下さい」

そう言ってラッシュから渡されたのは一枚の魔法陣が描かれた紙で、どこかで見た事があると思ったたら以前リユージユに貼られた魔力封じの魔法陣に似ていた

「これって魔封じの魔法陣？」

「いえ。陣は似ていますが別物です。先ほどのチェッカーである程度の結果が出れば必要ないと思っただけですが…あまりにも属性魔力が少ないので…もしかすると体内にある属性魔力を使いきれないという可能性もゼロでは無いですから。…普通は小さな頃に子供に体内の属性魔力を自覚させる為に使う物なんですけどね。ちなみにこの魔法陣では火属性が感じる事が出来ます。では目を瞑り、体のどこでもいいので紙を貼って下さい」

あたしが目を瞑り額に紙を貼ると「なぜ額なんですか…」と横から啖きが聞こえたけど無視した。だって…札みたいな紙は元の世界

では額に貼るものと決まってるのよ!!

何て考えてたら額のその紙がふっと消え、そして指先を掠る程度の暖かな感覚を感じ取れた。それと同時に体の中に感じる違和感に思わず声が出た

「ん？」

「ありましたかっ!？」

目を開けた途端にラツシユの必死な顔が飛び込んできた。期待をすぐくされてる目ですけど…結果を言いにくいです。

「あの…指先がほんのちよつと暖かかったです…」

あたしはその言葉を聞いてがくつと床に膝をついたラツシユの背中に手を置くと、ポンポンと慰めた。まあ…原因に慰められてもちつとも慰めにはならないと思いますけどね。何とか立ち直ったラツシユが最後の希望を持って火系の魔法を中心に魔法講座は行われたんだけど…初級魔法が辛うじて発動する事が出来、中級魔法では発動出来ない物がほとんどであり、上級魔法なんてとんでもないという仮発動の結果。散々な結果にどんどん顔色が悪くなっていくラツシユが死んじゃうんじゃないかって後半あたしはハラハラしっぱなしだった

「…本当に陛下は貴方を一カ月後の試験に合格させるつもりなんでしょうか…」

ラツシユが目を手で覆いながら呟いた言葉はあたしに向けられたものでは無さそうだったので返事はしなかった。シヨックの為か終了予定の時間よりだいぶん前に「とりあえず今日はここまでで…」と言って部屋にかけてあった全ての魔法を解除すると、ラツシユはフ

ラフラと帰っていった。そんな彼にあたしは出て行った扉に向けて  
出来の悪い生徒でごめんなさいと手を合わせて謝る。

さつきまでは『普通な自分』の余りの嬉しさに何も考えず喜んじ  
やったけど、冷静な自分がよくよく考えると「そんなわけないだろ」  
って事がテリサン村の事以外にもいつぱいあるのよね…。さつき体  
内魔力を調べた時に感じた違和感もその一つで、そんなの無視しち  
やえばいいんだけどさ…。どうも自分の性格上、物事ははっきり白黒  
つけないと気がすまないっていうか、立証あつての喜びだと思つたの  
よね…。さつきの体内魔法を調べる魔法陣が各属性分あれば簡単な  
だけ…。

あたしは部屋の中に向き直ると、先ほどラツシュが解除したシー  
ルドの魔法陣が今後の授業でも使うからと残されている事を確認し  
て、その側まで近寄った。

…どうかあたしの考えが間違ってますように！

一つの空論があたしの中に存在している。それは今までの喜びが  
全部吹っ飛んでしまうもので…。というか、よりどん底に落としそう  
な空論なので出来れば思い違いであつて欲しいけど…。あたしのこ  
ういう空論は昔からよく当たつてしまう。

その実証にはラツシュが残した魔法陣を使うのが一番手っ取り  
早い。

あたしは魔法陣の横に膝を立てて屈むと魔法陣に触れた。すると  
魔法陣が茶色の光を放ち、ラツシュより遥かに強固なシールドが部  
屋に展開される

「……………やっぱいいいい」

純度が大事なんですよと言つたラツシュの言葉が頭に繰り返され

る。魔法式を展開してみるともちろんこれは地属性のシールド魔法。

「…つまりあたしの純度はラツシユより高いって事だよねえ」

立証するにはあと2つ実験しなくちゃならないわけで…あたしは部屋のシールドが完璧に形成されてるのを確認してから「初級魔法は属性関係なく魔力の使い方は同じです」というラツシユの言葉に従って「はじめてのまほうのつかいかた」の水の初級魔法を習った発動の仕方で行ってみる

「我が力よ、水の流れとなって姿を現せ」

体の前に広げた手から言葉と同時に立ち上る水はまるで逆さの滝のように天井に向かう。すぐに手を握り魔法を解除したけれど、その結果、滝のような水は部屋に張られたシールドによって跳ね返り全てあたしの頭上に降り注ぐ。少し考えれば解りそうな物なのに…自分のお間抜けさには呆れを通り越して心配です。

「きやああ！！」

びしょ濡れとかのレベルじゃ無いです…ほんとに一瞬息が出来なかつたし、シールド張らなかつたらあたし水圧で死んでた気がする。何も水気が無い部屋で溺れ死ぬとか水による圧死とか可笑しすぎる変死体にならなくてよかった。何て安心してるのは逃避であって、もちろんそんな水が足元ちゃぷちゃぷ程度で終わるわけなく、余裕で床から2Mぐらいの高さになりました。天井が高かった事が救いですけど…今のあたしは浮かんだソファにしがみついている状態で、いわゆる漂流者です。打開策を考えてもシールドを解くと、この水が一気に城内に流れ込んで5階から水が襲うなんて状況になりかねないし、白の加護を使って水を変換させようにもこれだけの水を大



気に変換させたら水素と酸素が爆発的に増加してしまうので…それはそれで危険…氷なんかになると水に浸かった状況のあたし自身はやばい。なにより溺れそうな状況に陥ってパニックなんで落ち着いて化学とか考えられません。火属性の魔法で蒸発させようにも…指先ポツです。

…この水どうすればいいんでしょう？

あたしは部屋の中をぐるぐる漂流しながら「誰か助けて〜」なんて心で叫ぶしかなかった。

67話 火曜 魔術講義？（後書き）

はい…おバカ日和再び光臨です  
物語の紹介文を変えました。

## 68話 おかえりなさい

まだ授業中だと思ってる人達が助けしてくれるとも思えないし、ラッシュユが帰ってくる可能性も無い。窓から放水なんて考えもあるけど…あくまで最終手段。グルグルと部屋の中を漂いながら打開策を考えようとしても、水に体温を奪われて思考力が段々無くなっていく

「さ、寒い…部屋でタイタニックとかありえないし…」

どうしようかなあ…と思ってソファにしがみつき直そうとした瞬間、ソファがレザーのような素材だったのが悪かったのか、悴んだその手は見事につるんと滑ってあたしは頭から綺麗に水の中に落ちた。水の中で身体が回転しどちらが水面かわからない状況にパニックに陥る。

「ゴボツ！！ゴボボツ」

咄嗟に「助けてっ！」という言葉を叫ぶように口を開くと、そこからはもちろん声など発せられず、代わりに体内の酸素が無数の泡となって水面上がっていく。後から考えると水中で口を開けるなんて気がふれていたとしか思えないが、パニック状態に陥った時の人は冷静さなど保てるわけが無く、開けた口からは空気の代わりに大量の水が入り込んでくる。泳げる人がどうして溺れるんだろう？なんて不思議に思ってたすみませんでした。あたしも人並みには泳げるけど今、普通に溺れてます。水を含んだ服は手足をもたつかせ思うように動いてくれないし、何より苦しい。

”誰か…誰か助けて！！”最後の息が「ゴボツ」と泡となって口

から出ていくのをその目で追いかける。その時水の中にいるあたしにも聞こえる程の水音がし、何かがちらに向かってくる姿が見えた。逆光で影にしか見えなかったのに、あたしはその姿を見て手をそちらへ伸ばす。その影は何かであたしを包むと一気に浮上していく。水の中なのに濡れる気配のない毛皮はいつもと同じベルベットな触り心地で暖かかった。浮上は一瞬、ザバアという水音がしたと思うと水面より天井の方が近い位置にあたしは居た

「ゴホッ！！ゴホッ！！」

包まれた尻尾に大量の水を吐いても一瞬にして蒸発するが、あたしが触れても火傷するような事はない。それどころか尻尾が触れた部分の服がどんどん白い蒸気を出して乾燥していく。

「主、大丈夫ですか…」

心配そうにこちらを見つめる赤い目に泣きそうになる…だって…  
だって…

「こ…コハルううう、わ”ずれ”ででごめ”ん~~~~”」

はい、城に来てから見学やら目新しい事に心奪われ、すっかりコハルの存在を忘れていました。そんなダメ主人なあたしをコハルはここぞという時に救ってくれる。あたしはその体に思い切り抱きつき、顔をこれでもかというくらい擦り付けた。何て…何て使役獣の鏡のような子なんだあゝ。ダメ主人にはもつたないぞお！！そんな事を考えながらグリグリするあたしの頭にコハルが自分の鼻先をコツコツと当ててくる。

「うん…ごめんよ。あたしはコハルのお陰で大丈夫だよ…」

「主…そうでは無くて、いい加減この水を何とかしなくては」  
「……………」

…蛙の子はやはり蛙。コハルはあたしの安全確認だけした後は、感動の再会より被害状況の判断が先でした。いや…別にいいんだけどね…。

「私に少し案があるのですが…それを行っても宜しいでしょうか？」

「…どうにかなるなら何でもいいよ。やっちゃって」

あたしのその言葉を聞くとコハルは「では…」と言い、大きく開けた口から熱風を噴出した。熱風に触れた水はほとんど気化し白い蒸気が部屋に立ちのぼる。部屋から水を大半蒸発させた時には部屋が湯気で充満し、違う意味でしんどくなってきた。

「こ…コハル、この状況はちょっと苦しいわ」

部屋の中は湿度100%近くになっていて、不快感ハンパない。乾いたはずの服も身体にへばりつくし、何より暑い。あたしはシャツのボタンを上から胸のぎりぎりのラインまで外し、手で必死に扇ぐけど…とても解消されない。

「…この水の量でしたらシールドを解放しても被害はそれほどではないと思います」

「あ…そっか、シールドか…」

それを聞いてあたしはコハルから降りると、くるぶしほどになった水の中を部屋の真ん中にある魔法陣まで歩き、手をその魔法陣に翳してシールドの一部解除する。全部解除してしまうと城の中に残

った水が流れ込みそうなので座標指定を使って、窓部分だけを解除した。そしてそのままの足で窓まで行きそれを開け放った途端、一気に部屋の中の湯気が外へと放出され、それと一緒に、気圧の事をすっかり忘れていたあたしは窓から外に放り出された。慌てて手すりに掴まって必死に耐える状況に陥ってしまう。

「うひゃああ！！助けてえ！！」

情けない叫び声が部屋に響きわたるのが、自分で泣けてきた

## 69話 儂い夢(前書き)

すみません。

68話を訂正すると2話分の長さになってしまいました。

予想以上に訂正に時間がかかってしまったので…本日手抜きですみません

## 69話 儂い夢

あたしの情けないその声に即座に反応したコハルが窓の外に飛び出し、あたしの身体をまた尻尾で包み支えると、気圧のバランスが整うまで空中の安全な位置まで退避してくれた。

「主、大丈夫ですか？」

「うん…ごめん」

短時間の間に何度コハルの「大丈夫ですか？」を聞いただろうと、その声に謝りながら思わず首が縮こまってしまふ。しょげたあたしを見てコハルはあたしの頬を一舐めすると頭押し付け甘えてくる

「お怪我が無くて良かったです」

自分でも呆れるばかりのあたしにそんな優しい言葉をくれるなんて…やっぱりこの子は素晴らしい！！「コハルううう」と叫びながら顔に抱きついてモフモフしてたら結構な時間が経ってたらしく、申しわけなさそうにコハルが「もうそろそろ部屋に戻りますか？」と言われ…やっぱりバカ主ですみません。戻った部屋の惨状に顔を蒼くして突っ立っているとコハルが側にきてあたしに「すみませんでした」と謝ってくる

「どうしてコハルが謝るのよ」

「いえ…私が遅くならなければと思いましたが…少し主の魔力を辿るのに手間取ってしまっただけです」

どこでもわかると言っていたあたしの魔力が辿りずらくなってるっ



て事はやっぱりあたし自身の魔力が低下してる事が考えられるけど…ただ、さっきの水魔法と地のシールドの実験によって、それって火属性だけ限定だって立証されたのよね…

「…という事はあたし火属性の魔力無くなってるの？」

「…無くなる？」

あたしはコハルに火属性の力がほとんど使えなかった事を中心に今までの経緯を話した。コハルは何も言わずに聞いていたけど、あたしが話し終わると「ああ、それは当たり前です」と普通に返された。

「…つまり、あたしは火属性の魔力は持ってないって事？」

「違います。それならば私が生まれるわけがないですから。…しかしある意味それは私の責任と言いますか…」

「どうしてコハルのせいなのよ？」

コハルはさっきのあたしのように首を縮めて話しづらそうにしている。あたしは話を促すように「言っちゃいなさいっ！」と首元をガシガシと撫でてやった。あたしのガシガシ攻撃に負けたのか、気持ちよさそうにしているコハルが言った言葉に目が点になる

「私が魔魂の状態の時に主の火属性魔力を全部吸い尽くしたんです」

「はい？あ…もしかしてあの卵の吸引？」

「はい。全部吸い尽くされた状況になると普通は一ヶ月ぐらいは魔力を生成出来ないんですが、主は少量ですけど次の日には生成されていたので、そんなに心配はしていません。ですが、微弱になつていた火属性の魔力は他の属性魔力に圧倒されていて…」

「…ん？」

…つまりあたしの身体の中で、いじめられっ子な火属性魔力がいじめっ子な他の属性魔力にいじめられていたような状況だったってわけですか？

「私たち属性聖獣は同じ属性の魔力ならばすぐに探知出来るんですが、他属性になると結構な魔力が放出されない限り位置を特定する事が出来ないんです」

あたしが水属性の魔力を使ったから位置が特定出来たと…という事はやっぱりあたしは普通になつたわけでも何でもなくて…

「このまま火属性の魔力がいじめられっ子だったりするの？」

「いじめられっ子かどうかは…わかりかねますが、一ヶ月もすれば元の状態に戻ります。そうすれば他属性とほぼ同じ魔力に戻りますので」

今日ダムを作った勢いな水属性と同じ魔力：ラツシュの前で火属性がフルパワーじゃなくて良かったって心の底から思います。

「でさ…あたしの魔力、火と水と地だけって事はないよね？」

「もちろん。天属性も含め四大属性全てをそれぞれにその身に宿してらっしゃいます。それもほぼ無限に生成されていて、魔魂のように吸収されるだけ奪う物が対象でなければ魔力が無くなるなんて事はないと思いますよ」

吸収されるだけ奪うって恐ろしい事をさらっというね…コハルのお腹の中の雷属性の魔魂が悪魔に見えてきた。

「でも他の魔魂はちよつとずつ魔力を得ていくんでしょ？」

「はい。卵のまましているとより多くの魔力を吸収出来、孵化後の強さを決めます。ですが周りの卵がさきに孵化してしまうと食べられてしまう危険も伴いますので普通は魔力を孵化出来る最低限まで溜めると孵ります。簡単に言ってしまうと他の魔魂は腹三分ぐらいで孵るのに対して私は満腹で孵ったという状況でしょうか？」

自分がエサみたい…というかエサなんだけど、まあ…あたしの使えないハイスペックがコハルのお腹を満たしたのならよかった。

「魔魂自体に魔力吸収の制限量はありますが、本来は魔力を全て吸収してしまうと母体の生命の危機に直結されるので魔魂自体で吸収をセーブをしますが、主は他属性の有り余る魔力が存在していた故に、火属性の魔力を全て吸収してしまいました」

美味しい物が目の前にあると…我慢出来なかったんだね…。どっちにしてもあたしは今ハタレ魔法使いでも、一ヶ月後にはハイスペックに戻るらしい。あたしはがっくりと床に手をつくって夢かった夢に別れを告げた。

手をついた場所が丁度ラッシュの魔法陣の場所だったらしく、部屋の中にシールドの姿がはつきりと浮かび上がる。部屋は惨状だったけど、残りの水も全て窓から放出されたのであたしはついでにシールドをオール解除した。その途端バンツと音を立てて開かれる扉

「アサミズ…」

開かれた扉の向こうに立っていたリユージユの顔は蒼く、唇にも色が無い。あたしの姿を確認するとフラフラと近寄ってくる。足取りがまるで亡霊のようでちょっと気持ち悪い

「なつ何よ、その顔！何かあったの？」

「何かあったのじゃないっ！警備兵から五階の部屋から煙が上がっていると言われていると連絡があつて…私は…ラッシュを呼び出せば授業は終わったと言うし…部屋に着いたら着いたでいくら扉を叩いても全く開きもしない…転移魔法を使えば弾かれる。そんな状況だったのに…」

あ…もしかして煙つて…湯気ですかね？確かに大量だったからなあ…煙に見えたかもね。それに扉と転移魔法はシールドで弾かれたんだろうな。助けに来た人を妨害するつて…やっぱあたしの魔力は無駄なハイスペックだわ。

「…アサミズに怪我は無いか？」

「あ…全然平気」

だってあたしが死にかけたと言っちゃうと、この人の方が死んじゃいそう顔色なんでもん。それぐらいリユージユは蒼い顔をしている。ま、幸いあたしの体濡れてないし…

側に膝をついたりリユージユはあたしの身体を頭から触つて怪我がないか確認している。

「煙が上がった状態なのに…部屋は水浸し…一体何があつたんだ…」

「あはは…」

初級水魔法で濡れかけたなんて恥ずかしくて言いたくない。待てよ？さっきのコハルとの話を使って…

「あのですね…コハルを呼び出すのにちよつと力の加減を間違えました」

「主は今火属性の魔力がほとんど無い状況だったので…」

ぴったりとした合いの手のようにコハルがフォローを入れてくれる。うん…やっぱコハルは最高の聖獣だ。

「コハルは火属性…：…そうか…：魔魂で火属性の魔力が減少していたのか…：だから水属性の魔法を爆発させたんだな」

まあ、現実には水属性の魔法を爆発させたんじゃないやなくて…：溺れただけなんですけど。…：そこは「あはは…：」と誤魔化しておく。リユージュも安心したのか苦笑を浮かべていた。

そんなあたし達のほのぼの雰囲気我突然破られた

「なっ、何なんですかつ！！この部屋の惨状はっ！！…：それにお姿は！？」

口元を押さえて絶叫するナサエラさんが登場されました。しかも言われて気付くあたし達の姿。リユージュの手はあたしの腰部分にあるし、あたしのシャツはさっきの暑さでボタンが開かれています…：コハルはいつの間にかチビサイズになって乾かしたソファの上でちやっかり丸くなって寝ています。最高の聖獣はどこいった！？

はい…：ナサエラさんの背後に立ち上る怒気が恐ろしいです

## 69話 儂い夢（後書き）

本日は昨日の話の訂正分です。

大きな話の流れは変わっていませんので読み返さなくても大丈夫ですが、より詳しく倍以上の長さになっています。

手抜きですみません

## 70話 親子（前書き）

お気に入り登録が5000件を越えました  
感無量です！

ほんとにありがとうございます！

## 70話 親子

今がどういふ状況かと言いますと…ソファに丸くなって眠るコハルの横に正座で座っています。目の前ではナサエラさんを含むたくさん侍女さん達によって部屋の中の清掃がすすめられています。「自分で片付けますから」の言葉も「お客様に部屋の掃除をさせるなど侍女のプライドが許しません」と相手にされず、「じゃあ手伝います」という言葉も「結構です」の一言で却下され…今あたし非常に居た堪れません。なら部屋から出ようとすれば「そのような格好で表に出るなんて許しません！大人しく座ってて下さいませ」と言われてしまうともうどうしようもなく…ただソファに横柄に座るなんてとんでもなく…正座となっているわけです。

「……………」

横に丸くなるコハルに目を向けると片目を開けてちらりとこちらを見てくるけど、あたしからの指示が無いとわかるとすぐに元の体勢に戻ってしまう。

「……………」

で、あたしに不埒な事をしようとした疑いをかけられたリユージユはナサエラさんに「幼いお子に何て事を…私は坊ちゃまをそのような御仁にお育てした覚えはありません！頭をお冷やしなさいませ！！」と叫ばれて問答無用で部屋から言葉通り叩きだされた。うん…それはもうほんとに気の毒な感じで…「違うつ！誤解だつ！」「って言う言葉が暫く扉の外から聞こえてきたけど、消えたのは多分、宰相か誰かに連れ去られたんだと思う。何でも侍女頭のナサ



エラさんはその昔リュージユの乳母兼教育係だったそうで、皇帝という地位になった今でも彼女には逆らえないらしい、というのはナサエラさんが呼んだ掃除担当の侍女さんから仕入れた情報。「アサミズー！誤解だと言ってくれ」なんて言葉も聞こえたんですけどねふふ…リュージユ、正座を余儀なくされてる身分では助け出すなんて不可能ですからね。んゝそれにしてもそろそろ正座した足が臨界点を突破しようと無感覚になってきてるんですけど…

「アサミズ様、大丈夫う？」

そんな時に聞こえて来た声にに救いを求めたけど…ひよっこり現れた顔に思わず眉間の皺を深くしてしまう。うん、セクハラ医者じや…この足をいじり回されるだけだ。

あたしが思わず引いた身体は完璧に痺れた足に刺激を与え、「ぎひっ！」なんて情けない声が口から漏れる。それを聞いた瞬間の医者顔をあたしは見た！完璧に見た！！絶対ニヤリって笑った！！

「アサミズちゃん…ん？足どうかした？」

わざとらしい台詞を吐きながらじりじりと近寄ってくる医者に危険を感じ助けを求めようと隣に寝ている筈の物体に手を伸ばした。だけどその手に本来伝わってくる筈のモフモフはレザーに取って代わられていて…

「っ！？」

部屋を見渡すとコハルは既に避難を終えていて、侍女さんが片付け終わった一人がけの椅子に丸くなってる…こ、この裏切り者おお！…！！

「ひいひい…」

立ち上がったって逃げる事も出来ず、手をワキワキと動かす医者から怯えてソファの端まで逃げるのが精一杯だった。そんな医者の頭に容赦ない拳が叩き落とされるのがスローモーションで見えた

「シーっ！！お前まで何やってるんですか！！」

「ま…ママ」

「ママあ！？」

もちろん拳を落としたのはナサエラさん、そしてママと言ったのは医者であって…あたしは驚きの余り立ち上がり、すぐに「んぎゃっ」と足の痺れに撃沈して再びソファに沈む…だけど痺れる足を摩りながら目の前の人達を観察する事は忘れない

「医者の母親がナサエラさんっっ！？」

目の前で頭を抑える赤毛頭が爆発してる故に残念な美人医者ときつちりと纏め上げられた赤毛の昔はそれはもう美人だったろうというナサエラさんを見比べる。似てると言えば…似てる？医者の頭の爆発に気を取られてそんな事考えもしなかった…でも医者のお母さんならあの眼球抉られそうになった事件は凄く頷けてしまう。

「アサミズ様申し訳ありません。我が娘が粗相を…」

「失礼ね！『まだ』何にもしてないわよ！」

ナサエラさんが綺麗に頭を下げる横で唇を尖らす医者は正しく「悪戯を見つけた子供の横で親謝る」の図である。…それにしても『まだ』を強調するあたりにマッドな匂いがプンプンします。

「リユージユに言われて様子を見に来ただけど、その調子なら大丈夫そうね。まあ遊ぶのは明日でも出来るし、何も無いようなら帰るわね。」

明日？明日って何？まさかまさかの『魔術実技』の先生が医者だなんて事…につこり微笑む医者を見て「明日は終わった」と色んな意味で覚悟を決めた。あたしの蒼い顔を見て「ぶっ」と吹き出すと医者は手を振って部屋から出て行った。

「まったく陛下といいシーといい子供にこんな大人げない事をするなんて…」

医者が出て行ったのを見送ると、彼女が開けたままの扉を閉めに入口に向かいながらぶつぶつと小声で文句を言うナサエラさんに出て行った筈の医者が開け放たれた入口から顔だけひょっこりと見せ爆弾を落とす。

「ところでママ、ちなみに言つとアサミズちゃん25歳だから！」

部屋の中であたし達の会話に聞き耳を立てていたんでしょうね、侍女達の掃除道具が一齐に結構派手な音を立てて床に落ちましたよ。うん、ナサエラさんの選んだドレスの感じで何となく誤解されていたと思いましたが…

医者からの言葉を受け取ったナサエラさんは何故か怒気を纏ってこちらを振り返り…

「ごじゅう…ご…のお嬢様ですか…」

「はい」

「25歳にもなろうとお嬢様がまるで坊ちゃんのような格好で、人前に出ているのですか？」

「…え？いや…その…」

ゴゴゴと聞こえる音の発信源はもちろんナサエラさんで…ゆっく  
りとこちらに向かってくるのとさっきのリュージユと同様に問答無用  
であたしは隣の寝室へと連行されたのだった。

71話 水曜 魔術実技？

フリルがふんだんに使われた白シャツにピンクチエックのキュロットズボンと茶色の編上げブーツ、「今から乗馬ですよ。ホホホ」な格好であたしは城の裏庭に立たされていた。目の前にはそんなあたしの格好を涙を流して笑う医者ことシー。

「…動きづらい」

「あははっ！！！ダメだ…お腹が抜れる…」

ナサエラさんに拉致された後、シーのセクハラなんて可愛いと感じるぐらいに身体の採寸を全てとられ、次から次へとドレスを着せられては剥がされた。何のプレイだって頭の中で突っ込みながらも出る声は「んぎゃ〜っ！！」だけだった。

そんな地獄から解放されたのは夜中で、せつかく授業が早く終わったのだけど、昨日なんて比じゃない位あたしの精神はボロボロだった。

今日も二度寝しようとしたところを叩き起こされて入浴させられた。用意された服は昨日ナサエラさんが持っていたのなんて地味すぎるというぐらい派手なドレスだったけれどさすがにそれは今日は魔法実技なので…と断った。いつもの服を着ようとしたら、存在する筈の場所にその姿は無く、代わりに用意されていた服がコレ。どうみても無駄なピンクフリフリがロリータにしか見えません。

「鬼すぎる…」

お嬢様も乗馬ぐらいはなさるのでズボンスタイルで妥協出来るギリギリのラインがこの服らしい。あたし的にはもつとゆったりとした服が好きなのにズボンピチピチです。それに普通のブーツならま

だしも、膝下までの編上げブーツなんて履いた事ないです。おかげで何度も転びました

「お似合いですよ」

転げる度にコハルに救われ、ニツコリ笑って横を浮遊するコハルが言ってくれる言葉だけが救いだと思う。それにしても目の前のこの人はいつまで笑い続けるのか…元はと言えば元凶の癖に…

「そろそろ授業時間ですけど…」

「ひひ…ごめん。けど笑ったわあ…」

「失礼です」

「ああ、ごめんごめん。アサミズちゃんの格好の事笑ったんじゃないのよ。ママ昔から自分の娘を着飾るのが夢だったからさ。生まれた時からさ。生まれて来たのがあたしだったからさ。生まれた時からこの髪で、お洒落とか以前の問題だったのよね。まあ…あたし自身も興味無かったし。だからママがたがを外すとそうなるんだって初めて知った」

そう言っつてシーは苦笑を浮かべている。…それにしてもその頭、天パにしてはダイナミックすぎるだろう。あたしの疑問を感じ取ったのかシーは自分の頭に手を当てて指を差し込んでいるけど、もちろん手櫛でも梳けたりはしない。

「火属性の人間ってどうしても身体との相性が悪いのよ。だからどこかにこういった症状が出ちゃうわけ。アサミズちゃんも火属性だっつて偽るなら何か考えて置いた方がいいわよ」

なるほどね…人体の45%は水だから火属性の魔力が影響するのかも。…ん？待てよ。今さらりと「偽る」とかって単語出ませんで

した？

「偽るって…どう言う…意味ですか？」

「あたしもうつかりしちゃったけど…その話は後にしましょう」

よく考えると城の裏庭なんて人が普通に出入り出来るところで話していい話ではなかった。あたしがシーさんに頷くと彼女は短い詠唱を唱えた。すると空中に3Mほどの赤い大きな鳥が現れた。鳥はシーさんの横に舞い降りると首を下げ、シーさんの肩辺りに顔を持つていく

「……タカ？」

「あたしの聖獣『グロアワーズ』宜しくしてあげて。アサミズちゃんの聖獣はその横に浮いてる子よね？」

シーさんはグロアワーズの首を撫でながらあたしの横に視線を向けてくる。そこにはフワフワとコハルが浮いている

「コハルです」

「じゃあ移動するから、コハルと一緒に付いてきて」

そう言うときシーさんはグロアワーズの撫でていた首に掴まり、ふわりとその背に飛び乗って大空へと飛び上がった。その一連の動きはとても優雅で目を奪われた。

「早く行くわよ…!!!」

遙か上空から聞こえてくる声に我に返ると、若干周りの目が気になったけど城の人間は魔法使いの聖獣なんて見慣れているらしくこっちに気を配る人なんて居ない。なのでその場でコハルに冷蔵庫サ

イズになつてもらい背中に乗せてもらう。もちろん格好よく飛び乗るなんて夢のまた夢でコハルに伏せて貰い乗るのだけれど、そうやって乗る時でさえ「よいしょ」と自然に声が出た事に何だか泣けてきた。もうちょっと体力つけなくては…

背中に乗ってしまうと後はコハル任せなので、寝不足の身体をちよっと休めさせて貰う

「コハルは大きくて安定感バツチりね」

先を飛んでいた筈のシーさん達がいつの間にか並列で飛んでいてこっちに向かつて話しかけてくる…軽くもつと大きくなりますとは言えない。

「お褒め頂きました」

「良かったね」

少し照れた様子のコハルにあたしはしがみついている首元を撫でながら言つてやる

「コハルつて人語操れるの!？」

あ…そう言えば、コハルにあたし以外の人が居る所で不用意に喋っちゃいけないっていうの忘れてた。でも…多分シーさんは大丈夫。

「さすが、黒の加護者ね」

ほら…やつぱり知ってた。何となくそんな気がしてましたけど…  
もちろん情報元は



「リユー…陛下から聞いたんですか？」

「今はリユー・ジユで良いわよ。あたしとシユビがリユー・ジユの幼なじみだって話したっけ？だからあいつが黒の守護者だって事も知ってるの。で、アサミズちゃんも黒の加護者だからこそ今からの訓練があるのよ！さ、目的地に着いたわ。降りるわよ」

…黒の加護者だからこそその訓練？何ですかそれ？と問おうにも既にシーさんは降下を初めていて、声など届きそうにない。空中に停止してあたしの指示を待ってるコハルに「ついていって」と促すと、何だかこれから起こる事も楽な事ではなさそうで、降下しながら大きな溜息が何度もあたしの口から吐き出された

## 72話 水曜 魔術実技？

黒の加護者だからの訓練って何？そもそもそれを受ける為に学院にあたしは行くんじゃないの？降り立つとすぐにまだあたしの中に渦巻く疑問をぶつけた。もちろん下りる時にはコハルには伏せてもらいましたけど…

「あたしが黒の加護者だとリユージユに聞いて知ってるのはわかりました」

「ストップ。アサミズちゃんが黒の加護者だとリユージユから聞いたわけじゃないわ。リユージユは人の秘密を勝手に話したりしないから、そこは間違えないであげて。ただあたしとシユビはリユージユが黒の守護者だと知っていて、そのリユージユがこんなに執着する人を初めて見たの。それこそ公務を放り出しても駆けつけるよな…あたしはそこから予想を立てただけ」

…つまり鎌を掛けただけだ？…ただあたしが思うに、リユージユはバレバレの行動しかしてないですけどね。まあ、色々助けて貰ってるし、黒の呪いという事もあるので差し引きは0にしてあげましょう。

「わかりました。それでどうして訓練が必要なんですか？」

「『黒の加護者はその体内に全ての力となる魔力を宿す』。アサミズちゃんの中にある魔力を感じるまでそんな存在信じた事もなかったけど…」

…あたしの魔力を感じるって、そんなのいつのまに！？…そういえば思い出すのは数々のセクハラ医者行為。そこから推測するに

「…触れると人の魔力を感じる事が出来るんですか？」

あの数々のセクハラ行為にそんな意味があつたとは信じられないけれど、それ以外に考えられない

「『あたしは』ね。医療に従事してる人間はそれだけ他属性に触れる機会が多いからそうなりやすい環境なの。だからそこから培つたカン！」

「もつともな事言つてて最後はカンなんですか…」なんて突っ込めないのは…日本人『先生』の権力に一番弱いですから…。「皇帝」や「宰相」などは元の現実から離れすぎてイマイチ権力として認識出来ないんだよね。どう見てもあたしにはリ्यूージュはヘタレわんころにしか見えないし…」

「アサミズちゃんの体内って信じられないけど個々の魔力同士が溶け込まず、色んな魔力が入り乱れてるのが感じとれるのよ。ちょっと複雑で、まるで体内自体が難解魔法陣な感じ。そしてその力は行き場が無くて今にも決壊しそうなくらいに増幅してる」

エサの次はダム認定。どんどん人間から離れてくなあ…言わんとしてる事がなんとなくわかってしまうからそれも嫌なんだけど…

あたしの魔力は無尽蔵に体内の中で生成されている。コハルの言葉があたしの中に蘇る

「…つまり、どこかで発散させないと爆発するって事ですか？」  
「ええ。あなたの魔力が暴走すれば誰も止められない。一国どころかきつとこの世界すべてを巻き込んでしまうような魔力だわ」

魔王じゃないですか…それ。時限爆弾を抱えてるハイスペックと

か欠陥多すぎるでしょ

「あたしってこの世界に害にしかないんじゃないんか…」

「いいえ…あなたが生まれた事はきつと何かの意味があるはずよ。だからその時までいきちんと魔法の使い方を覚えましょうね」

あたしが生まれた意味…つまりあたしがこの世界に来た事に意味があるって事？いやいや…あたしは一般人で普通の日本人ですから、そんな物語の勇者みたいな事は丁重にお断りします。

よし…今までは料理も美味しいし成人してるんだからこのままこの世界に居てもいいかななんて考えてたところもありましたが、一刻も早く元の世界に帰る理由が出来ました

「あたし頑張ります！！」

「いい心がけだわ。そうね…どうせなら実践方法で魔法を使用した方が、何かあった時の護身術にもなるでしょう」

「え？」

はい？実践方法って何ですか？

「そうしましょう！模擬戦闘の仕方を説明するわ」

「せつ戦闘！？」

それって模擬って言葉が戦闘の前につくのも初めて聞いたような人間にする代物じゃないですよ？

「自分が殺されかけたって事忘れたの？身の守り方ぐらいいは覚えておかないと、いつでも人に助けて貰えるわけじゃないのよ」

そういえばそんな事もありました

「模擬戦闘は基本相手を殺しません」

「模擬なんだからもちろんでしょう！ってそこから説明！？」

びっくりして思わずつつこんでしまいましたけど…

「攻撃魔法は相手がシールドを張ってから30秒後に行う事。30秒なのはそこから魔力が安定するからよ。それから出力制限リングをつけた手で攻撃魔法は行う事」

そう言つとシーさんは自分のポケットから銀色の腕輪を取り出した。

「じゃあ…とりあえず出力制限をかけた状況でどれほどの力なのかみたいから、つけてみて」

あたしに腕輪を渡されたけど…明らかに金属なそれを見てちょっと顔が引きつってしまつ。

「あの…」

「ん？」

「あたし…金属アレルギーなんですけど…」

「……………」

えーっと…そのびっくりした顔で思い当たるのは一つしかないんですけど

…黒の加護者でも無敵じゃありませんから。

72話 水曜 魔術実技？（後書き）

更新が遅れてすみません  
今回はちよつと難産でした

### 73話 水曜 魔術実技？

制御リングを使用出来ないという事で模擬戦闘は無しになりました。どうしてシーさんがそんなに残念そうな顔でリングを触ってるのか全く理解出来ないんだけど…あたし的にはいきなり戦闘とか言われて正直ドン引きだったんで助かった

「じゃあ…今日何しようか…」

近くの石を蹴りながらそう言うシーさんに思わず「模擬戦闘だけで一日過ごす気だったのかよっ!!」と突っ込みそうになるのを慌てて口を押さえて止めた。うん、この人ならありえそうだし。だっていじけ方がハンパない。今時石蹴ってすねる人とかいるんだ…って本気で携帯があつたら写メ取りたかった

「…というか昨日の魔術講義でも基礎しか教えて貰ってませんか、戦闘なんて無理ですよ」

一応正論をぶつけてみる。この人ならノリで乗り越えろとか実践で感覚を掴めとか言われそうですけど…ね。

「…え？ラツシュの奴昨日仕事してないかったの？あたしがあんなに苦労して1人で仕事してたのに!!」

おお…ある意味予想外の正当な返事。ただ、このままでいくとラツシュの印象がいちじるしく損なわれそうなのでフォローを入れておく。

「いえ…ラツシュは仕事をきっちりしてらっしゃったんですけど、

あたしの能力がそれに釣り合わなかったと言いますか…」

うん、間違つては無いと思う。だって帰り燃え尽きて廃人みたいになつて帰られましたし…背中 of 哀愁が悲しみを物語つてましたから…ん？何でシーさんの眉間に皺がよつてるんだろつか？

「…シーさん？どうしました？」

「それ！…それよっ！！…どうしてリユージュやラツシユは親しげに名前呼んでもらつてるのにあたしは『シーさん』なわけ？」

どうしてそこ！？突つ込むべきところはもつと別にあるでしょう！？しかもさらにいじけてるし…この人が地面に『の』の字を書き出しても今ならあたし驚かないと思う。

「じゃ…じゃあ何て呼べば…？」

「もちろん『シー』って気軽に呼んで…！」

復活も早い…。

「それにしてもラツシユの授業についていけないって、手でも抜いてあげたの？あいつ魔法全般フェチだからそんな気遣いはいらないわよ？黒の加護者を間近で見れるなんてボコボコにしても喜んでると思うわよ」

「いや…ラツシユはあたしが黒の加護者だつて知らないっていうか…」

「え？あいつ…わからなかったの？」

言葉と一緒に発せられたシーの今までとは全然違つ怒気に気圧されてあたしは数歩下がってしまった。それに気付いたシーはすぐにそれを消してにっこり微笑んだ。いや…そんな似非笑顔で騙されま



せんから…どう考えても今の怒気の方がこの人の本性でしょう？

「ま、ラツシユの事は帰ってからにしましょう」

いやいや…このまま帰ると来週からラツシユさん来ない気がするし…っていうか生きていられるかも心配なので！

「あの…あたし今火系魔力が全然すつからかんなんですよ」  
「？」

「だから…その火系魔力を一番最初に試されたので…力不足と判定されたらしいです」

シーはちよつと考える姿をとると、あたしに方眉を上げて尋ねてきた

「あいつ触診しなかったって事？」

「触診？」

「ほらあたしがアサミズちゃんに触れたみたいな事」

思い出されるセクハラの数々…。うん、あんな事を初対面の男にされたらそれこそどんな手を使っても亡き者にしますから！！それに…

「次同じ事したらいくら筆頭医と言えどもボコボコにします」

あたしの引けを取らない怒気に今度はシーが2・3歩下がってる。

「だ…だけど、医者にとって触診っていうのは大事な診療なのよ？」

「あれを百歩譲って医療行為と言っならば、あたしが診察室に伺って白衣を着た状態の時だけにして下さい」

うう…とシーが呻いている。どこでもかしこでも『医者』って言葉で全て片付くと思っただら大間違いですから、そこところは釘を刺しておかないとね。あたしの視線にシーは苦笑を浮かべ、両手をあげて参ったと降参した。

「…あたしも筆頭医になってちょっと傲慢になってた、許してもらえる？」

「はい」

きちんと自分と向き合って反省出来る人に悪い人はいませんか。ところでラッシュユへのお怒りは解けたんですかね？…わからないけど、そう悪い事にはならないという事にしよう。

「じゃあ…せっかく医療の話が出たし、こんな外で何なんだけど…医療術の実戦しとく？」

「医療術？」

「まあ、あたしの得意分野でもあるし、何かあった時に覚えておいて損は無いから。普段の治療ではよっぽど軽い傷か重症でない限り魔力は使わないんだけど、戦闘中は自分で回復魔法をかけないと駄目な場合も多いからね」

そういうとシーはあたしの前で手の平を上に向け、その手に赤い透明な球体を作った

「これがあたしの魔力の塊。あたしは火系魔力だから赤い色します。これを直接肌に当てるとね…」

シーは手の赤い玉をそのままの状態で自分のむき出しの腕に当てる。あたしはそれが治療行為だと思って何も言わずに見ていたら、

どうみてもその赤い球体があたった部分がじりじりと焼け火傷状態へと変化していく

「…つく」

「なっ何やってるんですか!!!」

慌ててあたしが止めに入ろうとすると、すつと玉を外してふうつと息を吐いた。自傷行為など目の前で見るもんじゃない…：あたしが啞然とした状態でいるとシーが痛みでちよつと顔を歪めたまま笑う

「魔力はそのままの形では毒になる。それは自分自身の魔力でも一緒、だから気をつけて。でもね。ここに一つの魔法を発動させると…」

シーの言葉と一緒に手の赤い玉も変化し、今度は無色透明な玉へと変化した。そしてまたその玉を火傷した部分へ近づける。あたしはどうしてもさっきの映像が頭に残っていて目を背けたくなくなった、身を持って教えて貰ってる事を無駄にするのは研究者として出来ない。無色透明な玉は傷口にあてられるとその傷を包み込み、水の中の泡のような物が傷口から出始める

「…?」

そして暫くして最後の泡が弾けたのと一緒に玉も弾けとんだ。するとそこにあつたはずの傷は消え元の白い腕に戻っていた

「ほえ…」

「これが一番簡単な回復魔法。でも見てもらったからわかるように、傷をつけるのは一瞬で出来ても、治癒は倍以上の時間がかかるの」

あたしは自分の頭がどんどん研究者モードに変わるのがわかる。多分今の回復魔法は細胞再生能力を活発にさせてるような印象だった。つまり元の形に復元という事をすればもつと一瞬で回復するんじゃないだろうか？なんてどんどん色んな案が浮かんでくる。細胞組織を形成してる成分は……あ、しまった。これは違う。今までのあたしの方法で魔法を使っても仕方ないのであつて……

「じゃあ、アサミズちゃんにもやってもらいましょうか？」

そう、あたしが今覚えるべきはこの世界の魔法！！

「自分の体内に魔力を感じる事は出来る？」

「いや……あんまり」

「そっか。まあ慣れだからだんだん解るようになるわ。では、片手を上向けに前に差し出して、そしてそこに体内の魔力を放出するような感じで力を入れてみて、最初だから上手くいかないかもしれないけど、ちよつとでも出れば感覚が掴めると思うから」

シーに言われるままにやってみる。あたしは手の平によくわからないけど何かが集まっているのを感じた。ん？何だかこの感覚味わった事があるんですけど……そしてちよつとヤバイ気がするんですけど……

そう思ったのと同時に光が手から放出され、柱となって天を突き抜ける。

雲を突き抜けたそれを見て「あ……これ積乱雲に向けて発射したのと同じじゃん」なんて現実逃避するのを許してほしい

73話 水曜 魔術実技？（後書き）

本日より朝更新となりますので宜しくお願いします

## 74話 水曜 魔術実技？

今あたしは泥んこ遊び…もとい、泥人形作りに精を出しています。目の前には百体以上の形・大きさ、様々な土偶が形成されており、もちろんあたしの魔力によるものなんですけど…難しいんですよ。理屈じゃない感覚での魔力調整って…どうしてこんな事になっているのかって理由はもちろんあの光の柱に決まってるし…あの光の柱を見てのシーの感想は結構きついダメでした

「なつてないわ、全然なつてない。予想外の凄さと駄目っぷりね。こんな魔力を全力で放出し続けたら世界が壊れるし、無限魔力だからってこれはないわ」

さりげなく恐ろしい事と同時に人の心を抉るという高等技術をさらうと言っちゃってください。

「…とりあえず体内魔力の感覚を掴まないと話にならないわね。そうね…まず泥人形を同じ形で十体作れるようになりましょうか」

「え？十体でいいの？」

「ええ。これと同じものを十体ね」

そういうとシーは地面に魔法陣を描いて発動させた。すると地面から土が盛り上がりどんどん人の形になっていく。

「…あれ？これって」

ん？何だか見慣れた土偶ですけど…。どうみてもその土偶はリュージュにしか見えない。しかも妙に土偶なのに完成度が高いんです

けど…

「想像しやすい人の方が形成するの簡単だから。あたし達に共通する人物ってリユージユかシユビかラツシュでしょ？その三人の中だとシユビは印象に残らないし、ラツシュは昨日会ったばかりで印象もないでしょうから必然的にリユージユにしたわ」

うん…言ってる事は正しいけど、やっぱりさらっと宰相に対してぐっさり台詞を吐いてますよね。城ってほんとに一癖も二癖もある人達ばつかな…、ちなみに本人泣くかもしれないけどメルフォスさんももちろん含まれてます。

「わかりました。リユージユの土偶十体ですね」

「ええ。頑張つて」

十体のリユージユの土偶を想像してみて、絵面的にはちょっと…と思ったけど、頭の中では意外に彫刻置き場みたいな感じで違和感がない。やっぱり美形は得だと思う。

「よし…」

あたしは頭の中で今見たシーの土偶をイメージしながら「我が力よ、地上に降りて糧となり、形を示せ」と詠唱し、両手を地面につけ魔力を注ぐ

するとシーと同じように地面が盛り上がる。ただあたしがちょっと力みすぎたのか凄いスピードで100Mほどの巨大な土偶が出来ていく。

「げ…」



そうあたしが言った瞬間にその土偶が破壊された。もちろんそんな事をしてくださるのは横のシー以外におらず…それにしても一応リユージユを象ったものを木っ端微塵に躊躇いなく破壊するシーに恐怖を感じる

「アサミズちゃん」

シーが笑顔で自分の作った土偶を指差している。はい、重々承知してるんですけど…つい力が入ってしまいました。なんて言い訳を言える雰囲気じゃない。

「だ…大丈夫です。次こそは」

つまり魔力の注入を抑えればいいんだから、両手で力を送った物を片手にすれば半減するわよね？あたしはもう一度詠唱して今度は力を抜いて片手だけを地面につけた

すると今度は3Mぐらいのサイズになったけれど、ディテールが無茶苦茶ですでに人を形成していない。

「あれ？」

「アサミズちゃんの目にはリユージユはああいう風なのかな？」

わかってます！！わかってますから！！そんな怒りマークな笑顔を顔に貼り付けるのは止めてください。つまり…片手だと魔力の注入量は抑えられたけど、不完全な魔法になってしまっただけ…。つまり両手で片手分の魔力を注入する事が必要なんだろうけど…その感覚がイマイチ解らない。

魔法が発動した時には体の中から何か掃除機で一気に吸い取られるような感じなんだけど…注ぐんじゃなくて吸い取られる感覚だから上手く調整が出来ないんだよね…

「うーん？」

なかなかいい手が思い浮かばない状態に、ちよつと位置指定を使えば簡単に出来るのに…と簡単な方法に流れそうになる。ダメダメ…それじゃ意味ないから。そんな考え込んでるあたしにシーが声をかけてくる

「魔力の調整は感覚の問題だから考えるより回数こなす方が早いわよ。せつかくの無限魔力なんだから活用しなさい」

うう…基本効率を求めるあたしの性には合わないけど…やるしかない。出来なきゃ効率も何もないしね…

「うおりゃ〜!!!」

それからは100Mクラスの土偶を何体も作ってはシーに壊され、やっぱり片手案も捨てきれず人では無い物を何体も作り出し、両手で3Mほどの土偶人形を作れるようになる頃には何百体の土偶に囲まれすっかり日が暮れていた。それだけやってもシーのディテールには全然追いついてない。

「これを十体つて…鬼でしょう？」

「あら…やつとわかったの？今日はもう日も暮れたし帰りましょ  
う」

くすくす笑うシーに思わず近くにあった泥団子を投げたが軽く手で払われてしまう。

この世界の魔法を使えるようになる事。

その言葉の難しさを痛感した一日だった。

## 75話 ちんたら帰宅？

どうしようもないぐらいの倦怠感が身体を覆ってる…。魔力の消費っていうよりは、頭を使いすぎて痛い。コハルの背中に乗ってると気持ちよすぎて次々と睡魔が襲ってくる、ただどこかで負けてなるものか…。あたしには果たさなくてはならない使命があるのだ。そんなあたしにウトウトしてるのがばれたのかコハルが心配そうにこちらを振り返って言葉をかけてくれる。

「主…どうぞお眠りになって下さい。お部屋まできちんとお届けいたしますから…」

「うん…でも一度寝たらもう起きれそうにない…』「ご飯は』絶対食べたい」

「……………」

そう…何と言ってもこの辛い受験生活の中で唯一の楽しみ。ライザ母さんの腕には劣るものの城の食事は前菜からデザートまで凝っているのにふと素朴な味がしてなかなか旨い。それに朝食でさえ一度食卓に上がった料理は二度と出て来ない。つまり毎回違う料理なので一回食べ逃すと二度と同じ料理に巡り合えないのだ。何て恐ろしい

「…大丈夫。あたしの食への欲求は睡眠に勝るから…」

あたしは一度両手で大きく頬を叩いた。ビタミンという音が空に響く。前をいくシーも何事かとこちらを振り返るけど大きく手を左右に振って「大丈夫」と意思表示をしておく

「あ、主っ!?!」

痛い…派手な音がしたものは痛くないっていうけど、普通に痛いし…だけとおかげでちよっと目が覚めた。

「ふふ…今日の夕食は何かしら？」

「……………」

そりゃ頭の回線もおかしくなるさ…この二日の疲れとは全然違うハンパない疲労感だもの…。…だからこそ！ここで寝るわけにはいかないっ！！何としても夕食の席につかなくてはならないのだ！

「わかりました。なるべく早く城につけるようにしましょう」

あたしの気持ちを汲み取ってくれたのか、コハルは一気にスピードを上げ前に行くシーの左側に追いついた。

「シー様。主の疲労が激しいので先に戻らせて頂いて宜しいでしょうか？」

「あ…魔空間使うの？」

「はい。それが一番早いので…」

…魔空間？はて？それって確か聖獣が戻る場所じゃなかったっけ？…それって人が入っても大丈夫なんですか？

「そおねえ。確かにちんたら帰るの面倒くさいし、それならあたしは転移魔法で帰る事にするわ」

…う…あたしも！と言いそうになるけど、さすがに転移魔法使える気力は残ってないし、シーと言えど他人の転移魔法に乗るのは嫌だ…。

「では、ここぞ…」

「はい。一応無事戻ったら母さんづてに連絡くれる？」

「了解しました」

コハルの返事を聞くとシーは「よろしく」と言いながら空中に魔法陣を描き、その身を沈めていった。残されたグロアはしばらくコハルと並行して飛んでいたがこちらに向かって会釈をすると翼をひろげ、右に大きく旋回するとその中心に現れた魔力の渦に消えていった。コハルもグロアの会釈を受けると大きく口を開けた。あ…これって魔力の渦を発生させるやつだよ…でもねっ散々あたしを無視してくれちゃってるけど…確認したい事があるんだけどさっ！というわけで、口を開けた状態のコハルの頭頂部辺りの毛を思いっきり引っ張る

「んがっ！……主、痛いです。ヒドいです」

「…ねえコハル…質問。魔空間って人が入っても大丈夫なの？」

「魔空間は全ての魔力が存在する場ですので、普通の人間であれば魔空間の気の流れがわからず、対極の属性魔力の流れに触れたりして気を違えてしまいますが、主は体内に全ての属性を宿してらっしゃるので大丈夫だと思います」

「…うん？」

…思いますって言ったよね？つまり確信は無いつて事だよね？しかも気が違えるって何？恐ろしい事を軽く言いすぎでしょ。

「では…主、いきます」

「えっ！ちよっ、ちよっと！…！」

あたしの疑問形の『うん』をどうやら聞き間違ったらしいコハル

は、口を大きく開け魔力を発せると、迷いなくそこへ飛びこんだ。  
もちろんあたしの叫びは魔空間の中に響き渡るのだった

## 76話 魔空間

あたしの「いやああああ」と言う叫び声と一緒に飛び込んだ空間は以前の飛空よりはるかに高いらしく、地上を広範囲で見渡す事が出来た。コハルの背中に乗りながら見渡した限りでは、色彩あふれる何ともファンタスティックな世界に見える。4色の大きな湖と山が四方にあつてそこから網の目のように川が流れ出し、途中で交じり合つては複雑な色になつている。しかも驚いた事に湖の傍には森や建造物らしき物まである。あまりにサイズが小さくて何かはよくわからなかつたけど…うん。高さつてね極限を超えるとそう怖くないんだつてわかつた。だけどそれも少しの間だけで、あたしを背中に乗せたコハルは何か目的を見つけると空中をスノーボードのように格好よく滑り出した。

「ひいひいひい」

安全装置の無いジェットコースターの落下に乗っているようなもので、眠気なんて一気に吹飛ぶ…目をつぶつてコハルにしがみつくと事で必死に気を失いそうになるのをこらえる。だけど空腹に胃が浮き上がる感覚は凄まじく…酔つた

「こ、コハル…ギブです…」

「主？うわあっ！！すみません。魔空間での感覚をそのまま使用してしまいました」

振り返つたコハルがあたしのグロッキーな様子を見て急速に速度を落としてくれるけど、それによってさらに胃が浮き上がった…



「もう…無理。吐く…吐くものないけど…吐く」  
「あっ主っ！！もう少しだけ耐えて下さい」

そんな事を言われても今更どうしろと？ふわふわと降りるコハルの上で多分真っ青になつてゐるあたしは、されるがままだった。

そのまましばらくゆっくり降りるコハルにだんだん気分も落ち着いてくる

「し、死ぬかと思った」

「…すみません。魔空間での力の違いを忘れていました」

ひたすら申し訳なさそうにしているコハルに追い討ちをかけるのも可愛そうなので普通に話しかける。

「…それにしても魔空間なんて名前だからもつとオドロドロしい物を想像しちゃったわ。あれって川？」

だいぶ地上に近づいてきたから地理状況が把握出来てきたけど…赤い川やら緑の川やら…ほんとに色とりどりだわ…

「主、あれは魔力の流れが水のように見えるだけで、本当の水ではありません」

「魔力の流れ？」

「はい。今からあの流れに降りて城へ向かいますので」

…魔空間から戻るにも戻る場所とか関係あるんだ？

「…ってこの空間でも移動するんだったら、元の世界でもよかつたんじゃないの？」

「この世界は時の流れが違ふんです。なので城に戻ってもさつき

からほんの少しの時間しか経ってないはずだ」

「へえ……」

そんな会話をしている間に赤い流れに辿り着き、コハルがその上に立つと自然に動きだす。…水みたいなのに沈まないって…変な感じ。なんて考えてるとコハルが突然体を傾けた。

「おっと…」

「うわっ！ な…何？」

「突然飛び出してきた者がいました」

「え？」

言われて流れをよく見ると他にも流れの中からひよこひよここと聖獣の顔が飛び出しているのがわかる。コハルが上手く避けたので振り落とされたりはしなかったけど…びっくりした。

「聖獣？」

「この魔力の流れは聖獣達の回復場でもあるんです。ここは火属性の流れですので、その属性の者達がこうして魔力の波につかり回復してるんです」

…うん。確かに飛び出す顔がみんな気持ちよさげだし、まるで冬の猿温泉みたいだ…。

「ねえ…ここって聖獣だけの空間なの？」

疑問に思った事は解決出来るならしたい

「いえ、ここは聖獣の回復場でもあります。それと同時に精霊達の存在する場所でもあります。四方の湖の傍にそれぞれ大きな城

のような物が建っているのを見ましたか？」

湖の傍にちっちゃい建造物があったのは認識出来たけど…城だと言われれば城かもね。程度にしかわからないサイズだったし…

「そんなのもあつたね」

「あれは四大精霊の住処です。この魔空間は各城に住む精霊王と精霊女王によつて管理されています、城の周りにある建物はそれを中心に各属性の精霊たちが群れを形成している為に出来たものです」

「それは群れじゃなくて立派な街でしょ？つてというか国家じゃん…」

そつえば元の世界でこつう不思議生物の集まる世界つて『幻想界』つていうんじゃなかつたつけ？この世界を知つてしまつと魔空間よりぜんぜんその呼び方の方がしつくりくる。だけど…あたしこの世界知つてる気がする……ん〜だけど…脳の疲労度がハンパ無いから該当する答えが導き出せず、悶々としたものだけが溜まる。

「だめだ…思い出せない」

こつういう時は無理に頑張つても答えなんて出てこないの、忘れるに限る。きつと何かの拍子にぽつと出てくるでしょう。それにしてもこれだけしつかりした空間なら

「…コハル、あたしが呼び出さなくてもこの世界だつたら全然寂しくないね」

「主、私は主の傍が一番好きです。大半の聖獣達だつてほんとは主の傍に居たいんだろつと思います。ただあの世界では聖獣は存在するだけで主の魔力を消費してしまうので仕方なくこの世界に戻つてくるのだと思いますよ。その点、主はずつと私が存在する事を許

してくださる…私は幸せです」

「…な、何よ…照れるじゃない」

いつもより饒舌なコハルの言葉に思わず顔が赤くなる。意味も無くコハルの頭をグリグリとしてしまうのはもちろん照れ隠し。そんな傍から見るとバカツプルみたいなたたきだ…

「主…周りが騒がしくなってきました。先を急ぎましょう…」

意外と冷静なコハルの声にバカツプルはあたしだけだったとちよつと恥ずかしかった。それにしてもさっきまでの声とは違う深刻そうな声色にあたしも警戒心が生まれる

「…どうしたの？」

「主の存在を精霊達に見つかりと厄介ですので…」

「…？」

すっかり忘れてたけど…もしかしてこの世界でもあたしのハイスベックは何かトラブルを呼び起こすんでしょうか？

「えつと…猛スピードでお願い」

「了解しました」

コハルはあたしの言葉を聞くと足を半分ほど魔力の流れに沈め、スピードをあげた。それにあわせてあたしも姿勢を低くしてコハルにしがみついて静かにしていると周りの声が大きく聞こえる

【あれは…確かに黒の加護者？】

【精霊王にご報告しなくては…】

【精霊女王にご報告しなければ】

【急がなくては…】

はぐい。やばい気配が漂ってます。  
心の底から早く城に帰りたいです

## 77話 乙女心

なるべく目立たないようにコハルの背中に埋もれながらも周りを確認すると、先ほどまで見なかった色とりどりの光が横切っていく。光の玉が走る後をネオンのような光が追尾し、それはCGのようなのに現実で体験してる自分がなんだか変な感じがする。あたしは起き上がらないように注意しながらコハルの頭へ近づいていき、ひそひそ声で話しかけた

「ねえコハル。この周りのキラキラしたのって…」

「精霊や妖精たちです。今はやはり火属性の者が多いようですが… ちらほらと他属性も見られますね…」

そうじゃないかなあとは思ってたけど、どう見ても光の玉にしか見えないそれらが精霊や妖精と言われてちよつとがっかり。だってここまでファンタジー世界なら精霊達も想像通り小人に羽が生えたモノを期待してしまってもしょうがないでしょ…

「…何か…もっと可愛いものだと思ってた…」

「…主がどういったものを想像したのかはわかりませんが、これらはまだ幼体ですので成体の姿とは異なりますよ」

「そうなの？」

「はい。我らでいう魔魂の姿ですので…ただ、成体に見つかるよりも更に厄介ですから、この辺で空間を出ます。主、魔力の波に沈みますので私にしっかりと掴まっついて下さい」

コハルはそう言うと頭から魔力の波に飛び込んだ。ってあたしまだ返事してないし！なんて思いながらも、きちんとコハルの毛を掴

んで目を閉じ、思わず息を止めてしまっ。呼吸音が聞こえなくなつた事を不思議に思つたのかコハルがこつちに頭を向けてくる

「主、息は止めなくても大丈夫ですよ？」

目を閉じて大きく頬を膨らませた状態のあたしはコハルに苦笑された、だって…いくら魔力の波つて言われても…どうみても見た目は水ですし。

「主、これが火の力です。見てみませんか？」

いや、そんなうつつとりした声で話しかけられても目を閉じてるから見えないし…、でも魔力を直に見る事なんてそうそうないよね…。…凄く興味あるし、コハルもまあ言ってるんだし…水の中でも目を開けるのは平気なんだから大丈夫よね。あたしは覚悟を決めるとそつと薄目を開けてみる。

水のように見えたはずの世界は一転して燃える炎の世界になっていた。

普通なら燃え盛る火に気が動転しそうだけど、囲まれているのに不思議と熱どころか恐怖すら感じない。そこから感じとる事が出来るのは何者も寄せ付けない気高い強さ。触れようと手を伸ばすと、その手に戯れるように纏わり、そして離れていく。

「…綺麗」

息を止めていた事など忘れて思わず呟いてしまっ。

「主の体内にも同じ純度の高い魔力が流れているのを感じ取っているのじゃね。火が主を受け入れている」

「あたしの…体の…中に？でも…火属性の魔力って…今少ないんじゃないかったっけ…」

「量の問題ではありません。たとえ少量でもその純度はすべての源であるこの場所の純度に匹敵するものですから。ではそろそろ抜けます」

コハルが大きく体を旋回させると中心に魔力の渦が発生した。そしてそこへ旋回でバランスを崩したあたしだけを放りこんだ。

「こっコハル!？」

「すみません主。今私が一緒に行くかと精霊王に主の場所を知られてしまいます。少しの間離れますが、すぐに戻りますので」

「そんなのっ!！」

コハルの言葉を一方的に聞いてとつてい受け入れられないのに、転移魔法の時と同じ魔力の渦に沈み込むのを止められない。

「コハルっ!！」

「主、今日はぐっすりお休みください」

その言葉とともに視界が強烈な光に遮られる。思わずつぶつてしまった瞳を開けるとそこは見慣れた城の自分の部屋だったのだが、現れた場所から見た部屋は鳥瞰図であり、どうみても自分は落下していた。

「こっ!こっ!コハルうううう!!!」

なんて場所に出すのよおおお!!!と心の中で叫びながら、疲れた頭では咄嗟に魔法も出てこずあたしはこれから起こるであろう衝撃に身構えた。



「水よ。我が力を使って優しく受け止めよ」

声が聞こえたのと同時にあたしの体は水の玉に包まれ、落下が止まる

「…アサミズ、いい加減驚かせるのは止めてもらえないか？」

「ぷはあっ…りゅ、リユージユ」

水の玉から出るとそこには呆れた顔したリユージユが立っていた。こっつてあたしの部屋だよね？…どうしてこの人がいるのかしら。疑問が顔に出ていたのかリユージユはふうつとため息を吐く

「夕食を一緒に誘いに来たんだ」

「あ…そう」

結局最後に水浸しになってしまった…。あたし自分が浸かった宙に浮かぶ水の玉が薄く茶色に染まるのを見て、自分がどれほど汚れていたのかを思い出す。そりゃ一日泥触ってたんだから当然なんですけど、茶色の水に浸かるこの状況はあんまりだ…と嘆く自分にまだまだ乙女な部分が残っていたのかと驚いたりもするのだった

77話 乙女心（後書き）

いつも感想ありがとうございます  
執筆の励みになっています。

これからもどうぞよろしくお願いします

78話 『普勉』とは普通に勉強する事である

テーブルの上には食べきれない…いやぎり食べれるぐらいの食事が並び、空いた皿はどんどん下げられていく。食事は和やか？に進んでいく…と言うのは一言もしゃべっていない。だって目の前にこんなにとくさん美味しそうなご飯があつて会話とかありえないでしょ！ご飯の時には口を閉じて食べなさい！がうちの家訓でしたし。

「あいかわらず…いい食べっぷりだったな…」

「？」

いつの間にかリユージユは食事を終わらせていて、食後のディアという飲み物を飲んでいる。ディアはコーヒーに近い味がする飲み物で、高級な物らしく城にきて初めて飲んだ時には「コーヒーいいー！」と感動したのを覚えてる。研究者系の人はコーヒー中毒、カフェインジャンキーな人が多いんですよ。例に漏れずあたしもジャンキーですから…。リユージユのディアから漂う香りがあたしの鼻を刺激してくる…早く食べ終わってあたしもディアが飲みたい。そこからあたしの食の勢いは倍速になった

「……………」

もちろんリユージユは言葉を無くして痛い視線を投げかけてくるけど、デザートまで全て頂いて「お腹いっぱい満足。満足」と寛いだ気持ちになつてゐるあたしにはそんなもの全然痛くも痒くもない。

「……………」その小さな身体のどこにこれだけの食事が入るんだ？」

「胃」

「……………」今、何と言った？」

「だから…胃！」

「だからの後が上手く聞き取れん…それはアサミズの国の言葉か？」

…ずっとあたし的には日本語を話してる感覚なんですけど、というかあなた達の言葉もしっかり日本語なんですけどね…これって多分だけど世界を超える時の言葉の補正機能とかってやつ？だけど…補正されない言葉が存在してる？

ちよつと引つかかる…研究の時でもそうだったけど、こういう時の発見は意外と重要だったりする事が多い。だけど答えを出すにはパーツが足りない。

「うゝん」

「…アサミズ？」

「あつごめん。お腹って言いたかったの…間違えちゃった」

「そうか」

別に話しても良かったんだけど、きちんと答えが出てないから説明出来る自信もないので適当に誤魔化した。リ्यूジユも特に追求してくることなく次の話題へと移ってくれた

「ところで、授業は順調か？」

「…鬼のような先生ばかり紹介してくれてありがとう」

ほんとに全部の授業癖のある先生ばかりで、身が持たないわ…って怨みの視線を向けたら誤魔化すように苦笑を返された。そんなので騙されないし…

「だが、皆優秀な者達ばかりを集めたぞ」

「それに伴わないあたしの実力が悪いんでしょうかねえ…」

「実力が無いなんて事は言わせないぞ…アサミズの場合無いのは  
気力だけだ」

はい…よくご存知で。というか自分でも自覚して無かったんだけど、きつと今までみたいに適当にやっておけば何とかかな？なんて甘い考えがどこかにあったんだと思うのよ。でも魔術実技で特に感じたけど、やっぱり技能を学ぶという事は一筋縄でいくもんじやなくて、真剣にやらないと身につく物じゃない。ハイスペックと天才がノットイコールだという事は嫌という程思い知らされた。

「25歳の女に今更学習の気力とか求めないでよ…」

こっちは学業から遠のいてもう結構経つての…元々その学業中だってあたしは好き嫌い激しくて興味の無い授業なんて最低限しかしてなかったのに…その分興味のある事にはどんどんのめり込むタイプだったから研究は好きだったんだけど…

「学ぶ事に年齢は関係ないさ。世界は動いているのだぞ、常日頃から学んでいる事はたくさんあるじゃないか。ならばその一部を試験にまわせばいい事だろう？」

簡単に言っちゃってくれる。…しかもあたしの大好きな効率的な考えじゃないか。言われると確かに大人になっても仕事や何かを毎日学んでいるんだけどさ…こっ…勉強！ってなるとどうしても身構えちゃうのは受験がある日本人だからなのかな？

そういう事を考え出すと、何だかグルグルと思考が回りだしてあたしは顔を横に向けてテーブルに突っ伏した

「…アサミズ？」

「…何でもない」

小さい頃はお箸を持つことだって文字を書く事だって同じ学ぶ事だったのに…いつから生活を学ぶ事と勉強する事が別になったんだろっ？…学校に行った時から？違う。だってあたしは『勉強』だなんて思っただ事なかった。

「『勉強』ねえ…」

強く勉める事。普通に使ってて意味なんて深く考えた事無かったけど…これを日常的に使ってるって…脅迫観念に囚われてるよね…普通に勉強で『普通』でも良かったんじゃないの？なんて思っただ事は大人だからなんだろうけど…

「…ただ、あたしは今こそ『勉強』しなくちゃならないんだろうなあ…」

「さつきからブツブツ何を呟いているんだ？」

「こっちの話。頑張らないとっ！って思っただの」

「やる気が出たのなら何よりだ」

言葉を返せないあたしを救うようにディアが前に置かれたので、飲むフリだけしてリ्यूージュに思いっきり舌を出してやる。

「…何だそれは」

「ほら、あたし猫舌だから、熱くて…ちょっとヤケドしたみたい」

「……………大丈夫か？」

怪訝な目で心配する言葉をかけるって不思議な事をする男だ。あたしはその視線と言葉は無視して今度はゆっくりとディアを口に含む

「あっっ！！」

ほんとに熱かったディアに思わず声が出てしまつて「あ……」と思つても後の祭り、リユージュの冷たい視線に晒された。しかも帰る際にきつちりあたしの今後のスケジュールの休憩時間が30分減らされたのは言うまでもない。まったく大人気ないやつめ……まあ、果てしなくお互い様ですけどね。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n4120w/>

---

至上最強迷子

2011年11月19日00時05分発行